NYONINRENMIN

女人藝術

曝露實話號

附錄 女人大衆





女人藝術第三巻十月號目次

—禁轉載—

秋夜講習 思想・文藝講座豫告!!……(二)

ヨーロッパ諸國に於ける無産婦人の現状—應接室……淺野研眞…(四)

農民諸君の敵は?……永嶋暢子…(六四)

正義の背後に踊る……佐野京子…(八)

未開社會に於ける性と抑壓—……小林すみ子…(一七)

欺されるな!……川瀬美子…(一三)

モーターにかまれて……堀百合子…(二五)

中間搾取業者……田中豊穂…(二五)

小作し飽いた米とりあいた……福田樹美…(一四)

同志逢坂に代つて……島あやめ…(一八)

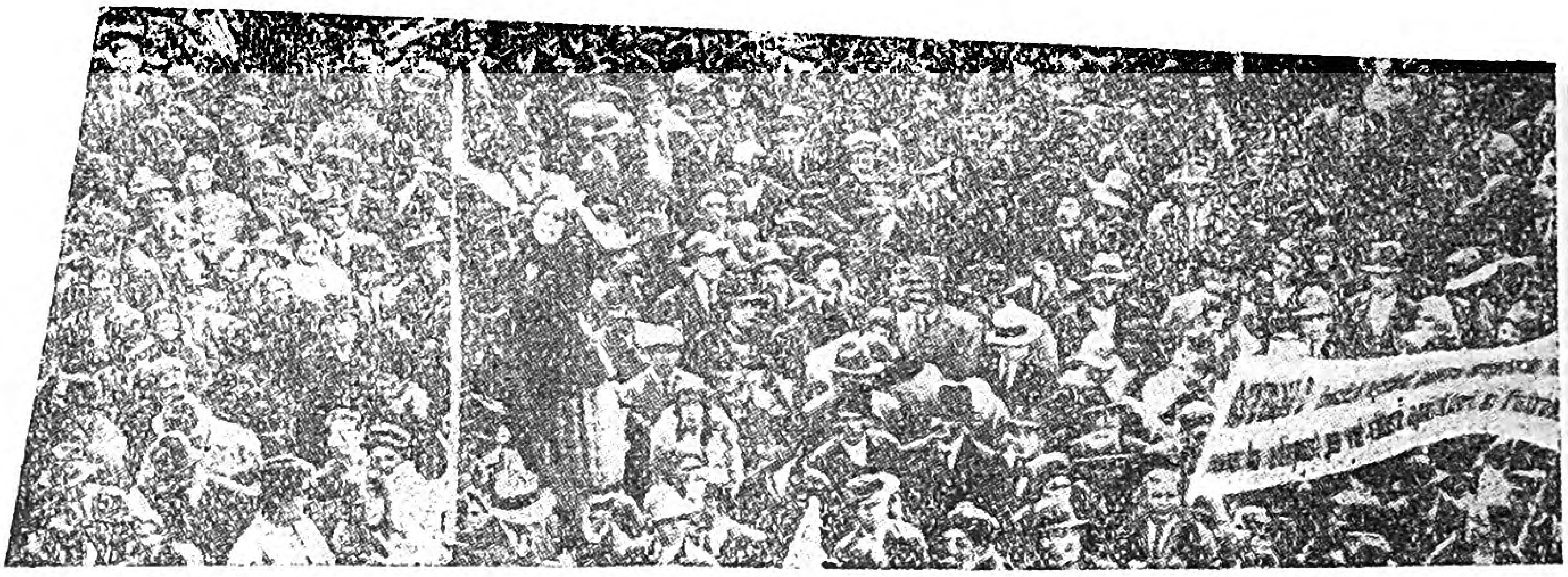
保護旗購入……笠千鳥…(一九)

視學官と洋裝……星勝子…(二六)

農村のある教員室……高城杜美…(三四)

希望社保健部にゐたプレー……山本美智子…(三〇)

ソヴエートグラフ



次の部署へ……土田途子（四四）
道子のことづて……沖しづ子（三八）
死兒を賣る……保瀬香代子（八三）
蔭をゆくもの……若杉香子（八七）
手を握りしめて……首藤嘉子（九〇）
階級に育てられた女……藍川陽（一二三）
流れてゆく……小野あづさ（一〇〇）
村の人達……青山幸子（一三九）
火群—小說……大田洋子（一一八）
女アパッシユ—放浪記……林芙美子（九四）
明治座今昔—日本橋……時雨（五〇）
相剋—みちづれ……ヴイクトオル・マルゲリツト 望月百合子譯（一四九）
ある日の話—談……生田花世（一四六）
母よ—詩……北山かつ子（六三）
一枚の浴衣—詩……森本正子（六三）
洋傘—詩……北山雅子（三四）
確信を送らう—詩……横堀恒子（三四）
秋の家—談……川路すみか（三）

女人大衆……

勞働婦人と家族制度—1……日種明子（一〇）
五ケ年計畫とソヴエート同盟婦人……高山絹子（二）
一生—長編小說—7……時雨（六）
おど、心配しんな—詩……高橋葉子（五）
時の問題……（一四）



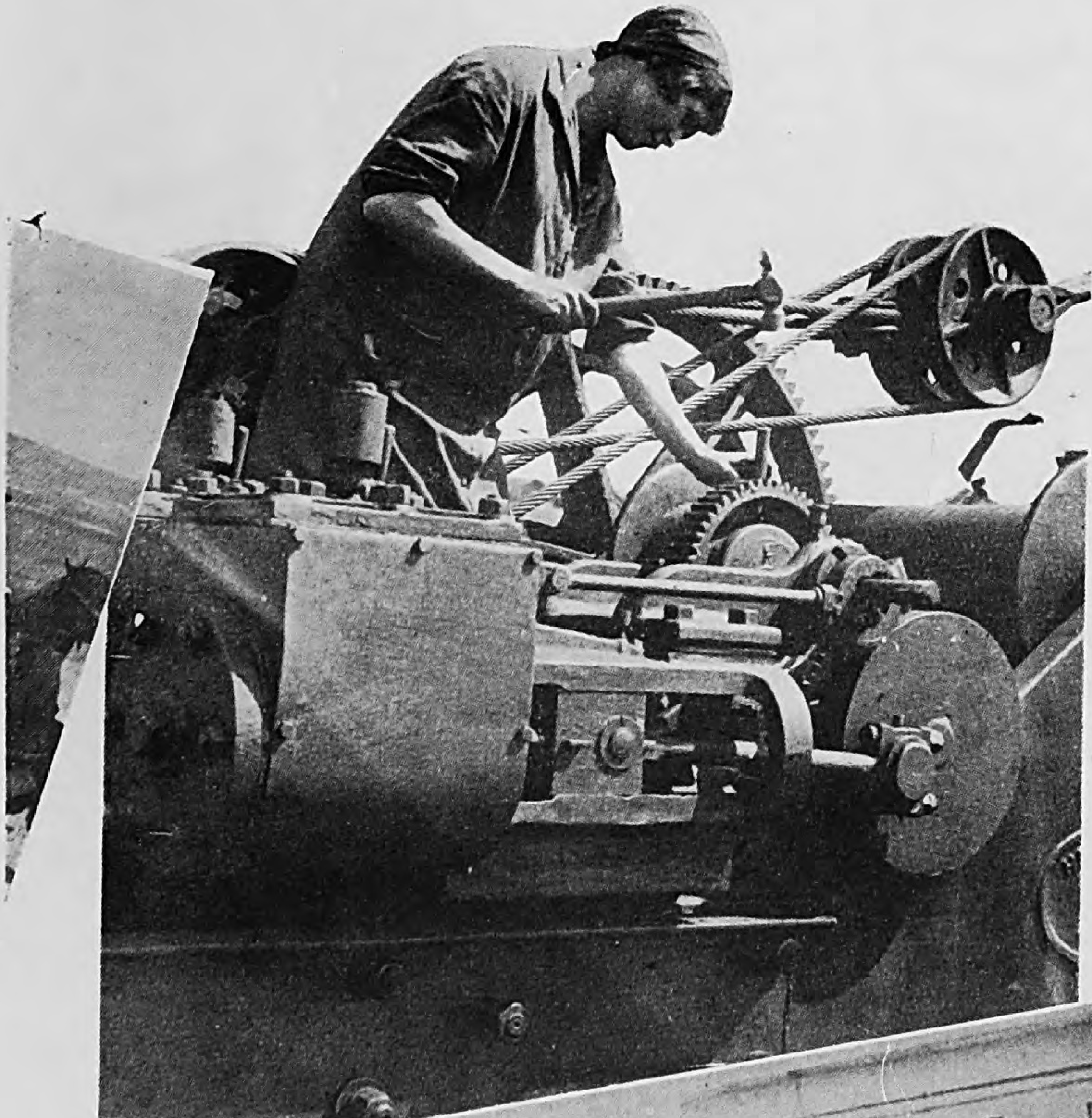


ロシヤ革命記念日と婦人のデモ

一九二九年――昨年モスコー赤い廣場で行なはれたソヴエート十月革命十二週年記念祭。

上、赤い廣場の演壇の前を通過するヂプシー婦人連のデモ。

下、赤い廣場に集まつたデモの群集。



ソヴエツトの若いコンミユニスト達は、社會主義建設のために國內の工業化を着々と戰ひとりつゝある。解放された婦人コンミユニストが蒸氣起重機の修繕をしてゐる潑溂たる風姿。



最近まで面紗に掩はれてゐたトルコの婦人にも解放の日が來つゝある。紡績工場に働く彼女達の急速な進展ぶり。





上、ソビエツト聯邦、シムフエロポル地方の集團農場で、男女の農民が馬に乘つて仕事に出かけるところ。

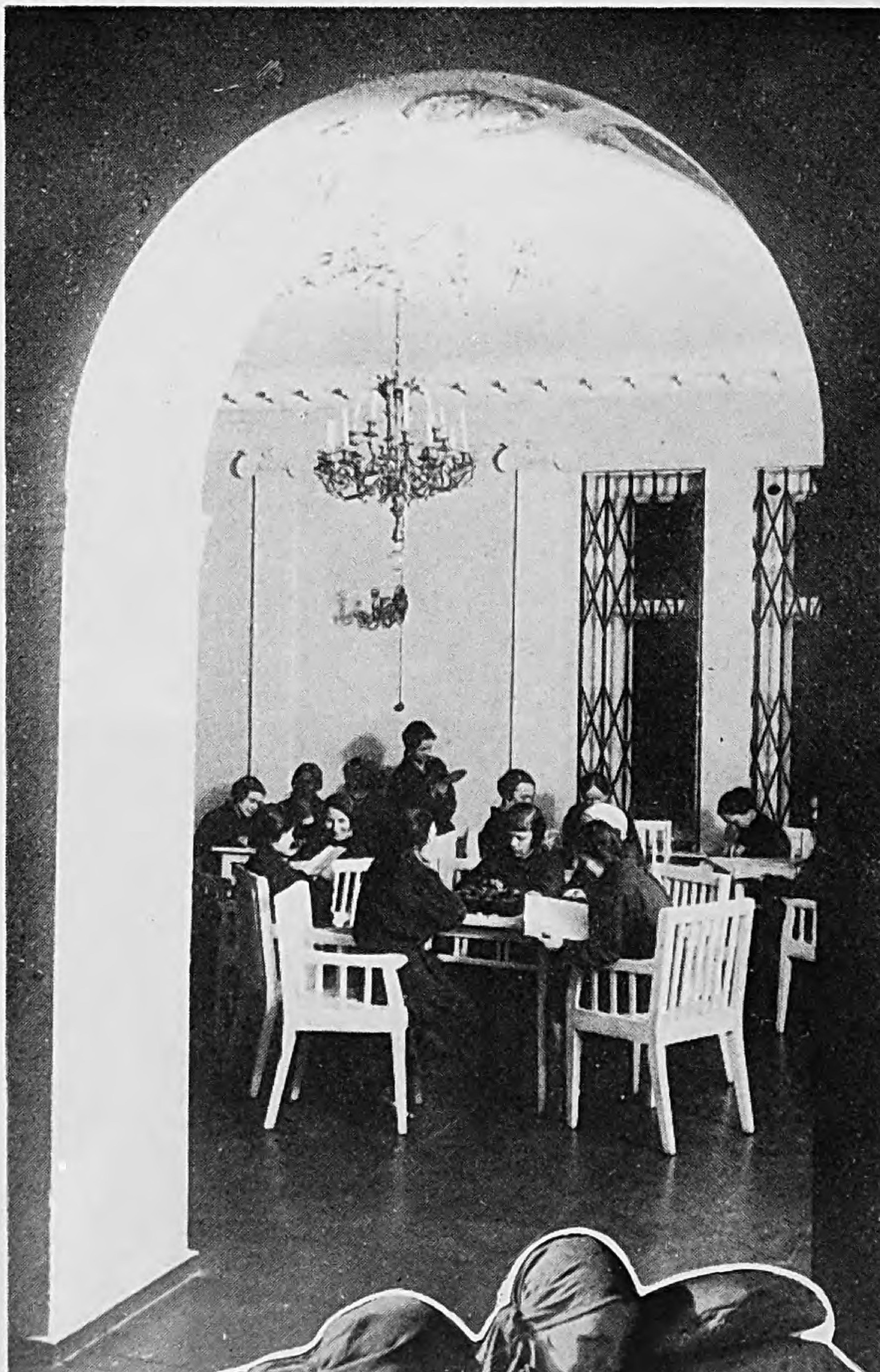
下、子供の發明品展覽會――一九三〇年五月イバノボ・ボスネセンスクで開催された。十四の子供が發明した望遠鏡を覗いてゐるピオニール達。





右上、レーニングラードには新らしく共同の大台所が建てられて多くの婦人を台所の仕事から解放してゐる。一人の巧みな調理人は仕事として他の人に食物の調理法を教へてゐる。

右下、ビスケント地方の集團農場化は非常な好成積で、コルホズ(集團農場の露語)新聞は彼等の間に行き渡り、婦人達にも喜んで讀まれてゐる。



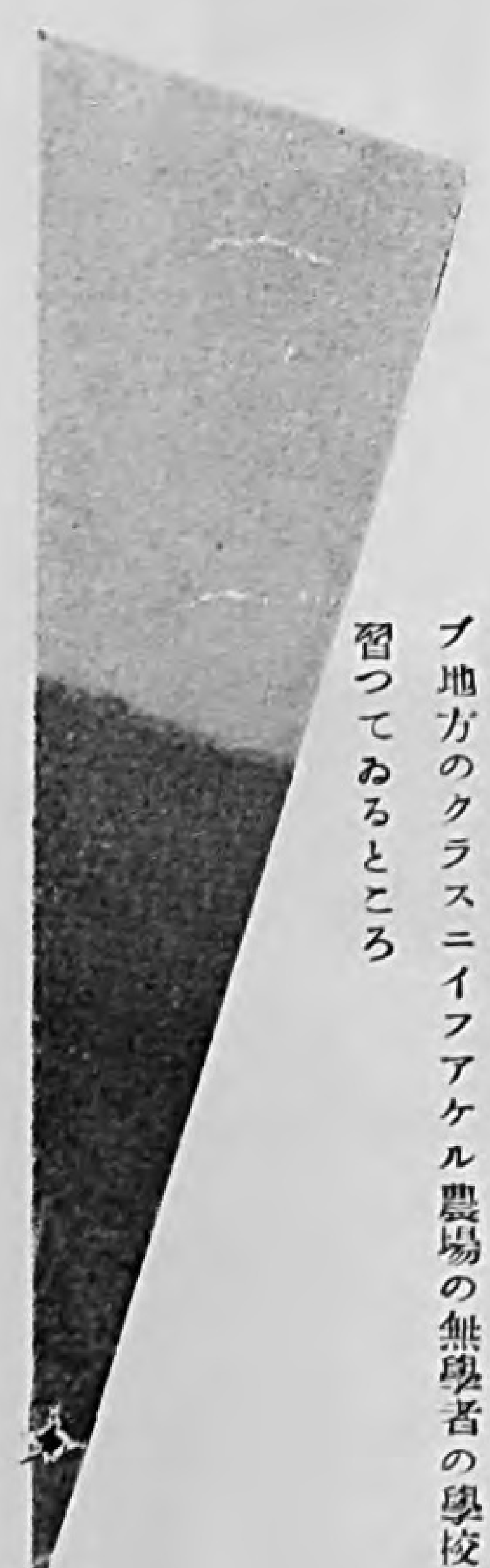


左上、工場に働く勞働者が胸をおかされれば、資本家は放ぼり出す丈である。ソビエツトでは輕度の肺病患者は晝間工場に働いて、夜は夜間療養所に行つて、醫藥と、食物とを與へられて一晩をすごし、翌朝は又働きに出かけて行く、こゝに連續して入られる期間は二週間乃至三週間で極輕度の病人に限られてゐる。寫眞はレーニングラード區にある夜間療養所の休憩室で婦人勞働者が休んでゐるところ●

左下、ウクライナのクルガン地方共產村の「ローザ」パン屋、素晴らしく大きなパンと働く婦人達。



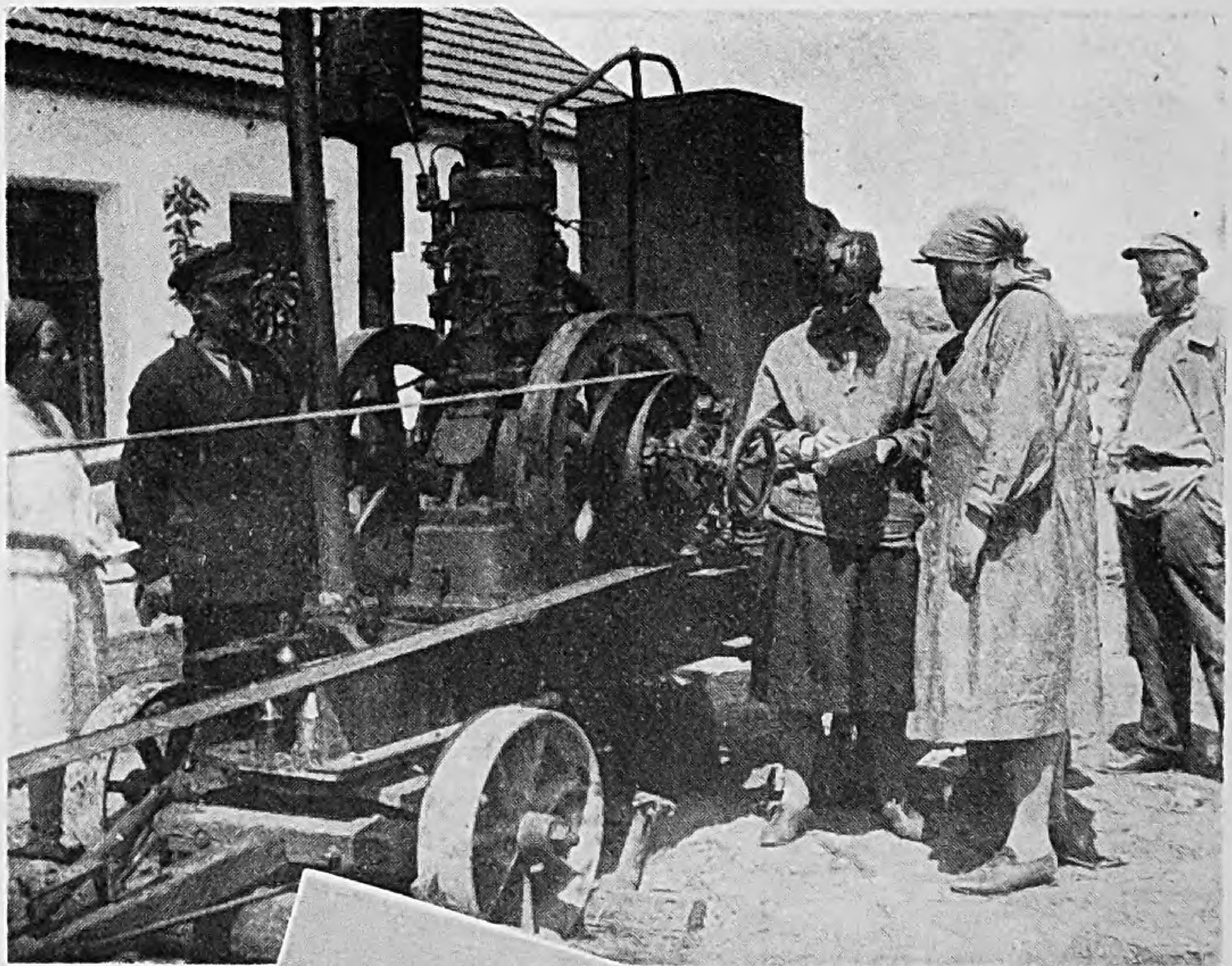




右上、北部コーカサスに於ける集團農場の穀物倉。
右下、ソビエツトにおける文盲撲滅運動はレーニン夫人クルプスカヤの獻身的な活動によつて好成績を上げてゐる。寫眞はカルコブ地方のクラスニイフアケル農場の無學者の學校で農婦が算術を習つてゐるところ

左上、集團農場では收穫前三週間を收穫に使用する機械の修繕をする事になつてゐる。
セルボナ・ゾオルカの集團農場でモーターの檢査をしてゐるところ。

左下、カルコプ地方の集團農場で農婦達は晝食後の休憩時間には若い婦人共產黨員から講話を聞き、思想的指導を受けてゐる。









上、コーカサスのキスロボスク地方は油田で有名な所であるがこゝの岩石の一つに彫られたレーニンの像である。

下、一九二九年四月一日ソヴエート聯邦内の中部アジヤの婦人は「面紗を、とる事を許せ」と叫んでレーニンの銅像の前に勢ぞろひして、地方議會をおそつた。

中村武羅夫・加藤武雄・三上於菟吉

三人全集

（各冊　金壹圓）

三上於菟吉著

悩める魂・麗人

既刊・第三回配本

情火・美玉

既刊・第六回配本

見果てぬ夢・戀と地獄

近刊・第九回配本

牛込區矢來町三番地

發行所　新潮社

女人藝術

十月號



★★★

秋夜講習

文藝・思想講座

——女人藝術第一回講習會——

働らかなければならない、もつと知らなければならない、學ばなければならない——いかに生きんかとの惱みは、女性共通の慾求である。本誌はここに、清凉明澄なる秋夜、最も意義ある集りとしてこの講座をもちたいと思ふ。幸に講師に其人を得たることを諸氏と共に欣びたい。

秋夜講座

九月廿九日(月)ヨリ十月五日(日)マデ

午後七時——九時半迄

會費 金壹圓——申込ト同時ニ拂込ムコト

★★★

定員参百名 ——申込順ニヨル。速刻申込マレタシ

場所 讀賣新聞社講堂・東京市京橋區北紺屋町——省線有樂町、市電讀賣新聞社前

國際經濟恐慌について　商科大學教授　大塚金之助氏

支那時局　創作家　藤枝丈夫氏

ソヴエート五年計畫とは何か　評論家　神近市子氏

婦人参政權問題について　評論家　中島幸子氏

ソヴエート文學　早稲田大學露語科講師　岡澤秀虎氏

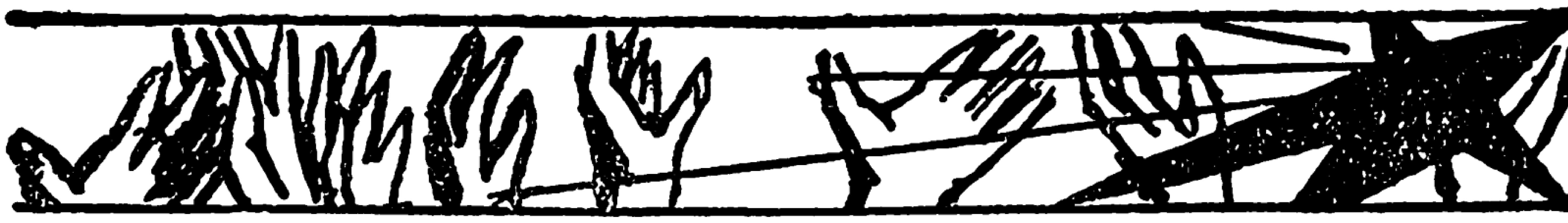
現代文藝觀　東京日々新聞學藝部顧問　千葉龜雄氏

最近歐洲文藝　評論家　木村毅氏

プロレタリア文學論　創作家　平林たい子氏

最終の日曜日は茶話懇親會

餘興プロキノ映畫（煙突屋ペロ）（子供）（今年のメーデー）



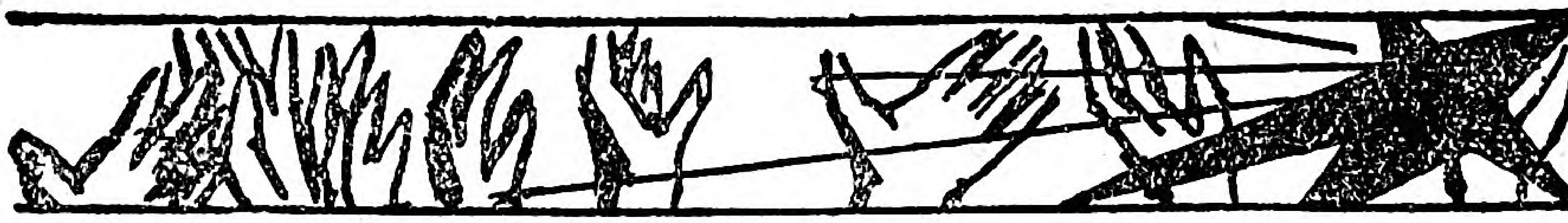
應接室
ヨーロッパ諸國に於ける無産婦人の現状

淺野研眞

共産黨が合法政黨として存在するところのヨーロッパ諸國における無産婦人の活動がすべて黨の指導下においてなされてゐる事は云ふまでもない。

例へば一九二九年四月二十一日パリにおいてアンドレイ・マルティ――一九一九年二月ソヴエート革命の最中、黑海氾濫に乘じて聯合軍がセバストポール、オデッサを侵略すべく黑海に數隻の軍艦をむけた際、それに反抗してソヴエートを守るためにおこつたフランス水兵の暴動の煽動者として有名な――を名譽會長として開かれた反戰運動のグループU・F・F・C・Gにしても婦人ばかりの三千人の會員を有しそれらはすべて工場勞働婦人、女事務員、女店員、タイピスト等の職業にある婦人共産黨員によつて構成され、名譽會長は男子であるが實際運動はすべてこれらの婦人によつて、モップル、ソヴエート友の會、プロフインテルンと相提携してなされてゐる。このグループの運動方針は單なる帝國主義××反對だけではなく、帝國主義××準備の危險に永久的に敢然と反對すると共に、ソヴエートに對する資本主義諸國の干渉をも敢然としりぞけるものである。

それからこれはやゝ問題が違ふが、フランスの婦人と日本の婦人は現在同じやうなレベルにあるやうに思はれる。即ち封建的な舊習からまだ完全にはなたれてゐなくて、婦人の社會的な地位を示す一つの指針となる人身賣買制度――公娼制度――が文明國中この兩國にのみ存し、一方婦人參政權は兩國にのみ存しないと云ふやうな點において、從つてフランスには婦人參政權運動は又日本の如くあらゆる層においてなされてゐてそのもつとも有力な團體は Française Le Droit des Femmes と呼ばれ、あらゆる階級の婦人によつて構成されてゐる。しかし黨は婦人參政權運動に對して格別の熱情を持つてゐない――勿論主張としてかゝげてはゐるが――何故ならかつてのドイツが示したやうにカトリックの勢力の強い國家において、婦人が選擧權を獲得した場合、その多くの投票を受けるものは共産黨でな



く、保守黨である事をみこしてゐるからである。

これはフランスだけでなくヨーロッパ諸國――黨の存在する――において、我々が先づ感じる事は、婦人と男子を區別した――即ち婦人だけのとか男子だけのとかの團體――はなくてすべての勞働組合その他の團體が半數の婦人會員をもつてゐる事である、勿論これは日本の資本主義が若く、一時的な紡績勞働婦人の外まだ勞働婦人の少い故もあらうが――。そしてすべてのデモには婦人赤衞軍がユニフォーム姿で活潑に、赤色少年少女團員の手をとつて參加する。――その勇姿は日本の女工さん達がたもとの着物に足駄で、ひきづられるやうに歩いて行くのとは格段の相異で私はそれをみた際つくぐ日本の衣服の不活潑さを痛感したものである。尙さうした場合の彼女等の活潑で勇ましい點においては、私は昨年（一九二九）五月二十六日パリにおいてパリコンミユン祭のデモに加はり、同八月一日ベルリンにおいて反戰デーのデモに參加したが、とても彼女等に及ばなかつた。

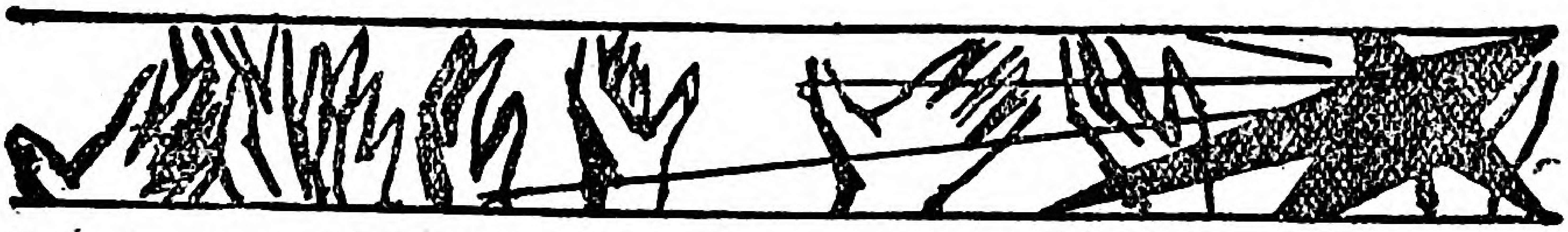


ソヴエート賣笑婦收容所

從つてあちらの黨及び勞働組合の事務所には男が一人も居らず――これも日本と反對の現象であるが婦人ばかりが安い俸給で忠實に働いてゐる。そこを訪問するとブルジョア的美辭麗句をつらねないで非常に氣持よく例へば貴方と云はないでお前と云つたよび方ドイツ語ではSieと云はずにduと云ひフランス語ではVousと云はずにtuと云つた夫婦とか親子とか戀人の間でなくては使はないやうなよび方で親しさを表してもてなしてくれる。

ヨーロッパの階級的にめざめた婦人達の間に家庭生活の分解作用が興りつゝある事は云ふまでもない。家庭生活の解體による社會革命の促進をめざしてゐる彼女等にとつて、結婚が戀愛の墓場であり、人生の墓場である事はもう問題ではない。相手を先づ戀人としてみる前に同志としてみる、即ち箱入り式戀人から街頭的同志たれと云ふ戀愛觀――平たく云へばコロンタイズムの下に動いてゐるのである。

ヨーロッパ諸國において黨が最も力を入れてゐる仕事の一つに産兒制限の獎勵がある。かつては夫婦愛の享樂のためにブル



ジョアジーによつてのみなされた產兒制限の宣傳は今や黨の指導下に、活潑になされてゐる。勿論これに對して政府の反對のある事は云ふまでもない。よりよき勞働力の搾取の對象としての產國民軍をつくり、帝國主義戰爭の強き肉彈たらしめ、又忠實なカトリック信者を得るために、彼等ブルジョアジーはプロレタリアートの間に產兒制限のなされる事をおそれ、女にいかにして子供を生ますべきか？母性たる事を拒絕する女性に、如何にして、女性たるべき事を強制するか？についていろ〳〵と頭をなやませてゐるのである。その結果としてもつとも反動的なファシズムの本場イタリーでは獨身税を課し、年金制度をしいて、子供の品評會を行ひ、フランスでは　子澤山の家族には、每年賞金を出す――その割合ははじめの九十家族に、二千五百フラン、次の二〇三家族に一千フランである――、去年は子供を十二人もつてゐる家族が最高でいたましい事には、子澤山の家庭は、みな勞働者の家庭である。ブルジョアジーは、子供を一人つくるくらゐなら自動車を一臺買ふと云ふ寸法であるが、プロレタリアートは、彼等ブルジョアジーのえじきとなる子供を黙々としてつくつてゐるのである。結果、大戰後、フランスでは、人口が増加した、しかし、この軍閥、銀行、教會の三位一體の彈壓に反撥して黨は盛んに產兒制限の宣傳をパンフレットの發行、機械の發賣等によつてやつてゐる。中でもドイツ共產黨の如きは生命、勞働力をブルジョアジーに、奪はれぬために、「子供をつくるな」のスローガンをかゝげて、人口的反抗を、こゝろみてゐる。

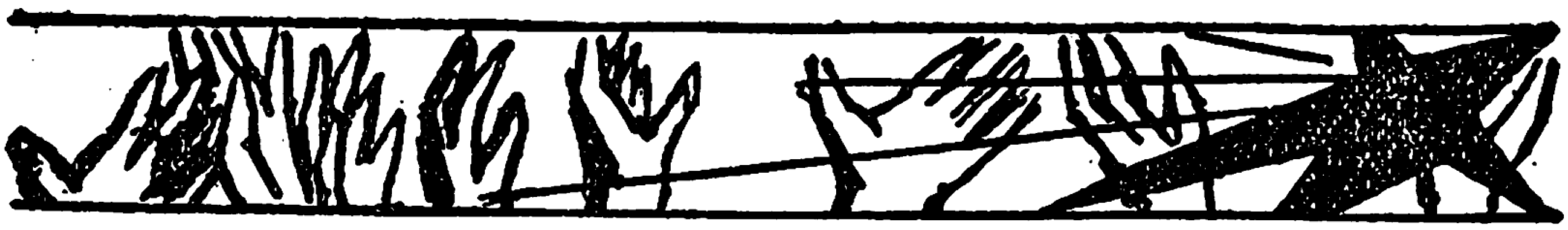


英國婦人赤衞軍

尙戰後、各國の黨の婦人部によつて、戰爭寡婦聯盟が組織され、大戰によつて寡婦となつた婦人及び孤兒の糾合が行はれ、黨及びピオニールによつて各動員されてゐる事も、目新しい事實である。

最後にソヴエート、ロシアについて少しのべたい。ソヴエートでは、墮胎及び生殖力消滅の手術――これはアメリカにおいては惡性の遺傳性病人及び罪人にほどこされてゐるものであるが――が子供をつくりたくない者には誰にでもほどこされると云ふ事は云ふまでもない。又黨の指導下に、婦人によつて、日本のプチブル的社會事業とは違つた意味の社會事業がなされ、婦人ホーム、托兒所、弱兒のサナトリウムの設立等が活潑になされてゐる。

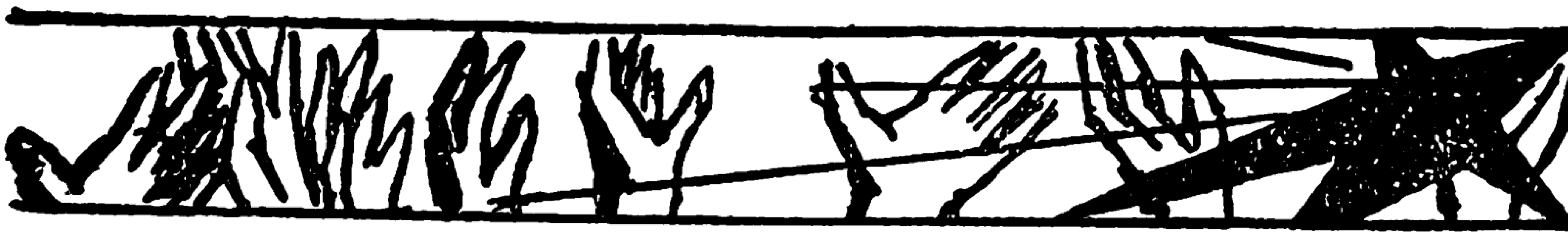
これは、モスクワで中條百合子氏とも、話した事であるが、ヨーロッパ諸國の都會を歩いてきて、モスクワにはいると、非



常に、きたないと云ふ感じを受ける。そこにはパリやロンドンの街々にある、お客の購買慾をチャームするやうな商店のショーウヰンドのかげがみられない。何故ならソヴエートには、その必要がないのである。「私有から國營へ」このスローガンの下に、すべて個人的な職業をいとなむ者には、重税を課して國營とする事に努力してゐるソヴエートでは、顧客の購買慾に、こびる必要は少しもないのである。組合に屬する者は全國どこの國營食堂でゝも二ルーブルで食事が出來る――。但し組合員でない者はその五倍もとられるのであるが――。かうして近い將來において、すべてのものは、國營化されるに違ひない。

私はしばしばソヴエートに、賣笑婦が現在存在してゐるとか、ゐないとか云ふ事が問題になつてゐるのを、耳にするが、ソヴエートには現在、賣笑婦が、存在してゐると云ふ事は、決してデマではない。その防止策として黨では、現在の賣笑婦の中で、よき意志――正業につかふと云ふ――をもつ者を、一定の收容所に收容して、そのルンペン性をとりのぞくために、先づ非常に嚴格な、體育をほどこし、彼等が、規則正しい生活になれる事が出來るのを、みると、新しい職業を職業紹介所を通じて求めてやるのである。これは直接目前の防止策であるが、間接の防止策と云ふのは現在の少女達を街頭に、なげ出さない事である。國家で彼女等の一定の職業を保證してやり、職業のないために、賣笑婦となる事をさけるのである。かうしてすゝんでゆけば、幾年かの後には、特別な變態性慾者の外には、賣笑婦は、ソヴエートに、なくなるわけである。

これは、ソヴエートに限つた事ではないが階級運動に身を投じてゐる前衞達の間に、近頃赤色スポーツ及びダンスが盛んになつた事は注目すべき事である。あらゆる身體的觀念と鬪つてゆかねばならぬ鬪士達にとつて、先づ大切な事は、壯健な身體と、精神とを養ふために適宜の運動をし、アミユズメントをとる事である。そのためのこれらのスポーツの隆盛は　よろこぶべき事と云はねばならない。ダンスと云つても日本の輸入階級共がよろこぶやうな性質のものではなく自然發生的な性質のものである。――ソヴエートでは、ブルジョアダンスホールを禁止してゐる。――黨或は組合の大會の果てた後でダンス會をもち、その會費をモップルの費用にあてるのである。ダンス會はモスクヷでは勞働會館、ベルリンではリープクネヒト・ハウス等で催され、殆ど男女同數で、徹宵徹夜をどりぬくのである。これは相互の團結力を深め、階級的裏切りをなくする効用をもつ上に、健康な身體と、鐵のやうな意志をもつ鬪士を育てる手段となる。この目的で、私は現在の日本のプロレタリア――左翼にゆけばゆく程餘りに神經的な、肺病やみ的な――の間に、プチブル趣味を脫したところの、赤色スポーツ及びプロレタリアダンスの勃興を待たずには居られない。



正義の背後に踊る

——虐×・×問について——

佐野京子

何處の國で？

調室に入れられるとすぐ彼女は×體にされた。文字どほりの××ばだかだ。一片の布も身にまとつてはゐない。

十疊敷ほどの洋室だ。五人の神聖なるブルジョアの××からは鋭い十の眼が彼女の裸體の上に大膽にそゝがれてゐる。

『さあ云へ！みんな云つてしまふのだ』五人の中の一人がおそろしく横柄な語調で彼女に命令した。

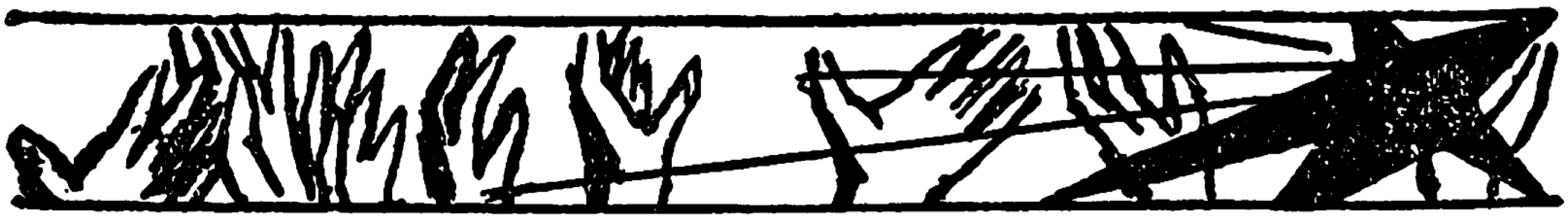
『何を云ふのですか』と反問した瞬間、彼女は自分の肉體の一點に恐ろしい震動を感じた。最初の震動は彼女の頰に喰ひ込んだ鐵拳であつた。彼女はそれを意識した。だがその後に續いて何が起つたかは知らない。彼女の意識が明瞭になつたとき、彼女は板のまの上に水で頭からズブぬれになつてゐる自分を見出したのであつた。

こうして三回意識を失つた。三回目に自分の意識が返つたときは、何時の間に來たのか三疊の金網の室の中に寢てゐた。——この室で彼女は既に數日を過ごしてゐた。扉には鐵の大きな錠前が行儀よくさがつてゐる。看守の倦屈さうな靴音が近づいて來て、金網からのぞき込んだ。

『やあ——いやに肥つたな』と云つていさゝか氣の毒そうな笑ひをした。

彼女は自分の顏だか、中ば夢の中にゐる自分の顏だかわからないようなイビッになつた顏に兩手を當てゝ見た。すばらしくふくれ上つたものだ。右の頰と左のオデコと、そしてその間の凹凸が横ねぢた、偉大にふくれ上つた顏を作り上げてゐるではないか？

その上に兩方の足が股の所から下手な義足でも付けたようにまるで自分の肉體の一部といふ感じを失つてしまつてゐる。起き上がらうとした瞬間、彼女は初めて自分の腰が立たなくなつてゐるのを知つた。兩足の筋肉が極度にひきつつてしまつて一



寸動かすのも足自身では自由にならない。そればかりでなくその筋肉が微動をしたゞけでも堪えられないような激痛を與へた。

それから一週間經つた。彼女は物にさゝへられて、やつと立つことゝ座ることゝ、一歩一歩、歩くことが出來初めた頃再び調室に引き出された。

今度は違つた流儀だ。××は自分のポケットから萬年筆を出して彼女の指の間にはさんだ。これはよくやる手だ。彼女はいきなり萬年筆をひつたくつて萬身の力で二つにへし折つた。他の××が又一本出した。彼女はそれも電光石火の早やわざでへし折つてしまつた。三本目は出さなかつた。その變りに、脇の下に兩手を突つ込んで來た、脇、首、足所かまはずくすぐり初めた。××××の中にまで——彼女はとう〳〵半狂亂の如くなつて二階の窓に片足かけた。

×××たちは、急いで後から彼女をだきしめた。今度は道場につれていつた。そしていきなり柔道の手を以てズドンと投げつけた。たほれた彼女を××××にして、大の男が、靴の片足で×××のあたりをギユッと踏みつける。カヘルなら內臓が飛び出してお駄佛といふ所だが人間だからそうはゆかない。又彼等もそうしてしまつてはおしまひだ。だから×ない範圍であらゆる×問の限りを盡すのである。

一人の男は、××××に倒れてゐる彼女の上に腹ばいになつてピッタリと乘つかかつた。尤も如何に大の男であらうと腹ばいに××××のでは大して苦しいものではない。

『そりや、まるで色狂ひのやり口じやねえか』と彼女の報告をきいてゐた一同志が叫んだ。思はず居合したものが笑ひを爆發してしまつた。

後になつて報告をきけば、それも笑話となるが實際は笑ふことも泣くことも——人間的な一切の感情から、はるかに離れた狀態におかれる。

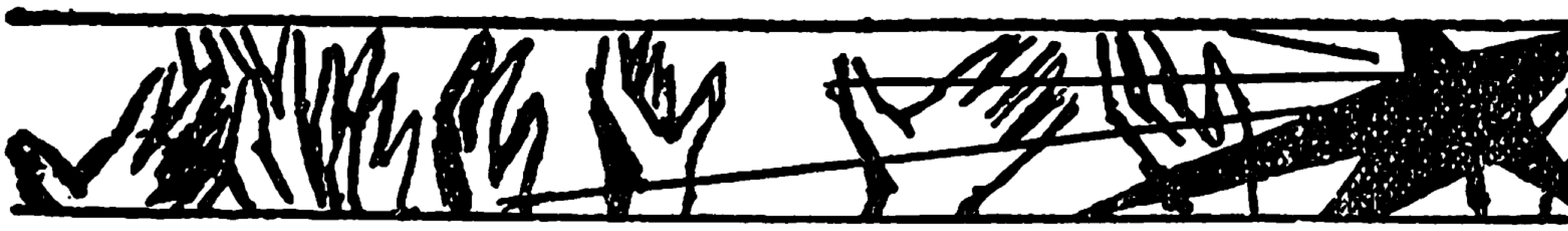
× × ×

右の事實は、何時、如何なる國で行はれてゐることかは諸氏の判斷にまかせるとして、一勞働婦人が、階級鬪爭の途上で××の手に捕へられたときの×問の一部分である。

私は現にかゝる事實について語る多くのより慘酷な、數々を知つてゐる。たゞ私たちは、現在ありのまゝにあることを語る自由を許されてゐないといふことだ。

社會の進歩は殉道の記録であると云つた人がある。人間の過去の歴史の大半は、人類社會の發展向上のために捧げた幾多無數の男女の犧牲に依つて先驅され且つ繼承されたところのものである。そしてすべてのパイオニアが進んで來た行路は、彼等の鮮血によつて染め盡されてゐる。その範圍が、新學說の開拓の場合に於ても、又は社會上の、宗教上の、或は經濟上政治上の自由の場合に於ても、過去の歴史は繰り返へした。たゞその時代が必要とするところの變形を加へて。

我が國に於ても切支丹宗に對する迫害は、島原の事件として名高い。明治維新の變革は階級から階級への政治權力の變遷と



いふ大舞臺面であるだけにより多くの殉難のパイオニアを產んでゐる。

古くは、十五六世紀のころ、テユードア主朝の王國に於て、時の權力者は、對外關係上、富國强兵の急務を感じて農業自給政策や國富增進政策を採つた。その結果、地主の土地併合が盛んに行はれて、無數の小作農は、土地と仕事とを失つて浮浪民となり、工業を盛にするために勞働者は安い賃銀で、長時間働かせられ、法律も、すべてこの勞働者に朝五時から夜の八時まで十五時間の勞働を强制するので、彼らの多くは、職を嫌つて浮浪民となつた。同時に物價は、誤つた貨幣政策と、新大陸の米國から盛に銀流入するので、各地に一揆の起つたほど暴騰した。家も、食も仕事もない農民と勞働者らは、相爭つて都會に集つてぞろ〳〵と群を爲して、街頭に乞食するに至つた。乞食の群に投ずる浮浪民の數は日に日に加つた。彼等は物乞ひと、强請りとで、彼等を浮浪民に落した人達に復讐した。

農業自給、國富自得から脱れようと焦つた。浮浪の徒には嚴罰が加へられた。が少しも利き目がなかつた。ヘンリー八世に及んで、浮浪の徒を捉へて、右の耳の軟骨の上部を切り、三犯以上のものは、絞罪に處するといふ法律を作つた。その法律で絞びられた人民の數は、同帝の治世だけでも七萬二千人からあつたと當時の史家は語つてゐる。

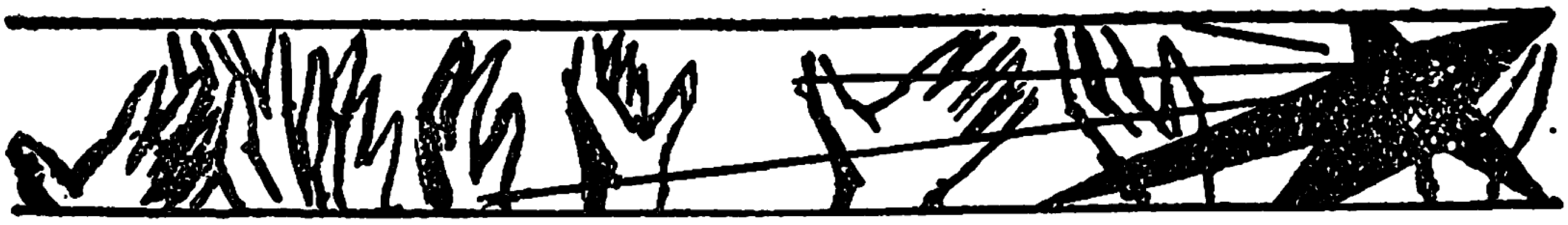
パリーコンミユンから、ハンガリア革命、近くは支那プロレタリア革命にいたるまで、反革命の白色テロルは、數千、數萬の勞働者、農民の虐殺によつて自己の支配的地位を防禦して來た。そして一樣に彼等の慘虐な行爲を理論づけるものは『正義』といふ御調法な武器である。

× × ×

ロシア革命の全行程は血によつて彩られて來た。民衆を無智に！民衆の眼と良心とを潰すことによつて專制政治を行使して來たツアーの下にロシアの民衆は幾世紀間か威嚇され、踏み躙られて來た。數限りなき民衆が反逆者の名によつて獄裡に投ぜられ、シベリヤ鑛山の苦役に送られ、絞首臺の露と消えた。

一八七五年から以後三十年間に、二十五萬の生民が西伯利に送られ、或は流刑地に餓死し、鑛山の苦役に慘死し、或は獄中に狂死した。二十世紀に入つてからの虐政は更にその度を加へてゐる。一九〇五年までの四年間に、公衆法廷及び軍法會議で死刑の宣告を受け、且つ之を執行された者の數が、二千三百餘人に達したと云ふ。したがつて、此の他いはゆる行政處分での銃殺や絞殺——卽ち公判どころか訊問も行はずに、各州知事に附與された殆んど獨裁的な權能で行はれた死刑——に處せられた者の數は、その幾倍に當るか不明なほどで、それが特に一九〇六年に初めて議會が開かれ國民自由權の保證たる憲法に發布されて以來、却つて著しくなつた虐政の犧牲なのである。

クロポトキンの『ロシアに於けるテロル』といふ著書には、議員チユーゼが議會に於ける演說中に、次のような數字で事實を語つてゐる。



一九〇七――八年の二年間に、議員で種々の刑期の入獄宣言を與へられた者が二百三十七人、そのうち十八人は西伯利の鑛山に送られてゐる。定期刊行物の禁止された數が一千八十五、その編輯者で監獄や要塞や、懲役囚の鑛山に送られたものが四百九人に達するといふ。そしてチューゼば『公民の自由は今や唯死刑執行吏に存するに過ぎず、而して死刑執行は日々の出來事となつた』と云つてゐる。

一九〇五年から一九〇七年にかけて、ロシアのプロレタリア運動は全局面に深刻な運動を産んだ。一九〇五年の第一革命の敗北は支配階級の勞働者虐殺となり、解放運動に少しでも主動的分擔をなした人々は檢擧され、法廷に引き出され、單に行政上の命令に依つて、或は西伯利に押送され、又は追放され、その結果、當時の公式の記錄に從へば、一九〇九年一月には收容力十萬七千人に過ぎない監獄に十八萬一千餘人と云ふ多數を收容したといふ事實を示してゐる。しかも此の數字の中には移送中の囚人約三萬人が含まれてゐない。その上に警察の留置所に拘留されてゐる囚人の夥しい數も含まれてゐないのである。

當時ロシアに於て 囚人の虐待の最も恐るべきは警察の留置所で、警察留置所の有名な拷問室としてワルソオに於けるグリム、リガルに於けるグレカスといふようなのを持つてゐたのである。××に於ても又然り、當時のロシアの狀態より、より凄慘、慘虐なるも決して以下ではないのだ。

ヴエラ、フイグナアといふ一婦人の手記『黎明を眼指して』の中に現はれてゐる、一革命婦人の追憶の記を讀んだ人々は無限の感激を與へられるであらう。

ロシア革命運動の初期『人民の意志』時代の一革命婦人が、捕へられて二十年間をシエルッセルブルグ要塞の牢獄に送つた、その間の輝やかしい記錄である。同時にそれは、慘虐な支配階級の××制度に對する鬪爭のエピロオグである。

一貫して此の書の中に流れてゐるものは、當時の××制度が如何に血を以つて民衆を威嚇し、踏みにじつて來たかといふ事實を如實に物語つてゐるのである。

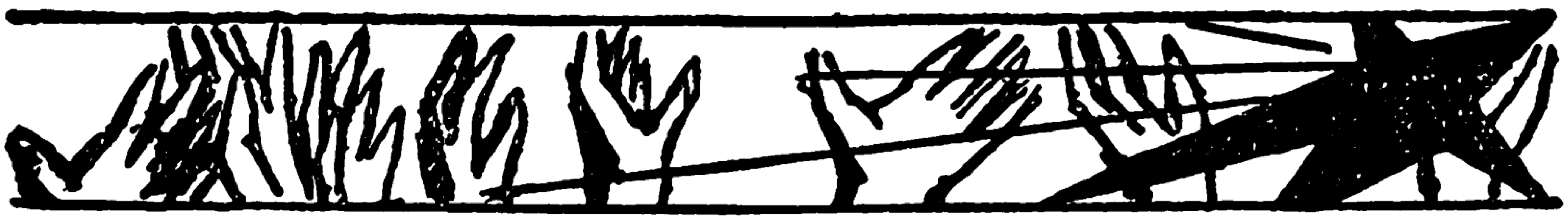
だが、かへりみて吾々は、今日吾々の目前に展開されてゐる支配階級の最後的狂亂の姿が、斷じて舊ロシアの前述の狀態に劣るものではないといふことだ。否！それどころか、彼等は旣に全世界の前進國が經た試練の結果から、より、科學的な、よりすぐれた、方法と暴虐性とを學びとつてゐる。

三、一五事件以來數千、數萬のプロレタリア運動の戰士達が受けて來た實際の經驗は、一々此處に記すことは許されない。

三、一五事件の戰士中から旣に吾々は獄中發狂したり、或は×死したりした無數の同志のあることを知つてゐる。

そして支配階級の殘虐性は特に政治犯人の上に加へる度をプロレタリア運動の進展に比例して增してゐるといふことだ。

國家とは、階級が階級を抑壓するところの機關である。即ち



支配階級は、被支配階級を國家によつて政治的に支配する。從つて政治は亦、階級に對する階級の支配である。

國家權力の行使が、階級支配のために最も露骨な形で現はれてゐるのは××制度である。

こゝでは、彼等の本質が全くありのまゝに現はれてゐる。××が民衆に對する態度は、徹頭徹尾『階級的憎惡』となつてゐる。吾々が一度捕へられて××の口から最初に聞く言葉は『吾々は國家の立場から徹底的にやる。だから、諸君を×そうと生かそうとは吾々の自由だ』といふことである。

××は支配階級の一使用人ではあるが、彼等が支配階級への使用人としての忠誠は、使用人としての範圍を乘り越えて充分に、階級性を發揮してゐる。此の點になると、支配階級が佛典と聖書と道德等といふ『正義』の裏面に行使する權力の切れ味は、被支配階級が持つ階級的憎惡に對して、はるかに强力だといへる。

『階級的憎惡なくして階級鬪爭はない』とレニンは云つた。

プロレタリア階級は自らの××獲得のためには、徹頭徹尾、階級的憎惡によつて武裝せねばならぬ。

單に、支配階級の直接の權力の現はれてゐる所に於てのみならず、一切の――いわゆるファシズムより左翼社會民主々義にいたるまでの――彼等の代辯者の現はれに對して、憎惡を持つて鬪爭のホコを向けねばならぬ。

（一九三〇・八・二〇）

秋の家

川路すみか

此の日頃言葉少なき父なるに
呑めばうたひき
醉へば踊りき

失業せる父よ　母なき子供らよ
幸は何時來る……
此の暗き家に

灯の下に父と幼き子どもらは
繪本展げ居し
おそき我まちて

いねなむと夜着被きつゝ聞き止めぬ
浪のひゞきの今宵高きを

此の日頃すべての事に反抗す
かなしき性に我なりしかな

阿蘇の山煙をはくと人の言ふ
愁ひも身をも山に捨てたし



みるなとよ！

欺されるな!!!

川瀬美子譯

あくなき暴力と僞瞞で、辛うじて斷末魔の彼等自身を支へてゐる他の國々のブルジョアジーと同様に、アメリカのブルジョアジーも又、全土にあふれる失業者の革命化をおそれて、用捨なき殺人の私刑に、急進的勞働者の弾壓に、彼等の所謂『秩序と安寧のための公平なる法律』を適用する一方、教會堂の中で牧師に『惡はかゞやける文化の殿堂を支へる柱の一つである』と猫なで聲で敎へさせる事によつて我々を阿片のやうに眠らせやうとしてゐる。しかし我々はその裏で彼等が彼等の所謂『文化の向上』のために、我々プロレタリアートを肉彈として、先年全世界のプロレタリアートを恐怖させた歐洲大戰以上に、殘虐な帝國主義世界戰爭の準備を急ぎつゝある事を見のがしてはならない。

何故我々プロレタリアートは、このにくむべき敵の行爲と陰謀に默してゐられやうか？

我々プロレタリアートは誰に訴へるべきか？インテリゲンチヤにか？ 否！ サツコ、バンゼツチの虐殺に反對した我々のデモを、余りに醜い行爲と嘲笑した手の白いインテリゲンチヤ共が何にならう。彼等が指導者面をする時往々にして、階級戰線における、我々の勢力はそがれる事を忘れてはならない。小ブルジョア的な知識がなんだ

我々は我々の手で、全プロレタリアートの團結力で、不合理な舊い制度を破壞し、新らしい制度をつくらなくてはならない。その時我々を眞に支持するインテリゲンチヤは、我々の戰列に一兵卒として加はり、戰ふであらう。

クリストの福音に、指導者面をした、エセインテリゲンチヤの甘言に、欺されるな！

プロレタリアートの戰は、プロレタリアート自身の手で戰へ！ その時こそ、我々の文化は、健全な向上をとげるであらう。

――ニユー・マツセスより――

都會と地方の報告

小作し飽いた米とりあいた

福田樹美

三百町歩の耕作地を取り上げられた小作人達の慘めな生活苦を前に宮崎縣×田村の小作人對昭和產業株式會社の作離料請求の抗爭は今春來つゞいてゐるが最近、ついに小作人側は會社側に誠意なしとして、調停裁判を仰ぐ事になり、事件はます／＼深刻化した。

村長以下村會議員等々の村內有志の誘致にかゝる鐘紡傍系昭和產業會社が今春その第一工場を×田村に建設すると附近三百町歩の小作地は直ちに地主との間に超スピードの賣買交涉を成立させた。最初から横暴で以つて君臨した會社はその工場の建設に當り先づ村民の通用路の上に跨げて建てた爲め通路は會社の門內に通じてしまつた、村民はどれ丈の不便を忍ばねばならなかつたか——會社が之に代る道を作らなかつた事は勿論だ。村民は助役にその處置を歎願した、助役は何と云つたか『自分は工場がどんな場所に建てられたか見ないから知らぬ』と涼しく答へた、何と間抜けた助役だ村の中樞部に堂々と建築された工場の位置を知らぬで助役樣顏が出來るのは×田を除いて外にあるまい、助役樣まであゝ云はれた仕方はねえ——小作人達はあきらめる事には餘りに馴されてゐる。

作物は誰の物？

麥は穗が出た、菜種は咲いた、今年の收穫を豫想した小作人達のよろこび——汗と油の結晶はグン／＼と力强く伸びてゆく。

その小作地は會社側に素晴しい價で自分達の知らぬ間に賣られてゐた——ことを知つた小作人達は驚愕に飛びあがつた、女房、娘は泣いた。今までだつて一生懸命作つても作つても喰ひかねた、繭の價はガタ落ちの半値だ、この不景氣に馬や牛でも働きさへすればまぐさの心配はして貰へるのに萬物の長と云はれるこちとら人間が牛馬に劣る慘さで喰ふや喰はずで家內中の者が働い

ても追つく貧乏に小作地を取上げられたら一體何を喰つて生きて行くのか。百姓だつて人間だ。地主ばかりが人間ぢやねえ小作人あつての地主さまだ。それに永年のよしみを忘れて無斷で賣拂ふとは餘り俺達をふみつけにしとる。兎に角地主にかけ合はう。小作人達は久しぶりに長い着物を着て地主の門をくゞつた、然しそれは引かれ者の小唄程度に輕くあしらはれて追ひかへされたにすぎない結果だつた。賣つたのは自分の持物だ、小作料の滿足に上らぬ畑を會社が値良く買つてやらうと云ふから賣つたまでだ、お前達やあそれに文句つけに來たのか——地主は永年の地主風で怒鳴つた。お互に腹一杯投げつけたい不平を孕みながら、小作料も滿足に上らぬの言葉に一言もかへせぬ永年の小作人根性はおとなしく引下るより外仕方がない〳〵彼等だつた。

誰も仕事に出るものはなかつた、或家は耕作地の大部分を或家は半を三分を、取り上げられた者二百數十戸の男達は働く元氣も出ない、然し五六日もすると皆の者達はこの先をどうして喰つてゆくかの重大問題は單純な村人の頭にも何等かの方法を考へ出させねば置かなかつた。どうせ取り返せぬ地ならせめて會社からいくらかの作離料でも出させやう。そこで二三十人の者は會社の幹部と會つた、然し老獪な幹部達の舌は彼等の死活問題を前の眞劍な要求をも他愛なく擊退する事が出來る、……何分會社と致しましても法外の高値で買收しました上會社も創立日淺く資金の運用も未だ思ふ樣にまゐりませぬ、村當局の御了解を得てやりました事で私達としましても甚だ御氣の毒には存じますが唯今のところどうにもならないのでして……村當局了解の上なら役場に出かけろ、村長どんに話をつけて貰はう然し工場の位置さへ知らぬと、とぼける助役のゐる役場が一文にもならぬ小作人達の要求の御取次眞平だ、村長に傳へおく退れ——だ。結局泣寢入りは無智な者と弱き者とに課せられた重税だ。

無產黨員の應援

いよ〳〵やつとるぞッ——よもやと思つてゐた、みんな家を飛ひ出して畑へ走つた其處には會社の傭人達が買收耕地の麥も菜種も根こそぎきれいに引ぬいた後へ桑苗を植ゑつけてゐるではないか。黑々と打かへされた畑地の一隅に彼等の汗と油の結晶は無雜作に積あげられてゐる。畜生ッ皆拳でボロ〳〵流れおちる涙を橫なぐりにした。誰もかうした不安を持ち乍ら然し畑は賣られてもやと思つてゐたのに。作物はこつちのものだと昨日までよもやと思つてゐたのに。誰も喪失した樣に默々と引かへした。萬事休すだ——

次の日無產黨員が應援に來たッ、と二三の者が村をふれて步いた。この場合如何す可きかを未だ充分に知らない農民達のために宮崎市で『鐘紡減給反對鬪爭同盟委員』として活躍中の社民支部に、心利いた者が應援を求めたのだつた。支部の杉浦外二名の黨員は鐘紡と鬪つたが結局工場長から『貴意に添ひがたく』のにべもない回答を受けると鬪志なき工場員を後に三十四錢の汽車賃さへない三人は六里の道を馳せつけた。四月二十六日——目ざすは同じ鐘紡傍系の會社だ。彼等の意氣軒昂たるものがあつた。村民は皆元氣づいて集つた。

役場へ押しかける

杉浦と村長、會社幹部との折衝は每日つゞいた、然し彼等は決して小作人達の要求に應じ樣とする好意を表さなかつた。五月十八日、百八十八名連署の作離料に對する請求書はいよ〳〵會社に突きつけられた。娘が息子が工場に出てるため首を恐れて連

都會と地方の報告

小作し飽いた米とりあいた

福田樹美

三百町歩の耕作地を取り上げられた小作人達の慘めな生活苦を前に宮崎縣×田村の小作人對昭和產業株式會社の作離料請求の抗爭は今春來つゞいてゐるが最近、ついに小作人側は會社側に誠意なしとして、調停裁判を仰ぐ事になり、事件はます／＼深刻化した。

村長以下村會議員等々の村内有志の誘致にかゝる鐘紡傍系昭和產業會社が今春その第一工場を×田村に建設すると附近三百町歩の小作地は直ちに地主との間に超スピードの賣買交渉を成立させた。最初から橫暴で以つて君臨した會社はその工場の建設に當り先づ村民の通用路の上に跨げて建てた爲め通路は會社の門内に通じてしまつた、村民はどれ丈の不便を忍ばねばならなかつたか――會社が之に代る道を作らなかつた事は勿論だ。村民は助役にその處置を歎願した、助役は何と云つたか『自分は工場がどんな場所に建てられたか見ないから知らぬ』と涼しく答へた、何と間抜けた助役だ村の中樞部に堂々と建築された工場の位置を知らぬで助役樣顏が出來るのは×田を除いて外にあるまい、助役樣まであゝ云はれた仕方はねえ――小作人達はあきらめる事には餘りに馴されてゐる。

作物は誰の物？

麥は穗が出た、菜種は咲いた、今年の收穫を豫想した小作人達のよろこび――汗と油の結晶はグン／＼と力強く伸びてゆく。その小作地は會社側に素晴しい價で自分達の知らぬ間に賣られてゐた――ことを知つた小作人達は驚愕に飛びあがつた、女房、娘は泣いた。今までだつて一生懸命作つても作つても喰ひかねた、繭の價はガタ落ちの半値だ、この不景氣に馬や牛でも働きさへすればまぐさの心配はして貰へるのに萬物の長と云はれるこちとら人間が牛馬に劣る慘さで喰ふや喰はずで家内中の者が働い

ても追つく貧乏に小作地を取上げられたら一體何を喰つて生きて行くのか。百姓だつて人間だ。地主ばかりが人間ぢやねえ小作人あつての地主さまだ。それに永年のよしみを忘れて無斷で賣拂ふとは餘り俺達をふみつけにしとる。兎に角地主にかけ合はう。小作人達は久しぶりに長い着物を着て地主の門をくゞつた、然しそれは引かれ者の小唄程度に輕くあしらはれて追ひかへされたにすぎない結果だつた。賣つたのは自分の持物だ、小作料の滿足に上らぬ畑を會社が値良く買つてやらうと云ふから賣つたまでだ、お前達やあそれに文句つけに來たのか――地主は永年の地主風で怒鳴つた。お互に腹一杯投げつけたい不平を孕みながら、小作料も滿足に上らぬの言葉に一言もかへせぬ永年の小作人根性はおとなしく引下るより外仕方がない彼等だつた。

誰も仕事に出るものはなかつた、或家は耕作地の大部分を或家は半を三分を、取り上げられた者二百數十戸の男達は働く元氣も出ない、然し五六日もすると皆の者達はこの先をどうして喰つてゆくかの重大問題は單純な村人の頭にも何等かの方法を考へ出させねば置かなかつた。どうせ取り返せぬ地ならせめて會社からいくらかの作離料でも出させやう。そこで二三十人の者は會社の幹部と會つた、然し老獪な幹部達の舌は彼等の死活問題を前の眞劔な要求をも他愛なく擊退する事が出來る、……何分會社と致しましても法外の高値で買收しました上會社も創立日淺く資金の運用も未だ思ふ樣にまゐりませぬ、村當局の御了解を得てやりました事で私達としましても甚だ御氣の毒には存じますが唯今のところどうにもならないのでして……村當局了解の上なら役場に出かけろ、村長どんに話をつけて貰はう然し工場の位置さへ知らぬと、とぼける助役のゐる役場が一文にもならぬ小作人達の要求の御取次眞平だ、村長に傳へおく退れ――だ。結局泣寢入りは無智な者と弱き者とに課せられた重税だ。

無產黨員の應援

いよ〳〵やつとるぞッ――よもやと思つてゐた、みんな家を飛ひ出して畑へ走つた其處には會社の傭人達が買收耕地の麥も菜種も根こそぎきれいに引ぬいた後へ桑苗を植ゑつけてゐるではないか。黑々と打かへされた畑地の一隅に彼等の汗と油の結晶は無雜作に積あげられてゐる。畜生ッ皆筝でポロ〳〵流れおちる涙を横なぐりにした。誰もかうした不安を持ち乍ら然し畑は賣られても作物はこつちのものだと昨日まではよもやと思つてゐたのに。誰も喪失した樣に默々と引かへした。萬事休すだ――

次の日無產黨員が應援に來たッ、と二三の者が村をふれて歩いた。この場合如何す可きかを未だ充分に知らない農民達のために宮崎市で『鐘紡減給反對鬪爭同盟委員』として活躍中の社民支部に、心利いた者が應援を求めたのだつた。支部の杉浦外二名の黨員は鐘紡と鬪つたが結局工場長から『貴意に添ひがたく』のにべもない回答を受けると鬪志なき工場員を後に三十四錢の汽車賃さへない三人は六里の道を馳せつけた。四月二十六日――目ざすは同じ鐘紡傍系の會社だ。彼等の意氣軒昂たるものがあつた。村民は皆元氣づいて集つた。

役場へ押しかける

杉浦と村長、會社幹部との折衝は毎日つゞいた、然し彼等は決して小作人達の要求に應じ樣とする好意を表さなかつた。五月十八日、百八十八名連署の作離料に對する請求書はいよ〳〵會社に突きつけられた。娘が息子が工場に出てるため首を恐れて連

署に加はらない悲しきあきらめをした小作人も數十人はゐる。請求書は作物侵害料反當り三十圓、永年作物（茶、ラミー等）侵害料反當り五十圓、總額四萬六千圓也。會社はこの請求書を受取ると直ちに之を村役場に持つてゆき助役に手渡ししたため杉浦につゞく百八十八名の小作人達は役場に押かけ『助役は會社の助役か』と形勢惡化したので杉浦は一同をなだめて引揚げた、（ダラ幹奴！）そこで之が回答を五月二十五日村長、會社幹部立會の下でする事になつた、然しその前に村長も幹部も長途旅行に出た事は故意か偶然がさせたのか知らぬが決して善意に解釋される行動ではなかつた。

だが小作人達は今は一日の猶豫も出來ない困窮にヒシ／＼とその日の生活を脅威された。百姓が働く土地を持たない――失業農民の生活ほど慘めなものはあるまい。農民の威力が社民ダラ幹の手におへなくなつたので遂に調停裁判を仰ぐ事になつた。

×田村村民大會

村長どん以下會社からうんと金を貰うたげなと云ふ事が村民をより怒らせた。

わかつとらあ――會社に關係したもんな皆金うんと貰うちよるぞ、そいぢやけに俺達のために一言も會社にかけ合が出來まいがの。昨日も一昨日も村長どんなえたいの知れん者から呑まされよつたぞ。

暗い事しとるけにつけ込まるるとよ

村をぶちこはして會社の犬になるけな村長な村から叩き出してしまへ。

さうぢや、あんげな村長や助役達がのさばつとつたら俺達ん村は黒暗ぢやぞ

やめさせろ、叩き出せ、村當局排斥の烽火は村民一致して彼等に向けられた。

六月十二日×田村村民大會は開かれた、會場は小學校上手の廣つ場だつた。此日空は押しつぶされる樣に陰慘な雨雲が垂れ下つてゐた。集る者七百人、數里を隔てた部落々々からも朝まだき立つて正午には皆顏を揃へた、管內の警官はもとより縣特高課からも刑事は派遣され警戒はもの／＼しかつた、その中で素朴なたど／＼しい口調で村民はこも／＼立つて悲痛な叫びを上げ村長、助役、議員達の非を鳴らし會社の橫[illegible]を痛罵した。村長の部落二十七戸の內村議と姻戚四戸を除く外は皆反村長派である事も面白かつた。然し彼等の非を訴へ自己の困窮を叫ぶに言葉足らぬ村民達はもどかしがつた村長を引づり出せ、叩き殺せ、熱狂した村民達は誰からともなく一齊に騒然として警官の目をむかせた。

兎も角騒ぎの中に決議された事は、村長以下村會議員達に辭職の勸告狀を叩き突けること。村政の紊亂を革新して平和な×田村を取り返す爲×田村政革新同盟會を作り村政の革正に村民一致して當る事であつた

一致團結赤旗立てゝドッコイショ地主征伐コリヤせにやならぬヨチヨイナ／＼

小作し飽いた米取り飽いたドッコイショ地主の機嫌もコリヤ取りあいたヨ…

今に見やがれ鐘紡の奴らドッコイショ將棋倒しにコリヤしてやるとヨ…

最後に誰が作つたのか何時徹底させたのか足並揃へて高唱しながら軍隊的な規律を見せて引上げたのは二ヶ月前までのあきらめを背負つて暮してゐた小作人達とは別個の情景であつた、杉浦の訓練だと警官達は云つてゐたが、この日杉浦達は村民でないため會場には入れなかつた。

辭職勸告狀を叩きつけられた村長達は事件が案外擴大性を持つ事に今更驚いた。然しもとより責を感じて辭職する等考へても見ない事だつた、村長は縣當局に出頭して曰く「昭和產業會社誘致について兎角の噂

さがあるが私は唯、村のため誘致に努めそのため三十萬圓の大金が村に這入つて來てゐる、私は噂さるゝ様な報酬等一文も受取つてをらぬ、村民の騒ぎも一部不良分子の煽動によつて盲動してゐるにすぎない村民はそれ程騒ぐ必要を感じてゐない筈だ』自分は悪例を殘すから斷じて辭職せぬとつけ加へた。村民よみんな聞いてくれ、三十萬圓とかの金は一體どこにころがつてゐますかね——

村議と酒を飲むダラ幹

から蒸暑うちやのさん、燒酎ども呑うかい。一杯やらにやかなはん、杉浦は村會議員川村と村の酒屋で一杯やり出した。杉浦は人も知る斗酒なほ辭せぬ酒豪だ、川村は呆さにうだつてすぐ醉は廻つた。

お前達ちやしかし今度ん會社誘致ちやうんと儲けたつうぢやないかねウハ、、、

何云ひよりやるか儲けたつあ村長や助役どんばかりよ。

うんにやお前達ぁ貰うたつうげなそ。

馬鹿云へ主が知るか、今度ん會社の賞與じやて己達にや鼻糞ばかりよ、杉浦は一膝のり出した

何? 賞與? 何の賞與かい

醉つた川村は他愛もなくスラ〳〵云つてのけた。

會社からよ、村長が皆んなに配けてくりやつたつぞ。

ふん村長が會社からの賞與をお前達に分配してやつたつうか、こりや面白いわい、こん不景氣にそりやうまい事やつたなあ、お前や何ぶ貰ふたけえ、おごれよハ、、、

何ぶもかんぶもあるか、俺それでこの間から不平でたまらんとよ

どれぼづ貰うた?

たつた八十兩よ。

うまい事したなあ、何處で渡したとか。

たぶの木坂で封筒入りを貰うたげに人は通らずすぐ開けてみてびつくり玉手箱よハ、、、たつた八十兩で辭職せよとはコリヤい、い、のしまつせんチヨイナ〳〵じやハ、、、

杉浦は醉も一時にさめてしまつたといふことだ。

間もなく村政革新同盟會員の赤札が門毎に貼られて行つた、三十二部落九百戸の門口に貼られない家を何戸見出すか——月三回巡廻員が印を押す様に出來てゐる、これによつて村長派と反村長派とを歴然たらしめあく迄闘ふと云ふのだ。生活戰線上に立たされた小作人達が今や漸く自己を主張しうる未知の社會へ鍬を入れやうとする。

強慾地主と息子

この抗争の間に村にはいろ〳〵のエピソートがまかれた。

大地主松木の息子は某大學二年生だがふい、るさとの出來事を取りよせてゐる新聞で知つて飛ぶ様に歸つて來た、小作地讓渡の徹回を迫る子はゴマ鹽あたまの親父に拳で打ちおろされた、父を打ちかへすわけはない若者はしかし、打たれ、けられて伯拳の下から父に徹回を頼んだ、父も泣いた長男は高等學校在學中社會科學研究のため退學させられ勘當同様にしてあるのに賴みに思ふ次男も又俺を苦しめる勉强をしようと見えると云つて、泣き乍らどなつた。

馬鹿め、大馬鹿め、出てうせろ、

息子は貪慾な老父を淋しみながら泣けた。彼は村民の爭議組合事務所に向つた。

毎晩〳〵村民達は各所で演說會を開いて氣勢を揚げた、村民擧つての鬪爭だ、村の青年團も起つた、われ等の村をとり返せと人々は叫んだ。青年團は村内三部に分れてゐるが一部は村當局に追從して他二部と行動を共にしなかつた、一部の團長は民政黨

員で村長派だつた。二團體は一部と今後の團交を拒絶した、然し之と同時に當局からは二部團體に對して團の補助費を削減する旨の通知を發した。當局のけちくさい了見は青年達の血を更にかりたてた、己達の青年團は己達の手でやつても、くさつた役場の補助等を受けるのは恥だ——、

若人よ盛なれ——

農民よ起て！

第一回調停裁判は兎も角八月十六日開かれたその成行は、農業團だけに絶え間ない小作爭議の今後に影響するところが大であるため一般からは非常な期待を向けてみられてゐる。

百八十八名が請求額の四萬六千圓を完全にかち得たとして一人當り平均二百四十圓餘、そこらのブルジョアが一日の淸遊にきれいに札ビラ切る金にも足らぬではないか

二百五十圓足らずの金を半年或は一年後にもなるが彼等の懐に納めえたとしてそれが彼等に新らしい下駄の一足も買へる潤を齎らせるか、それには餘りに枯れつくしすぎた彼等の生活である。それにまだ小作料値上げの氣配さへ見えて來てゐる、傳統に馴らされて來た×田村の農民も今や敢然と起ち上る時が來た。

同志逢阪に代つて

島あやめ

九月號に——レート工場姉妹の闘爭——と題し、大阪全産業勞働組合婦人部の逢阪喜代が、誌上を通じて絶叫した——平尾レート工場の姉妹は諸君を代表して果敢なる闘爭を續けてゐる、應援鼓舞して姉妹に絶對の勝利を得させろ——反響は涙ぐましいまでの實績をあげて全國からの應援に接したのである、あるひは組合に逢阪を尋ねて來た同志も四五あつた。

だが、逢阪はこのとき既に曾根崎署に檢束されてこれらのよき同志の來訪または應援の數々を知るよしもないのだつた。

從つて應援下さつた、殊に組合に來られた未知の同志へ一應當時の事情を開陳して同志逢阪に代りおわびの一端にしてをく。

當時、大阪全産が最も力を注いでゐたのは府下吹田町の友仙工場爭議であつた。是非ともこの爭議を通してもはや合法主義による闘爭が如何に無力であり認識不足であるかを示さねばならぬゆきがゝりがある組合との仲にあつたりしたので。

諸姉の心ある人は、七月下旬より八月中旬にかけて大朝、大毎紙上に吹田町の友仙工場爭議の經過報告的の文字が毎日の様に載つてゐたことを記憶してゐられるであらう、實に果敢なる解消意圖を以てのわれらの闘爭はヂヤアナリズムの特種にさへなつたのである。

實に實に全力をあげて大阪全産はこの爭議に當つてゐたのである、そして最後の日が見舞つたのであつた。即ち、ブル新聞紙は（工場を占領し五〇尺の煙突に赤旗を立てる吹田町友仙工場の爭議）とのミダシで、突風的に遂行したわれらのゼネストの光景を報道したのだつた。

この朝、組合員の十六名は國分寺町の事務所に集合することになつてゐて早朝同志逢阪も組合事務所の附近まで行つたのであつた、だが如何にも平常ならぬ有様が話しあつてゐる近所のお上さんたちの顔に讀ま

れるのでそれとなく仲間入をすると、
「大變だつせ、さつきからもう十人程來る人、連れられてゆかはりましたで」
　同志逢阪は逃げる樣にしてこのことを同志沖野に知らすべく沖野の下宿に行つた、だがこのとき、沖野は既に組合に出かけたあとで致方もなかつた、更に同志逢阪は私を訪ねてこのことを云ひ、誰々が檢束されたか氣になるからもう一度行つて來ようと言ひ置いて再び事務所に出かけたのだつた、さうしてかれもまた檢束されたのである。だが!! だが!! 解消へ! 解消へ!!
わが全產は而して同志逢阪は如何なる迫害をもケトバして鬪ひ拔くことをちかふであらう。
　逢阪を訪問された同志たちよ、以上の樣な理由でかれは不在であつたのだ、よろしく御了解あることを乞ふ、
なほ、レート工場の爭議に於ても、わが全產は決してルンペンではなかつた、殆ど幹部を奪はれてゐたが婦人部・總動員でもつて鬪ひ拔き遂に相當の勝利を得て解決することが出來たのだつた。
　附記
　詳細なるこの間の爭議内容はもはや解決の事柄に屬す事、ともかく如何に鬪ひぬいたかは想像にまかせる事として書くことを略する、猶贈與された金錢は解決後のことであつたので組合婦人部に收入として處理してあるが異議ある人へは即刻返却するから組合宛通知ありたい。

保護旗購入

笙千鳥

北方政府が建ち北平はまた北京となるとか、ソヴエト・チャイナが樹立するとか悲喜こもごもの中に、南方政府の飛行機襲來バクダンのお見舞です。
共產軍について北京へ報告されたままをお傳へします。
十匪は一縣を占領するごとに學校出身の青年を搜査し、法を設けて逮捕し戰はしむ殊に軍事學校卒業生は最も歡迎するところで若し服從せざれば直ちに銃殺する。
それから共產軍の最も必要とするものは兵器および資金だがその調達の方法は
イ、土匪は民團或は軍隊へ誘致する方法として、逃走に當り若干の銀貨を路上に撒いて置く、討伐はこれを不思議なことに考へ鐵砲をお留守にして拾ひ集めてゐると、土匪の伏兵はワアと現はれ、これを包圍して武裝を解除する。
（ロ）討伐隊が土匪の勢力圈内に入つた時、婦人をして酒肴を饗應せしめて油斷に乘じて武器を强奪する。
（ハ）最惡の場合は討伐隊を夜襲して物資を掠奪する。
（ニ）南通方面の共產匪は勢力圈内の住民に「保護旗」の購入を强要し若し應ぜざる場合は銃殺する、保護旗は一本五十元、一ケ月に一回改正する、同地方ではこれに依りて三ケ月に約四十萬元を得たといふボロい話、調達の方法がいかにも滑稽に傳へられてゐますが、しかし、その勢は大したもので結成内容は、貧農六割五分、逃亡兵一割、工人および知識階級一割五分といふ數字です。最近の情報ではソヴエト政府の建設さるゝもの百數十縣、江西、湖南は全省の大半が同軍で埋められてゐるといひます。

欺されるな！

希望社保健部に居たプレー

——昨年八月迄の事實——

山本美智子

一、とんでもない樂園

「採用許可八日までに御來社下さい」と云ふ許可書を握つた時、私は完全に雀躍りした。「——三ヶ月は假採用後正式に入社を許す」此んな但し書き付きだつたが其んな事は何んだつて問題ではなかつた。信と愛とに立脚した國家的集團だ。より美しき社會の建設等々の美詞は、魅惑をそゝるに充分な吸引力を持つて居たゞけに希望社への憧憬はたいしたものだつた。修養書とかいふ薄つペラな頁を繰つたゞけでは、其の裏面にどんな僞瞞を含んで居るかは、目覺めない純情な若人達には知る由もなかつたのだから、姉の心配さうな憂鬱も、知る邊のない東京へ一人で行く淋しさもすつ飛んで、只憧れの希望社の看護婦になれると云ふ一事で夢中になつてゐた。で、私の期待は大きかつた、どんなにか理想的に、內部は完備されて、優遇は勿論、世人に指導めくだけの價値はあると信じて居た。

「わたし保健部へ來たんですが——」

希望社の玄關へ立つた時サーッと暗さを直感した。

ぢき保健部へ案內しますから……と云ふので事務室へ案內された。其處には、主任だと云ふ數名の男員を交へて幾百かのうら若い女性がセッセと事務を取つてゐた。通風の惡い中に卷き上つたゴミと、人の息に醸された惡臭が無遠慮に發散して居る。

保健部部員募集の美句に釣られて、看護婦としてはひつた筈の私は、一ヶ月間事務雜事に追ひつかはれるとになつた。これは別段さうしなければ入社させぬと指定された事でもなんでもない。そこへゆくと自然そんな風に追ひつかはれるのだ。社長の妹さんといふのが優しい言葉で——あとで思ひあたつたが、すべて言葉だけはいつも優しいから世なれない者はコロリとまい

る。「みなさん、立派な免狀をおもちになつてこんな事をするとお思ひにはならなかつたでせうが、これもみな社會奉仕ですから！」

　そこで私も異義なく社會奉仕に從事する。事務室は第一から第五まで別れてゐて近畿地方、中國、九州、四國と云ふ樣になつてゐた、各々出生地を受け持つので、私は近畿地方へ廻された。奈良、三重、和歌山と別々なカード箱に、又郡別になつて、誌代を記入した讀者カードが大事に保存してあつた。中机が三つづつ並び其の兩側にやつと椅子に腰掛け得るだけの間隔を置いてそのカード箱がギッシリならんで居る、近畿だけでも誌友が二萬突破して、希望近畿と稱してゐた、――希望近畿といふのは一町村五十名以上の讀者（卽ち誌友）を有する時希望町村と云ひ、そして同じく郡となり、縣となり、希望近畿と名づけてゐた

――朝八時から五時までの勤務時間だが、各自だけで働くことは其の限りではない。通信の處理及一日に二千枚から三千枚の夥しい帶封を一人して受持つのだ。間に合はない時は夜の十一時、十二時までも書きつづける。八月から四時起床、廻されたプリントには、

　四時起床、五時から行事、七時事務開始九時消燈。休勤、遲刻、早引した場合の各理由を毎日の明記表に各自記入し主任の手を經て社長まで差出せとの嚴命である。行事とは毎朝五時に屋上に集り體操をして社長のゐない時は、行先の方を向つて、「先生お早うございます」と最敬禮をする。全く偶像的な崇拜を强ひるのだ。それから講堂に入り奏樂で默想（所謂精神統一）かしこくも明治天皇御製の「大御心」にならべて、彼後藤の自作「權威」を朗讀させるのだ。勿體ないわけではないか。日曜だつて、なんだつて、どんな日でも此の行事をする。それから食堂に入る、健康、食糧問題の解決等と體裁よく吹聽して玄米食の實施だ。五百人ばかりの大家族だから其處に浮かび上る、白米との差額は莫大なものだらう。

　九時消燈と云つても、眞夏に其んなに早く眠れる筈がない。自然事務のない時でも十一時十二時になる、そしてどんなに眠くても四時には起きねばならない。朝からぶつ通しに働いて正味四時間の睡眠では神經衰弱になり、顏色が蒼ざめて行くのも當然だ。此處に私のやうな田舍娘にも不思議に思はれたのは、この大家族主義の、勤勞第一條件の大アパートに、眠りの次に一番疲勞を休める所の風呂の設備がないのだ。たつた一日五錢といふなかれ、乏しい財布には多大な影響をするが、やむを得ず錢湯に行かなければならない。

　これはなんの爲だらう、社長に眞の人道的愛があればこんな事はテンからわかつてゐる筈た。然し私は昨年夏迄の事をいつてゐる。昭和五年の現在のあの大希望館が全國各地の讀者の淨財で出來上つてからの設備はしらないが、ともかく希望社の根をなしたそれ迄の働き人はかゝる無慈悲のもとに働いたのだつた。

　事務室の右側に大きな矢張り縣別になつた通信箱がある。讀者並びに社員への通信物を入れ、各々が見るのだが社長宛に來たのでも、先づ其の縣の主任が封を切る――どう云ふ關係から主任になつてゐるのかは知らないが主任に絕對權利を與へてゐるらしい。時折社員へ來た手紙まで開封してある。中味を改めるのか、用向きを調べるのか、何んの爲に無斷で開封するのか、ほんとに氣持の惡いものだ。

二、希望社とは何ぞや

さて私はいふ事を急いだために希望社と云ふものゝ構成を初めに言つておくのをわすれた。素川女史が本誌七、八月號二回にわたつて、「反動希望社一覽、希望社反動事業綱」と題して明細に書きつくされたが、私が何にもしらずに飛込んだ、あこがれの希望社には、希望社とは何ぞやといふ希望社の三大綱領及其の具體案といふのがある。

一、社會の倫理化
二、教育の生産化
三、産業の教育化

組織及その運用といふ方面に
一、本社事務の分掌として、

(1) 總務に屬する方面
　總務部、庶務部、會計部、文書部、
　炊事部、接待部、被服部、營業部、
　整理部、人事課、調査部
(2) 社會教育に屬する方面
　出版部、講演部、講習部、神事部、
　編輯部、出版部、印刷部、宿泊部、
　通信部、輸送部、音樂部、體育部、
　保勝部、發送部、圖書部、保健部、
(3) 社會事業に屬する方面、
　富人部、慰問部、救護部、弔慰部、
　育兒部。
(4) 學校教育に屬する方面。
　教務部、育英部、保護部、表彰部、
　寮安部。

がある。經營方針として掲示されてゐるのは社員無報酬獻身的に働くである他の部類は知らず、私は看護婦の仕事を目的にしてゐたのでそののち、保健部へ入つた。

保健部といふのは、希望社に働く、いはゆる社員とよばれる勤勞者の病人を入れる、病室又は靜養室なのであらうが、その取扱ひのどんなものであつたかを少しばかり私の知つてるだけ記して見ようと思ふ。

保健部と云ふのは社から可成り離れた普通の一寸廣い家だつた。醫者が始終居るわけでもなく、病院らしい設備もない。集つた者は看護婦見習生——勉強しながら實地研究をなし、看護婦の資格を得ようと云ふのが六名、免狀をもつた者が八人ゐた。私もまた八人の中の一人である。中には夫を亡くし一人娘を亡くした四十位の未亡人も交つてゐた。夫と離緣して二人の子供と生き別れたと云ふ人もあつた。まだ若い身を夫亡き故に愛兒を殘して出て來た人もある。かうした悲しい境遇の人達だから、一日も早くどうにか身をたてようと、希望といふ字にどんなに心をひきつけられ、人を救ふと云ふ後藤社長の言にどんなに信頼して來た人達だかそれはいふをまたない。現に私もその一人だ。私は希望社のいひかげんな讀物によつて身をたてうると強く信じて來た一人だ。ここの社長を神樣にあがめ奉る地方の人々は、此處へさへ來れば幸はせになれると思つてくるのだつた。入社した當時「後藤先生の愛に抱かれて美るはしき人のみの世界に思ひのまゝ活動されん事を——」友達からこんな手紙まで來た、所が數日經つても其の憧がれの先生にお目にかゝれない、そして主任から「皆さん誌友である限り仕事に不服はないと思ひます、今後藤先生は目のまはる樣な多忙です。いづれ今後の方針、計畫等具體的なお話があると思ひますからそれまで本社の事務をしてゐて下さい」と云ひ渡されたのだ。

時報に日本看護婦聯盟と大々的に書いてあつたがそんなものは何の私達を益するところもなく、却て社長を益し希望講讀者の増加運動にすぎなかつた。其の名にもつ期待は全く裏切られたが、後藤社長の人格?

を信じ切つてゐた私達は、不平はおろか、むしろ喜んで言はれるまゝになつてゐたのだ。其の言ひ渡しがあつてから間もなく、看護婦産婆の免状を立派にもつてゐた○澤さんは耳の悪い娘の監督と云ふ名の下に世話人にやられた。看護婦と云つても社員か誌友の看護をするのでない限り、絶對に普通の病院等へは派遣させられなかつた。社内の病人はみな此の保健部で介抱する。だがホラ發送だ、誌代整理だ、レポートだと次から次へ持ち出される仕事を目先がボーッとする位、盲目的に働きぬいて居る人達には、この保健部の存在は全く無關係の様なものだつた。なぜなら極度に堪へられなくなる程悪くなつてからでなければ保健部のある事をすらよく知らない人がある。彼等は初めから保健部を利用することを知らないのではない知らさないのだ。社友の醫者さんが（この醫者はあまり病人がわるくなると外からかけつける人だが）他病院へ入院させる。だからその結果は定まつてゐる。みな死亡して行くのだ。

　ここに一つのよい例がある。後藤社長の寵愛を得て居る保健部の主任が脳膜炎を患つた時、阿佐ヶ谷病院へ入院させられた。高熱と發作が續いて、二週間三週間と經つても一定の病狀を保持してゐたが、長く入院するのは社のため不經濟だと云つて、退院するのは嫌だと云ふのを無理に、コカイン（充分麻醉し得る分量）を注射して自動車で歸らせた。その人は藥が覺めた時、麻醉藥なぞかけて知らぬ間に連れて歸るとは、あんまりひどい、私の父であつた筈の後藤先生を怨むと非常に憤慨した。で、其の人をなだめるのに苦心した。今この人は、おなじ社内の人と結婚したとか云ふ話だが、それは私が出てからだからはつきりわからない。希望社では社内人の結婚をよろこぶさうだ。もしこの挿話をこの人が嘘というふやうな事があれば、その人はかんぜんに希望社の御用人となつてしまつたしるしだ。

　どんな苦痛も疲勞も犧牲にして、從順な社員になり切つていなければならない社内に、表面的には患者が出來る譯がないので、看護婦であるべき者もや、毎日事務員の様に封筒を書かせられた。手首が、肩が痛くなつても書き續けてゐる時、不意に

「一人入院したから行つて下さい」

　早速かけつけたのは、下谷にある慈善病院だつた。患者は希望社印刷學校の、生徒と云つても本當は職工だ。――十七ばかりの少年だつた。ほこりにまみれた騷騷しい中で終日働き、五時から九時までは夜學だと云ふ、かうした間斷なき勞働に病み疲れて、四十一度の發熱、化膿性脳膜炎と診斷されて入院したのだ。病室は共同ベッドで何んとも云へない陰慘な空氣を感じた。夜の間私は毛布にくるまつて汚い床に横にならなければならない。この患者は乳嘴突起の手術を受けてから毎夜疼痛が激しかつた。

　午後になつて暑さがムッ〳〵して來ると、病人は何かに壓迫されるものゝ如く、頓狂な聲を出しては、全身を痙攣させる、かうした發作が毎日續いた、其の度に、郷里から駈つけてきてゐた病人の父は、堪らないと云ふやうに、

「利ちやん、しつかりしてくれ。」

「治るんだから、しつかりのう――」

　どうして頑丈だつた息子が、此んなにも苦しむんだらうと男泣きにないた。この子は家にゐる時はピン〳〵して肥つてゐた子だつたが――と泣いた。

病勢は極度に惡化して遂に亡くなつた。

日死亡した生徒の告別式だと云ふので（私が來てから五ヶ月目で之で五人目だ）希望社の講堂に祭壇が設けられた。印刷學校の生徒が全部集つた。

正面の亡き同級生の寫眞をじーつと見つめては、自分達の日常を思ひ起すやうに涙をすゝつた。やがて社長が

死は悲し。
されど
天より出でたるもの天に歸る。
命は人間によつて作られぬ。
たゞ聖旨のまゝに――
誰か之以上言ひ得るものぞ。
愛するもの逝きて
現世と靈界との連鎖が出來る。
眠つた者はいつも側に居る。

こんな事を朗讀した。そして彼が入社する時出した手紙――それは精神主義者の言葉に憧れて入社するのを非常に喜んで書いたものまで讀み上げた。たぶん喜んで死んで行つたと思つてゐるらしい。

三、宿料食費で相殺

睡眠不足になつて看護から歸つてきても餘り休めない。すぐ又前に述べた帶封書きだ。肩が痛くて嫌なのに、掃除洗濯だ。そして看護にいゝた間の給料は貰えない。電車賃でさへ自辨だ。此處へ一體何をしに來たんだらうと考へざるを得ない。

一般事務員の規定は新入一ヶ月間は假採用（食費十五圓給與）で二ヶ月目から小遣ひとして五圓渡される。一年以上勤めてゐる人は本社員と稱してゐるが一體いくら貰つてゐるのか知らない。事務員の中には一年半も經た人が、どう云ふわけかやつぱり五圓なので餘りの不合理に憤慨して出て行つた人がある。私達保健部に入つた者は病院へ派遣される時の毎日の電車賃。辨當代――病院へ附添人の夜具食費を入れるのは高いからと毎日社から通はせられるのだ、――自然自分の財布をはたかねばならない。三月目から二十圓を支給されたが食費十五圓と看護婦六人で三十圓の家をかりたから（この家は修省舍といふ名だ、なんと立派な寮舍のやうに思へるではないか）一人五圓づゝの家賃を支拂つたことになる――社内に金券があつて食堂で食事を求め、家持ちは社內の賣店で日用品食品を全部求める。勿論外へは通用しない――私達看護婦の免狀をもつたものは四ヶ月目に三十圓給支されるやうになつたが、食費家賃の殘金十圓も希望社金券で渡された。たまには現金の時もあるが之は勝手のいゝ時だけだ。何にも、報酬だけを目當てに來たわけではないが、此んな僞瞞的な資本家の、エンの下の力持になつて、奴隷的生活に過ぎない日常を、只沈默を守つて働いて居る皆んなが不思議に思へた。だが嚙み殺してゐた不平、不滿が燈火心の様に炎を出し始めた。實地研究はおろか勉強さへ出來ないで病人の家へ子守にやられたり、掃除炊事をさせられて居る見習生は殊更慘めだつた。「私達どうなるんでせう」と小聲で囁いては泣き合つた。又且つて農村で、産婆として賄付五十圓で役場に雇はれて、相當な暮しをしていた人が、無報酬、而も女中同然な勞働に對し不平滿々だつたのは無理もない。だが此の反抗心は社員への導火線にもならない程の小さなものに過ぎなかつた。グン／＼恐ろしい勢ひで增加する誌友と、內面の矛盾に對し、只漠然とした疑惑だけで、私達はまだ／＼しびれ切つて居た。

私は五ヶ月目に此處を飛び出した。社員の血潮と、誌友からの搾取によつて

出來上つた大希望館、そして後藤總裁六月二日渡歐とある。成程ハハアンだ。

モーターにかまれて

堀百合子

モーターに片腕を噛まれて戸板で運ばれた兄が新聞紙の樣にほをりこまれた。犬小屋の樣な生活にやつれた母がせんべい布團の中で聲を殺して泣いてゐる、死人の樣な蒼白い顏に土色の唇が慄へる。

！新聞紙のやうに投りこまれた——口惜し涙がポタ／＼と指からこぼれて味噌越の中に落ちる。

會社から見舞だといつて蚊の泪程のめくされ金が屆けられたけど、いつたい、これからどうなるんだい。日を追ふて細くなる疲れた無口のお母さんの顏がそこにある。よごれたガーゼーで手を首に吊り、昂奮に蒼ざめた憂鬱な兄の顏がそこにある。いじらしい弟まで青くなつてゐる——何とかしたい。なんとかしなけりやならない。せめて兄のよくなるまで——

横町のある家の白い顏が視野をかすめる。

昨夜工場から歸つて來ると、夜しかしみ〴〵と出來ない兄の膝へ十一になる弟がとんでつた。

お歸りなさい兄さん。今お藥を取りに行つたんだけどお金……

オット待つた賢坊や、よいものやるから一寸來い。

あわてゝ路地に連れだし、

何故母さんの前で金の事なんか云ふの、おととい話して聞かせたばかりなのに——

靜にさとす優しい兄が、大切な兄が——ブルジョアのお腹を極度に膨脹させる爲に

中間搾取業者

田中豐穗

私が貧しい故にあらゆる娘の名譽も外聞も打捨てゝ或る郊外の新聞配達となつた時或る新聞は知識婦人の新聞配達等と行々しく書き立てた。

正月の頃の午前三時と云へばまだ夜半だ。人々はぬく／＼と夜着にくるまつてゐる時分だ。こほり切つた空氣の中を三時間もかけ廻つて働く、いてた道路を踏む足はまるで感覺を失つた、ブル／＼と手先は寒天の樣だつた。

そして私達には雨の日も雪の日も休みとてはないのだつた。そして此の給金が二十五圓だ。

働く時間が僅か五六時間だからね、と初めに主任は云つた。成程名目だけはその通りだけれども決して實際はさうではなかつた。三百軒に近い自分の區域の集金に讀者の擴張にと日中は働くのだ。かうして集金人や擴張員の分まで働いていよ／＼主任の利益になるのだ。

本社から出る集金人の給料も擴張員の給料もみんな主任の懐を肥やすのみだ。

いくら働いてもはげんでも配達員の給料は二十五圓、その二十五圓も滿足に仕拂ふ月は一度もなかつた、すべての搾取業者がさうである樣に此處の主任も表面親切であつて一寸のすきもなくあはれな配達員を苦しめた。かさかさの枯草が干秣に變つて、五倍も十倍もの仕事をさせられる牛の樣に私達はよく、その手を使はれた．だから配達員達には三十錢の丼を十錢のソバよりはおそろしい物に思へた。

十五日が來ると毎日々々集金に行くのだ。新聞屋は馬鹿にお金を早く取りに來ると大抵の家庭では拂つて呉れようともしない。いゝ加減足が棒の樣になつても集金袋はふわ〱と輕かつたこんな日には屹度集金率の惡い事をとがめられた。

2

「やあ〱女の新聞屋だ、おかしいなあ」

子供達は何の遠慮もない大きな聲で此の男裝の女をはやし立てた。

「やあ君は勇敢だね」とからかひ半分に道行男達は投かけた。

フン君達も矢張り工場で多くの勞働者達を苦しめて居る組かい、それとも事務机にしがみ付いて課長の顔色でも窺つて居る組かい。こんな事を考へながら私はボン〱思ひざま石を蹴つてあるいた。

給料日は二十日と云ふ事になつて居るが二十日に出した事は一度もない。二十日どころか二十五日が來ても三十日が來ても何にも云はなかつた。間代の期限が來て、私が催促するとまだ今月は淸算がしてないからと云つた。かうして當然仕拂ふべき給金をまるでお慈悲で貸せる金の樣な態度だつた。初めの中は私も信じて居たが二ヶ月三ヶ月過す中には何故に斯くまでも出し澁るかをはつきりと知る事が出來た。それは配達員達の區域中より轉居等で新聞代の取れない分をみんな此の給料から差引くのだ。

だからいくら取れない金があつても彼の收入には一寸も變りはなかつた。かうして働く者は働けば働く程損をした。

それからもう一つは酷使してゐる事をよく承知の主任は此のあはれな人間共の無闇と逃げ出さない樣にとの手段なのだ常に何にも餘裕をあたへない樣にしたのだ。毎月給金の半分なり三分の一なりを出して後は二月も三月もそのまゝにほうつて置くのだつた。

たつた二十五圓の金それはブルジョア夫人の唯一回の美容院のチップにも過ぎない高だらうが、私にとつては一ヶ月の間の食費にも間代にもなれば本代にもしなければならない貴い〱金なのだ。人々の蔑視に胸をさゝれながら得る金なのだ。

3

多くの配達員は出張所の二階に起居して居た。六疊と四疊半の二間にゴロ〱とほうり出した樣に生活して居た。たてつけの惡い硝子戸の隙漏る風はヒユー〱と鳴つた。雨の日には雨が遠慮もなく侵入して一面うす黒く汚れたへりの摩り切れた疊にビタ〱と浸み込んだ。寒中もズット火鉢等はある筈がなかつた。此のあはれた人間共は一寸の暇でもあれば唯眠る事しか知らぬ如く眠つた。下では手のなま白い主任が此の間何處からか連れて來た、玄人上りらしい細君を相手に長火鉢の前によつて居た。二階の彼等は寒くなると下に下りて來て仕事場の眞中に取付けてあるストーブにチビリ〱と廣告の紙をくべてあたつた。かぢかんだ皆んなの足が足袋もなく、板の床に並んで居る、石炭も買はない主任は戸棚に

山程積んである古新聞さへ燃やすのを拒んだ。古新聞ならまだよく燃えるのだがこれはまだ古新聞として賣れるのだ、だから彼等に許された燃料はジト〱と印刷の油のかわかぬ樣な廣告の紙片よりなかつた。

此の廣告と云ふのは方々からの開店案内や賣出し等の案内を千枚一圓で新聞に折込む其のあまりだつた。此の廣告の折込代金等も當然働く者の餘計の勞力となるだけで一文の增收にもならなかつた。

チラリホラリ梅が綻び初めて主任は細君を連れて水戸とかへ梅見に出かけた。櫻の便りも目近にはなつたが私達には依然訪れさうもなかつた。私の心は唯或る者に對する反抗がムラ〱と湧き出した。働いても〱逃れる事の出來ない苦しみは何故か。雨がジトジト降つて薄ら寒い日が續いた二三日來の頭痛も私には我慢しなければならなかつた。矢張り雨の中を[illegible]中から働いた二三百軒分の新聞紙は四貫目に近い目方があつた、肩は重みに痺しがれて毎日一定の所まで來ると屹度痺びれて感覺を失つた。私達に與へられて居る雨合羽はトックの昔に防水の用もなさなくなつた穴さへあいた布に過ぎなかつた。途中まで來るとグッショリと雨は裏まで浸み通つた、激しい雨の日等は纏はぬ方が却つて身輕で都合の良い位の品物だつた。やう〱家に歸つた時分には着てゐる毛糸のジャケッを通して雨は膚みにしみてゾク〱と寒氣がした、頭はまるで石にでも打つけた瞬間の樣にいたんだ。一日下宿の二階にねて居た。又夕刊に行く事を考へると悲しくなつた。

三月の風はピュー〱と町並をふきまくつてゐるガン〱する頭を抱へて店に行くと相變らず配達員達は紙をストーブにくべてあたつてゐる、向ふの座敷にはフカ〱とした絹夜具を掛けた炬燵に猫の樣に潛つてゐる主任が見えた、私は故意に入口を一パイ開けて入つた、冷えた風がドン〱と炬燵の向ふまで通つた。オイ〱早く閉めて吳れないか、私は尚も愚圖〱として居た。たまにはこんな風にもあたらないと腐つちまふと私は皆んなに云つてやつた、多くの配達たちはだまつてゐた、私はあまりのいまいましさに又窓を開けてペッと道路に唾をはいた。莫迦となり度い樣な衝動にかられて。

4

貧乏な働く者にとつては桃の花も櫻の季節も何んのかゝわりもないものだ。私達は唯その日其の日に追はれて居る生き物に過ぎないのだ。永い〱梅雨のジメ〱の間も雨を吸水紙の樣に吸ふ雨合羽でとう〱過ぎてしまつた。寒い時に苦しいと同じ程度に暑い時にも矢張り苦しかつた。ジリ〱と照り付ける太陽の下に一日中讀者の勸誘と得意の擴張と追使はれた。

ある日私の下宿の隣の時事新報の配達がストライキをやつた、十五六人の配達たちは各自の持分の新聞を通りと云はず屋根と云はずあたりかまわず撒き散らした。三千にあまる讀者に屆けるべき新聞はヒラヒラと遠慮なく舞ひ散つた。近所の子供達はよろこんで拾ひあつめて居る。自働車は道路一面の新聞の上をガソリンの匂を殘してかけて行つた。私は二階から眺めてゐた。手も足も出ず奧に引こんでゐるとか云ふ主任を一寸見てやり度い氣持で。

鬼主任をたゝき出せ

彼はおれ達の最低限度の給金さへもまだ搾るのだ。

そして一日僅か五錢十錢の食費でまるで豚の樣に追使ふのだ鬼だ〱等と大きな文字がベタ〱と方々にはり付けられた。

下の小母さんがマアなんて非道い事をするのでせう。使はれて居る癖にねえ。そんな事を云ふ小母さんをしら〴〵と眺めて私はさけんだ、なんて愉快だらうなんて愉快だらう。

たとへ今すぐに私達に幸福は來なくても、やがてかうして皆んな働く者が一等强くなるのだ、とほがらかな氣持でさけんだ。

七・三一

視學官と洋裝

星 勝子

今日は縣視學の來る日であつた。

「授業三時限り

第四校時より内外全力をつくして大掃除の事日錄、出席簿諸帳簿至急整理の事」

職員室の各學業授業時間割一覽表とならんで古ぼけた所々白墨によつて白くすりへつた掲示板には仰々しくこんな事が書かれてあつた。表面だけでもていさいを造らうと努力して、机の上に山程ある帳簿をかたつぱしから忙しさうに落度のない樣にしらべてゐた校長のにぶい顔を彼女は思ひ出した。机の上には一つ一錢也の一昔前の名殘を留めてゐる茶色の饅頭が行儀よく五六段並べられてあつた。食べるとたんさんの味がからくピリッと舌を打つ。間もなくガタ馬車のゴトゴトした音しか聞えた事のない此の農村には不向きな自動車のエンヂンの音がした。

「お帽子を」

「イヤコレハ」

「どうぞお二階へ」

たけのひくいがん丈ないがくり頭の視學だつた。衣を着せて珠數を持たせて坊主にしたらさぞ似合ふだらうと考へた。澁さうな茶がお上品に茶碗に六分目程そゝがれた。

やがて二鐘合圖に視學の授業參觀である。視學の後に續いた校長の蒼白な顔。視學が教室に入る度にピタッと堅くなつて上づつた聲で恐る恐る講義をする同僚達の態度がむしろこつけいに感じられた。授業參觀は午前で打切り。午後より視學の訓示及び授業の批評のある旨が報告された。

鐘を合圖に各職員達は教室に集められた。

第一番に授業の批評。幼學年より順序に禮を一つするとやがて話し出された。

「一年の一の組S先生の授業でした。算術をやつておいでの樣でしたが態度があまりいそがれた感があります。物事のわかる樣になつたらいゝだらうと思ひます。小さい兒童ですからよく善導せねば將來の爲に好影響をおよぼさないだらうと思ひます。」

さび聲である。發音に一ッ一ッ注意をはらつてゐる事がうかゞはれる。

「次に一年の二の組O先生の授業ですが、大變立派な授業でした。兒童もよく先生の云ひつけを守り柔順な樣に見受けました。兒童に取つては柔順程得がたいものはないものです。他に取り立てゝ云ふべき事はなかつた樣です。大變よい授業でした。」

默々と二十年間の教員生活を送つて來た四十六歳のオールドミスのO先生の顔には

はれやかな滿足氣な色が漲つた。

順序にこんな具合に話は進行していつた。

第二は訓示である。

「今は農村は疲弊してゐます。私共は最全の努力をもつて節約し經濟に意を用ひ一刻も早く疲弊した農村をすくはねばならんのであります。此は私共の急務であります。何故農村が疲弊するか？ それは農民のあまりに惰惰な生活がそれを裏がきするものであります。もつと目覺めて仕事に精を出したらそれはかんたんに片がつくものであります。もつと目覺めた生活をするそれは教育者だけしか癒されないものです。人格の堅固な教育者による教育。それは兒童への思想善導となり又農村を富ます一條件であります。故に私共は益々教育者の責任の重大なる事を自覺してこの大任をはたし以て富國强兵の策を講ぜねばならないのであります。」

視學はホッとした晴々した顔を女教師に向けた。

「それから女の先生達はお見受けすると着物の樣ですが縣下では至る所全部洋服を着用してゐます。着物より經濟で物事に便利な點はとても洋服には及ばないだらうと思ひます。縣の法規にも女教師は洋服着用の事と示されてあります。」

以上で視學の訓示は終つた。

貧農の多いこの村では隨分代用教員が多かつた。それは此の村の經濟に關係してゐた。子供を五六人かゝへて薄給に滿足してゐるH先生もゐた。月々の日給が月の二十一日が來ても「役場に金がない」の一言でわたされない事が暫々あつた。時には二月分位投やりにされてゐた事もあつた。金にこまると各々が假受領證で五圓又は拾圓と貰ひに役場に日參するのだつた。洋服着用の四字がどんな風に女教師間に問題になつたか？

次の日から洋服の二字に話題がもちきりだ。

例の放課後である。人の噂と同僚間の批評と美容としか話題に上らない放課後の集りそれが女教師間の一種の樂しみでもあつたのだ。どの顔を見ても生活と職業に疲れ果てた顔ばかりだつた。朝とは逆ひだらしなく袴の紐が一本は長く一本は短くひと結びにだらだらと垂れ下つてゐるのだつた。後の腰板からはすゝけた古い帶がピョッコリ顔を出してゐた。塵つぽい低い机の上には玉砂糖で固めた三つ一錢の黑いあめ玉が三十ばかりと豆ットとがカサカサした半分破られた白い袋からのぞいてゐた。それでもつて一日の勞苦を癒やさうとしてゐるらしかつた。

例のオールドミスの。先生少しでも年より若く見せ樣と努力してゐるらしい技巧的な大きな目がはれやかに輝いてゐた。

「私ね上着は肉色の富士絹に仕樣と思ふのスカートは紺サージでもいゝねそれから靴下はやつぱり木綿では足が太く見えるから絹の黑か肌色に仕樣、靴は黑の皮靴がやつぱりいゝ樣だ。」仙臺ナマリの取れない妙にこびを含んだ聲がぐんぐん頭をおしつけた。

「先生が服を來たらなんぼか似合ふかせいが高いすやせてるす」と年の若いA先生が云つた。自重したO先生はさも滿足げにホヽ、と笑つただけだつた。

しやべると玉砂糖の樣に黑つぽい臭氣が茶色にそまつた齒の間からもれてプンと來る。

「おら子供が五人もあつて唯生活すてえぐのさへ、ひどいでは、とつてもぜいたくな

事は出來ねえから何か木綿のサッとしたのでもきつぺ」とA先生の話。

硝子越に赤子のギヤアギヤア泣く聲が聞えて來る。子守が四五人ウョウョと立話をしてゐた。

「はいれ」の先生の命令に十歳位の子守がこはごは入つて來た。

まだ産まれてまもない乳のみ子のある先生は子守を一人借りてゐるのだつた。

「こんなふうにおぶうからなくんだ」

子守の背から赤子をやはらかにおろしながらぶつぶつ小言を言つた。

だらしなく胸のはだかつた間から黒くはつた片方の乳首を右手でひつぱり出して乳を含ませてゐた。乳くさいにほひが鼻先でうろついた。

「S町のB先生は隨分スタイルがえがすね、きれも立派な絹を使つてるす、靴もかがとが高えす、髪も鏝をつかつてちやんとゆつてるす、わたすなんかとつても足が太くて洋服がきられさうもがえん。んでもやつぱす下着はキヤラコがえがすね」と又K先生の話。

もう周圍は黒いあめ玉のにほひと汗くさいにほひとの混合物で鼻むけの出來ぬ位嫌な臭氣で一杯だつた。

唯視學の洋服着用のお言葉。

外觀の裝飾だけが何になるのだらう。

內面の經濟方面は？

調整上の苦面等は？

「その方共よきに諜らへ」であつさりきめてしまつた點まるで封建時代のお殿樣そつくりの話。

なんの階級意識もなく、唯本當に從順に洋服着用で經濟的に打擊を與へられるであらう女教師間の話に、彼女はもうあきあきしてしまつた。唯ずるずるにひきづられつ放して生活してゆく事が彼女には恐ろしく感じられて來たのだつた。第二學期に洋服着用の四字がどんなふうな階級差別を造り出すか彼女はゆつくり見なほさうと考へた。

農村のある教員室

高城杜美

「今年度の豫算は時節柄の緊縮でみんな節減されそこに印刷して上げた通りになりました。私の腕の足りなさから諸君にかうした切りつめた豫算で仕事をして戴かねばならない事は非常に心苦しい次第ですがそれでも人件費だけは節減して欲しくないと思つて隨分奔走したつもりです。これは我々一身の問題ばかりじやなく國家の教育上重大な問題ですからね。教育者の生活安定といふ事は……。食ふに困つたりするととにかく惡思想になんかかぶれますからなあ」

校長は一同を見渡した。職員等は默つて豫算書をながめてゐた。

「おほきにさうですね。」

時すぎてから間の延びた聲でそれに相槌を打つたのは次席訓導の岸田であつた。彼は校內での年長者であるがいつも馬鹿げた言動をやつてはひとから嘲はれてるのも知らず天狗になつて得意になつてゐるおめでたい男である。自分より下級には徹頭徹尾命令的に上司に對しては何事によらず柔順

にといふのが彼の信條なのである。しかしこの日の「おほきにさうですね」は半分以上彼の眞意であつたらしい。俸給をあげてくれと校長にたのみに行つたり職員の規約貯金を借りて毎月俸給から差引されたりする彼であつたから

「全く生活の安定を保證してもらはなければ眞の教育は出來ませんからねえ。」

校長はつけ足した。

「衣食足つて禮節を知るですからなあ。」

さう云つたのは前校長の腹心であつたが又現校長に取り入る事も忘れてゐないといふ男であ、。隣村の大地主の婿君である首席訓導は「我不關焉」とばかり窓越に空をながめてゐた。

「何もお話がなければ今日の職員會はこれでおしまひに致しませう。學級の受持や事務の分掌は前年度末に於て申上げた通りですから中には御自分の期待通りでなく御不滿の方もありませうが全校の統卒上如何ともなしがたい事ですからまあ一生懸命今年度もやつて戴き度いのです。」

さうして新學年第一回の職員會は終つた。

隷屬に馴らされて神經の痲痺してしまつた女教員二人は恭々しく各自の湯呑へお茶を注いでまはつた。

「××さんお湯う一つ注いでくれえんかや」

土瓶を振りまはして例の岸田がそりかへりながら命令を下す。彼は湯沸しのたぎつてゐる火鉢の側に席を占めてゐるのである。

「ふー　またはじめた。ガンデン氏の八番をさ。」

名ざゝれた若い女教員は唇をそりかへし極度の反感を示して返事もしなかつた。

「古い人達がみんなあんな習慣を作つたのよ、だからいゝ氣になつて増長して。爺だから我慢してやるけどさうでなかつたら捨てゝおかないわ。」

「全く！　人を馬鹿にして。すぐそばにあるんじやありませんか。カフエーにでも行つたつもりなのよ。いゝ年をして行くんですつてねえ。お金の事といつたらとてもきたないくせにさ。あれでもチップなんか置くのかしら？」

「ノーだわ。勿論。チップなしで女給に手をのばさうとなんかするんでせう。ああ！　あゝだ。」

同じやうに反感を持つ若い女教員たちは口々に囁き合つては口をゆがめて笑つた。ガンデン氏とは岸田をそのまゝ音よみにした若い連中の間に通用する尊稱である。

岸田の側にゐた四十を越してゐる裁縫教員がチラと若い同僚等をにらんでその土瓶を受取つた。

男の方のグループでは先刻の減俸問題を中心に雜談が交されてゐる。

「實際農村は今困つてゐるんですね。米は安いし繭は安いし、だからもう動きがとれないんですよ。」

「小作爭議なんかも起つてますからね。」

「小作爭議なんてさわぐのは勞農黨が後おしするつんでねえのすかや。あいつ等はそんな煽動などして飯くつてんだべおね。」

「何しろ農村人は困つてんだから藁でもつかみたい氣持でそんな煽動にのつてしまふんだね。」

「しかし何だね。うー。減俸つうあ少しおだやかでねえやうだ。私のチョリ（郷里の意だらう。この人獨特の言葉だ）の方でもそいつが問題になつてるそうだが。」

これはガンデン氏の聲である。

「さうです。山の方の村や半島部の方の村なんかとてもひどいさうですね。半年位も

減給不拂の村があるさうですよ。この村なんか市部近接村だからまだいゝ方でせう。」
「半年も？　半年も不拂とはひどいなあ第一飯が食へないじやありませんか。」
「しかたがないから役場で傳票を出してその傳票を紙幣みたいに村內で通用させるんださうです。しかし役場ではその傳票になかなか支拂をしてくれないから信用がなくて結局だめだつていひます。」
「くそ！教育者の面目まるつぶれだあ。」
「私も先にゐた村では二月位拂つてもらへなかつたの。度々。後で少しづつ拂つてはもらつたけれど。」
　若い女教員のグループの一人が小聲で獨言のやうに言つた。聲高な男達の話はまだ續いてゐた。
「僕の友達なんか赴任して一學期すぎても一文もくれられないので休みになつて歸らうにも歸る旅費がないし、下宿の拂ひも出來ない仕末、お母さんに泣きついてやつと一ケ月分だけ下宿料を拂つたさうです。」
「氣の毒な話だね。お母さんも折角錢とるやうになつた息子がそんではがつかりしたべがなあ。」
「本當に氣の毒なんです。奴の學費はお母さんとたつた一人の妹とが女工になつて生み出した血の出るやうな金だつたんですからね。お父さんですか。お父さんは小さい時死別したんださうです。奴が卒業したら妹を學校に出す筈だつたつていひますが可哀さうに兄がそんな樣だからやつぱり女工になつてました。その中に赤いとかの疑ひで解雇されたとの話です。」
「そんではなほ更のこつた。何だつて選りに選つてそんな貧弱村にやられたんだかなあや。」
「そりや視學あたりへ運動した奴等が市內や近接村を占めてしまふからさ。さうした方へ手をまはす事を知らない連中は山へ追はれたり島流しにあつたりよ。」
「ふ——む。そのさつきなの赤いつあ何のことだべね。」
「左傾のことさ。先生。社會主義。」
又もガンデン氏の橫槍。人々は苦笑した。
「はあ、さうすかや。そんではその娘よつぽどろくでなしだね。どうも今時のをなご達は生意氣で。」
「淺はかなんだなあ。お母さん一人の働きではどうもなんめいに。」
「娘はぶら／＼して遊んでんのか。」
「こないだS市へ行つたら夜店で花賣してましたつけ。あんな事をして細い利益をとつてるんですね。」
「幾つだいその子は？　君。」
「え？　年ですか。十八位でせう。」
「いやに委しいんだねえ。あぶないぞ。アハハ……。」
「冗談じやない。」
「アハ、、、。」
　湯のみには底の方に冷えはてた紅茶が僅く殘り灰皿には吸へる丈吸ひ盡した卷煙草の吸がらが雜然とすてられてあつた。
「俺達は不平も云へないね。そんな人々もあるんだから。」
「しかし有資格教員には國庫補助があるんだから村の一存で減俸だの不拂はおだやかでないよ。」
「しかしかしだ。疲弊してゐる農村を考へると文句も云へないからねえ。」
「さうさ。それに村の爲政者のする事だから他處から來た者が一人や二人、何だカンだ云つたつてきかれるもんでなし……。」
「税金は高いしか。五十圓そこ／＼の月給とりが年二十圓のおさめであたまんねえ。」
「村では月給とりが一番いゝつて云つてる

んだからなあ。とても高率にかゝるんだ。」

「市内にゐたら我々なんか一文だつて稅金なんかいらないぜ。それに地方へ來ると下宿してゐる者からまでとるんだからなあ。特別戸數割つて名をつけやがつて……全く不合理じやないか」

「なんぼこゝでがんばつたつて駄目だあ。とられるものはとられるんだから。」

方言まじりの彼等の會話がバットの煙と一しよにもや〳〵と室内に籠つてゐた。女教員達は大方職員室を出て各自の教室を見まはつたり翌日の授業の準備にとりかゝつたりしてゐた。しのぶも廊下に出て窓をあけた。四月とはいへまだうすら冷たい風が今まで室内にこもつてゐた彼の女の頰を冷した。冬の風邪以來侵されてゐる咽喉の粘膜を刺戟してピリ〳〵と咽喉が裂けるやうな咳が續け樣に出て來るのだつた。

兒童の歸つてしまつた受持教室に入つてやつと咳のおさまつた彼の女は今まで同僚間で交されてゐた會話を自分の頭の中に再生して見た。

減俸問題！ 俸給不拂の問題！ 不當の村稅！ そして花賣をしてるといふ娘のこと！

「事情はもう迫つてゐるのだ。」

しのぶはひとりごちた。

ブルジョアジーの攻勢はもはやプチブル階級の上にのしかゝつてゐるのだ。滅びの日のせまつたあはれむべきプチブル！ しかし闘爭の準備はおろか闘志さへも持つてゐないではないか。教育者といふ有難い假面をきせられた彼等！ その假面は彼等を盲にし闘志を奪ひ彼等の神經を麻痺させつゝあるのではないか。彼等の俸給の七割は國庫が負擔してゐるのだその當然受くべきものさへあたへられなければぼんやりと指をくはへてゐるのだ。彼等の彼等らしい良心から「疲弊した農村の財政を考へると文句も云へない」などいふ。しかし彼等は何故農村が疲弊するかを考へてはゐないのだ。減俸や俸給不拂に不平と不安をもちそれに反對すべき理由を持ちながら反對を叫ぶ勇氣はないのだ。下宿人にまで課される不當な村稅の撤廢を叫ぶ勇氣はないのだ。彼等は云ふ。「一人二人がいくら騒いだつてどうもなる事でない」と。團結の力を知らないからだ。獨善主義である彼等の眼は個人以外には注がれてゐない。正しい道を歩んで行つた女工の姿がろくでなしの淺はかな女として見える彼等の視力だ。ブルジョアジーが彼等にあたへた假面はかうも巧みに彼等の力を奪ひ眞を見る眼をくらました。やがて有がたさうにきせられたその假面は完全に彼等の顏に吸つきいくらあがいてもとる事の出來ない鐵假面である事がわかるだらう。沒落して行くプチブル彼等！ しかし自分もその中の一人ではなかつたか。

頭の中を冷たいものがすつと流れた。「それでいゝのか。」しのぶはひとり昂奮してつぶやいた。



彼奴等の探し物

洋傘

北山雅子

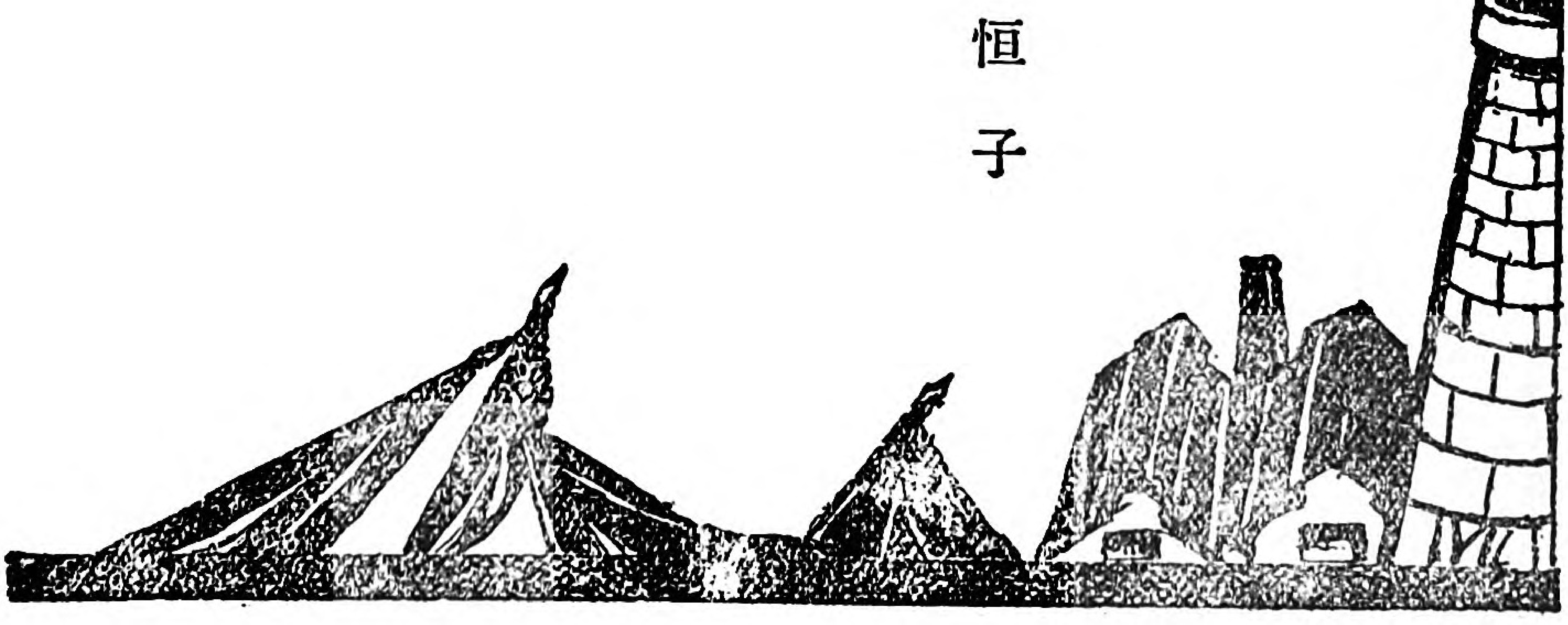
誰だ。
橋の上で、黒い洋傘を振つてるのは。

窓近くの床の上で
何氣なく外へ投げた私の眼へ
とびこんできた、停止した人影。
ほら。また、ほら
橋に向いて開いた此の窓へ
洋傘を振るのは誰だらう。
さうだ。
同志、それに違ひない。
私は跳ね起きて釘から、引きむしつた上着を振つた。
危ない。
　近寄つては、あぶない。
家の周圍には犬共がうろついてるのだ

確信を送らう

横堀恒子

今日は
かび臭い病床(とこ)を蹴つて
波止場まで貴女を見送りたかつた
しつかりと抱き合つて
お互の決意も强めたかつた
貧しくて
貴女にあげる餞別もないが
わたしは



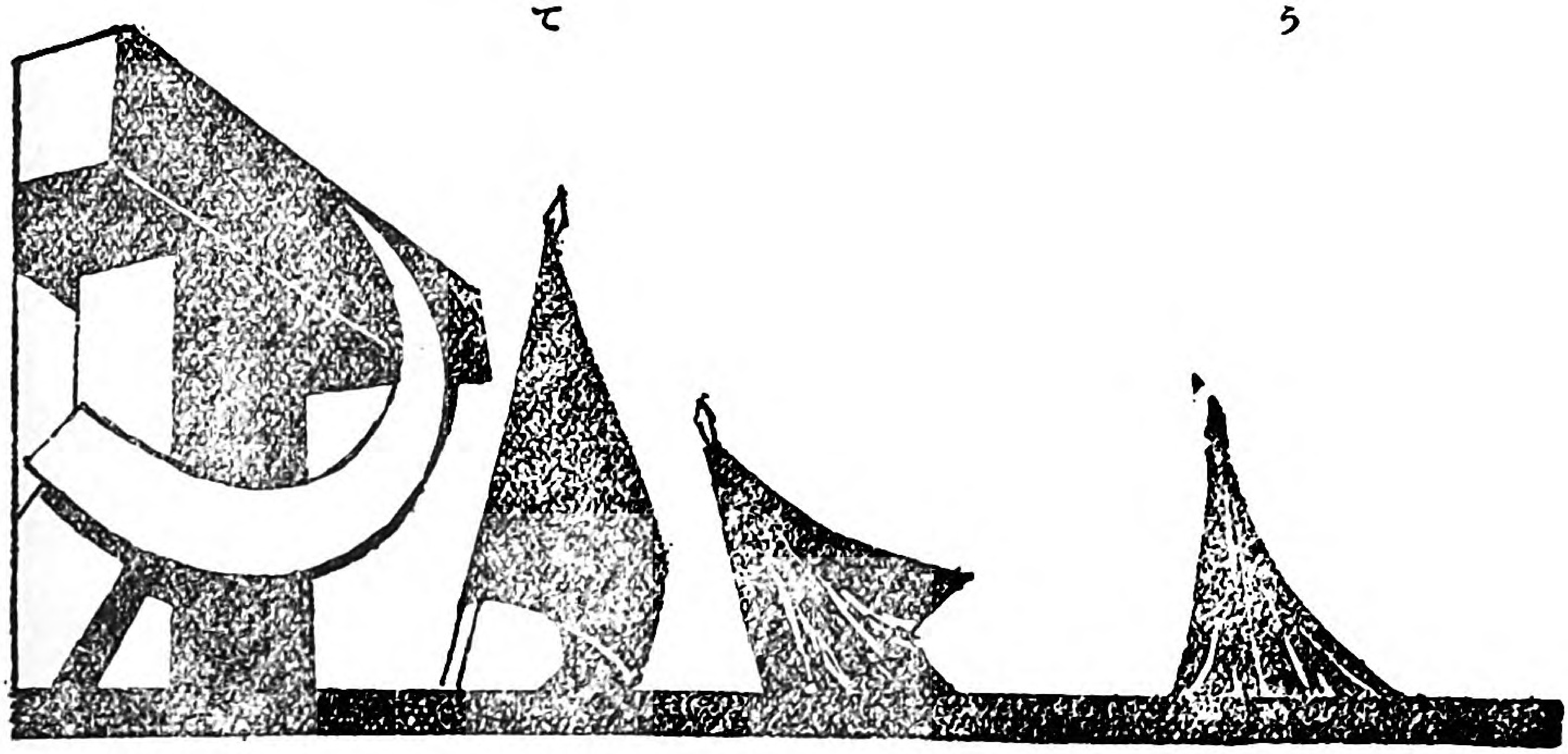
洋傘は高く揚げられた。
おゝ、解つてくれたか。
新らしく誰かを釣るための
餌食として
動けないレポーター、私は先きに出された
其の邊には奴等が網を張つてる。
殘された人は、
みんな元氣で頑張つてる筈だ、
打たれ蹴られたけれど
ほら、私もこんなに元氣です
三度び洋傘は高く振られ
黒い人影は靜かに歩み去つた。
誰だか知らない。何の人か解らない、
だが私は、此の偉大な贈物を
嬉れしく受取つた。
「チエッ。
涙なんて、だらしがねえぞ」
誰も見てないけれど
私は氣恥かしく眼をこすつて、
冷い監視の中に、強く生き抜くことを誓つたのだ。

幾年かの辛苦をこめた
血みどろな明日への確信を送らう

さようなら！　友よ！
ふりかかる災の中にも
強く壯烈なる意志をもつて
鬪ひに負けぬおん身であれ！

今、

炎熱のてりつける窓邊まで這つて
そこから見える蒼空のような
遠い海峽を思つてゐる。





道子のことづけ

沖しづ子

1

朝、五時半の目覺しが鳴ると、その前から目覺めてゐた道子が、工場へ行く妹を搖り起した。「フヂちやん、フヂちやん、」間をおいて二三遍、繰り返した。

「アラ何時目覺しが鳴つたの、」暫くして起上ると、フヂ子は腫れつぽい目で時計を睨み、不平さうに言つた。「駄目ぢやないの、島さんを起してやらなくちや！、彼、六時の時間がある筈よ、」

彼女はも一度寢床へ引つくり返り、右手の袂へ甘つたるい聲を投げた。「島さーん、」

この一週間ばかり、フヂ子は毎朝、島を家から一緒に連れ出すことに苦心した。寢坊の島がどうかすると彼女の手に負へなくて、一人後へ殘ることなんかあると、フヂ子は工場から歸つてもプリ〳〵不機嫌で姉に當り散らした。寢坊なんかして連絡をスッポかしたらもう家へ泊めてやらないから——とフヂ子は姉の前でもさう言つてゐたが……妹の心使ひがわかりすぎるだけに道子にはそれが痛々しかつた。

朝飯のガスへ火を點じてから、フヂ子は島の部屋へ入つた。朝陽をはらんだ部屋で、彼の寢顏が汗ばみ赤らんでゐた。フヂ子は用意のぬれ手拭を不意打に、捲毛のねばりついた彼の額へ載せて、上からぎゆつと押さへつけた。すると島は例もの通り、無言のまま伸ばした兩腕を間違ひなく彼女の腕にからみつかせて離さなかつた。「嫌よ、離してつたら、ね、離してよ、」

ね、——この故意に押しつぶした聲が隣室の道子の心をかき亂した。彼女は軟かい枕へ、食ひこむ樣に頭を埋め乍ら、息づまる樣なこの時間を堪えしのんだ。

不意に兩腕をねぢ返されて、フヂ子がガックリ膝を折ると、島は

一遍に彼女の胴を抱きすくめた。畜生！　いや、いや、――これらの反抗は完全に彼の胸の邊で揉み消されてゐた。

かつて道子のものだつた島――それを充分知りつくして尙、彼を愛せずにゐられないフヂ子――

彼等の間でも決して例外でない戀愛の無政府性だつた。そんなものは至るところで見せつけられもし、聞かされても來た。だから今更――と、道子は一方引き裂かれてゐる自分の心を突つぱなし、可なり餘裕のある氣持で眺めることが出來た。

しかし、何て頑是ない子供の樣にガムシャラな彼等だらう、――こんなにゴ飯がコゲ臭いのに！

そして約一時間の後、彼等の戀愛のお相伴をし乍ら、茶飯の樣に黄色い朝飯を食べた。

「フヂちやん、部屋を借りてくれないか、」――、

停留場まで一緒に歩き乍ら、その朝、島が言つた。

「部屋を？　ぢや姉さんとこを引上げるの、」

「さうした方がいいと思ふんだ。そして一緒にならう――」

「さうね――」

フヂ子も出來るならさうした方がいいと思つた。完全に島が自分のものである今、姉に對する顧慮は無用だと思つた。しかし一方、二人の生活を維持してゆくだけの經濟力に就いて可なりに怪ぶまれた。失業してゐる島の收入は無論當てにはならないし……未だ臨時工のフヂ子は八十錢の日給に夜業の步を入れたつて故々月二十二三圓の給料だつた。間代が七八圓としてもガス代その他で十圓を見なくては不可ないし……工場へ行つて每日の通り機械的な座業を繰り返し乍らも、フヂ子の頭はこの新らしい「計畫」で一杯だつた。

何十種かの製品にラックを塗りつけ乍ら、彼女は考へた。

「階級のために親や肉親を裏切るのは當り前だけど、戀愛のために姉を裏切る私は何だらう？」――

しかし、こんな考へも永くは追ひ廻さなかつた。知らずく\の內に亂暴な動作になり乍ら、フヂ子は生毛のある口傍を皮肉相に引吊らせた。これはプチブルの里心だ。島が口癖の樣に言ふ通り、こんなこと位ポスく\實行出來ないのは意氣地のないインテリだけだ――

「工場へ行くことは決して自分一人の暮しや、プロレタリヤの生活を味ふためぢやないのよ。この困難な時代に運よく工場へ入れたフヂちやんは自分の使命を自覺して充分自重しなくちや駄目よ、凡ゆる場合に階級の利害を第一番に考へて、――戀愛も結婚も、個人的な一切を、それに從屬させなくちや不可ない。」

これは道子の口癖だつた。たとへ五人のグループでも作つて見たい――と組織の仕事に渴望的な情熱を持ち乍ら、自分自身の不適當な條件を顧慮して、いさぎよく同情者の域に止まらうとする道子は一切の希望を妹の上に托してゐた。だから或る場合にはもつと明

らさまな忠告も與へた。
「島なんかに利用されちや不可ませんよ。フヂちやんの場合は私の場合と全然立場が違ふんだから。――自分自身、重大な使命を果たしながら、二人前の生活費を稼ぎ出すなんてことはやらうたつて出來ないことだし、もしそんなことで生活の苦勞でもする樣になると、フヂちやんの性質としてきつと沒落するにきまつてゐるから。――」
この時の姉の言葉がさし當つてフヂ子の胸に甦つて來た。

2

西陽さす洗面所で五つの水道栓が勢よく鳴つた。板敷の片側が着替場になつてゐた。夜業のないB棟の女工等は汗くさい仕事着を脫ぎ乍ら、わけもなくはしやぎ立て、賑やかな笑聲を撒きちらした。明日は第三の日曜日だ。たつた一つの古ぼけた鏡へ五つ六つの顏が重なり合つた。髷なしも、耳かくしも銀杏返しもあつた。
シヤボンの泡を二の腕まで塗り上げて、活動の話に夢中になつてゐるトメ子。ゆつくり番を待ち乍ら、窓際の日當りへタバコの煙りを吹き上げてゐる年增のクラ。人々の後からハスに鏡を睨んでお太皷の山をこさへてゐる背の高いフミ。端の水道栓で梅干の種やごはん粒のついた辨當箱を洗つて皆にブツ／＼言はれてゐるトキ子。
彼女等は水の樣にパシヤ／＼喋つた。月經が多いとか少いとかいふ話から、男工の噂さ――流行歌の一節を誰かゞ口吟さむと板を叩く樣な合唱がすぐその後に續いた。
手早く着替へを濟ませたフヂ子は隅つこへ立つたままで髮を卷き直した。彼女の體を楯にし乍ら、臨時工のつる子が屈んでごそ／＼ズロースを外してゐた。
「つるちやん、そこんとこで何してんの、」
背の高いフミが兩方の袂をブラン／＼させ乍ら傍へ寄つて來た。つる子がヘラ／＼笑つた。額の狹い、ニキビだらけの娘だつた。
「お洗濯やさんを始めるの、ついでだからあんたも何かあつたらお出しよ、洗つたげるわ、」
「洗つてくれる？　ぢや私のズロースでも洗つてくれる？」
「ズロース？　構はないわ、お出しよ、」
「ハツハツ、お出しよつたつて本氣でへいなんて出せる品だと思ふの？　だが折角だから、このカツポー服でも洗つておいて頂戴ね。」
「よし、來た、」
毎夕、近くの工場々々から流れ出る女工たちの中でも、一寸人目につく位別ピンのフミはもうこの工場に三年もゐる熟練工だつた。胸が薄くて、肺病かも知れない、と自分からさう言つた。古く居る女工の中にはフミの樣な體格をしてゐるものが多かつた。彼女等は眞白い襟白粉の堺目から壁の樣に不氣味な顏色を持つてゐた。これでも樽の樣に太つてゐた證だ、の、林檎の樣に赤い頰つぺただつた、のと聞かされてもフヂ子はかつがれてる樣な氣がした。

「當り前ぢやないの、あんた、陽の目にちつとも當らないんだもの、此處の窓ガラスの厚さは一寸位もあるつて話よ、それに知らず知らずのうちに何とかガスを吸ひこんで、それに中毒してるんですつてさ、」

フミはストライキの洗禮も受けてゐた。その時の話もした。

「あんたなんか知らないでせう。この工場にも、もうせん組合があつてメーデーへも出たしストライキだつてやつたことがあるのよ。去年の×月。あの時三工場の奴等がちつともガン張らなかつたために負けちやつたのよ。組合もそれつきり潰されてしまふし――」

こんなことをちよい〱言ふフミを、最初はフヂ子も可なり警戒した。しかしおきやんなだけに、この娘はそんな「さはぎ」がも一遍やつてくれればいいと本氣で望んでゐるらしかつた。

つる子は千住の方から通つてゐた。フヂ子と同じにこの工場へ入るまでは近所の皮革工場で働いてゐた。彼女の顔がニキビだらけの様に見えるのは、原因不明の奇病とまで言はれてゐる、皮工場特有の工場病にやられたためだつた。これは全然豫防の道がない上に、全治しても醜い斑痕を殘す厄介な病氣だつた。彼女は廿歳になるのにまだ月經もなかつた。ハツカねずみの様によく動いたが、時々疱瘡の様に逆上あがつて欠伸ばかり連發した。「千住の工場に較べたら、此處なんかまるで女學校みたいだわ、」――さういふわけで、彼女からは不平不滿をきくことが出來ない。同じ臨時のたけ子は隣りの大學生から借りたといふ戰旗を平氣で工場へ持つてくる娘だつた。口癖の様にバスへ入りたいと言つた。三ケ月の見習期間を完全に二月超過してゐるのに、まだ本雇にしてくれない許りか二三日前、又新たに一月分の契約書を取つた會社側のやり方に對して、誰よりも、一番ブツブツ不平を洩らした。

此の事については臨時工たちの間に大分不平の聲が湧き起つてゐた。彼女等は、一月でも永く、自分等を安い賃銀に引きとめてをかうとする意地汚い、資本家根性に對しては一樣に反感を持つたが、こういふ大工場目がけて、ともすれば潜りこんでくる意識分子を、充分な調査と內偵の下に、出來るだけ臨時雇のうちに發見し、ふるい落してしまふといふ會社側の、も一つの意圖については殆んど知るところがなかつた。

既に數人の同志がこの工場で臨時雇のうちに發見され、苦い經驗を嘗めて來た。

最近三工場から來たといふ色白な眼のつり上つた娘があつた。何處となく物腰が機敏で、笑ふと愛嬌があつて、言葉使ひが叮嚀で――と、案外早く女工等から好感を持たれてゐる。この娘が考へこむ時眞面目さを通りこして、如何にも氣難かしげな顔付になることをフヂ子は知つてゐた。あれは此方の者の顔付だ――何時となくそんな確信を持つ樣になつた。

三工場の方には是までも度々デンタンが貼られたり、ビラが撒か

れたりしたことがあつたのだ。……

「フヂちやん、あんたも何かあつたらお出しよ、」

だしぬけに後からこう言はれて、フヂ子は吃驚して振り返つた。考へ事に夢中だつたので、つる子が何を言つたのか一寸わからなかつた。

「ね、汚れもんがあつたらお出しつて言ふのよ、」

「あらさう、ありがたう、私は合憎ないの、」

「このお内儀さん仲々おせつかいでせう、」

フミが傍から冷笑した。

3

どうかすると道子の胸にパッと憎悪が燃え上ることがあつた、妹を？　島を？

「妹の問題ぢや、私、隨分手を燒きましたわ——」

道子はハツとして顔を上げた。彼女の目の前には女醫で同情者の肥え太つた何々女史が控へてゐるのだ。道子が若干の寄附を期待して訪れたところの。——

妹の問題？　似た樣な話だと思つて耳を傾けると、女史は、「最近流行の小兒病」に取りつかれて、向ふ見ずに職場へ飛びこんだ一人のお孃さんの話をしてゐるのだ。——

そのお孃さんが職場へ行けば一廉の鬪士振つて監督と喧嘩したりするか、家へ歸れば相變らずのお孃さんで、女中に辨當箱を洗はせ、自分は寢そべつて雜誌を讀んだり、雨降りには職場を休んだり、最近、家をとび出して住所をくらましたり、それも動機が戀愛問題にあるんだから、不純なものだ——等々、女史は心からのひんしゆくを以て彼女の缺點を算へ上げた。最後に女史はこんな物好きなお孃さんのため、ほんとに食へない勞働者がみす〳〵職を奪はれてゐるんだから——と皮肉相につけ加へた。

「島が運動のためにどんな重要な役割を果してゐるか知らないが、あつちの女、こつちの女に食ひ下つて歩く生活態度には、可なり濃厚なルンペン性があることを正しく見なくてはいけないと思ふわ、」

その夜、フヂ子は島のために絽の半襟と白い夏袖を買求めて肌じゆばんを作つてゐた。妹の無言の挑戰に抵抗しながら、道子は一人で辯舌つた。辯舌り乍ら、晝間の女史の「若い時代」に對するコチ〳〵した態度を思ひ浮べた。

「ぢや何故姉さんは島さんのルンペン性を默つてゆるして來たの、今まで、姉さんは——」彼女は露骨に鼻を鳴らし乍ら、「島さんが自分のものである間は姉さんはルンペンでも何でも構はなかつたのね、」

道子は冷靜にならうとして默つて煙草をふかし續けた。

「そんな個人的な批評だけしか出來ないのね、姉さんたちは。私は同志としての島をその具體的な活動に於いて見るだけだわ個人的な生活態度がどうあらうと問題ぢやないわ。そりや、少し戰鬪的にや

ればすぐ職場をクビになるし、例へ食へないからつて一日も鬪爭をやめるわけにゆかないし、軍資金はどんな手段でだつてつくらなくちや不可ないぢやないの。」

そつくり島の口調だ――姉はさう思つた。

「姉さんは戀愛だけを中心にして考へてゐるけど、私たちの間ぢや、職場を持つてるものが、失業してゐる同志のために毎月半分づゝ金をやつてる話や、一人が五人の失業者に食はせてゐる話なんかザラにあるわ。」

「それは立派なヒロイズムだけど、フヂちやんの給料ぢや一人が食ふのさへやつとでせう。」

「勿論さうだわ、だからつて私今まで通り姉さんと一緒にゐることなんかどうしたつて出來ないわ。――姉さんさへよかつたら、お父さんが殘して行つた貯金をいくらか使はせて貰ふつもりよ。」

「どつち道いくらも殘つてゐない金だからどんなことに使はうとフヂちやんの勝手だけど……しかし、も少し冷靜に考へたらどう？　いつも言ふ通りお前は姉さんと立場が違ふんだからね。」

もう澤山、しつとだ！　假面を着たしつとだ！　フヂ子は再び無言の固い殼へとぢこもつた。

電車のなくなる頃島が歸つて來た。彼は道子と顏を合せることを恐れて、玄關の部屋から出て來なかつた。ごろりと寢そべる氣配がした。二三遍せつかちにマッチを擦つて、ポンと投る音だつた。フヂ子が立つて行つた。感情的な聲で言つた。

「私も今晩此處へ寢るわ！」

「何事なんだい、一體。」

フヂ子は机の前へ立膝し乍ら、紙片へ圖を書いた。「一寸。」

「此處をみつけて來たの。」

交通、出入、P・B、近所、――と書いて、

「此の點非常にいい條件なの、たゞね。」

間代、――と書いて、

「これが少し高いのよ、でもどうにかなるわよ。」

「さうかい。」

島は無感情な聲で言つた。しかし、いかにも勞働者らしい陰影の淺い顏に、フヂ子に對する信頼と希望を一杯に現はしてゐた。――髮を振り亂して狂亂した何處かのお内儀さんの姿を、道子は冷やかに思ひ描いた。原紙切りの仕事が夜明けの三時頃までかゝつた。ガリ……といふ規則的な音を聞いてゐると、不思議に落着いた澄んだ氣持になれた。隣室から二人の寢息が交互に聞えて來た。

「何といふ他愛のない話だらう。」

まるで子供の樣な二人だ。子供は變つたものを次から次と欲しがる。欲しいものは奪つてでも自分のものにしたいのだ。

道子は長女として、割合に甘やかされて少女期を過して來たし、そろ〳〵家運が沒落しかゝつて、若い繼母が入つて來る頃には、女

學校――大學――と殆んど東京でばかり暮して來た。家庭の冷めたい空氣なんか餘り知らずに過した。フヂ子が「幸福な姉」について時々しつとを感じた位に――。彼女の方は女學校も田舎だけで、娘時代を下女代りに働かされたり、繼母との感情的な對立の中で暮して來たりしたので、二人の性格の相違なんかも重にそんなことから來るらしかつた。父が死んで一緒に暮しはじめた頃、道子は妹の我の強い、强情な性質に驚いた。一方妹の頑丈な體格や現實的な、物質的な物の考へ方を、非常に頼もしく思つた。いかにもインテリらしい弱々しい體格や頭腦を持ち、とかく夢みがちな自分に較べて、明かに、次の時代を感じさせられた。――世話女房式のしつかり者で、組合へ手傳ひに行つてた頃、いくらもそんな機會があつたのに、一度も戀愛らしい經驗を持たない彼女だつた。島が始めての相手なんだもの、――と道子は思つた

「困つた時の用意に邪魔だけど、着物を全部持つてゆきますよ、」

翌朝道子がまだ寢てゐる內から、フヂ子は荷造りを始めた。汚れたシャツだの靴下、ネクタイ――等、島が時々置きつばなして行つたものを一物も殘さない樣に荷物へ纒めた。そして珍らしい上機嫌で姉と會話した。

「姉さんが一人になるとご飯を炊くもんがなくて困るわね、」

「ごはん位私だつて作れますよ、面倒くさくなつたら外へ食べに出るし。」

「私、時々姉さんの洗濯をしに來ますよ、今度の家干場がなくて流しが狹いから、私自分のもんも此處へ洗ひに來るわ、」

フヂ子は出來るだけほんとらしく聞える形容で嘘の所番地を姉に敎へて行つた。どうせそんなことだらうと思つて、道子もロクに聞いてはゐなかつた。

所が翌日十時頃、全く思ひ掛けないフヂ子が歸つて來たのだ。

「アラ、どうしたの、こんな時間に、今日は工場を休んだの、」

「え、」

見ると兩方の眼を泣き腫らしてゐる。道子は腕時計を覗いた。約束の時間が迫つてゐた。

「とにかく出かけて來るわ、フヂちやん急ぐの?、急ぐんだつたら歩き乍ら話さうか、」

「いいわ私、一時間位なら待つてゐるから、」

何時になく萎れた樣子だつた。

或は――道子は途々思ひまはした。島の健康について一應フヂ子に注意してをかうか、と思つたことなんかもある、それぢやあるまいか……、等と。

「今更それを掘つくり返して聞いたからつて何になる?」

しかしフヂ子の方はさう思ひ返して――姉の歸るのを待つてはゐなかつた。

一年も經つた樣な氣のする二月であつた。フヂ子は一遍も姉を訪ねなかつた。島の方は時々偶然らしく見える機會をつくつて道子の前へ現れた。馬鹿野郎が――彼女は島の未練さを見せつけられる度に用心深く高い垣をつくつた。

仕事の疲れでぐつすり眠ることが多かつた。或夜、晩く同志の家を訪ねた時、その時ばかりはほんとの偶然で島と落合つた。

「近い内に俺れやられ相な氣がするんだ。」

「バカな。柄にもないことを言ふわね。疲れて來たんぢやないの。」

一緒に其處を出て、人通りのない坂道を歩き乍ら。――電車は寄だつた。ボックスではポリが眠む相にハイ劍を鳴らしてゐた。

「そんな觀念的なもんぢやないよ。いろんなことが起きてゐるんだ。近頃、泊るところがなくて困つてゐる。」

しかし泊めてやる氣がない以上、突つこんで聞く性質のものぢやない。――さう思つて、道子は默つて聞き流した。

「島がやられたらしい――」それから十日程經つてから道子の耳へはいつた。その後で或る同志が詳しいレポを持つて來てくれた。島が寢込みをやられたのは矢張りフヂ子の家であつた。

「おいお前も行かう！」

から言つて、何氣なく逃げ出さうとしたフヂ子をも一緒につれて行つた。しかし、永く同じに置くことは向ふに取つて不利だつたし、戀愛關係といふ丈で、フヂ子の意識の程度を問題にしない向ふは、一晩調べたきりで歸して寄こした。しかし工場の方は完全にばれて了つた。その同志は、

「島の樣な街頭的な鬪爭をやる人間と一緒に住むなんて、フヂちやんも可なり無鐵砲だね、今は何でもなくても、フヂちやんが將來重大な仕事をする樣になつたら、そのために工場內の組織の根までもバラして了ふぢやないか！」と言つて憤慨した。

「世帶やつれってでも言ふのかね、フヂちやんすつかりやつれて、その後もスパイ等にひやかされ乍ら、ちよいちよい差入なんかに行くらしいよ。」

たとへ、一人のフヂ子が沒落しても、蟻の樣な同志等が、次、次と仕事をすゝめてゆくことは確信出來るとしても、――

「フヂ子に會つたら貴方からもよく激勵して下さい。今が大事の時なんだから。單なる世話女房や差入女房で終つちや不可ないつてね！ 個人的な感情的な差入さはぎなんかから手を切つて、次への鬪爭のための準備を獻身的にやらなくては不可ないつてね！」

姉としてではなく、一人の同志としての心からの忠告を、道子は傳へて貰ひたかつた。

次の部署へ

土田途子



虱

外は四月中旬だつた。二つ廻されてから××署をポンとほうり出された彼女は、ぶく／＼と眞冬の身装をしてゐた。別莊で背負ひ込んだ虱が、身體中をむず／＼させた。ともあれ、彼女は自分の宿へ歸らねばならなかつた。

「まあ、まあ！　あんたのやうに溫和しいひとが、そんな大それたひとゝは思はなかつた！」

彼女を待ちくたびれた主婦は、漸く、その人に言ひたいことを叩きつけることが出來た。主婦は毎日のやうに、この言葉を咬みくだいたり吐き出したりしてゐたのだ。

出てみれば一刻も早く、外の狀勢が知りたかつた。ナカでうすうす聞いてゐた市電と鐘紡の爭議は何うなつてゐるか？

久しぶりに手入れする頭は、梳き返す度に、ポロリ／＼黑いものが古新聞の上に落ちた。虱も二ヶ月の垢で眞黑くなつてゐる。櫛の齒には拷問にやつれた艶の無い毛が一パイに溜つた。その間に何匹も何匹も虱が游いでゐる。

彼女はピチ／＼押し潰した。ばかに氣持がよかつた。

──吸血鬼ども、いまにかうしてくれる！

娑婆の第一日を、彼女は選擧鬪爭名殘の虱退治に暮した。

この日は四月十八日だつた。

市電の爭議はぐづついてゐた。勞農黨山下らの四ダラ幹は、大衆の壓力に押されて、屁ピリ腰で、交渉また交渉、戰鬪的組合員の鬪爭心をにぶらせることに腐心し、高く賣りつける肚が露骨にあらはれてゐた。

二十日の朝、彼女は××車庫に出掛けてみた。電車はあまり動いてゐないが、スキャップとサーベルとスパイで埋まつてゐた。勞働者の城塞が敵の軍勢で一パイだ。

これで勝てるのか?!

畜生、畜生!

敗北

彼女は歯咬みしながら、連絡と引越とにまる一週間を費さねばならなかつた。市電で忙がしいのだらう、犬の眼を逃れての仕事はいゝつもよりしやすかつた。だが、死力をつくして闘ひの只中にある同志たちを憶ふと、ジッとしてゐるのが何よりもツラかつた。

二十三日、豫期したやうに、市電の四元老宮井たちが、二千名を率いて爭議を賣つた、賣つた。

――爭議する毎にスズ文の腹はふくれ。

奴等はスパイであり、勞働ブローカーだ。奴等は爭議のブッ潰しと、高く賣りつける時期を狙つてゐたのだ。

――こんなヤツ、虱のやうにヒネリ潰してやりたい!

彼女は拇指の爪で强く壁をこすつた。

二十五日には、完全に敗北した。同志たちはみな、面やつれしながらも、再び燃え上らせるために精力的に動いてゐた。

一方、鐘紡の爭議も、ダラ幹の裏切りで、ポツリ〳〵押し潰されて行つた。

そして、敗北のうちにメーデーを迎へた。

街頭には百五十萬の失業軍が溢れてゐるではないか!

失業、失業、失業。

ブルジョア新聞さへも毎日のやうに書き立てゝゐた。大衆は不安におのゝき、その不安のハケ口を求めてゐた。何かのキッカケを求めてゐた。

だが!

そのキッカケを與へることが出來なかつた。第十一回メーデーも、大衆の革命的昂揚にもかゝはらず、殆んど例年のやうに官犬共に守られたお葬式行列に終つてしまつた。

だが!

吾々の敗北は一時的のものだ。吾々は、敗北のうちに最も多くのものを學ぶのだ。そして、決定的に勝利を得るのだ。

吾々は多くの教訓を得た。

そして!

精力的に立ち上つた。

赤テロ

吾々は二月の闘爭に可成りの痛手を受けた。その痛手の癒えないうちに、二つの大産業にゼネストの波が渦捲いたのだ。

世界恐慌！
産業の合理化！
失業者の洪水！
そして、大衆は左へ！
白テロは××化した。プロレタリアートは自らの力で白テロを粉砕しなければならぬ。
四月三十日の夕刊は、愉快なニュースを四段ヌキの大見出しで報じた。

二ケ所で二巡査の遭難

サーベル奴、赤テロを喰つて伸びたのだ。
「とう〳〵ブル新聞まで出しはじめたのね」
彼女は、太腿の拷問跡を押へながら笑つた。
「パイ公ども、毎日のやうにやられてるので、この頃は、少々オチケづいてるつて話だ」
オルグは晴々と笑つた。そして、上衣の左側を押へた。堅いものが膨らんだ。
「これさへあれば三四匹は大丈夫だ」
彼女はひどくアヂられて、全身の毛穴が立つた。
――誰が大衆の味方か!!

社會民主主義者どもは、白テロに恐れて、社會ファシストに轉落したではないか！
馬面の大山よ、お尻にシッポの出たのを匿せるか！

極左的傾向

大衆は左翼化した。
だが、打ち續く白テロに、指導力が不足してゐた。そこで、あるものは焦つた。殊にインテリに多かつた。
武××起！
これが、メーデーを通じて、左翼の一角から捲き起つた聲だつた。だが、これは、運動を見誤つたのだ。自己の英雄心を滿足させたに過ぎなかつたのだ。それどころか、左翼を一大危機に陥れる破目になつたのだ。
プロレタリアートの武裝××は！
――必ず權力問題と結びついてゐるのだ。
敵の強大な權力と正規軍とに對して、吾々の力は何うか？　吾々の組織率は低いし、その動員力は微々たるものだ。吾々は敵と味方の勢力を正確に知つてゐることが大事だ。
數十萬の×××員を有するドイツのプロレタリアートを學べ。
一九二九年のメーデーを通じて、ドイツの官犬は社會ファシスト

い、とぐるになつて暴動化を煽動し、一氣に×××及び革命的勞働組合の大衆組織をタ、キ潰さうとたくらんだのだ。だが、これを知つたドイツのプロレタリアートは、白テロ反對の大衆政治的ストライキを以て之れに應へ、大衆と密接に結びついて時期を待つてゐるではないか。

吾々の結果は何うか？　吾々は多くの尊い犠牲を出した。

しかし！

——×器を取るべきでなかつた——

と言ふべきでない。

さうだ！

吾々は武×を取らねばならぬ。

だが！　時期をあやまつてはならぬ。

だからといつて、日常、白テロから自らを守る××をすてゝはならない。死を以てのみ！　さうだ、たえず死に直面してのみ、吾々の組織は强化し動員力は擴大するのだ！

そこにこそ、

鐵の訓練！

鐵の組織！

鐵の規律！

が鍛え上げられるのだ。これこそ、吾々が×装して起ち上れる前提なのだ。

彼女は、六月はじめ途でひよつくり、他の地區の同志に出遭つた。

「見たか？」

「なにを？」

「××事件の批判をさ」

「あゝ、見た！」

二人は急がしく別れた。

指が綺麗すぎる

ブタ箱住ひは、彼女を勤め先からクビにしてゐた。わづかな退職手當も殘り少くなつてゐた。彼女はオルグに相談した。

「君、オルグをやつたことがあるかね」

「いゝや」

「どうだ、一つやつてみては？」

「さうね、職場がある？」

「それは、わからんが、搜してみるんだね。そして、じつくりとやつてみないか」

その翌日から、彼女は職場を搜しだした。彼女はまづ、T紡績S工場へ出掛けた。地味な田舎臭い着物を着込んで行つた。

「ハハア、尋常を卒へたばかりか、でそれからは何うしたかね」

「うちで働いてたの」

「百姓をやつてたのだね」

「えゝ」

「それにしちやア、きやしやな手をしてるね」

――しまつた、図星をさゝれた。

そして、駄目だつた。

「手を汚して行つても駄目だつたか。S工場の奴、最近のストライキで恐ろしく過敏になつてるんだな。それぢや、もつと、手をいかつくする工夫をするんだな」

オルグは笑つた。

殴る

彼女は、同志から唐手の話を聞いたことがあつた。

しめた！

彼女は夜になると、近くの新築中の仕事場へもぐり込んだ。昼間から目星をつけておいた瓦を三枚、風呂敷に包んだ。

彼女は先づ、準備行動から初めた。堅いものに十本の指をウンサウンサと押しつけた。机がその相棒だつた。インテリ臭い指は、直ぐに疲れてしまつた。

こんどは、瓦と瓦との間に綿を挟んで、ゲン骨で殴りつけた。薄い手の皮は忽ち血に染んでしまつた。彼女は繃帯の厄介になつた。

「どうした？」

オルグが訊いた。

「ちよつと怪我したの」

彼女はまた、馬ケツに土を運んで來て、自分の室に置いた。そして、毎日、子供のやうに土いぢりをやつた。

十日ほど經つた。彼女の手は見違へるやうになつた。

「どう、いくらか百姓の手らしく見える？」

「だいぶ苦心したね」

オルグは彼女にパンフレットを手渡しした。

「サア。いよいよ行くんだ！　うまく這入れりやア、もうなかなか會へないよ」

彼は　ッと手を差し伸した。彼女も手を出した。

二人は堅く手を握り合つた。



骨でも食らへ！

◇女人聯盟へ御加入下さい!!

女人聯盟の發展はその後益々盛んで各地の讀者の皆樣から非常な熱心をもつて加入の申込あり積極的に支持されることを表明して下さることは感激の外ありません。女人聯盟は本誌愛讀者を中心としてあらゆる婦人が思想境遇、地域、年齢等を超越して親密に團結し女性のめざましい社會的進出や向上のために何等かの力となりたい、將來は聯盟員のために研究機關を設けあらゆる方法によつて女性の親睦の綱となり智識の泉となる事を企畫してゐます。奮つて聯盟に御加入下さいませ。

一**通信部**　讀者のために通信の便を設けまた御感想などお寄せ下されば紙面のゆるす限り本誌通信欄に掲載いたします。

一**講演部**　本社には種々の方面の女性が多勢をりますから地方聯盟員の御希望によりましては喜んで講演に出かけます。

一**質問部**　東京における學校、職業方面圖書その他のことで御質問がありましたら調査の上お答へをし尚ほ交渉の便をも圖ります。

●**投書を募る**…聯盟員のみならずひろく愛讀者の女性から投書を募ります。從來も毎號創作や評論欄に新人を紹介してきましたがよき寄稿は喜んで掲載いたしますから力あるものをお送り下さい。

●**本誌につきての御希望を**…愛讀者諸氏の本誌に對する御感想は非常に興味深いものが多く集まりました。尚ほ本誌の内容及び將來に對しての御希望をどしどしおきかせ下さい。

支部をつくりませう!

五人以上の愛讀者のあるところでは支部を設けることが出來ます。支部と本社は特別の緊密な關係を保ち其他の通信、講演、本誌販賣等にもいろいろな便宜を得ることが出來ます。支部設置に就てはそちらの事情を委しく書いて本社に御相談下されば規約その他御送りします。

女人聯盟
加入申込票

住所

氏名

◇女人聯盟に就き皆樣の御希望を御寄せ下さい!!

十五錢の定食

此度は公設食堂巡りをしやう、編輯室の暑い午後桒川さんが口を切る。山の手の食堂、本所深川の食堂、みんなで行つてまわし書をしやう、ところが断髪の桒川さんと熱田さん、こんな頭で行つたら冷かされて冷かされてやり切れないと云ふ、つけまげしちやへ、つけまげをして浴衣を着て行く事にしたのにいつの間にか逃げちやつた二人、「若い人達にまかせるよいゝから行つて來いよ」そこで、川瀬さんと美智子さんとあたしの三人、お腹をすかせておひるすぎの太陽がぐるぐるまわつてゐる左内坂を降りて、まづまないた橋の市設食堂にゆく、九段下で降りた市電のグウと云ふ音がすいたお腹にしみこんで三人で何食べませう顔見合してウフフ(みどり)

ランチ三十錢・ライスカレー十五錢・野菜サラダ十錢、等々きれいにいろんなものがならんでゐるガラス棚の中を指さしておなかゞすいてるんで早くあれをたべませうよ。そこで食券賣場の前に立つてみどりさん威勢よく「ランチに、ライスカレーに野菜サラダ」とところが肝心の定食をたべなくては話しにならないので、しぶ〳〵「それから定食一つ」やれやれ御飯にありつけたと食券を買つてゐるみどりさんの後であたしと美智子さんがほつとしてるとこれはしたり、食券賣子、いかめしく「定食と他の物はたべるところが違います。」(美子)

定食は二階だと云ふので、見本の料理を恨

明治座今昔

――日本橋――18

時雨

神田附木店(ツマキ)

芦壽賀さんは、向ふ兩國の青柳といつた有名な料亭の女將でもあつた。百本杭の角で、駒止橋の前にあつて、後には二洲樓とよばれ、さびれてしまつたが、その當時は格式も高く、柳橋の龜淸よりきこえてゐたのだ。横濱についた最初の旦那は、判事さんだといふものもあつたが、その人はどうしたことか切腹してしまつたのだ。

だからおしよさんが、お孃さんあいての月謝をすこしばかり集めて、二絃琴なんぞ敎へてゐるといふことは、めんどくさかつたらうと思ふ。慰さみ半分の閑を消すためだつたかもしれない。

おしよさんの家の簞笥の上の飾りものの數は言ひつくせない。およそ美術的にかざつた玩具の數々――あゝした趣味もこれからの世間には見られまい。下品なものはなかつた。隣家に常磐津の老婆師匠が越して來て、負けずに窓のある部屋へ見えるやうに飾りたてたりしたが、覗いて見ると、それは子供にも不思議に思へた男の子のつけてゐるもののかた

らめしく眺めながら、十錢と、十五錢の錆びた金物の食券を握つて、トコ〳〵階段を昇る。白い食卓が六列にズラリと並んでゐる。割合に明るく綺麗だ。勞働者と云ふより店員が、自動車に乘つかつてゐる人が通りすがりに飛び込みそうな人達ねと、みどりさんは云ふ。そう云へば下の入口に「自轉車盜難御注意」と大きな看板が、かゝつて五六輪の自轉車が置いてあつた。お腹のすく時は唯れも同じで十人ばかしがいつせいに餘りうまさうでもないにほひをさせながら掻き込んでゐた。男の人ばつかりなので一寸氣恥しかつたが思ひ切つて、椅子へ腰掛る。グツト椅子を前に引かうとしたがビクともしない。オヤこれ動かないのね。仕方なしに、すまし込む。(美智子)

ぢや、あきらめて先に定食をたべてそれから階下で色んなもの食べてみませうね、甲と乙と二つの食券を持つて、おはしを三本もらつて三人でつっつぃちやへばいいわねとはなしをきめて、はしごを登つてゆくと小僧さんがすぐ三つお膳を持つてきた、「アラ變ね」「何が變なんです」「だつて食券二つつきや、それに甲と乙とあるんですよ。」照れくさくなつて三人で二つをたべますとは云はれなくなつてドカドカと私は下へも一つ食券を買ひにゆく。あがつてくると三つならんだお膳の前で川瀬さんと美智子さんにやにや笑ひながな「みどりさんが乙よ」横目でにらんでみると甲はお丼に入つてる御飯の上にカツレツの三分切りになつたのがあつて卵子とニンジンキヤベツが一緒にのつてゐる。小さなお皿にお

ちをかざりならべておがんでゐた。

おしよさんの家へは、綺麗な娘さんたちが多く來た。みんな美しい人だつた。お母さんやばあやさんの自慢の娘さんたちだつた。鴛鴦に鹿の子をかけたり、ゆひわた島田にいつたり、高嶋田だつたり、赤い襟に、着ものには黑繻子をかけ、どんなよい着物でも、町家だから前かけをかけてゐるのが多かつた。前垂れの友禪ちりめんが、着物より派手な柄だから揃つてゐると綺麗だつた。春の夕暮など、鬼ごつこや目かくしをすると、せまい新道に花がこぼれたやうに冴々した色彩が流れた。玉村の――お菓子屋の――お島ちやんは面長な美女で、好んで黃八丈の着物に黑じゆすと鹿の子の帶をしめ、鹿の子や金紗を結綿島田の上にかけてゐるので白木屋お駒といふ仇名だつた。山口屋――本間屋――のお駒ちやんは八百屋お七――お駒ちやんの妹の幸ちやんは實にぱつちりした、若衆だちの顏つきだつた。天野さんの――化粧品問屋の――×さんはおとなしく、金物問屋のおぬひちやん、袋物問屋のおよしさんその他の人たちも醜いのはなかつた、

高い脚立をかついで駈てきた點燈屋さんもにこついて眺めてゐる。近所の人達はいふまでもない、通行の人たちも立止つてゐる。そんな時、おしよさんはどんなことを思つてゐたらうか、いつか、こんなことをはなしたことがあつた。

「あたしは十五の時お母さんに叱られたことから、ふと死にたくなつて、矢の倉河岸(大川端)に死にゝゆかうとしたら、町内の角に木戸口があつた時分のことでね、急いでゆく前にばたんと立ちふさがつたものがあるので、怖々顏をあげてみたらば、男の首くりがぶらさがつててね、あつと思つたとたんに死神がどこかへ飛んでしまつて――」

「その時、おしよさん、どんな姿してた?」

なすがおみそにまぶれてる綠色をまだ持つてる白瓜のお香こが二切れ、私の方の乙は、お丼に入つた白い御飯おかずはさつまあげ三切とごぼうの煮つけ、白瓜のおこうこ、で三人何だかたのしみな樣なこわい樣な氣持でおはしを割る。パシャッと云ふ音と一緒にお丼の中につつこむ。溫い御飯だ、白い御飯だ、空いたお腹めがけて飛びこんでゆくごはんはそんなにまづいとは思へない。さつまあげをつまんでガブリとかみついてみる。大口で食べると一片二口だ。すこししよむないがたべられないといふ程ではない、御はんとおかづとお茶とおこうことまぜて十錢だから高すぎはしない。しかしおこうこはいかにも食べられない、何故こんなくさつた樣なおこうこをつけるんだらう、勞働者の體にはどんなにか新鮮なビタミンBを持つてる野菜が必要とされてゐるだらうに、くさつた樣な匂ひと味とを持つおこうこだつて同じ樣に鹽もゐるだらうし、ぬかもいるだらうし、かきまわす手心一つでおいしいおこうこになるのにおかずがまづくてもおこうこがおいしければまだたすかるのに一口かみ切つたおこうこのはきだすわけにもいかずのみこむのも悲しいまづさに目を白黑してさあ乙の方もたべてごらんなさい、お丼をとなりにまわす(みどり)

　みどりさん乙でうらめしさうな顏をして甲は、ごはんの上に卵子がのつかつてるなんて云ふけれど卵子とはマツカなイツワリ、實はなまぐさいお汁でにたお豆腐のクヅ、それに馬だか豚だかわからない肉がヒイ、フウ、ミ

何でも訊きたがる私は、話にぶらさがるやうにきいた。

「ゆひわたに結つて、黃八丈の——あたしやまあいやだよ、いい氣になつて‥‥この子はいけない子だッ」

ふと、その頃の自分とおんなじやうな年頃の娘たちをあづかつてゐる事を思出したのだらう、笑つてしまつた。

だが、その娘さんたちに交つて、娘のやうな、娘でないやうな人がひとりゐた。お金ちやんにきくと、アンポンタンが知る前に阪地へいつた人なのださうだ、曙山さんていふのだといつた。

曙山といふ名は、アンポンタンにも新しいものではない、まさかに子供でも錦繪の智識から羽左衞門かとか尾上梅幸とかよぶやうなこともしなかつたから、曙山とは澤村田之助の俳名だと知つてゐた。幕末頃のくさ草紙には、俳優田之助が人氣があつたからか、小意氣な水茶屋の女なぞに環菊のお田之とかなんとか書いてあつたほどだから、俳名の曙山も目からくる文字の上でのおなじみだつた。

その女は黑い顏で、大きな鼻で、體はグニヤグニヤとしてゐた。長じゆばんが裾から蹴出されると、緋ぢりめんだつたり、薄紫ちりめんだつたりした。黑ちりめんに加賀紋の羽織を着て、風呂敷ほどの絹半巾を鼻からまいて、車からをりると、

「おツしよさん——」

て鼻聲を出して、踊るやうに袖をパタパタさせて、

「おゝ寒む寒む、はよう溫かいものでもおくれ。」

と妙に甘つたれた調子で太い聲を出した。

みんなが羽根や手鞠をついてゐると、

イ、ヨウ五ツのつかつてゐる。あたしは御飯の上に、いろんなものがのつかつてるのが大のきらひ。こんな事しないで、おかずを別々にすればいゝのに——となき言をならべる。傍にくつゝいてゐるなすの味噌合へのすつぱさ。白瓜のおこうこに至つては批評の限りでない。これで十五錢なら一寸も安くはない。私だつて十五錢でもつとうまいお料理をつくるのにとこぼす、おまけにそれらのものゝ入れてあるお皿の模樣をみると、どれも〳〵東京市設、公衆食堂の字が入つてゝひどく殺風景な感じだ。お豆腐のくずの、のつかつた御飯に、半分もたべずにうんざりして、あはれつぽくお箸をいじつてゐると、みどりさんの乙がまはつてくる。白いごはんがなつかしくなつて一寸つゝいてみるがもうたくさん。あゝ、熱い番茶に、おいしいおかうこで、お茶づけがさら〳〵たべたいなあ。([illegible]子)

三つの丼を皆んな半分位殘こして其處を飛び出した。お行儀が惡いねと、おつしやいますな、だつて、あんな、まづいものたべられやしない。だが、汗ダクになつて働いてゐる勞働者のお腹がどんなにすき切つてゐても、之れよりまだ〳〵まづいものを食べなければならない。必要なエネルギーが消耗して行くばかりだ、此の時、沁々贅澤な事は云へないなと思つた。

「さあこれから何處へ行かう」「神田驛の所に昌平橋食堂があるわよ」「ぢやそこへ行かう」

九段下で電車を待つ一時過ぎで暑いさかりだ、汗がおしげもなく流れる。「もつと色んな

「わたいもつこ。」

と仲間になる。

「さあ、あんたはん、あげますウ」

と器用に、なんでも巧者だ。

アンポンタンは思つた。この女は、どつか大きな家の娘で、病氣——ばかのやうなので、髮を斷らして遊ばせてあるのだらう、だから、あんなに無沙法なのだと——さう思へたほど、堅氣の娘たちとは調和しない奔放さがあつた。

その人は斷髮だつた。だが、その女の人が、なんで田之助の俳名と關係があるのかがわからなかつた。あたしの解釋では、くさ草紙の人物、環菊のお田之さんのやうに、これは生きた人間が、田之助ぶつてゐるのだらうと思つた。しかし、環菊のお田之はそれは美しい女に描いてあるが、曙山といふ女は汚らしかつた。だから言つた。

「あの女、氣狂ひ？」

すると、お金坊は金切り聲を張りあげて、

「おッさん、曙山さんのことを氣狂ひかつて！」

「惡い子がゐるね、誰がわたしのこと氣狂ひといふた。」

太い聲がモッタリといつて、こつちを振りかへつた。

「あの女の人、黒い汚ない顏だつて——」

「フン、黒うても白うなる。白粉つけて美しうなつて見せてあげる。——金坊、おッさんに白粉だしてもらうとくれ。」

あたしは怖氣だつた。氣狂ひが白粉をつけだしたりしてどうなるのかと——

丸い手鏡を片手に持つて、白粉刷毛でくる〳〵顏をなでまはしてゐた曙山さんは、傍ら

ものを試食しやうと思つてゐたのに、もうお腹がいつぱいになつちやつたわね」「でも今度はどんなものが出るんだらう」まだ見ないお料理に一寸ほゝ笑ましい氣持になる。やつと電車から降りて神田驛のまわりをグル〳〵見廻す。「一體何處にあるの」「あのガードの向ふよ」そこでテク〳〵歩いて行つてみても、食堂見あたらない。「アラ無いぢやないの」みどりさん悲鳴をあげる。「だつて省線に乘つかつて、見た時たしかにあつたのに變だわ」結局何處だか分らなくなつて、川瀨さん、店先の人に聞く。かけて來て「萬世橋のとこだつた」「アラ、ぢやずつとあとの方ぢやないの、暑いけど、歩いちやへ、」道々眞黑になつて目ばかり光らせた工夫達が懸命に土を運んでゐるのを見た。此んなに働いても、ありつける御飯は、今私達がのどを通して來たのと同じなのだ。遊んでゐる資本家が、うまいものをたべて、汗みどろになつて働く勞働者は、なぜ榮養の少けないものばかり、たべさせられるのだらうと考へる。

これぽつちの暑さにまゐつてしまつて、もう歩く力がぬけそうになる。「あゝ、のどが喝いて、氷が欲しいわね」みどりさんすかさず「さつきから氷屋があれば飛び込まうとニランでんのよ」皆んな少々へコたれて最初の意氣込みがなくなりかけた。「もう行くのやめちやいたいな」でも身の爲にならないので、元氣を出す、ほこりつぽい街ン中を歩いて漸やく昌平橋食堂をめつけた（美智子）

秋の陽ざしを含んだ午後一時すぎの太陽と

にゐるおもよどんや、お金ちやんを腭でつかつて、紅をとれの、墨をかせのと、命令するやうに押つぶした聲で簡單にいひつける。

「その手拭をおよこし」

鏡臺わきの手拭かけにあつた白地に市川といふ字が手拭一ぱいの熨斗の模樣になつて、莚升と書いてある、市川左團次の配り手拭をとらせると、上手に姐さんかぶりにして、すつと立上ると、

「おッさんの寛袍をもつといで。」

と自分の帶をときだした。

あたしはとんでもない事をいつてしまつたとしよげてゐたが、廻りの者はゲラ〳〵と笑つて面白がつてゐる。

曙山さんといふ人は、わざとらしく怒りつぽく、

「お腹がすいとるのに、みな面白さうに笑つてからに、わたしばかりこんなことさせて——おごらんかつたら怒る。」

「どういたしまして、これこの通り、ちやんとお仕たくはしてござります。」

おもよどんはそんな事をいつて、大きなお膳の上にのせたおすしの大皿と、もひとつの高脚膳にのせたものをはこんできた。その上には酒徳久利ものつてゐる——

「では、まづ一ッ——」

曙山さんは立ちながら腰をかゞめて、お猪口でなく、そばの湯呑をとつてお酒をついで、ごくごくと飲みほした。

あたしはまた溜息をついた。おしよさんはなんでだまつて、煙草なんか長い煙管からのんきにふかしてるのだらう——

熱とほこりだらけのアスファルトから反射するやつぽい光線とにのどがいりつきさうになつて、おなかは一ぱいにはつたものゝのどうも何處かに滿足しきれない何かゞあつて、食べたと云ひ切れない氣持、この暑さとだるさの中に素川さんが居たら又フンフンて鼻をならすだらうな、今頃は社でおいしい御飯をたべて涼しい二階で、で三人で思はず「ずるいわねえ」、「みどりさん何かおいしいものたべさしてよ」「あと口がなくちやあねえ」「あゝ氷がのみたい」「あらよく飮みたいんねえ―川瀨さん何かおいしいものたべさせてよなんて云つてたくせに氷をのみたいといふとそんな悧まれ口をきく」「ぢやのみたくないの」「いいやのみたいよ」濟ましてる。萬世橋の市電の停留場の前にある神田女學校のまだ夏休み中と見えて閉まつてゐる門の前におかれた接待の麥湯、恥も外聞もあるもんかのどがかわいたんだものとばかり一いきに一ぱいのむ、二人はすまして先に歩いてゆく。やつとめつかつた昌平橋食堂。第一のんきねえ、ちやんと昌平橋つて所の名前が出てゐるのに神田驛んとこよとかいや神田橋のそばよとか暑い中をテクテク歩いたのかと思ふとふき出したくなる。昌平橋つてなあんだ松住町のとこぢやないのあとからブウブウ云つてもおひつかない。汗をふきながらおなかにまだすき間ある？　實はもうないのよ。昌平橋食堂といふのは昌平橋々畔に立つてゐる。やつぱり鐵筋コンクリート建てだ。

「臭い」思はず汗でしめつたハンカチを鼻に

と、思ひがけずおしよさんがこんなことをいつた。

「お前さんがさうやつてると白糸がよささうだね。」

「あたしもさう思ふ、鈴木主人をつきあふてくれるものがあれば――」

「川崎屋（市川權十郎）ならいいけれど――」

曙山さんは、ふと、アンポンタンを見た。

「あの子がわたしのこと氣狂といふたのやろ、ほんに無理もないこと。これ御覧、綺麗な長じゆばんだつしやろ。」

姐さんかぶりの曙山さんは褄をあげて見せたが、

「よい事がある。」

といつて着物を脱いでしまつた。下には薄紫に遠山紅葉の裾模様のあるちりめんの長じゆばんを着て、白はかたの細帯をまいてゐた。

「この上へお着せ。」

おもよどんが、紅絹裏の糸織のどてらを長く上にかけた。

曙山さんは懷紙で顏をあをぎながら立膝をして、お膳の前の大ざぶとんの上に座り直した。

「さあ、みんなおすしおあがり。」

おそろしく横柄だつた。あたしはかつて他人から、そんな風に聲をかけられたことがなかつたから、いよ〳〵氣狂ひだと思つた。けれどみんなは嬉しさうに、樂しさうにゲラゲラ笑つてゐた。

この人の正體がやつとわかつた。女形だつたのだ。舊時代の遺物そのまゝに育てられてきて久しく阪地へいつてゐた俳優だつたのだ。東京の水になれないので、むかしのままの

おしつける。どぶどろ河だ。」河ぢやないどぶだ。東京の街を流れるあのお茶の水の橋を持つてるどぶ川だ。汚物とごみをすてる舟のゆききする、メタン瓦斯のプツプツと泡をふき出してゐる水だ。で昌平橋食堂は正面は電車通りに向いてゐる、右のとなりは、ごみ舟、こえ舟の舟つき場だ、荷すて場だ。ごみ自身の持つ濃度でむうんとむれあがつてくるあの匂ひ、それが高い崖から下の舟めがけてサツとおとされる時に街の中に食堂の中にその臭ひとこなと蠅がむうんととび散る。おあい車がずらりと食堂の前に並んでゐるふたをされた入口、その車と車の間から、袢天着の勞働者達をおしわけて入つてゆくにはあまりにも空いてゐないお腹と、むつと胸に來る臭ひときたなさ、蠅、「どうする入つて何か食べてみる」「よしませうよもうおなかにはいらないわ。」「こんな汚いところでねえ。まあよく病氣にならないわね。」入らうか入るまいかためらつてる間に交叉點の信號が、ススメ。ススメの向ふ側にヘンポンとなつかしくひるがへる氷屋の赤い旗、そこで三人は何もかも忘れてちやないあとにして先づ氷へ氷へ、氷屋にとびこんでおのおの咽喉をぬらせて、あアたすかつた(みどり)

　夏の終りの光線のギラ〳〵光るまひる氷屋を出た三人これから又歩くの、ユーウツだなあ。でもそんな事云つたつて仕様がない。もう一度昌平橋食堂へ行つてみませうよ。そこで又汗をたらしながら暑い道をスタ〳〵。昌平橋食堂の入口までくると、小僧が二人涼ん

お坊ちやんで――とお師匠さんはある時いつてゐた。お金ちやんの說明によると、
「曙山さんは女の通りに育てられたのよ。けど、ほんとは女かもしれないわ。裁縫もよくするし、髮も巧者に結ふし、なんでもかでも女の通りよ。だけど男だつていふの、女の通りに育てられた男だつていふの。こんど來たら、なんだか男と半分〳〵になつちやつたやうだけど、もうせんには、ほんとに女だつたわ。だからおッしよさんも、女のお弟子さんとおんなじだつて――」
　そしていつた。この間も、新富座へ乘込みのときは、以前の通りに――鬘だつたけれど――樂屋下地に結つて、紫のきれを額にかけて、鼈甲の簪をさして、お振袖で、乘組んだのだと。あたしは氣味がわるいと思つた。どうしたつて、あの大きな黑い顏は、そんな、花やいだ、たおやかさを思はせはしなかつたから――
　ともかくこの人は結局女ではなかつたのだ。でも、その後、時々面白い笑話がきかされた。
　盲目の坊主頭のお婆さんが死んで、その法事のかへりに淺草田圃の大金（鳥料理）へいつたら、そこの人達が、どうした事か、家業柄にもにず、この女形を完全に女にしてしまつて、御後室樣〳〵と、お風呂まで女風呂へ案內したとか――
　またそののち、曙山さんの名を養家へかへしてしまつて、市川の門下になつた。時勢はいつまでも彼を娘と見るやうな甘いものでもなく、彼もまた薹のたつた女男になつてしまつたが、娘ぶりより、御後室の方がまだしも氣味わるくない。新富町の露路裏に、男役者と、いゝやもめが二人同居してゐたが、そんな時彼はすつかり世話女房だつた。片つぽが歸らない朝なんぞはブツブツいつて女中と一緒に働いてゐた。
　ある朝、片つぽの男に捨られた女が、勢ひ猛に押寄せて來た。彼女は、昨夜、自分の情

である。「定食の他のものたべてみない」「えゝ、ちやあ他のものあるかきいてみませうよ。」みんな定食には一度でこりてゐるのでせめて他のものでもたべて話しのたねにしやうと、小僧に、「定食の他のもの、ないんですか。」「えゝ。ありません。」「あらつまんないわ。」と口には云へど内心ではこの共同便所のとなりのきたならしい食堂でこの上まづいものをたべなくてよかつたのでほつと一息。そこで又日中の大道にふやけた顔をしてつゝ立つて、「さて、これからどうしやう」市電の停留場まで歩くのも、ものうい。省線で歸つちやへ〳〵。そこで萬世橋驛で。電車にのつかると急にねむけがさす。

「あゝあ。まづい物でおなかゞはつたのつていやな氣持ねえ。」

「あゝあ、これから左内坂登るの些ユーウツだわねえ。」

「あゝあ。素川さん達ずるいわねえ。」三人共あゝあの連發。やがて市ケ谷驛で電車を下りて、みんなフクレツ面をしてモク〳〵と左内坂を上り、社にかへつて、今日の一分一什をつぶさに報告した上、さて三人口をそろへて「何かおいしいもの、口なほしにたべなきや、やりきれなーい。」（美子）

續十五錢の定食

公設食堂めぐりを一日でへこたれて了つた連中あれぢや六號がたりなくてよ、ほんとよたりないわよ。ちやあどうするのさにみんな

夫が他の女と一緒にゐたことを耳にして、大變なけんまくで駈けこんで來たのだ。彼女は下駄もはいたままで座敷へ飛込みかねない物凄い有様だつた。あたしを差おいて――と彼女はいつた。彼女は彼の家の火鉢の前に座るべき、正妻の權利を第一にもちうるものは自分だと信じてるのだ。だから、障子をガラリとあけた。

「どなた――」

ぼやけた聲がする。

はて！　女も流石に躊躇した。

「あたしです。」

「あたしつて、どなた？」

彼女は、自分の位置であるべきもののやうな問方をするのが小癪にさはつた。けれど、來たわけをいはないわけにはいかない。

「××さんはゐませんか？」

「ええ、まだ歸らないんですよ、あきれつちやうぢやありませんか、何處をウロ〳〵してゐるのだか。」

女はギクリとして障子の中を覗いた。そこには、姐さんかぶりの後むきが、小意氣な半纒を着た朝の姿で、たすきをかけて、長火鉢の艶拭をしてゐた。

「まあ！　あなた、おかみさん――」

女は、しどろな言葉で挨拶して、來た時の勢ひとは、くらべものにならないいしよげかたで、どぶ板に吾妻下駄の音を殘して歸つていつた。

なんだらうまあ、あの女は折角來たのに、用向きもいはないで――と思つてゐると、

「おゝこわ、こわ！」

ムニヤ〳〵。

そこでキンペン、ユウカン、川瀬美子、フン然として、一夜單身神樂坂の公衆食堂へ――

ひどく手ぜまな感じの建物の前へ來ると、まないた橋の、お豆腐のくずの、のつかつてた御飯を思ひ出して、そぞろものかなしくなる。これではならじで勇をふるつて、中へ入ると、ここでは夜の定食の獻立表が、食劵賣場に、かかげてある　これはいい思ひつきだ。曰『甲そぼろ丼、お汁十五錢乙野菜丼十錢』どうせ甲も乙も上おかずが上にのつかつてるのなら甲にしちやへ。そこでお汁のついてゐる甲の方をかつて、二階へ上る、一杯の人だ。商人小僧學生等々――。中には金縁？目　のナカ〳〵のモダンボーイもゐる。まないた橋のつもりで、すまして腰をかけてゐると、ボーイがニヤ〳〵してやつて來て、私の肩をたたき「御婦人の方はどうぞあちらへ」指さされた通りに面した窓の方をみれば木の札にれい〳〵しく「御婦人席」なる程そこには、女工さんらしい婦人が十人程、くたびれた樣子で、御飯のくるのをまつてゐる。更におもしろいのは、その傍に、しつらへてある「同伴席。」まるで活動みたいだなと、のんきな事を考へる。但しこゝの同伴席は、活動のそれのやうに、ステキな彼と彼女がチョウ〳〵ナン〳〵してゐるのではなくて、營養不良みたいな顔をして三つぐらいの子供をつれた、勞働者らしい夫婦。夫婦共働らいてゐるんで自分の家で仕度をして、たべられないのだらう。きよろ〳〵してゐる間に、あたし

といつて、同居の片つぽが歸つて來た。そして、姐さんかぶりの仲間を見ると、フッと吹出して、

「おかみさんがゐるのに、なぜ、いはなかつたつてたぜ。」

といつて、カラ〳〵笑つた――

いまこの人は老女役になつて、生れ土地の關西へ歸つてゐる。

久松町の千歳座が燒けて、明治座が建つとあの邊は一體に華やかになり景氣だつた。芝居小屋がやけて芝居小屋がたつのに、そんなかはりがあるかといひたいほど代つた。明治座前に竈河岸へかけて橋がかかつた。川を離れてその橋ぢりへまで芝居茶屋が飛んで建つたほどだ。明治座は橋にむかつた角で、芝居茶屋は右手に並んでやまと、はりまやと五六軒、通りをへだてた横に日野屋さぬきや六七軒、樂屋口うらに中村屋が一軒、みんな大間口の素晴しい店だつた。茶屋は揃つて二階に役者紋ちらしの幕を張り提灯をさげ、店前には、贔屓から役者へ贈物の棗をならべた。劇場の表飾りもまけずに趣好をこらし、庵看板をならべ、アーク燈を橋のたもとに點けたので、日本橋區内には、今までになかつた色彩をそへたのだつた。それが人氣にあつた。しかも、中洲は開けたばかりですぐ近く、前の川の下である。橋をわたれば葭町の花柳場があり、ゐんしんな人形町通りがあり、金のうなる問屋町にとりまかれて、うしろには柳橋がひかへてゐる。ずつと昔、淺草猿若町へ、三座がひけぬ前の、葺屋町、堺町の賑ひをとりかへしたかの觀を呈した。もと〳〵千歳座があつたが中芝居であり、人氣のあつた中島座は小芝居ですでに燒けて亡び、中洲に眞砂座があつても歌舞伎の稽古芝居が新派であつたので、明治座はたいした人氣となつた。

それに、そのころ、尾上一家の細かい藝よりも、豪宕な左團次（今の左團次のお父さん）

だけをのこして女工さん達に、御飯がくる。みんな乙の野菜丼と云ふ奴だ。それを、うまさうにたべてゐる。他の公衆食堂へ行つた事ありますかときくと、他へもちよい〳〵行つたが、これが一番待遇がいいとの事。やがてあたしの前に運ばれたそぼろ丼に、ふのお汁。なる程、これはまな板橋の程まづくはない。おなかがペコ〳〵のときなら、大丈夫おいしくたべられさう。但し茄子のお香こは、ここもなつちやない。そこで、そぼろ丼とお汁をかはる〳〵二口三口たべてお香こを一口たべたとき、社の熱いお茶づけと、おいしいお香こが思ひ出されて、あとはもうダメ。乙の方をガッ〳〵たべてゐる女工さん達に、一寸きまりがわるいやうな氣がして、お箸と半分以上のこつてゐるそぼろ丼を、放りだし後をもむかず、一目散に夜の散歩者でこみあつてゐる神樂坂を下り、お堀ばたをつたひ、フー〳〵左内坂を上つて、折から夕食中の社長さんのお部屋にとびこみ、「六號がたりないんで、一人で神樂坂の公設食堂へ行つてきました、えらいでせう？」「おや〳〵それは偉い。ぢやあ、もうお夕飯はすんだのね？」「いや之からお茶漬です。」に社長さん「へえ——。」（美子）

社へ行つてみると川瀬さんにやにや笑ひながら「ゆふべ神樂坂の公衆食堂へ一人で行つて食べてきたわよ」そこで私も又勇氣を振つて、新宿の府立六中の隣にあるといふ食堂をめがけて、日曜日の朝お腹をせい一ぱい空せて浴衣にメリンスの帶、陽に焼けて黒い顏にサイフをポンとふところにほうりこんで出掛

が時流に合つて人氣を得てゐた時で、その左團次が座頭であり、團十郎が出勤し、福助（今の歌右衞門）が女形だといふので左團次贔屓の力瘤は大變だつた。

二絃琴のおしよさん芦須賀さんは、その左團次が、若い時からの岡惚れだといつてさわぎ出した。

だから、曙山さんは左團次の弟子になつた。おしよさんは、當地に馴染のない人だからと、毎日〳〵樂屋へいろんなものをもたしてやる。ほかのものはいいがお汁粉をどつさりこしらへてもつてゆく時は、おもよどんは運ぶのに大變だ。兎にかく、お稽古はそつちのけで、明治座のはなしに無中になつてゐる。

アンポンタンは十二三の時から、あの貧乏な勝梅さん（前出、長唄の師匠）の蠣殼町の家から出ると、豐澤團なんとかいふ竈河岸の義太夫の　の表格子にたつて、ボカンと中の稽古をきいて過し、びつくりして歩きだして橋を渡ると、千歳座の前で看板にひつかゝり、それから附木店まで歩いて、本箱の蟲になつて、家から迎へがくるか、おもよどんかお金ちやんに送りながらわびてもらつて、暗くなつてから家へかへる習慣になつてゐたから、明治座が出來たから急に芝居の前にたつわけではなかつたが、みんなとは違つた意味で、自分の慾をたんのうさせてもらつた。

もと〳〵家では、長唄が一日、二絃琴が一日と隔日にといふのを、盲目の勝梅さんの方はトットとすませて二絃琴に通ふのだつた。しまひには、勝梅さんは三日おき四日おきにしかいかなくなつた。月謝が早く手にはひらないと、勝梅さん一家は當惑してしまう（妹と二人分だから）さういつては悪いと思つても、貧にはかてず お婆さんかお君ちやんがとりにくる——あたしの母は、いくらその困ることをあたしに言ひきかせても、月謝を屆けるのがおくれるので、それからは毎日けいいしをあけて唄本の間を調べる。毎日そのまま

ける。秋の朝陽がギラギラと射しつける新宿の通りを肩とかかとでズクンズクンと歩きながらあつぱれすごい女勞働者だらうなんかとゝいい氣になつてショウインドの硝子戸をのぞきこみながら、新宿松屋の三尺巾のきたない露地を通りぬけて裏通りに出る。六中のコンクリートの塀、完全にボカボカな白いほこりと馬糞との道　六中の隣、ばかが他家でよばれたぼたもちを一生懸命でおぼえながらきたやうに六中の隣六中の隣、やつと六中の前にきてやれ嬉しや、ずゐ分おなかもすいたし一體どんな味噌汁をたべさせるだらう、この前の時は三人一緒だつたからいいけど此度は一人だから、それにここは場所がらが場所がらだから、たのしみなやうなこわいやうな氣持でサテ食堂は？何處？六中の隣つて云つていたのに、どつこいしよとつまづいてボタモチがどつこいしよになつたやうに、いつの間にか六中の隣は自動車屋の自動車置場、ハリウド美容院新宿分院、自動車屋で肝心の食堂は蔭も形もない。聞き違ひだつたのかしら。先の方に行つてみやう引越たのかも知れない、ボコボコとほこりを眞黒な足にあびたがら傘を持つてない悲しさが、照りつける秋の陽ざし　頭がジンジンいたむ。胸のあたりがキユツとして胃液が口の中めがけてとびだしてくる。行つても行つても食堂らしいものはない。だらうかなと思つて行つてみると簡易宿泊所、簡易旅館である。何てこの邊は旅館が多いんだ。あきらめて又六中の前までもどる、歸らうかな、歸る前にも一度探さう、早

だ。もう二絃琴はさげてしまうと怒つた。ほんとにさげられてしまつた。けれど、あたしは平氣で、無代で稽古しに出かけてゆく。それがあたしの權利のやうに――おしよさんはなんとも言はなかつたが母の方が困つた。あたしは稽古そつちのけで芝居の研究をする――

研究といふときこゑがいいが、覗いてきたままを臺所でやるのだ。譬ば、丸橋忠彌の堀ばたとか立廻りの見得とか。せまい臺所でほんものの雨傘をひろげるのだから、ぢきに破いてしまうが、一方ならない高嶋屋びいきは小言どころではない。よくおぼえてきたくとほめる。ここの立廻りは、いくつ踏んで、トントントンとかうきまると棒をふりまはして棚のものを破しても叱られない。わからないところがあると、おもよどんにくつついていつて樂屋から見學だ。いつまでたつてもコツののみこめない下廻りを見ると、おとなつて、なんて物覺えが惡いんだらうなんて生意氣にも思ふ。

左團次の新富町の家の稻荷祭りなんていふと、おしよさんは夢中だ。それでもきまりが惡いので、むかうにゆくと、子供衆たちが大悦びで――なんていつてゐる。

現在の左團次はアンポンタンとおなじくらゐだから初舞臺から知つてるわけだ。新富座の「和田合戰」の佐々木小三郎だつたか、まんまるく大福のやうなのを覺えてゐる。その後明治座時代の少年期の彼はへたくそ。――だが、一體に少年期に大成するものは、早くのびが縮まるやうだ。(私は彦三郎を後に異なる味をだす役者だといつて、みんなに、まだですか、だいぶゆつくりだが、まだ見どころありですかなんて笑はれるが、私はまだだと言つてゐる) 左團次の今日あるを、少年期の時誰が云ひあてたらう、自分でも少々悲觀してゐたのをしつてゐる。舞臺へ出るときまりわるがつて、うつむいて、モツくとものを言ふ。まつすぐに逃べてしまうとまつすぐにひつこんでゆく――見物は氣の毒さうな顔を

く探さないと時間がきれると食べさせて吳れなくなるから哀れだ。そこの自動車屋の角を折れて山ノ手市場の方に一軒一軒目をさらしながらゆく、旭町といふこの場所は、何といふ青い鼻汁をたらした子供達の多いとこだ。ジャンケンポン、ハア、十ヨ、チヨキ、三ツ、グ、五ツ、子供をおぶつた十位の子が、六つ位の子が、十三位の子が、鼻汁をすすりながら遊んでゐる。狭い往來、きたない旅館、市場、たづねあぐんだ食堂は一體何處に行つたんだ。ボロの紺絣りの上つぱりを着た三人の女が背中にしよつた仕事道具をゆすりあげながらペチヤクチヤしやべりながら朝の仕事に出かける往來に出て齒をみがいてゐる男。丼を持つて豆腐屋をおひかけてゆく女、針金で塀をかこんだ　とか神社、食堂は何處ですか、ききたい心は一ぱいなのにどうしても周園の人達を見まわした時にその言葉が出て來ない。笑はれさうで、にらまれさうでどなられさうで仕方がないから又元のところにもどる。あきらめるのかな、大きなトラックにガソリンを入れてゐた小僧に、「六中の隣りにあつた食堂は何處へいつちやつたんでせう」「あれはこはしちやいましたよ、そのあとに美容院が出來てゐるんですよ」「へえ」「何處へいつたんでせう」「しりませんねえ」食べようと意氣込んで飛び出した食慾娘、目的のはづれたおなかをかゝえてこりやまづいのを食べたよりも深刻だ、と思ひながら失業してむなしく歸る人の氣持でトボトボと新宿の大通りを歩く(みどり)

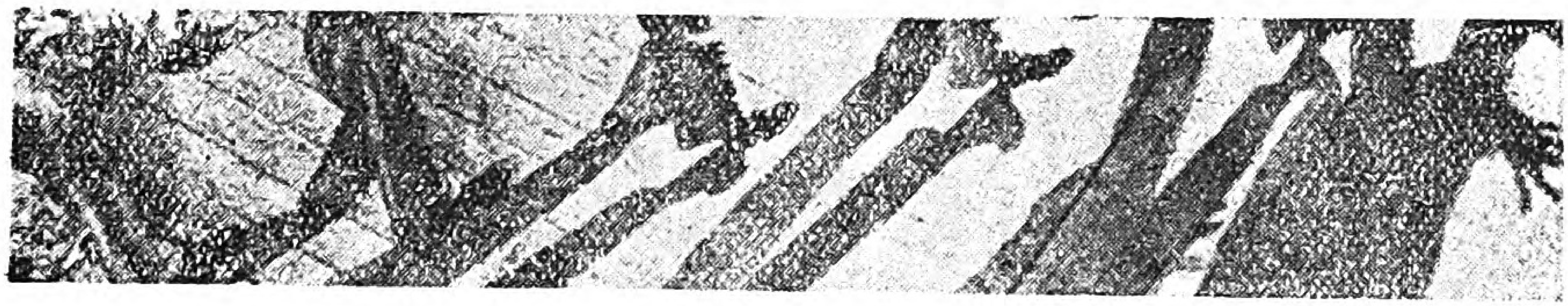
する。お父さんが働きてで、人氣ものだけに、若い伜の人氣のないのが一層はかなげに思はれたのだつた。

「銀行家にしようと思ふのだが——」

と、あの舞臺では睨みのきく眼が、慈眼といふやうに柔和になつて、樂屋では、これも大町人か、それこそ、そのころの、あまりこすくない銀行頭取の面影をもつたお父さん左團次がゆるやかに話す——

ぼたんさんが小米になつた。おしよさんのうちへあそびに來た。いつも樂屋や舞臺で、知りきつた顔なのに、この少年は背廣を着てきて、キチンと座つてゐる。一言も口をきかない。廻りのものやおしよさん夫婦は種々骨を折つてしやべるが、かんじんの少年客はムツとしてゐる。そのくせ歸らうともいはない。

そこでアンポンタン、大成した彼の舞臺を見、舞臺の惡黨ぶりを見、息をひいて、白い眼をむいて、顎でしやくつた太々しさを見ると、ウフツといふ笑ひが表面へ出ずお腹の底の方で笑ふ。それほど少年の客小米のキクイクジヨたる風采が、教育勅語を讀む山間の模範少年か、社主の前へ出たであらうところの、××會××社の少年諸君にもさもにたる勤務ぶりであつたから——



母よ

北山かつ子

母よ、
貴女は女となり母となりて、世の苦惱を悉くなめ、
くぢける樣な時も貴女をうるほす貴女の愛兒、
私等同胞に、唯一の希望をかけて育くむだでせう。
貧しい中にも力强く育くまれた愛兒が、
貴女のふところを巣立つものです。

母よ、
貴女の愛兒はナッパ服。奴等の爲めに搾られて、昔の

一枚の浴衣

森本正子

貴婦人の心のやうに
うすつぺらな浴衣一枚を
さも同情顏して下さるんですつて？
止めて下さい！
貴女の手のダイヤが
僞つてゐます
貴女の心よりも薄い絹物のお召が
倣つてゐます
髮かざりのプラチナが
貴女の心を表はしてゐるぢや
ありませんか？



紅顔は青ざめた頬に、骨ばつた體になりました。貴女が是を見たらなげくでせう。
おゝその歎きを、
奴等への憎悪にすりかへて下さい。

母よ、
貴女の愛兒のナッパ服は、金襴の着物より貴いと言ふ事を知つて下さい。
此のナッパ服が
貴女や、貴女の様な恵まれなかつた母達が、喜ぶ日の來るのを期して、全身が赤く赤く、焔に燃えてゐるのです。

母よ、
おゝ！　貴女達の喜ぶ日を、來させないでおくものか

たつた一枚の浴衣も
買へない貧乏に誰がしたんです？
そして　どん底につき落して置いてから
慈善家顔をして　ホンノ
貴女方の爪磨代にも足りない程の
浴衣一枚で
吾々の餓え切つた心を
ゴマ化そうとするんですか
そして
自己満足を味はふとするんですか
貴婦人方！
貴女の知らない間に
もうそんな事でゴマ化されない
強い精神が鍛へられつゝあるんです
素裸の強い肉體と精神が
ぐん〳〵成長しつゝあるんです。



農民の敵は地主や高利貸ばかりではない！

——社會時評——

永島暢子

農村の貧窮化について

（イ）農民の極度の貧窮化

最近私達は、ブルジョア新聞に於てさへも、毎日々農村極度の貧窮の報告と、そのブルジョア的對策の記事を見ない事はないであらう。働く農民は、實に地獄に突き落された。働いても〳〵食へない所か、このまゝ行つたら、死ぬより他ないのが、農村の現狀だ。まづ私達は、農村の生活を知る爲に、一例をひいて見やう。

長野縣諏訪郡を中心とした、夫婦子供一人の自作農の家計（東朝二月九日による）

收入の部

一、米作收入一ヶ年1040俵乃至60俵 平均50俵、米價10圓として	五〇〇・圓
一、男の農閑期の燃料取 臨時その他副收入	八〇・
一、女の農閑期出かせぎ内職並に製絲工場に通勤收入平均約	一三〇・圓
計	七一〇・

支出の部

一、肥料豆かす代	七五・圓
一、租稅公課	二〇〇・
一、農具その他雜費	一〇〇・
一、一ヶ年食費	一五〇・
一、電燈料其他交際費	五〇・
一、衣服費雜費	八〇・
計	六五五・

これは比較的副業收入の容易な、南信地方である事、必ずあるに相違ない借金の利子が挿入されてゐない事（この問題については後にふれる）ブルジョア的統計に必ずつきものゝ、當にならない綺麗事等々も考慮に入れる必要があり、若し小作農なれば、小作料二百五十圓を拂られる事を考へねばならない。

兎に角にこの統計が示す如く、農民は、耕作のみにては生活の維持は出來ない。その收入の重要な部分を占むる製糸工場に、賃銀不拂ひがあつたらどうだ！（この事は既にあつた事實だ）家族が病氣をしたらどうだ！　重要な働き手を、二ヶ年間も、××の名によつてする灰色の××ー兵營にたゝき込まれたらどうだ！　働いても働いても借金の利子に責められた揚句には、餓死するより他ないではないか。

これはいふまでもなく、一長野縣の農民の姿である。が、また新潟縣の、秋田縣の、否全國の働く農民のありさまだ。

更に農民の生活を一べつするために、一例を農業生産の主要である米穀生産に見やう。

自作農米生産の直接的生産費（單位圓）

費目	反當り	石當り
種子代	〇・九二	〇・三七
肥料代	一六・二五	六・四三
諸材料	一・五三	〇・六〇
勞賃	三一・二八	一二・四〇
畜力費	三・七七	一・五〇
小計	五二・七六	二一・三〇
間接的生産費		
農具費	二・一八	〇・八六
農舍費	二・二〇	〇・八八
公課	一〇・六二	四・二〇
土地資本利子（三分	一九・八二	七・八四
土地資本利子（四分	二六・四九	一〇・四九
小計（三分	三四・八二	一三・七一
小計（四分	四一・四九	一六・四八
生産費總計（三分	八八・五九	三五・〇八
生産費總計（四分	九五・二五	三七・七一

「右のうち一石あたりの生産費は、副收入を差引かざるものである。副收入（わらその他）を差引いたものは、土地資本利子三分の時は、一石當り三十二圓二錢、四分の時は、三十四圓六十三錢となつてゐる。而して收入より生産費を差引き、剩餘の有無を見るに、右六ヶ年平均に於て、土地資本利子三分の場合は、反當り三圓二十九錢の利益があるが、四分の場合は三圓三十七錢の損失となつてゐる」（以上帝國農會、七月二日發表）

この場合にも亦自作農の統計であるが、之を以てしても、小作農に於ては、更に加はる言語に絶した、過重なる小作料の負擔によつて、餓死に追ひやられてゐる有樣を知る事が出來る。

尚數字を追ふならば、まゆ一貫目の生産費が、五圓九十九錢餘であり、まゆ價一貫目平均三圓（地方によつては、一圓八十錢などゝいふ相場がある）とすれば、二圓五十八錢の損失である事（中央蠶糸會の調査による）、都會附近の、比較的經濟的餘裕ありと見られてゐる農村に於てさへも、二百貫目程の、牛車に滿載した野菜の、市場價格が、十圓！　などゝいふ底拔け相場であり、「示瓜一反歩作るにしても、肥料、支柱その他で、四五十圓の經費はどうしてもかゝり、種蒔きから、切り取りまで、七八十日の勞力をかけた結果は、六百貫の、收穫があり、一貫目、とび切り十錢と見ても、僅に三十圓にしかならず（七月二十一日東朝による）、等々の悲慘なる數字を限りなく見ねばならない。

一體働く農民は、どうしたらいゝのだ！　それ故に米を作つてゐる農村の缺食兒童は、都會の貧窮兒のそれよりも、更に物凄く増大してをり、その大部分は、生活費の爲と云はれる借金が、左の如く厖大な數字を示してゐる。

貸付主	調査村數	貸付額	一村平均
信用組合	九二八	六八・二〇八千圓	七三千圓
頼母子講	一・二四八	五〇・七二五	四〇
個人貸付業者	一・二三八	一九・九七六	一六
一般個人	一・一四一	三八・二七二	三三

（帝國農會の調査による）

右の他、銀行、保險會社、無盡業者等々からの負債を加算すれば、農家一戸當りの借金は平均九百圓、全國農家五百五十萬戸として、推算約五十億と稱せられてゐる。（個人貸付業者の利息は、平均一割以上、地方によつては、二割にも上る事は、注意を要する）

まことに「高利貸と租税制度は、到る所で、零細農を零落させてしまふ」マルクスの至言を、そのまゝ受けとらねばならぬ現狀を、私達は今見せつけられてゐるのだ。

（ロ）何が農村をかく貧窮につき落したか

私達は簡單ながら、農村の貧窮を一べつした。で、何が農村をかく貧窮につき落したか、である。

「今日に於ける農業恐慌は、工業の危機によつて一層深められてゐる。即ち工業は、自己の負擔を農業に押しつけ、最も廉い農業生産物を提供させる事によつて、工業製品價格の低落から犠牲をさけ、工業生産費の低下、（特に勞賃の低下）を計り、國際的な競爭能力を高めやうとしてゐる。この事がブルジョアジーの政策を通じ、市場關係を通じて、農業に強制され、農業生産物價格の低下を强ひ、强慌を促進してゐる。それ故に、工業の世界的困難が増大すればする程、農業の恐慌狀態は深まる。」（産勞三月號）

即ち農業恐慌の原因を、世界的規模に於ける經濟恐慌の餘波であり、從つて、その一環としての、日本資本主義の危機によつて、持ち來たされたものである、と見る事が出來る。

工業原料を生産する事少なく、原始的方法によるまゆ生産のみが、纖維工業と結びついてゐるのみで、他は論ずべくあまりに僅少な生産額しかなく、從つて、大工業との結びつきに薄弱な根據をしか有たない、我國農業生産は、全國人口を維持する、米生産にその主要なる基礎をおいてゐる。

だが前述の如く、賃銀引下げを企圖するブルジョアジーの政策によつて、容易にその引下げを行はしめる素地を作つてゐる。内地農業米生産の停頓、殖民地米の輸入（一例を朝鮮にとれば、彼の地に於て日本帝國主義は、その手先き、總督府、不二興業、東拓等による土地の掠奪、××と×とによつて脅やかし、言語に絶した兄弟の搾取による、廉米の移入）、買占め等による「米價調節」等々の如き、政友會民政黨を問はず、資本家地主の政府は、それ自らの利益のために、常に農民を困窮に陷し入れる政策をとつた。

更に、既に農村市場の開拓より、國際市場の競爭、殖民地よりの搾取の増大を目論む、金融ブルジョアジーの政策、或は、沒落の前

夜にある、資本主義末期の切り抜けの爲の戰爭準備、產業の合理化及失業群の增大は、都市プロレタリアートを饑餓につき落したと共に、また農村の貧窮をより增大ならしめた。

即ち地方中小工場の不況による農村勞働者の過剩、支配階級の、家族制度の美名のおだてにのせられて歸農勞働者の甚大なる群、これ等は、農產物の低落とは逆に、昨年來、小作料の漸騰を來さしめ、底知れぬ地獄をもたらした。

その上に、生產的消費の六〇パーセントを、市場から供給される農民は、資本家的搾取のあらゆる侵入に無力である。問題の煩雜を恐れて一例を、農家の重要なる生產手段である肥料について見れば、先頃或種の安價な窒素肥料の輸入の喰ひ止めをし、國內肥料業資本家より成る「不當廉賣防止委員會」なるものと、政府當局との野合によつて、肥料價格の引き下げを防止する事に成功した。

之等の事は何を意味するか？ 一言にして之を被へば、資本家、地主の利益の爲とあらば、農業生產費は、いくら高くても構はないし、農業生產物は、極力引き下げねばならない、廉いものを作つて、高いものを買へ、といふのである。

更に最も直接的に、農民を締木にかけるものは、封建的な土地搾取、米田に於て知らるゝ如く、未だ物々地代であり、その割合は、五分々々乃至四分六分である事は、人の知る所であるし、賦役の如きも未だ存在してゐる。これ等は、日本に於ける封建的諸要素の基礎に數へられるものである。かてて加へて、二重三重もの公課諸租稅の苛斂誅求は、實に農民にとつて重き負擔なのだ。たゞこれのみを考へて見ても、農民の困窮の直接的な原因がわかるではないか。

（八）支配階級の農村救濟の本質（一例）

しかのみならず、支配階級はこの奴隷的地位にある、農民の澎湃たる反抗は、プロレタリアートと共に起つて、××への巨歩を踏み出す事を恐れて、治維法、治警法その他の暴壓法を以て、盛り上る農民の當然の運動を彈壓し、在鄉軍人團、青年訓練所、處女會、小學校教員等を總動員し、意識的におくれた農民大衆に、反動思想を植えつける事を怠らない。

かゝる計畫をより說明づけたものは、農村救濟を名目として案出した「七千萬圓」の低利融通である。しかも之は、農民の要求する、高利の舊債の借りかへによつて、利息の負擔を輕減せしむるものではなく、資本家、地主の治安維持のためのものであつた事は、農相町田の明言した所だ。即ちこの融通案は、「都會の失業者の、歸農を促すが如き事件を引き起す恐れある事」を非として、全國町村長臨時大會實行委員會なるものが、農相を訪問した時に、彼の答へはかうであつた。

「今次の資金融通の目的は、現下の不安なる世相に鑑み、治安維持的見地に於て、全國的失業救濟をなさんとする爲である。而して自分は、本資金が、貸付不成績に終る時は、却つて政府としては、現在の不況は、さまで深刻なるものにあらずとして、喜ぶべき現象とすべく、一種のバロメーターと考へる云々」（東朝）

勿論、かゝる支配階級の所謂救濟策なるもので、農民の救はれた例は一つもない。米價調節も口實は、農村救濟だつたが、救はれた

のは地主の懐であり、糸價補償の實施だつて農民には一文の利益すらない。彼等は、農民から血と汗をしぼり上げた血税を諸刃の劍として、農民の胸に擬して來る。

働く農民の要求

農村の苦境切り拔け策は、全村の消燈、御飯節約のための朝寢の習慣、公吏、教員の俸給の減額等であつた。が、之等は、眞實に農村窮乏の對策であつたらうか。例へば教員俸給に關して、杉山元治郎氏に聞いて見やう。

「昭和四年度市町村豫算面に於ける教員俸給額の割合は、約一割四分ばかりを占めてゐる。故に之を輕減する事は、直ちに農村を更生さすかの如く見るのも無理はない。が有名な無産農村として知られてゐる、郡馬縣の强戸村に於て、比較調査の結果、何等農民の利益にならない事を知つた。即ち强戸村では、教師の最高俸給百二十圓より最低三十圓、之を平均すれば五十五圓餘である。これから二割を輕減する事は教師には大打擊だが、農民はどれだけ負擔を輕減されるかといふに、年收三萬圓ある村一等の某は、約四百圓ばかりの減税になり、村民の六七割は僅か一圓にも足りない。つまり同じ無産者の教師を苦しめ、大地主を助ける事になる。」(東朝から)

即ちかゝる要求は、農村に於ける階級的對立、地主の、小作農の利害關係の對立を考へずして、否寧ろ階級對立を塗りつぶさうとする、地主の代辯者共のペテンに引つかゝつてゐるが故に、おこるといふものだ。が、彼等の奸策にだまされない農民は、何が自分達を利益し、解放に導くものであるかを知つた。

「今年上半期に於ける小作爭議は、昨年同期に比較して、件數に於ては百六十件を増してゐるが、著しき現象は土地返還に關する爭議であつて、六百三十一件、前年度の殆ど倍加であり、總件數の五割四分を占めてゐる」(農林省調査)

今全國に渡つて血の雨をふらし、慘澹たる鬪爭を戰ひ拔いてゐる農民諸君の記錄を摘記して見る。

「山梨縣奧野田の農民十八名は、地主深澤某と小作爭議をつゞけてゐたが、舊全日の、社民的な鬪爭は、地主に對して强制力乏しく、六月限り、地主による强制的な土地返還が行はれた。怒りに血をたぎらせた十八名の農民は、七月二日、深澤某及三十餘名の反動小作が、ノメ〳〵とその土地を耕作するのを見て、鋤、鍬等で武裝し、耕地にとび込み、地主を叩き×し、他を一人殘らず叩き伏せた。その結果十八名は直ちに起訴され、小作人對地主側が、相方武裝して對峙したが、之に仰天した×犬は、縣下一市七郡二十五ヶ村に渡つて二百名の農民を檢擧し、拷××虐の限りをつくした。が、幹部を盡く奪はれた、山梨全農縣聯の大衆は、之に對して何等ひるむ事なく、ます〳〵鬪爭の結束を堅めてゐる。」(××××新聞)

以上は單に一例にすぎない。しかし私達は、富山の入善農作組合の、新潟縣北蒲原郡黑川村の、等々の血みどろの鬪爭、而して全農民の、組織的統一的の鬪爭の激化を見る事が出來る。

斯くの如く、×動にまで高まつた農民の××的鬪爭は、右から左への一切の社會民主々義者の、鬪爭を街頭的小市民的な鬪爭、小作

料の減免、立禁、立毛差押へ等の闘爭にのみ止め、組合自身の闘爭を政治的にまで發展させる事を、喰ひ止めやうとする、ダラ幹をケトバし、闘爭の歩武を、大膽に押し進めるに至つた。

(ホ) プロレタリアートと貧農のブロック

今や私達は、農民の敵は、地主、高利貸に止まらない事を知つた。日本帝國主義の資本家的搾取が、產業の合理化の名によつて、プロレタリアートに莫大な犧牲を負はせ、更に貧農を完全に奴隷化して、最もおくれた封建的搾取を永久化しやうとする、資本家・地主のカラクリを知つた。

働く農民の敵は卽ち、資本家・地主の政府を手先きとする支配階級の一切である。

從つて農民は、その表面強固に見えて、しかも內在するあらゆる矛盾、相互對立によつて危機を滿身に孕んでゐる、全××機構の牙城を、プロレタリアートとの強固なブロックによつて、全プロレタリアートの頭部、×××のヘゲモニーの下に、果敢な闘爭を行ふ事によつてのみ、自己の解放を、長き奴隷的搾取から、人間的生活を取り戻す事が出來る事を確信する。

××への道はゼネ・ストによつてのみ

警視廳は、七月末日迄に、管內に起つた爭議件數三百三十二件、調停にて成功(彼等のいふ)したもの七十六件であり、他は自滅か共倒れか、ルーズな結末であつた事を報告し、調停解決を喜ぶべき傾向だと奬勵してゐる。

プロレタリアートの怨嗟と反抗に恐れて、產業合理化の手段は、昨今ます〳〵老猾をきわめ來つゝある事を、私達は、種々の機會に於て見る事が出來る。

神戶市川崎造船所本社は「無制限人員制度處理規定(アイドルシステム)」を案出し、口實としては、特殊の技能ある熟練工の離散を防ぎ、勞働者の馘首を差控へると、誠に有り難き趣旨であり、事實は、解雇手當を要せずして半失業者につき落し、目の前に產業豫備軍をつきつけて勞働者の競爭心を煽り、より勞働の强化に役立てる制度である。試にその內容を見るならば、一、組又は本人に割當るべき工事なき場合、二、天候その他に於て作業を爲し難き場合、三、工事の都合上止むを得ずと認めた場合にアイドルシステムを適用し、その日給規定は、午前八時迄に退場には日給七割、正午退場には八割、午後二時迄退場には同九割を支給し、而してその適用期間の長い時には、日給の六割五分を支給するといふ。言ふまでもなくその適用の如何は、資本家の一存によるのみでなく、よしその期間は如何に長くても、六割五分の日給ですき腹を抱えてゐねばならない。殊に資本家の胡麻化しは、日給規定は勞働者の手取りにする賃銀の、工場によつては三分の一位であり、手當、その他日給を標準とする時は、時には規定の日給を標準として支給する。卽ち資本家のみは、いつでも間に合ふ熟練工と去勢される事を肯んじる勞働者の故に、のう〳〵と思ふまゝに搾取が出來ろといふものだ。

更に石川島造船所の某職工長の語る事を東京夕刊は傳へてゐる。

「勞働者側の目前の勝敗にのみ重點をおかざる誠に強力的なストラ

イキの爲に、資本家は世間に目立たない馘首方法をとり、失業勞働者を手も足も出ない樣にするやうになつた。當造船所に於ても、昨年より事業縮小のため、三千人位ゐた職工は二千三百人位に減少したが、更に本年正月頃より毎日數人宛解雇し、既にその數が千人を突破した。之の社會問題化しないのは、巧妙な手段だからで、例へば、白羽の矢をたてられた勞働者が、上役に呼ばれ、丁重な接待をうけて巧妙に辭職勸告をうける。これは體のよい解雇で、若し不服だと云へば改めて解雇を宣告され、解雇手當その他が少なくなる。且それも一時に數名を行ふのではなく、一人一人その手にかゝつて馘首される故に、中にはストライキで戰ふ强硬意見の抱持者はあつても、チリ〲に解雇されるから團結が困難で、泣き寢入りの他はない。」何といふ獰猛な狡猾さだ！　かくして資本家は、勞働者を死に衝き落す事によつてのみ、資本主義第三期の、安定の危樹を切り拔けやうとしてゐる。

　だが勞働者は決して支配階級の奴隷でもなければ、ロボットでもない。二十數年鐘紡隅田工場に搾取された一勞働者の、最後に與へられたものは馘首と飢ゑ、その不安と反抗を死によつて解決しやうとした悲慘な姿は、未組織勞働者の誰もの姿であるとは言へ、自覺せる勞働者には昨日の姿だ。最近捲き起るストライキの波は實にプロレタリアの本能を語るものであり、未來を約束づける曉鐘である。內務省社會局に於ける上半期の調査概數によれば、爭議總件數は七百三十件に及び、一日平均四件の割合でストライキを敢行してゐる割合であり、參加人員も七萬六千七百人となつてゐる。これを昨年の上半期に比較すれば件數に於て二百四十件、人員に於て一萬五千五百餘人の增加を見てゐる。

　されば彼等資本家は、彼等の殘虐なる搾取を擁護するために、政府をして、治維法その他の法網を自由に張りつめて、勞働農民の前衛、革命的斗士を、檢擧投獄、一切の爭議をぶつつぶさせ、飽までも勞働者の蹶起を阻止し彈壓せしむる。更に在來の武器の上に、彼等は、催淚彈の使用、ピストル佩用をなさしめ自由に××行動をなさしめたのみならず、大震災等の災害に備へるなど〻民衆を僞瞞し、民衆の總動員を强要しつつ、彼等の兄弟プロレタリアートを抗擊するための行動をさへしてゐる。

　かゝる支配階級の意識的計畫的なる、大衆の××化への挑戰に對して苟くも、勞働者の味方を看板にしてゐる勞働團體は、どんな鬪爭をしてゐるであらうか？「爭議調停の利用の傾向は喜ばしい」と彼等に喜びを與へてゐるのは、果して誰であらうか？

　總同盟系の海員組合は、組合員九萬六千人を擁する大組織である。しかし彼等は、その組合員だけでも四千六百人、未組織者を加へる時は一層おびたゞしい失業者の爲に、何等の事もなす事が出來ない。「海員組合は、勞資協調はおろか、日本海運のために（資本家のためにだ）あらゆる壓迫にも應じて來た。食費の低減、手當給料の削減にも應じた。今や我々は、最低賃銀の讓歩さへも辭せない」（東朝）など〻、只管に魚心あれば水心の意を示して、奴隷的取引を乞ふのみではないか。かの天下の耳目を衝動せしめたカニ工船「エトロフ丸」事件に對して、また海員組合は如何なる鬪爭をなし

たか？　政府の監視船は、資本家の殘虐を被ひかくす爲に、一日二十二三時間の勞働と牛馬に劣る食糧、幹部等の鬼畜の如き勞働者への暴行の事實を合理化し、十五名の死者、五十餘名の病人をさへも、單に勞働に堪へなかつた如く、簡單に取り扱つてゐるのに對して、また、死んだ、或は病めるエトロフ丸の兄弟に代つて、何等かの抗議を一度でも試みたといふのか。議會を唯一の鬪爭場面と心得る合法主義の代議士諸君は、まだ議會が開かれないので、鬪爭する事は出來ないとでも思つてるのだらうか?!

強制歸國に反對して起つた東京モスリンの兄姉の敗北は、組合同盟に屬する幹部が、全協指導の下にあつた、戰鬪的勞働者を×犬に引き渡し、盛り上り行く大衆の鬪志を強迫し、圓滿に資本家とお茶をのみ乍ら、解決せしめ樣としたにある。ブルジョア新聞の紳士協定によつて、一粒の米ほども報導されなかつたが、東京日々その他の新聞社では、大量馘首遂行の故に、大衆の憤起を怖れ、まづ戰鬪的分子を馘首したり××に引き渡したりした。この資本家の横暴に大衆は默つてゐやうか？　否、大衆は憤激した。その大衆に、東京出版や東京無産黨の紳士諸君は、街頭的な演說會や、新聞の不買同盟を泣きつく事を教へたにすぎなかつた。斷然ストライキだ！　機械を止めろ！　と日本出版の果敢なる活動がなかつたならば、多くの鬪士、勞働者は、尙馘首をあきらめねばならなかつたであらう。

かゝる取引・協定・泣き込み等のストライキ戰術のさ中にあつて、組合組織の彈壓に端を發して戰つた、京成電車のストライキは、眞に戰ふものゝ強さを指示したものであつた。惜しくも、この爭議も亦同志の×で旗を染めたまゝ慘敗を見た。しかしこの慘敗は、取引によつて得た所謂勝利に比すべくもなき、大きな教訓をかち得た事を見逃してよいであらうか。×犬暴力團の挑戰、資本家の威かく、一切に耳を藉さず、ひた押しに押した鬪爭、スキャップはまた勞働者の敵である事を示した。×テロの効果的な遂行、池上その他の交通勞働者に猛烈に活動した、ゼネ・ストへの宣傳、煽動、檢束者の大衆的奪還等々

このストライキの微細な點に渡るならば、幾多清算されねばならぬ事もあらうし、××的勞働組合のいまだ十分に、イニシャチーブを發揮し得なかつた恨みもあらう。が、その敗北にも、私達は、鬪ふものこそ、勞働者の勝利をかち得る事をはつきりと感得する事が出來る。勞農黨は、遠くゼネラル・モータースの爭議に見るまでもなく、この京成電車の爭議に於て、害虫的存在をバクロした。彼等は東京交通のダラ幹を指導に送り込まうとし、「若し全協・日本交通にも指導されるなら手を引く」とか「彈壓がひどいぞ」とか強迫したばかりか、爭議勃發に際しては、ストライキ中止の諒解運動をしたり、沿線町民への泣き込みのみを教へ、解決の時には、從業員の代表を一名も加へずにこれを資本家に賣り渡したといふのだ。

この內部に於ける彼等の資本家の走狗ぶりを知らずとも、諸君は、左の樣な疑問を持たないであらうか？　彼等にして若し革命的鬪爭をなし得たならば、何故この爭議を契機とし、市電の勞働者をして、應援ストを決行せしめなかつたのか。市電の戰鬪的勞働者諸君は、この前の爭議の慘敗ばかりでなく、緊縮行制度の撤廢、少年

車掌の停年馘首反對等々、數へ上げれば、それこそ數限りなき不平不滿の故に、いつでも起つだけの用意はある、と聞く。また若し眞に利益をかち取るために戰ふならば、京成の勞働者と相呼應して起ち、而してまた他線の勞働者をもケツ起せしめてこそ、即ちゼネラル・ストライキの決行によつてこそ、その勝利は約束づけられるではないか。口には革命的言辭を弄し、紛議の小出しで、その裏切りを胡麻化さうとしてゐるが、徹底的に支配階級に闘ふ決意なく、取引きで終らせやうとする彼等は、また市電勞働者の利益のためにも獅子身中の虫であつたし、全勞働者の憎むべき敵であつた。

眞劍に向つて人は冗談の行動は取り得ない如く、闘爭は、その人を、その組合を、その黨を判然たる行動をとらせる。勞資協調を看板とする右翼はいふまでもなく、階級闘爭を口にする左翼社會民主主義者も、頭底味方であり得ない事を、熾烈なる爭議はバクロする。階級闘爭は、一階級が、一階級を打ち倒さんとする決定的な×ひではないか。諸々の合法主義者が、支配階級の許す範圍に止まり、取り引や、泣き込みで、プロレタリアートの利益が獲得され、解放さるゝ如き毒瓦斯をふり撒いてゐるうちに、支配階級は着々とその陣營を堅めて行く今日を見よ。

資本家十國家權力十走狗暴力團十走狗社會ファシズム等々、一かたまりになつて來る時に、一工場、一職場の勞働者のみが、いかに死に身になつて戰ふとも、勝利を思ふはあまりに覺束ない。

愛知縣三信鐵道を請負つた五月女組は、昨秋より六百名以上の勞働者に、賃銀を支拂はなかつた。飢ゑに堪へかねた勞働者は、七月中旬、決然として賃銀即時支拂ひ、その他を要求してストライキに入つた。五月女組は、×犬、暴力團の協力の下に、滅茶苦茶な挑戰をした。が爭議團は中國自由、豐橋合同等の應援を得、強硬に對峙した。強力な爭議に臨む國家權力は、いつもの定石を踏んだ。××は徹底的な××を目論み、民衆の面前に於て、打つ蹴るの暴力を働いた揚句、三百の闘士に手錠をはめ、泣き叫ぶ家族を尻目に、引つたてゝ行つた。

三信鐵道の勞動者はまた、ゼネ・ストのみが勞働者の勝利を約束づけるものである事を、身を以て敎へた。

かねてよりこの正しき戰術を勞働大衆に指示したのは、實に革命的政黨であり、組合であつた。さうして、今も現下の狀勢から、ますゝゝゼネ・ストへの闘爭を強力的に集注的に闘つてゐる事に、プロレタリアートは勝利の曙を見る事が出來る。

ゼネ・ストへ！　これこそは、支配階級に對して、決定的な闘爭を行ひ得るのであり、プロレタリアートの解放の、輝しき××への道である。(三〇・九・四)

附記　紙數のかさばるのを恐れて、農村問題について充分意をつくさなかつた事を、特に農村の讀者諸君にお詫びします。今月は勞農黨の解消問題、無辜の罪に向はれた人に對する國家の賠償についても、一言述べたかつたのですが、割愛しました。山梨の一女敎員氏よりの御忠告は、大變參考になりました。私は讀者諸君からの鞭達を希望してをります。ずつと前、デパートに勤めてゐられるといふ方から、お手紙頂きましたが、紛失したので御返事も出せず失禮してゐます。この機會にお詫びしておきます。



未開社會に於ける性と抑壓（六）

B・マリノウスキー
小林すみ子譯

四　醜行と神話

これから、母系家族の典型的情操に關する傳說について論議する事ゝはなつた。そして之を以て、我々は精神分析學と人類學の領野中最も良く硏究された區域に踏込むのである。嚴な昔語りや面白可笑しい言傳へ等は　夫等が流行つてゐた當時の人々の慾望に相當するといふ事は、一二の理由からしてずつと以前より認められて來た。就中フロイド派は、童話や口碑に抑壓された願望を發表する事の滿足感と、傳說とが關係有る事、及び諺や代表的な洒落や俚言紋切型の罵詈等も亦同樣である、といふ事を力說して居る。

先づ最後の罵詈から始め樣。こうした罵詈が無意識に用ひられるからといつて、それが罵つた人や罵られた人の抑壓された切望を滿足さす爲である、といふ意味に解してはならない。例へば「糞喰へ」といふ言葉は、東洋人種や多くの未開人間に廣く通用し、ラテン人種間でも稍變形して用ひられてゐる辭句であるが、之は罵られた人と罵つた人どちらの願望をも、直接には滿足せしめない。只間接に、斯く呼びかけられた人を貶しむかつかせる爲のものである。あらゆる形式の罵詈や惡口には、強い感情的可能性で滿ちた或る主題を含んでゐる。そのあるものは、嫌惡と恥辱の感情を戲談に濁してしまへる樣な輕いものであるが、あるものは、所與の社會に於て厭はしいとされてある如き或る種の行爲に注意を向けしめ、斯くして聽手の感情を傷けるのである。之には瀆神の辭句が屬するが、ヨーロッパ文明に於て之は完全と複雜化の汚點に達し、朗かなスペイン語が通じる場所なら何處にでも芽生える〃me cago en Dios!〃といふ辭句は、無數に變形して廣く用ひられてゐる。又、社會的地位や、卑められ若しくは墮落した職業、犯罪性其他に關する種々な罵詈もそれに屬してゐるが、どれも皆社會學的に大いに興味あるものである。何故ならばヨーロッパ文明の墮落した最下層に於て、如何なる

事が考へられてゐるかを示すものであるから。

近親不倫的タイプの罵詈——此處で人は禁制の親族、普通×親と關係しろとやられる——は、ヨーロッパではスラヴ族特にロシア人の特性であり、"Yob twayn mat"（母親と關係せよ）といふ言の結合辭句は無數に有る。我々はこういふタイプの罵詈に最も興味を感ずる。といふのは、題材が題材であるのと、これはトロブリアンドでも重要な役割を演じてゐるからである。土人達は三種の不倫的辭句を有してゐる。即ち「クヲイ イナム」——「母親と同棲せよ」「クヲイ ルムタ」——「妹と同棲せよ」「クヲイ ウムクワヴァ」——「妻と同棲せよ。」此の三つの言葉は奇妙な取合せである。何故なら、最も合法的タイプの性關係と最も不義な性關係とが相並んで共に、怒らせたり傷ける目的に用ひられてゐるからである。又烈しさの等級に至つては更に特異である。母子不倫の辭句が、愚弄や又は戲談に用ひられる只の輕い言葉であるに引換へ、兄妹不倫の罵詈は最も由々しき無禮であつて、怒り心頭に發した場合にのみ使用される。だが最もひどい侮辱は妻と關係せよといふ命令である。此の辭句が本氣に使用されたのは、私の知る限では精々二回であつた。その一回は、以前述べた兄殺し事件の原因中に含まれてゐたのであつた。此の辭句は最惡なもので、私がその存在を知つたのは、トロブリアンド島に滯留してから餘程後の事である。土人達はそれを低聲でしか言はなかつたし、又此の不都合な罵詈に付いて何か戲談口を叩かうなどとは誰しも思つてゐないのであつた。

此の等級には如何なる心理が働いてゐるのだらうか。それ等の言葉が、行爲の不埒さや不愉快さにはつきりした關係を有してゐるものでないといふ事は明瞭である。母子不倫は絶對的且つ完全に問題外であるのに、尚それは最も輕い意味の罵詈に用ひられてゐる。又行爲の罪惡性が罵詈の種々なる強度の存在理由とはなり得まい。何故ならば最も罪の無い事實合法的な關係が、罵る場合は一番相手を傷くるものとなるからである。眞の原因は、行爲の妥當性及び現實性にある。それから又、現實が地べたに引下され、赤裸々な姿が明るみに持出される事の羞恥感や怒、禮儀の防壁に對して感ずる社會的墮落感等にもある。といふ譯は、夫婦間の性的親密さは非常に嚴格な禮儀に依つて掩蔽されて居り、兄妹間の禮儀程嚴しくはないが矢張り性行爲を聯想さす如き態度を除く事を目的とするものである。性的な戲談やみだらな事は、二人の配偶者間では口にすべき事ではなく、又夫婦の私的な性生活を下品な言葉で物語る事は、敏感なトロブリアンド人に取つて致命的な無禮である。此の心理は、罵詈の主なる一つが、現實と、慾望や行爲の妥當性及びそのコンヴェンショナルな抑壓との間に介在する事を、暴露するものである故甚だ興味深い。

×子不倫と兄妹不倫に對する罵詈の關係も、同じ心理學で明白にされる。その強弱の度合は主として、非難に相應する現實的可能性に從つて定められる。×子不倫の觀念は土人に取つて、兄妹不倫と同樣、恐らくはより以上に汚らはしいものである。而し乍ら既に見た如く、あらゆる親族關係や性生活の發達が、母親への不倫的誘惑を殆ど無くしてしまふ一方、妹に對するタブーは、暴力的に強ひ

られ且つ最格に維持されるので、此の鞏固なタブーを實際に犯さうとする傾向の方が遙かに、現實性が多いのである。夫故、後者の罵詈は相手の心をひどく傷けるのである。

トロブリアンド人間には、諺に付いて何も傳はつてゐない。さういふものは存在しないのである。代表的俚言其他の名辭に關しては、此處にルグタ（私の妹）なる語の重要な用法を述べる事にし樣。此の語は、魔術中矛盾とか相互反撥とかいふ意味に用ひられるのである。

此處で、我々は神話と口碑、即ち事物や教訓や風習の説明を重大なる目的として、民間に傳へられてゐる物語の研究に至つた。此の非常に廣汎で豐富な材料を、明確に而も迅速に調査するべく、物語を三つの範疇に分類し樣。（一）人間の起原及び一般社會制度特にトーテム的分類や（譯註）社會的位階の起原に關する神話。（二）文化の變遷や進步の神話。英雄的行爲や、風習、文化的特色、社會制度の設立等に關する物語をも含む。（三）魔術の一定樣式に關聯せる神話。

（譯註）トーテムとは個人又は種族に深き因緣ありとしてその人又はその家族の紋等を用ひ、大いに崇拜せる天然物、主として動物、種々のトーテムに從つて分つた事をトテーム的分類といふ。

最初の類、即ち人間の起原及び社會制度、特に酋長職やトーテム的分類法、種々なる氏族や亞氏族等の起原に關する神話中に於て、我々は直ちに文化の母系的性質に直面する。あらゆる地方がそれぞれ固有の口碑やら、變形したものやらを持つてゐるので、之等の神話は無數に存在し、一種の聯環を形成してゐる。皆、人類は地面の穴より出現したと述べて居る點に於て一致して居る。すべての亞氏族は各自出現地點を持つてゐて、この重大事件——出現——は折々亞氏族の特權又は無力を決定した。神話中最も興味ある事は、最初に現はれて來る始祖達が常に女性であつて、兄やトーテム動物を伴ふ事は往々あるが、決して夫は共に現はれないといふ事である。神話の或る物には、女性の始祖の繁殖方法が精しく記載されてゐる。彼女が雨中不謹愼にも身體を露出したので子孫が出來る樣になつたとか、洞窟に寢てゐて、鐘乳石の滴が身體に突入した爲とか、水泳中魚に嚙まれた爲だとか種々ある。こんな工合に彼女は「開拓」され、精靈の形をとつて子供が胎内に入り姙娠する。（註）斯樣に、神話は父親の創造力の代りに母なる始祖の自由なる生殖力を顯はす。

（註）フロイド學者は、之等の神話の基を成す象徵心理に興味を抱く事だらう。土人が男性××の授精能力に付いて全然無知である事は、大いに注意すべきである。併乍ら、彼等も處女は姙娠せぬ事、女が母になるには、彼等の表明に從へば「開拓」されねばならぬといふ事は知つて居る。村の日常生活では此の「開拓」が幼少時にそれ相應な器管に依つて遂行されてゐるのである。女性の始祖の神經から、夫や性的にふさはしき男性等は除かれて居り、魚とか鐘乳石とか言ふ樣な自然物が對象に選ばれてゐる

又何等父の出現れる樣な役割も存しない。事實記載された事もな

ければ、神話界の何處にも存在しないのである。之等の地方的神話は、大部分非常に粗雜な形狀で傳はつて來、あるものに至つては單一の事件しか含んでゐず、又權利や特權も只一つしか認めてゐない。それ等の內、粗笨な神話の本質的要素なる葛藤とか劇的事件を含むものは、お定まりの樣に母系家族とその中に惹起される事件を描寫したものである。ある二人の兄弟間に仲違ひが生じ、各自妹を伴ひ絕交してしまふ話や、二人の姉妹が意思の齟齬より分離して別々の部落に加入する等の話がある。

此の部類に入れてもよいと思はれる神話で、不老不死の喪失、もつと正確に言ふならば人類が永遠の青春を失つた理由を說明するものがある。祖母と孫娘のいさかひが斯くの如き不幸を齎らすといふのである。子孫が女性に依つて算せられる母系――女性の演ずる重要な役割なる母權――兄弟の軋轢の眞只中にある、血族の婦長的形狀――一言にして云へば、こうした母系家族の標本は此の範疇に屬する神話の構造中、明かに見られるのである。夫又は父親が、何等かの役を演じてゐる如き、起原の神話は唯の一つもない。役を演ずる所か登場さへしないのである。神話劇の母系的性質が、家族內の母系的抑壓と緊密に結合してゐるといふ事は、論を俟たずして、精神分析家を納得せしめるに違ひない。

さて、神話の第二番目の類卽ち、英雄的行爲や大冒險が齎らす所の、文化上の進步に關するものに取かゝらう。此の類の神話は比較的粗笨では無く、長い聯環を成し多くの劇的事件を明瞭に展開して行く。此の範疇の內、最も重要な一聯の神話はツダヴァの物語である。鍾乳の滴がある處女の胎內へはいつた爲生れ出た、此の主人公の行爲は數多の神話に依り讃えられてゐる。それ等は地方々々に依つて多少變化してはゐるが、大體農業の紹介、多くの風習や道德の設立――彼自らの道德性は非常に薄弱なものではあつたが――等の功績を彼に歸するものである。併し乍ら、すべての地方に普く知られてゐる、あらゆる物語の根柢を成す所の主なる行爲は、鬼退治であつて次の如くである。

トロブリアンド群島の人々は幸福な月日を送つてゐたが突然島の東方にドコニカンといふ恐ろしい食人鬼が現はれて、次々に部落を喰盡して行つた。當時島の西北隅のラバイ村には、一人の妹とその兄弟達が一家を成して住んで居つたが、ドコニカンが段々近くへやつて來るので避難する事に決めた。けれども妹は丁度其の時足を負傷して居て動けなかつたので置き去りにされて了つた。兄弟達は彼女と小さい息子をラバイの濱の洞窟に殘し、獨木船で南西の方向へ逃げて了つた。男兒は母親の傍で生長して行つた。母は先づ第一に、頑丈な槍を造るに相應しい木材の撰擇方を敎へ、次に人間の分別力を盜み去るクヲイガパニ魔術を敎へた。軈て此の主人公は船出をし、ドコニカンをクヲイガパニ魔術で誑し首を刎ねた。その後で彼と母親は里芋のプディングを拵へ、中に鬼の首を入れて燒上げた。ツダヴァは此の氣味の惡い御馳走を携へ、母親の兄を搜しに出かけた。そして發見した時そのプディングを差出した。ドコニカンの首を發見して仰天した伯父は、恐怖と後悔の念に囚はれ、彼や彼の母親を置去りにした償ひとして種々な贈物を甥に提供したが、

英雄は皆拒絶し、伯父の娘と結婚した後で漸く怒りを解いた。其の後再び起つて多くの文化的行爲を成したが、それは此處ではもう興味の無い事である

此の神話中には、劇を動かして居る二つの葛藤がある。その一は鬼の食人慾、第二は母方の伯父に依る母子の放棄である。此の第二は典型的な母系劇であり、トロブリアンド母系家族を解剖した際發見した如き、部族道德と風習で抑壓されてゐる自然の傾向に、相當する事は明　である　何故ならば、母親の兄は妹やその家族の保護者に任命されて居るが、彼にとつてはどちらも重い義務であり又被後見者達はそれを有難くも愉快にも思つてゐないのが普通である。斯くして、神話中最大の英雄劇の序幕が、伯父の義務怠慢といふ重罪と結び付いてゐるといふ特殊な事になつたのである。

併し乍ら、此の第二の母權葛藤は第一の葛藤から全然獨立してはゐない。ドコニカンが殺害された折、彼の首は木製の皿に載せて母方の伯父へ提供されたが、若し怪物を見せて驚愕させるだけならば何も首を里芋のプディングの中に隱す必要は無かつたであらう。のみならずドコニカンは人類一般の敵であつた故、彼の首は伯父を滿悦させたに違ひない。此の事件の全構造及びその根柢を成す感情の意味は、食人鬼と伯父との間に或種の聯想又は默契といつたものを假定する場合にのみ、解する事が出來る。その場合、食人者の首を他人に食べさせるといふ事は、まさしく正當な刑罰である。であるから、實際の物語は一人の惡人と、二つの舞臺に跨り、且つ二人の人間に對して二重課せられた所の葛藤とを含んでゐるのである。斯くの如くツダヴァの口碑は典型的な母系劇――口碑の眞髓を成し且つ論理的結末を持來す所の――を含んでゐる事が了解つた。故に、私は明白な之等の特色を指摘した事で滿足し樣。そして此の神話を之以上調査するには、或る歷史的神話學的假說を要するから細部には入るまい。併しドコニカンといふ人物は、母系の家長と聯結する事で全く說明が付いた譯ではなく、或は父長文化から母系家長文化へ讓渡された人物――その場合彼は父か夫を代表する筈だ――であるかも知れない、といふ事を提言したい。まことにさうであるならば現在の口碑け、舊文化の鑄型が夫自身の社會學的脈絡中に適應せしめるべく、人間や制度を如何に造型し變形するかを示してゐるので非常に興味深いものとならう。

此の神話中、只此處に掲げるに止めておく今一つの事件は、終りに於ける主人公と母方の從妹との結婚である。之は現在土人の親族制度では、實際の近親不倫ではないと云へ明らかに不穩當と考へられてゐる事である。

今一つの口碑の聯環に移るならば、實生活上屢々惹起される如き田園敷地の事で爭ふ二人の兄弟の話がある。そして、そのいさかひの中に兄は弟を殺害するのであるが、神話には此の兇行に對する後悔らしいものは何等記述されてゐない。其の代り、劇の漸墜（アンチクライマックス）なる要所の場面が事こまかに記載されてゐる

兄は地面に穴を掘り、石や葉や薪を持來り、たつた今豚を殺したか又は大魚を釣揚げたかの如き平然たる態度で、此の土窯で弟を燒始めるのであつた。それから燒肉を村から村へと呼賣して步い

た。時々、彼の嗅覺が、必要と認める時には燒直し乍ら。彼の賣物を拒絶した部落は非食人種の儘であるが、購求した部落は夫以來食人種になつた。斯様に、人肉食の由來は、此處では兄弟殺しの兇行に、及び犯罪の結果手に入れた食物に對する嗜好嫌惡に迄、溯り調べられる。言ふだけ野暮だが、之は非食人的部族だけの神話である。人肉食と否との差異は、まことの食人種なるドヴウ土人と、ダントレカストオ群島の人肉を嗜む地方との物語り——その中では確かに人肉食は不快なものとして汚辱されてゐない——に依つて説明が付けられる。此の物語は又、二人の兄弟と二人の姉妹間に起きたある不和に依存する。之等の神話中主として興味ある事は、兄弟間の爭ひに見られる母系的刻印である。

火の起原に關する神話は二人の姉妹の不和を描寫してゐる。此の中には亦、日月の起原に就いての簡單な記述がある。此の神話中、火は女性の性器官の中で創造されたと記載してある事を附加し様。

神話の精神分析學的解釋や、一般事物の關する心理學的及び人類學的著書に親しまれた讀者は、私の記事がひどく簡單であるとはいへ偏見のない事を發見されるであらう。此處に述べた事は皆神話の表面に明らかに書かれてある事であつて、私は只、複雜化され象徴化された物の解釋を試み様としたに過ぎないのである。併乍ら、私は之も故意に差控えた。何故ならば、母權社會に於ける神話は特別に母系的性質を帶びた葛籐を含むであらう。といふ即ち此處に展開された説が慥な論證のみに支持されるなら、貢獻なし得たと言へるし尚又、私が正當であり、我々の社會學的見地がまこと一歩〳〵に我々を、神話の正確な解釋に近附けて具れるものなら、何も廻りくどい象徴的解釋に夫程賴る必要等無く、信じて事實それ自體に物語らせ得る。我々が、人工的象徴的再處理に依つて、母權錯綜の直接なる結果と解した數多の局面は又、父權的外貌に相當させ得るであらう。母の兄と甥——天性保護者であり常に味方すべき筈であるのに實際は屢々お互に食人鬼視してゐる兩者間の葛籐や、部族の律では一體とされてゐる兄弟間の爭鬪や殘忍な食肉等、之等は皆父權家族内の類似の葛籐に略相當する。そして母權的神話を父權的なそれより區別するものは、俳優や役割の相違だけであり、異るものは悲劇の社會學的見地である。我々は神話の精神分析學的説明の根據を毫も搖るがしたのではなく、只此の解釋に於ける社會學を改正したに過ぎない。けれども此の改正が極度に重大であり、根本の心理學上の問題に向つてすらゐるといふ事は、充分明瞭になつたと信ずる。

發禁と日清印刷

女人藝術九月號の論文が法に觸れ發行禁止となつた。右についての責任はみな私にある。いづれにも濟まないこととひたすら恐縮してゐる。

元來私は書いて食べてゐた人間なので、よき作品をとこそ一心に精進してきたけれど、編輯のことについては一向心にとめてゐなかつた。その素人が、ジャーナルな型をきらつて、なんら豫備智識をもたず、しかも指導者もなく、この複雑な編輯といふことに從事したので、專門的な人にはなんでもない事であらう些末な事にまで無益な神經を一方ならず費した。一行一字いやしくもせぬ氣持ちではあつたが、時に惑ひもある。それはどの程度のものが法に觸れないのか——である。それをよく知らなかつた爲の失敗である。私は乏しい自分の生きてきただけの世界から、物事は無理を通さうとすると勞して功すくなしといふことを學ばされてゐる。ことに聢く讀んでもらひたい雜誌を、僅かの不注意のために發禁になつたりするのはいけない。私一人の不注意が、おかみへもよけいなお手數をかけ、書肆にも面倒をかける。無論損害もすくなくはないが、自分のことは言つてゐられない。

九月號は八月の炎暑のさなかに編輯された。暑い、暑い——これはみないふ言葉で全くもつて暑い。が、よけいな心づかひではあらうが、私は編輯同人のみんなの暑さを培加して感じる。どうにかして早くきりあげさせたい、早く休ませたい——その折ふと、これはと思ひ、再思三考しながら、他に代へるものがない時、考へてゐるうちに機械はドンドン廻り印刷は終つてしまう鞠躬如として猶この難がある。私は思つた。記事差止命令がくるやうに、このていどのものは記載すべからずと內達してもらへれば、どんなに具合がよいだらうかと——

發禁について誌友から慰めはげましてくださつた。私こそみなさんにすまなく、一々お詫びを出したかつた。微力な、我々につねにはげましの詞を下さるみなさんは、どんなに九月號を待つてゐてくだされたのか知れない、それが、中一月間、女人藝術はみなさんに姿を見せないのである。一部の雜誌をつくりあげるには、どんなに人の精神力が盛られるか——それを思ふと、私の不注意はます〱申譯ない。私は作者である故に、紙に刷られ、世に問ふまでの文筆家諸氏の痛苦を知りすぎるほど知つてゐることに、新らしく出やうとする人々のものが、折角印刷されながら死んでゆくのである、彼女の希望は、何糞ッと叫びながらもさびしいであらう。ことにまた、字を數へ幾度か校正をして、それを完全にするため地味な仕事をつゞけてきた編輯人たちは、その努力の結果を失つたばかりでなく、責任をわけて心を傷ましてゐる。印刷工場の工人達は、もつと下積みな仕事を分擔して私達の依頼を完全にしてくれてゐる。この人達もまた張合なく思つたであらう。人情としてよく賣れることを祈つてくれるであらう大賣捌店の搬入の人達、小賣店の小店員にも、むだな骨折をかけたわけである。

たゞここに一つ、この際よきをりとして女人藝術に筆をとる人々にお願ひしたいのは、修辭といふことである。言葉のあやは微妙である。あまりに現實暴露に急いで、

繫爭問題

言葉のラフなために、たいした內容をももたぬものが罰されるのはいまだしい。人も我も、女人藝術は勉强努力する餘地がまだあんまり大きくありすぎる。

日淸印刷との繫爭について

この事についても諸氏から御心配をいただいてゐる故、お禮をかねてあらましを御報告しておく。私は正しからざることを厭ふ。明々白々であるゆゑに、あまり正直すぎる「淸き水には魚が住まないよ」といつも三上氏から注意されてゐる。けれど、癖のやうに曲つたことがきらひだ。だから人を信じることも厚い。

日淸印刷株式會社は大會社であるから頭から信じた。今でも惡くは思つてゐない、ことの疏通といふ事は、人と人ならば魂と魂だ。お雇ひの人達には、あの大會社を左右する專務さんでないかぎり、自分自身ではからへないから、人間味がなくなつて、正直ものの私にカンシャクを起させるのだと思つてゐる。

さて、そこで、自分の方の非からあげれば、第一に營業に迂愚な私が、一部あたりの算當で、概略を述べる缺點にあつたらうと思ふ。これは、私達文人社會では、アノといへばウンさうだ、と答へてくれる。手ごたへの早い仲間に生てゐた缺點だ。ことに私はまた、心意氣でゆく江戸風の工人との應待にのみなれてゐた。だから、それでたのめばそれでいいと安心し、信賴しきつてしまう。まして對手は厖大な資金の大會社で、私はほんの數千部の雜誌を造つてもらう、貧乏人なのは知れきつてゐる。約束の×何錢かで一部が出來あがるものとしてゐると、××錢になり貳拾錢を越へ、る。（それは頁數にいく分の變化はあるが、安くはならない）

それだけなら困る〳〵で押してゆくのだが、表紙の色や裏紙など段々貧弱になつてくる（これは掛員も認めて頭をかいてゐた）平凡社の加藤專務は十×錢位なら上等に出來る。部數がもすこしあれば十×錢にも見つもれると鑑定してくださつたりした。その開きは大きい。困る〳〵といひながらさほど困つてゐないのが商人の掛引きださうだが、私のはほんとに困るのだから、もすこし安くする處はないかなあと思ひだした。そこに又、篠田ちか子さんが病中表紙を書いてくれて、お母さんが乾かないのをもつて來てくださつたりしたのを、工場で見失つてしまつて（今だに何ともいはない）妙に感情がもつれだした。で、親切にするといつてくれる秀英舍に代へた。

それまで品代金は現金、又は、小切手で拂つてゐる。止めた月のとあとは少々の殘金があるだけだが、お金がないから內金拂ひにした。二回ばかりして額が多いと伸びるから月賦百圓といふことにかけあつた。戸板といふ會計の人が出て來て、そのたびに自分ではきめられないからと歸る。私も忙しい、電話をくれても居ないをりも多い。幾度も來てもしようがないからハッキりきめた返事をもつてきてくれれば直ぐ渡すといふてもハカがゆかない。そして今度はそれでいいから定めた月の分から何百圓まとめて拂へといふ。何百圓まとめて拂へる位ならば、てんで最初から百圓月賦とはいはない。私は面倒くさくなつて、全々首を突つこんでゐなかつた親戚の、そろばん

勘定を知つてゐる者に一任した。その人は時價として高すぎて儲けすぎてゐるのだから、話をしてあげると受合つてくれた。

　もうその時は世間がグッと不況になつてゐた。本も賣れない。三年の損もかさむと大金だから月賦も百圓といふ高はだせなくなつた。その人が戸板氏がきた時さういつたら、御返事しますといつておいて、其人を押退けて辯護士から私へ訴へるといつて來た。それでも私の方はその代理人が辯護士のところへまで出むいた。またそれには返事をくれず押退して訴訟にした。

　裁判所からは六月廿日迄に委細書を出せと丁寧な添書きのある達し狀が來た。私は多忙の中を綿密に反證を調べて書いて、理由と受取書や其他もつけて辯護士に期日迄に間違ひなく出してくれと、女人藝術社へその辯護士さんに來てもらつて賴んだ。で判事さんの手許にはその反證が屆いてゐる事とばかり安心してゐた。ところが、最めの呼出しの日に、私の方の者が傍聽にいつて見たら、どうした事か私の方の辯護士はよく讀んでもゐなければ、その書面を裁判所へ廻しておいてもくれなかつたのださうだ。プアーな依賴人のためにはなんと冷淡なことなのだらう。大會社の方のは、堂々と人が揃つてゐたさうだ。卵をつぶすのにも大きな金槌をもつてくる用心深さなのだらうが――

　しかし、やがて、第二回の呼出しがくるでせう、其時には私の方の辯護士も力を入れてくれるでせう。その時傍聽してきたものもあきれて、控へがとつてあるから、その時は自分も證人に出るといつてくれてゐる。

　結局は、細々でも拂ひませうといふのを細々ではいけないといふのです。細々しか出せないものが細々でも出さうといふのに不正はない筈です。先方が、つぶしてしまはうといふ腹があるのなら別ですが――

　で、ここでも敎へられた事は、不知ざる事が多い、學ばねばならぬといふ事です。民事裁判が非常に便利に、期日中に書面を差出せば、親切な扱ひをしてくれるといふことを知らなかつたのです。そのため、却つて辯護士に賴んで、直接に判事さんの手許に反證を差出し得られる期日を失なつたのです。それらも覺えておかなければならない社會常識だと思つた。

　右、いはいでもよいことも、いはねばならぬのを悲しみます。(委しい數字は、さまではとわざとはぶきました)

空氣をたべておいでですかと笑はれてゐた夢想家が、現實へぶつかつて、夢想袋が時々パンクし目をパチクリします。それでまあ徐々に淸算されてゆくのですね。

金より心、なんていつた時代は、いつたい、何處へスットンでいつてしまつたのでせう、私はまあ、何百年前に生れたのだらうと考へる――

こんな呑氣な人間が棲息するには生きにくいといつたら、夢想袋なんぞしよつてるからだ、早くカラにしてしまつて、飛行機にでも乘つて世情カンサツをしなさいと言はれた。

實話三篇

死兒を賣る

保瀨香代子

夏に入つてからの架橋工事はたまらなかつた。去年の秋から起工したのだが、深いのと急流の爲に思つたよりずつと難工事で、今年の秋には竣工する豫定であつたのが、夏になつても三分ノ一しか出來なかつた。

清江は大きく目に立つ樣になつた腹をかゝへて、砂ふるいに出て居た、炎天下の十二時間勞働で得る一日の賃銀は七十錢だつた、でも實際に受取る金はそれより少なかつた、晝の十一時頃になると、勞働で固めた彼女の身體も、鹽をかけられた菜ッ葉の樣になつてしまつた。

ぐづ〳〵しやがると、十時までだぞ。

現場監督のしやがれた、ドナリ聲を聞くと、彼女はのろまな牛の樣に働き初めた、もう一時間すると十五分の休憩だ、それを思ふと幾分かの元氣を出す事が出來た、清江はにぶい體動を感じながら重い砂をふるつた。

壁の落ちた六間長屋の奧で、四五人の勞働者はヒソヒソと話し合つた。

俺には理窟は分らねえ、わからねえが、俺はじつと奴等のする事を見て居られねえのだ、だから、俺達は皆にこの事を話して、力を作らねえと、奴等の爲にたゝき伏せられるぜ

奴等は理窟でやり込めるぜ、

腕力でやれ、腕力で

讀者通信

京都 太田 照代

殘暑きびしうござゐますが皆樣お變りござゐませんか。

東京を去つて、四年靜かな都に來てから女人藝術のみ樂しみに毎日を送つて居ります、因習的な土地の氣持が少しも合はなくて困つたのも、いつの間にやら同化されて行く自分を淋しく眺めて居ります。幾度かお便りをさせて頂かふと思ひながら失禮してゐました。

今月女子醫專のことが出てゐまして自分も故荒太先生の香奠五圓に人しれず心をいためたものですから何かしら書きたくなつて筆をとりました。反抗兒はどこへ行つても反抗兒です、すなほにうけ入れられない自分を悲しく思ひます人の命をあづかるのだと云ふ美名のもとに、二十四時間勞働を强られますので支部會にも出られずにいます行きたくても行かれない私達のために、講演會の速記でもお送り下さいましたらどんなにか、うれしうございますでせうみどりさま、優子さま、皆樣にお逢ひしたらと存じます。秋になりましたら社長樣を引き出して皆樣でお遊

大勢集まれや、奴等に負ける事はねえ、
それや考へものだぞ、奴等の後には××がついて居るから、
そんな奴蹴飛しちまへ、
口で言ふ樣には出來ねえ、色々の工場で起るストライキにも、××した××がついて居る、その上金で買はれた暴力團もな、
ストライキの時は爭議員が武器を持たないからだ、俺達にや……
急ぐ事はねえ、
ぐづ／＼して居られるか、今日も二人足の骨を折つたぞ、二三日前も張が死んだ、十日程前にや、なまけたと言つて、沼田と、樋口と李が賃銀も拂はずに、たゝき出されたじやねえか、おとなしくして居ると思や、間違ひだぞ、な、林、俺達の內で一番皆の信用を受けて居るお前が、そんな引込思案でどうするのだ、やらう、
俺はやりたい、今すぐでも、やりたいが皆にそれだけの團結力があるかどうかが疑はしい。
實さいにあたつて見りや、決してそんなものぢやないぞ、俺が硝子工場に居た時も、幹部の者にそんな考へ方をしてる奴が居たが、皆よく結束した、破れたのは指導者がいけないのだ、ダラ幹の指導がいけねえのだ、
俺達にや指導者がねえ、
指導者はいらない、私達は自分の力でやつて見せる、議論より實行だ、私達は實行の外にもう何も殘つては居ないはずだ、林には昔の氣持が殘つて居る、勞働者と言ふものは決して林の思つて居る樣なものじやない、
皆はシンとした、淸江は一氣に言つてしまうと、大きく肩で呼吸した。
インテリな氣分のまだ充分ぬけきらぬ林は、淸江が言つた言葉が胸をついた、彼は此の氣持をいつも淸算しようと思ひながら、いや淸算した心意でありながら、いざとなると昔のまゝの氣持で居る事がはつきり分る、無敎育な彼女の爲にはげまされながら、林はハツキリ決心した。
やるぞ、
皆は輕くさけぶと一段と聲を落して計畫を立てた。
能率は上らなかつた、暗さと、難工事の爲に毎日／＼負傷者を出した、會社では賃銀の

びにいらつして下さいまし。

埼玉縣　堀　百合子

皆樣お元氣でいらつしやいますか、女人藝術お送り下さいましてほんとに有難う御座居ました。
女人藝術併加運動、大いに贊成です。うんと腕に撚りをかけてがんばりませう。私の室には十人のタイピストが居ります。ひまを探す樣にしては、他人の着物の惡評たべもの、等々に花が咲く、實に罪がなく、情ないと云ふより腹が立つ、何とか階級意識のラッパでも吹いて彼の女等の耳元でなぐりつける樣に注入してやりたいと思ふ位小癪に障ります。何時になつたら芽が出るのやら、ヘタバリそうな自分をむち打つてくれるのも女人藝術です。ほんとにたのもしい女人藝術。一切を克服して皆樣の御健鬪を益々お奮ひ下さいます樣お祈り致します。

岡山　和瀬　露子

御誌の御發展を我が事の樣に喜んで居ります。岡山は振はない！それは殘念です。けれど一生懸命に働いて見ます。近く岡山市の御誌愛讀者會を開く積りで居ります。併し今頃は秋の大演習を控えて居るので役所が大變に神經を尖らせてゐるので時の來るのを待つ

二割引と同時に、夜十時までの殘業を發表した、殘業には少しの割増金がついた。

工夫達は不平を語り合つては、どうする事も出來ぬ、自分達の力をなげいた。こゝだ林と井田は工夫の動搖に眼を付けた。

十五分間の休憩に、彼等は辨當を食つて居る工夫達に、次々とアヂつて行つた。

翌日の晝の休憩明けの笛を鳴らしても仕事をする者はなかつた。

林と井田は皆から爪印まで取つた要求書を持つて、事務室へ行つた、十四五人の工夫達はぞろ〱ついて事務室の破れた硝守戸からのぞき込んだ。

監督さん、とても俺達にや、十時まで働けません、それに賃銀を二割も引かれたら、飯は食へません……

井田は固くなりながらやつとこれだけ言つて、要求書を監督の前に出した。

馬鹿、貴樣等は外の處より賃銀は高いのだ二割引いても高い位だぞ、十時まで働きや、また金が手に入るじやねえか、だまつて働け、言ふ事聞かねえと、たゝき出すぞ、監督さん、お前さんはそんなに言ふが……

默れ、

椅子が飛んだ、硝子が破れた、テーブルが横になつた、井田と林は、からうじて戸をおし開けて外に出た、外には大勢の野次馬で眞黒だつた。

喧嘩だ、

喧嘩だ、

聲は大きくなつた、二人の後から來た工夫達は外から石を投げた、波瀾は大きくなつた制服が四五人飛んで來た。

現場でも動搖して居た、事務所へ行こうとあせる大勢の工夫を夏や清江が必死になつて止めて居た、井田と林は別々に現場に來て、皆をアヂつた、皆は無中になつて口々にしやべり出した。

氣が付いた時は遲かつた、大勢の制服によつてドシ〱檢束された。

林も、井田も、清江も、その外首謀者らしい者や、暴行者らしい者は皆檢束された。

翌日のブル新聞には大きく記事にされた、後には主義者が居ると。

工事々務所の向ひに臨時に交番所が出來

てゐます。大いにやる積りですから今後の岡山を期待して下さい。

大阪府　岸　のぶゑ

殘暑のきびしい折から御社のみなさまお達者にすごしていらつしやいますかしら。常々お世話になりながら何一つお返へしする事も出來ない私です。月々の雜誌がほんとうにたのしみです。田舍に居つて不便ですけれど、いろ〱催しには行きたい、きゝたいのは山々ですがどうもゆきかねてたゞもうよむばかりが私の樂みです。

去年の今ごろは大阪でも市内の方に出て居りました所から大阪支部に入れていたゞきましたが失業の憂目をみたその後今日までずつと田舍の方にかへつてきましたので一層出るのが數少なくなりこのごろではこちらの處女會の方に幹事として努力いたすのが役目となりました。

府立の女學校を出た昨年の希望にくらべて今年のこのみじめさは文に趣味をねつた學校生活の延長をつゞけたい氣持もそがれてたゞさびしく日送りをいたして居ります、雄々しく社會に出て働いてゐられる友達をみる時この不甲斐ない自分の身がくやしくてなりません。母の病のために尊い自分の仕

た。
現場には腕つぷしの强そうな工夫監督が増員され五人の制服が、ガチヤ〳〵と劍で威嚇した、彼等の要求は完全に一蹴された上に、壓迫は増々加へられる。
清江は姙娠の爲に出されたが、長屋の入口には監視の眼が光つた、食料品のなくなつた彼の女は買に行く事も出來なかつた、監視の眼がうるさいのみでなく、賃銀を與へられなかつた彼女にはもう一錢も殘つては居なかつた。
二日目に裏から肥田がしのび込んで少しの米と、味噌を入れて行つた、肥田の話で工事現場の殘酷さが眼に見える樣な氣がした。
林と井田はなか〳〵出られなかつた、清江は肥田に面會に行つてもらつたが會してくれない、警察での暴行はお話にならなかつた。
實際と空想は相反する事はなくとも、大きな相違がある、過去の感情を淸算する事の出來なかつた林は、勞働運動はプロ文學にある樣に、容易に大衆を組織し指導する事が可能であると考へて居たのだ、だが今度の事件で其の根本問題は覆へされた、あの時の大衆の動きは雷同したと言つてもよい、假に組織されたのでは無く、一時的の昂奮に過ぎない、其の事は事件後の彼等の行動に依つてもわかるように、林・井田の指導者を奪はれた彼等は指導者を求める事はせず、資本家の搾取に身をゆだねたのだ、ルンペン、プロレタリアートの組織の困難な事がつく〴〵わかると同時に、林はプチブル、インテリゲンチヤをも淸算する事が出來た。
暴虐と搾取に苦しみながらも、架橋工事は日一日と進行して行つた、十月も過ぎて十一月になると、さむさは加はつて來た。
清江は自分の腹の異常な大きさが不安になつたので、架橋工事中犧牲になつた、張の妹が産婆なので、相談の上大學病院の學用患者として、診察を受けた、强制的な入院も今の彼女には幸福であつた、入院料も治療費も出す事なくして、食費の心配もいらない。
勞働者の血と汗の結晶である大きなコンクリートの建築物も半地下室の病室になると、濕氣の多い、光線のにぶく、黴臭い、破れた硝子窓からは遠慮なく寒風が吹き込む、貧になれた彼女も、今日も掃除しなかつたであら

事を投げだしてしまつたのです、それから社會は生活苦失業苦ですもの出たら後はなか〳〵入られません。食べるには缺かぬ百姓の子です。でも近ごろの百姓もあへいで居ます少しばかりの田地主がどうなりませう。身につけていたゞいた學問も尊い汗を流された結果だと思ふ時幼い妹や弟をこれから養つてゆかねばとうてい父一人だつたらと思ひます。しつかりやりませう。この世の中にまだ〳〵苦しむ人もあるんですもの、先日も大阪の大丸にショップガールとして出ている友から始めておたよりをいたゞきました。職業について居るが、どうもさびしい氣がするつて言ふんです、で、もつとたしかな職業婦人といふ考へのもとに强く正しく進んで下さい。そして御誌をおよみ遊ばせとこの八月號をお送りいたして居きました、處女會のお友達もみな〳〵働きざかりの農夫の娘さんばかりです。それ〳〵の意見發表會に私の下手なお話をお誌から拔き出してお話させていたゞいて居ります。
私には讀書のおもしろみと、その實行より外、いろ〳〵な講演もきかせていたゞく事もなく平凡にすごして居ります。一寸でものば

うと思はれる病室前の便所の臭氣には少なからず苦しめられた。

六ッ並んだ鐵のベッドには、むくんだ青い顔をした女達が寢て居て一せいに新入の清江を見た、しめきつた部屋には、オムツのすつぱい臭と、スチームの異常な溫かさにむつとした、彼の女は入り口のベッドにくずれる樣に橫になつて、ハー〱肩で呼吸した。

張さん、林でも井田さんでもいゝから住所がわかつたら、私が入院した事しらせて下さいね。

清江は張の歸つて行く後姿に、こう呼びかけた。此頃は林も井田も釋放されて居たが行方不明だつた。

翌日の夜中に、劇しい陣痛の爲に目が醒めた。うなり聲によつて居眠りして居た看護婦が來て、手術室の隣の分娩室にうつされた、陣痛は加はつて來るが仲々生れそうになかつた、榮養不良の爲衰弱しきつて居る彼の女は、段々と弱つて來た。

注射、と云つた醫者の言葉と、チクリと針でさゝれた痛さを覺えたのみで、其の後は一切わからなかつた。

氣が付いた時は元の室に寢かされて居た、看護婦が一人心配そうに顏をのぞきながら、脈を見て居た。

清江は重い首を無理に動かして見まわした、

赤ン坊らしい姿はない。

看護婦さん、赤らやんはどこに居ますの、隣の室にねかしてありますの、心配しないで靜かに寢て居るんですよ。

そう云つて出て行つた、死んで居たのだ、きつと死產にちがひない、淸江はそう思ふと冷たい涙が耳へ流れ込んだ。

苦しみながら、十ケ月間養つた赤ん坊も、榮養不良で死んだのだ、私達の爲にはその方がいゝかもわからない、だが私は貧しくともやはり母としてはぐくんで行きたかつたのに、未來のガッチリした戰士に、未來の鬪士にしたかつた、彼の女は泣きながらそんな事を考へた、午後彼の女の氣分の落付いた頃醫者は一人で入つて來て、淸江が產んだ子供の珍らしい畸形兒であつた事、分娩中に死亡した事などを話した後に、

失禮だが、實に珍らしいので、科長も買つ

したい創作短歌も思ふ樣にゆかずに居ります。此の農村に居る限りはこの大願は死ぬまで駄目だらうと思ひます、何とぞつたない私をおみちびき下さいませ。

大阪　村田　千代

御壯うございますね、らんとお健やかでいて下さいまし、先生のお作「一生」がこれからも少し工場に働く女たちにむく樣、展開されんことを希望します。

この間レート白粉の工場爭議がありましたが若い娘さんたちの元氣のよい求知識慾のひたすら勞働問題にむいてゐること等に驚かされるくらゐでござゐます。

先生の一生なんかゞやがて單行本にでもなる事が出來れば確かに彼女達はケイモウされるでせう、らんと力をいれて下さいませ。

一昨日八月號に投書した逢阪喜代さん一派三十名檢束されました今朝の新聞でみれば、工場を占領し赤旗を煙突の上に揚げたり十五町の町筋をデモつたりしたのですとにかく、大阪には次第な滸行的な仕事が滸々となされてゆきつゝあります。

秋田　菅原　晴子

女人藝術每月うれしく拜見してゐます。

て標本にしたいと云つて居る、それであんたさへよければ五拾圓で買ひたいのだが……

しばらく考へさして下さい、

清江は直ぐ返事する事が出來なかつた、たとへ世にも珍らしい畸形兒であつても一度でもだいて見たいと思つたが、五拾圓あれば、二ケ月の生活費はどうにかある樣な氣もした、

貰らうか、どうしようかと彼の女は迷つた。

夜見舞に來た張は林の手紙を渡してくれた。

そうして今晩組合の會合があるからと直ぐ歸つてしまつた。

清江さん、あなたの入院を今日知りました、今僕はK紡織の分工場の爭議應援の爲にS市に來て居ます、今日家によつて歸りに張君に會つたから、此の手紙を賴みました、書きたい事は澤山あるが、今書けません、からだを大事にして下さい、用事があつたら左記へ、

と書いてS市の爭議本部の所が書いてあつた、讀みをはるとこなごなに破つてしまつた、破ると同時にはつきり決心する事が出來た、子供を貰らう、今の私達の全財產だ。

蔭をゆくもの

若杉香子

靜岡は傳統の街であつた。

此處には昔からの、師匠と弟子と職人と、そして第三階層インテリとが、無風帶の樣な歷史を綴つて來て居た。併し、犯罪らしい犯罪一つなく、一度の爭議すら起つた事がなく、實に其の名の示す通り靜かな此の街にも、歲と共に深刻化する不況は遂に颱風となつて其の猛威を振ひ始めたのであつた。

かくて、靜岡マッチ工場も必然的なる沒落の過程を辿つて今春遂にその門を閉した。と

一度あの半白半紅の扉を開けば幾多の熱情的內容の洪水は、疲勞した農村の若き私達の血汐に强い感動を與へて呉れます。時代の潮流に間隔を持つてゐる傳統と慣習の硝子張の中に生活してゐる、私達の沈滯した感情を覺醒させて呉れます唯一の友、女人藝術!!、女人藝術は私達のものです、農村女性のものです、と私は叫びたいのですが、——狹少に限定されたものではないのです、吾々女性のものですね。

後れ馳ながら、別紙女人聯盟加入申込票を御送附致します。何卒加入させ下さい。そして農村女性の私を指導して下さい。別に規定もありませんから申込票だけ送るのです、これでいいのでせうかいけませんでしたら一寸御手數でせうが御通知して下さい。

大阪 小山 翠

さかまく怒濤の中へ思ひきつて飛び込む事の出來なかつた自分を恥づかしく思ひます。

岸の傍觀者でした……飛びこまねばならぬと知りながらも!

どうしてもプチブル根性が淸算出來なかつた、あせればあせる程——何が私をさうさせてゐたか、「教育者」といふ置位が——

言ふ。併し、工場主は職場を閉鎖することに依つて、決してプロレタリア層に落ちたのではない。唯、彼が今迄貪り來つた利潤を少し許り遠慮したに過ぎないのである。

悲慘なのは職に離れた職工達と、マッチ張りと云ふ唯一つの內職を失つた貧しい主婦達であつた。確りと握つてゐた筈の生活の絆を突然斷たれた無數の人間達が、聲も立て得ず忽ち生活苦の波に押し流されて行つた。

山田一家も、その激浪の中に與へられた悲運を甘受してゐる人々であつた。主人の平吉が近所の××製材を、これも緊縮整理による馘首の犧牲になつてから半歲以來、唯一つの職業であつたマッチ張りの內職をも又復失はねばならなかつたのである。何等の資本も要らぬマッチ張り——僅かのショーフを煮て糊を作り、石油箱を伏せて机代りにすれば直ちに仕事にかゝれるマッチ張りは、貧しい彼等には實に好適の仕事であつた。と同時に、市場に賣出されるマッチの廉價から推して見ても、彼等の手に渡る勞銀の如何に些少であるかゞ想像出來よう。千箱張つて漸く二十錢、時には十八錢位に値下げされる時もある。

米を五合買ふ爲めには千箱——と言つても、箱と中味とでは實に二千箇張り上げねばならない。

併し、山田一家にとつては此の內職こそ、必死となつても取すがらねばならぬ救命具にも等しいものだつた。

それをすら今は失つて了つた。彼等の前に横はるのは、唯薄氣味の惡い餓死の路より外なかつた。

夫婦と子供が四人、多產な妻のトヨは、五人目の兒が明日にも產れさうな體を、自棄に近い氣持で無暗に引たてゝは、內氣な夫を元氣付けねばならなかつた。彼女は極度の疲勞と粗食との爲めに、毎日夕方になるといくら焦つても眼が利かなくなつて了つた。トリ目だつた。鰻の生膽が良いさうだと聞いても、トヨにはどうしようもなかつた。

たつた一間つきりの薄暗い家の中に彼等は今は手を束ねて、永久に取上げられて了つた職業への追慕と、まるつきり當てのない生活の路への恐怖にぢつとすくんで了つた。

蒼ぐろく萎びた體をゴロ〳〵さして、子供

‥女人藝術」にも洗つても〳〵こびりついてゐるインテリゲンチヤのあかを見出します。それらすべてを清算して我々はプロレタリヤの爲に資本主義社會と鬪つて行きたいと思ひます。何分とも皆樣の御指導の程を御願ひ致します。

徳島　水原ふみ子

今朝八月號女人藝術を手に入れる事が出來ました。なつかしい表紙力強い唯一の師であり友である女藝よ、女人聯盟加入申込票に署名しつつ自然ほゝ笑ましくなつて來ました、一種の誇さへ感じつつあります、冷笑と侮蔑無理解なる世人の嘲罵と戰つて幾度か白衣の袖をしぼつた事で御座居ませう、過去の私達は餘りにも弱く、しひたげられて來ました、熊本の木村時江樣おなつかしく存じます、四國の一隅にも貴女と同じ樣に惱んでゐる私で御座居ます、沈默を守つて云々‥‥それはいけません、私達は強くならなければなりません、私達の過去に於ての生活を省みる時貴女は沈默を守つて過されますか、我が女人藝術は働く者の爲、貧しき者の爲に力強く、導いて下さるぢやありませんか、最後まで私達は最後の日に働く者の上に勝利あるを確信してあくまでも

達迄が一日中家を離れ得なかつた。トヨはそれを見ると、餘計儚なさと腹立たしさとに疲れ果てるのだつた。

元々有りもしない品物は、無論質にも入れた。賣りもした。近所の人にもすがつた。そして、之だけはどうしても置かねば困るから、と殘しておいたぼろ〳〵(それはトヨがお産に使ふための)迄も、疾う〳〵屑屋に渡して了つた日の夕方空家に等しい家の中でトヨは産氣付いたのであつた。

近所の産婆が同情して駈付けたけれど、手の下し樣もなかつた。お産と言へば「ガーゼと脱脂綿と、新しい一ッ身……」さう思つたら間違ひだ。

トヨの家には脱脂綿など夢の樣なこと、襁褓一枚、滿足に有りはしないのだ。併し捨てゝは置けない。

産婆は自分の前掛けをはずし、主人のたつた一枚きりの浴衣を使つて、兎も角も赤ン坊の始末をしたのであつた。

『脱脂綿を買つておいて下さいね、あした赤ちやんにお湯を浴びせに來るから』

吉野(産婆)が翌日見舞つた時、トヨの枕許にはさゝやかな脱脂綿の、値にしたら十錢かそこらの薄い袋がポツンと一つ置かれてあつた。吉野の眼にはその袋の白さが妙に佗びしく哀れに見えた。それ許りではない。昨日お産に使つた主の浴衣は、洗濯をして未だまだ着なければならないのだと言ふ。さもあらう、たつた一枚の浴衣であつて見れば……

併し、その次に吉野が見舞つた時にも、トヨの枕許の脱脂綿は少しも減つては居なかつた。彼女はハツとした。

『一番危險な産後の始末に、私の居ない時は何を使つてゐるのか判らない……』

自分への體裁、と云ふよりも義理に近い氣持で、この人達は極度の苦しさの中から求めて來たのか、使へばすぐに失くなつて了ふ、なくなつてゝ後は買へない、なればこそ使ひもしないで備へてある――。吉野は暗憺として涙を呑んだ。

腹が減つても喰へぬ、それも悲慘であらう、併し、尚その中に居て、文字通り無一物でお産をせねばならなかつたトヨの場合を思つて見るがいゝ、お産の經驗のない人には判るまい。否なまじの經驗ではとても察し得ぬ

正しくそして强く戰はねばなりません。

勝利! なんと云ふ力强い言葉でせう。

今治市　藤地　稍子

當地では朝夕はもう秋の氣で一つぱいです。女人藝術の皆樣方も益々御活動の事と思ひます。

御多忙中を早速聯盟ニユース御送り下さいまして飛び立つ樣な思ひです。倍加運動大贊成でございます。私も早速一人讀者に又直ちに聯盟員に加入させて頂く樣に致しました一人が一人をでも實行して進んで女人藝術を築き上げ樣と思ふとはち切れそうに勇氣が増します。

茨城縣　中谷　涼子

私も改めて女人聯盟に加入させて頂きます。皆樣どうぞよろしくお導き下さいませ。私は山の麓の一小村にて田に畑に土まみれとなつて働く田舍娘です。春の收穫秋の收穫を唯一の樂しみとして眞黒になつて働く百姓娘です。

地主に云はせれば骨惜しみの横着ものの小作人なのです。働いても〳〵一年のかてさへ取り得ぬみじめないたげられた百姓なのです。

この私にも遠い御地より送らる

苦惱だ。

彼女はこれから五人の子供をどうして育てゝ行くだらう。彼女は未だ〳〵生むかも知れぬ。何故なれば、産兒制限、等と言ふ言葉は彼女の知る由もないものだから、例へ知つたとて、そして何等かの方法を行はんとした處で、彼女にその費用があらうとは思へない。失業と多産、慘苦の極みに喘ぐ彼女の一家に、明るい陽光の訪れる日は遂に來ないものだらうか。

靜岡は長閑な街だ。

喰へないのは未だ〳〵働きが足らぬからだ、と老人達はしたり顔に、若者を叱り付ける。

『働きたくつても仕事がねえや』

これは確かに若者の實感には違ひない、併し彼等とても、明日喰べるべき一粒の米は無くとも、地主の娘が美しい單衣を着る事には何等の不思議さをも感じては居らないらしい。

そして、トヨの樣な一家は實に運の惡い家だと云ふ結論を與へて澄ましてゐる人間が、未だ〳〵此の街には充滿してゐるのである。

手を握り締めて

首藤嘉子

×月×日

十五日間待ちに待つた休日だ。一日中寢て暮す。何といふいゝ氣持ちだ。便所に行かうと起き上ると、體中の節々が疼くやうに痺れて頭が呆然と雲の中に浮いてゐるやうには覺えるけれども。

今は晩の八時二十五分、もう十時間もして又明日の七時になると、あの天井のおつ蓋さるやうに低い、暗い四疊半での勞働が始まるのかと思ふと、このまゝいつまでも〳〵寢て

る女人藝術によつて力强い何ものかをもられて行くのです。

おお我等の女人藝術よ、御誌の發展は即ち私達の發展なのです。

北海道　大野滋子

皆様御奮闘の事と存じます先日はニュースを有難うござゐました。小林すみ子様と支部設立の努力を微力ながら致して聯盟員加入勸誘の結果二名獲得致しました。初陣の功妙として一人づゝ御知らせ致すことにしました。加入させて下さいませ。

讀者と云ふ廣い範圍の下に集つた私たち、會合の中には小ブル的インテリ層の女性の讀者が多く統一は困難なのでござゐます。

そう云ふ支部設立、聯盟員統一の過渡に立つ土地への相談として小肥事をおのせ下さるならば幸甚でござゐます。先日カメ屋に於て女藝所載の反動希望社について批判致しました。非常に批判もおだやかな處でした。當地は聯盟員と新加入聯盟員と合すれば支部設立規定の五人以上はあるのです讀者としては方々の書店をきいて見ると十五人位はある様です、月極の方の住所をきいても妙にケイカイして知らしてくださいません。

目下支部設立準備會として小さ

ゐたい。寢床に溶けるやうに體中がぐつたりしてゐるのだ。

私はミシン縫ひの通ひを始めて九ヶ月になるが、一年も經てば胸を病むことうけ合ひ、七人ゐた同僚のうち、一人倒れ、二人倒れ、三人倒れて、古顔は四人だけ、又明日から二三人新しく入つてくると云ふ。

朝の七時から晩の十一時半迄のミシン踏みだ。辨當は二食持ちで、それを食ふ二、三十の他は體を安めるなんて考へるだけでも野暮だ。私は人に訴へたい。この一日の賃銀が六十錢ですよ。六十錢だよ。

あゝ、私かこゝを一日でも休めば、六十錢差引かれて、祖母と二人の食と住とがぐらつくのだ。

朝から晩迄、美しい令孃や貴夫人の細い首に纏りつくであらう、肩掛けの白や黑の羽毛を縫ひ合はせながら、私は憎いあの男の事を考へてゐるのだ。

男は大阪の心齋橋筋の或る大きな呉服屋の番頭であつた。家の近所の米屋の小母さんがその男の叔母に當るので、私との緣談が持ち上り、一度、二度逢ふうちに、私はどんなにその男に魅き寄せられて行つたことか。

彼は活動寫眞に連れて行つてくれたり、ある時なんか素的にハイカラな浴衣をもつてきて呉れた事があつた。

交際し出してから三ヶ月も經つてからであつた。私は遂に拒み切れなくなつて彼に最後のものを與へてしまつたのだ。

それといふのも、祖母といふ重荷を背負つてゐる私の家になんか、養子に來てくれる男なんか今迄に一度だつてなかつたのだ。來る緣談も來る緣談も「祖母」の重荷で見事に破れてしまふのだ。

今度のこの又とない緣談が破れたら——私は又何年も〳〵あのじめ〳〵した陰氣な部屋で朝から晩迄ミシンに噛りついてゐなければならないのだ。

その考へが遂に婚約の前に私を弱くしてしまつた。

が、何といふ事だらう。それから後、毎日のやうに手紙を出す私に、一本だつて返事が來なくなつたのだ。そう、葉書一枚も。

そして、この三月の中頃になつて、急に、『暖簾を分けて貰つて一軒の店を營む豫定だ

な店を開くやうになりました。

私は近く北海道の北見の方へしばらくまゐりますので。あちらの方へまゐりましたら是非吉川燕様とやらに御目にかかりたいと存じてゐます。

兵庫縣　沖津　京子

××倶樂部、××世界、××の友等々本屋の店頭を埋め盡してゐる美しい令孃むきな表紙のプチブル的反動婦人雜誌の洪水の中に、女人藝術のいつもながら、氣持のいゝ元氣な顔をみうけました。早速手にとるが早いか家に歸るまで我慢出來ず、路々ひろげてはウツカリ電信柱につきあたりさうになりながら夢中でむさぼり讀みました。

毎月論文を有益に拜見してゐます。希望社の反動事業網バクロ、實に痛快です。どん〳〵反動事業のバクロをのせて下さい。希望社のみならず全國に擴る反動網をどん〳〵バクロする事によつて、眠り込ませられてゐる多くの大衆を目覺めさせなければなりません。

ソヴエート畫報も興味深く拜見してゐます。よき論文と、よき畫報をお載せ下さいます樣、希望致します。僞瞞的、プチブル的婦人雜誌を撤底的に排擊し、私達の女

つたのが、この不景氣にお店もやりくりが苦しくなつてゐるから、暖簾を分けて貰ふなんてことは到底不可能な事だ。これでは妻を貰つても食はす事が出來ないから」

破約にしてくれと、仲人の米屋さんの話だ。

泣き寢入り――。私は地團太踏んで口惜しがつた。畜生っ！人の貞操を嬲りもんにしやがつて――。

折角の希望を打碎かれた祖母は毎日しよんぼりと首をがつくり落として坐りこんだなり、ものをいつても答へる勇氣もないらしい。

私は又ミシン通ひだ。

一日中ミシンを踏むのもいゝ加減疲れるのに、そこがそれ、女同志の小さい根情。互に一寸でも負けまいと、睨み合ひながら、時には自分のものを隱しては、まだこれだけしかしてゐないんだぞ、お前達も悠然とやつたらどうかといふ風に目で知らしたり、競走心でいがみ合つてゐることはお話にならない。

一月に一日と十五日の二度の休みは私達の最も待ち望む所。

もう十日、九日、八日と算へてゆく時の心の苛立ち、さうして二日の公休は寢て暮すのだ。だから新聞も讀まない、活字といふもの一切手にとつた事のない私は一切世間の事を知らないのだ。

元より無學文盲の祖母には日本に戰爭があつたつて內閣が變つたつて、そこの所は、自分の孫に蚊が止まつたよりも感じられないのだ。

朝と夜中の半時間宛の行き歸りで、私は娑婆の些とした風景を見る。例へば、電車が滿員だとか、女給の長い袂だとか、泥醉者が道端に大の字になつてゐるとか、朝の自動車の運轉手が私に目混ぜしたとか――。

絕えず襲つてくる不安――來月から暫くの間ミシン屋は休むのだと。この不景氣で縫ふものもなくなつたのだ。

一體私達は何處へ行くのだ。何處迄落ちてゆけばいゝ？

學問も美衣も何もない私にとつて、世の中はあまりにも慘酷に責め上げる。

誰か敎へて下さい。私達は一體どうなる？

死ぬのはいやだ。生きるには――生きるにはどうすればいゝのか？

人藝術を多くの婦人大衆に與へる事によつて、より多くの目覺めたる女性を作り、一そう果敢なる鬪爭に參加する事を望むものです。

皆樣の御健鬪を祈ります。

福岡　福田美智

雜誌をお送り下さいまして有り難う御座いました、暑いのに每日私達のために御奮勵下さつてゐる事と思ひます。

昨日故里へ歸りました。久し振りの山や川は變りません。村人の死んで行つた、人を追憶してそゞろな哀調です。

都會の雜音の樣な秋蟲のコーラスが秋だ！と言ふかんじを深くします。

深刻な不景氣で村はしづんだ、みすぼらしい生活をしてをります此の不景氣が何所から來たのか：：それすらも知らない、又解からふともしない程の善良な村人青年等は、其の深刻さをなげくばかりです。而し一部分の地主達は、又違つた世界に生きてゐると言つても間違はないでせう。私はこんな奴等に憎惡を感じます。

あくまで戰はねばならないと、固く決心のほぞをかためてゐますお金を送ります。どうも長くなつてすみませんでした。

地下鐵會話



「おい兄弟！
もしもこのアメリカつて國ん中に、
正義つてものが
蚊の涙程もあると云ふのなら
世界中が正義だらけにならうぜ」

ニュー・マッセスより



女アパッシュ

——放浪記——

林芙美子

二月×日

あゝ何もかも犬に食はれてしまえ！

寢轉ろんで鏡を見てゐると、歪んだ顏が少女のやうに見えて、體中が妙に熱つぽくなつて來る。

こんなに髮をくしやくしやにして、ガランスのかつた古い花模樣の蒲團の中から乘り出してゐると、私の胸が夏の海のやうに泡立つて來る。汗つぽい顏を、疊にぺつたり押しつけてみたり、むき出しの足を鏡に寫して見たり、私は打ちつけるやうな激しい情熱を感じると、蒲團を蹴つて窓を開けた。

——思ひまはせばみな切な、貧しきもの、世に疎きもの、哀れなるもの、ひもじきもの、乏しく、寒く、物足らぬ、果敢なく、味氣なく、よりどころなく、賴みなきもの、捉へがたくあらはしがたく、口にしがたく、忘れ易く、常なく、かよはなるもの、詮ずれば佛ならねど此世は寂し。

チョコレート色のアトリエの煙を見てゐると、白秋のこんな詩をふつと口づさみたくなつてくる、眞に賴みがひなき人の世かな。

三階の窓から見降ろしてゐると、モデル女の裸がカーテンの隙間から見える。靑ペンキのはげた校舍裏の土俵の日溜りでは、ルパシカの紐の長い畫學生達が、之は又野方圖もなく長閑なすまふの遊びる。さあその土俵の上に此三階の女は飛び降りて行きますよツて吐上から口笛をプイプイ吹いてやると、カツパ頭が皆三階を見上げ鳴つたら、皆喜こんで拍手してくれるだらう——。

川端畫塾橫の石屋のアパートに越して來てもう十日あまり、寒空に毎日チョコレート色のストオヴの煙を眺めて、私は二十通あまりも履歷書を書いた。

原籍を鹿兒島縣、東櫻島、古里、溫泉場だなんて書くと、あんまり遠いので誰も信用してくれないんです、だから東京に原籍を書きなほすと、非常に肩が輕るくて、說明も入らない。

「オーイ」

障子にバラバラ砂ッ風が當ると、下の土俵場から、書學生達はキヤラメルをつぶてのやうに投げてくれる。そのキヤラメルの美味かつたこと……。

隣りの女學生かへつて來る。

「うまくやつてるわ！」

私のドアを亂暴に蹴つて、道具をそこへほうり出すと、私の肩に手をかけて、

「ちよいと畫描きさん、もつとほおつてよ。も一人ふえたんだから……。」

「………。」

下から、遊びに行つてもいゝか？ つて云ふサインを書學生達が投げると、此十七の女學生は指を二本出してみせた。

「その指何の事よ。」

「これ！ 何でもないわ、いらつしやいつて言ふ意味にも取つていゝし、駄目駄目つて事だつていゝわ……。」

此女學生は不良パパと二人きりで此アパートに間借りしてゐて、パパが歸へつて來ないと私の蒲團にもぐり込みに來る可愛らしい少女だつた。

「私の父さん？ さくらあらいこの社長よ。」

だから私は石鹸よりも、このあらいこをもらふ事が多い。

「ね、つまらないわね。私月謝がはらえないので、學校止してしまいたいのよ。」

火鉢がないので、七輪に折り屑を燃やして炭をおこす。

「階下の七號に越して來た女ね、時計屋さんの妾だつて、お上さんがとてもチヤホヤしてゐて憎らしいたら……。」

彼女の呼名はいくつもあるので判らないんだが、自分ではベニがねと云つてゐた。ベニのパパはハワイに長い事行つていたとかで、ビール箱でこしらえた大きいベッドにベニと寢てゐた。

何をやつてゐるのか見當もつかないのだが、櫻あらいこの空袋が澤山持ちこまれる事がある。

「私んとこのパパあんなにいつもニコニコ笑つてるけど、とても淋しいのよ、あんたお嫁さんになつてくんない。」

「馬鹿ね！ ベニさんは、私はあんなお爺さん大嫌ひよ。」

「だつてうちのパパ一人でおくのはもつたいないつて、若い女が一人でゴロゴロしてゐる事は、とてもそんだつてさア。」

三階建の此ガクガクのアパートが、火事にでもならないかしら。

寢轉ろんで新聞を見る。

きまつて目の行くところは、藝者と求妻と、貸金と女中の欄だ。

「お姉さん！ こんど常盤座へ行かない、三館共通で、朝から見ら

れるわ、私歌劇女優になりたくて仕様がないのよ。」

ベニは壁に手の甲をぶつゝけながら、リゴレットを鼻の先きで唄つてゐた。

夜

松田さん遊びに來る。

私は此人に拾圓あまりも借りがあつて、それを拂へないのがとても苦しい。あのミシン屋の二階を引き拂つて、こんな貧乏アパートに越して來たのも一つは松田さんの親切から逃げたい爲だつた。

「貴女にバナヽを食べさせやうと思つて持つて來たのです。食べませんか。」

此人の言ふ事は、一ッ一ッ何か思はせぶりな言ひかたになる。

本當はいゝ人なんだがけちでしつこくて、小さい事が一番嫌ひだつた。

「私は自分が小さいから、結婚するんだつたら、大きい人と結婚するわ。」

いつもから言つてあるのに、此人は毎日のやうに遊びに來る。

さよなら！　そう云つて歸へつて行くと、非常にすまない氣持ちで、こんど會つたら優しい言葉をかけてあげやうと思つても、かうして會ふと、シヤツの目立つて白いのなんかとてもしやくだつた。

「いつまでもお金かへせないで、本當にすまなく思つてゐます。」

松田さんは酒にでも醉つてゐるのか、わざとらしくつゝぷしてゴブゴブ涙の息をしてゐた。

さくらあらいこの所へ行くの厭だけど、自分の好かない場違いの人の涙を見てゐる事が辛らくなつたので、そつとドアのそばへ行くあゝ拾圓と云ふ金が、こんなにも重苦しい涙を見なければならないのかしら、その拾圓がみんな、ミシン屋の叔母さんのふところへ、はいつて私には素通しして行つただけの拾圓だつた。

セルロイド工場の事。

自殺したお千代さんの事。

ミシン屋の二疊でむかえた貧しい正月の事。

あゝみんなすぎてしまつたのに、小さな男の涙姿を見てゐると、同じやうな夢を見てゐる錯覺がおこる。

「今日は、どんなにしても話したい氣持ちで來たんです。」

松田さんのふところには、剃刀のやうなものがキラキラ見えた。

「誰が惡るいんです！　變なまねは止めて下さい。」

こんなところで、こんな好きでもない男に殺ろされる事はたまらないと思つた。私は私を捨てゝ行つた島の男の事が、急に思ひ出されると、こんなアパートの片隅で、私一人辛い思ひをしてゐる事が切なかつた。

「何もしません、これは自分に言ひきかせるものなのです。死んでもいゝつもりで話しに來たのです。」

あゝ私はいつも、松田さんの優さしい言葉には參つてしまう。

「どうにもならないんぢやありませんか、別れても、いつ歸へつてくるかも知れないひとがあるんです。それに私はとても變質者だから駄目ですの、お金も借りつぱなしでとても苦しく思つてゐますが、四五日すれば何とかしますから……。」

松田さんは立ちあがると、狂人のやうにあはたゞしく梯子を降りて行つてしまつた。

夜更け。

島の男の古い手紙を出して讀む。

皆、之が噓だつたのかしら、アパートの頭のもげそうな風が吹く

栓ずれば佛ならねどみな寂しか……。

三月×日

栞の花の金色が、硝子窓から、廣い田舍の野原を思ひ出させてくれた。その花屋の横を折れると、××產園とペンキの看板がかゝつてゐた。何度も思ひあきらめて、結局產婆にでもなつてしまはうと思つて。たづねて來た千駄木町の××產園。

歪んだ格子を開けると、玄關の三疊に三人許りも女が、炬燵にゴロゴロして居た。

「何なの…。」

「新聞を見て來たんですけど…助手見習生入用つてありましたでせう。」

「こんなにせまいのに、あいつまだ助手を置くつもりかしら……。」

二階の物干には、枯れたおしめが半開きの雨戸にバツタンバツタン當つて居た。

「こゝは女ばかりですから、遠慮はないんですのよ、私が方々へ出ますから、事務を取つて戴けばいゝんです。」

このみすぼらしい××產園の主人にしては美しすぎる女が、私に熱い紅茶をすゝめてくれた。下の女達が、あいつと言つたのが此女なのだらうか、高價な香水の匂ひがクンクンして、二階の此四疊半だけは、ぜいたくな道具がそろつてゐた。

「實はね、下にゐる女達、皆素性が惡るくて、子供でも產んでしまえばそれつきり逃げ出しそうなやつばかりなんですよ。だから今日からでも私の留守居して貰ひたいんですが、御都合いかゞ？。」

あぶらのむちむちした白い柔い手を頰に當てゝ私を見てゐる此女の瞳には、何かキラキラした冷たさがあつた。話はいかにも親しそうにしてゐて、瞳は遠くの方を見てゐる。

そのはるかなものを見てゐる彼女の瞳には空もなければ山も海も、まして人生の旅愁なんて、支那人形の瞳のやうな、冷々と底知れない野心が光つてゐた。

「えゝ今日からお手助してもようございますわ。」

晝

黑いボアに頰を埋めて女主人出て行く。

少女が臺所で玉葱をジタジタ油でいためてゐる。

「一寸！　厭になつちやうね、又玉葱にしよつぺ汁かい？」

「だつて、これしか當がつて行かねえんだもの……。」

「へん！　まるで犬ころとまちがえてやがるよ。」

ジロジロ睨みあつてゐる瞳を冷笑にかへると、彼女達は煙草をくゆらしながら、

「助手さん！　寒いから汚ないでせうけど、こゝへ來て當りませんか！」

何か底知れない氣うつさを感じながら、襖をあけると、雜然として前の玄關に、女が六人位もさしあつて居た。

こんなにどこから來たのかしら――。

「助手さん！　貴女お國どこ？」

「東京ですの。」

「テヘッ！　そうでございますの、一寸これやごまめだよ。」

女達は、ワッハワッハ笑ひながら、何か話しあつてゐた。

臺の膳の上。

玉葱のいためたのに醬酒をかけたの、京菜の漬物、薄い味噌汁。

八人の女が、猿のやうに小さな卓子を圍んで箸を動かせる。

「子供××××××と言つて、あいつ一日延ばしに私から金を取る事ばかり考へてゐるよ、そして榮養食ヴイタミンBが必要ですか、奴淫賣(ドインバイ)のくせに！」

女給が三人

田舍藝者が一人

女中が一人

未亡人が一人

女達が去つたあと、少女が六人の女の說明をしてくれた。

「うちの先生は、産婆が本業ぢやないのよ、あの女の人達前からうちの先生のアレの世話になつてんですの、世話だけでも大したものでせう。」

奴淫賣(ドインバイ)！　と云ひ散らした女の言葉が判ると、自分が一直線に落ち込んだやうな氣がして急に、フッと松田さんの顔が心に浮んだ。

不運な職業にばかりあさりつく私、もう何も言はないで、あの人と一緒にならうかしら――。

何でもない風(ふう)をよそおつて、玄關へ出る。

「荷物を持つて、もう歸るの……。」

××の寫眞を、まるで散しのやうに枕元に散亂させて居た女が、フッと起きあがつて、それに座蒲團をかぶせると、

「ちよいと、先生がかへるまで歸へつちや駄目だわ……私達が叱られるもの、それにどんなもん持つて行かれるか判らないし。」

何と云ふ救ひがたなき女達だらう、何がおかしいのか、皆目尻に冷嘲を含んで私が消えたら、一どきに哄笑しそうな様子だつた。

いつの間に誰か來たのか、玄關の横の庭には、赤い男の靴が一足ぬいであつた。

「見て御らんなさいな、本が一册と雜記帳ですよ、何も取りやしませんよ。」

「歸へつちや、やかましいよ。」女中風な女が、一番不快だつた。

腹が大きくなると、こんなにもひねくれて動物的になるものか、彼女等の瞳はまるで猿だ。

「困るのは勝手ですよ。」外の暮色に押されて花屋の菜の花の前に來

ると、始めて私は大きい息をついた。
あゝ菜の花の古里。
あの女達も、此菜の花の郷愁を知らないのかしら……だが、何年か、見きはめもつかない生活を東京で續けたら、私自身の姿があんな風になるかも知れない。
街の菜の花！
清純な氣持ちで、生きたいものだ。何とかどうにか、目標を定めたいものだ。今見て來た女達の、實もフタもないザラザラした人情を感じると、私を捨てゝ去つた島の男が呪ろはしくさへ思へて、寒い三月の灯の街に、呆然と私はたちすくむ。
玉葱としよぺつ汁。
共同たんつぼのやうな惡臭、いつたいあの女達は誰を呪つてゐるのかしら——。

三月×日

朝、島の男より爲替來る。母さんのハガキ一通。
當にならない僕なんか當にしないで、いゝ緣があつたら結婚して下さい、僕の生活は當分、親のすねかじり、自分で自分がわからない、君の事を思ふとたまらなくなるが、二人の間は一生ゼツボウ狀態だらう——。
男の親達が、他國者の娘なんか許るさないと云つたのを思ひ出すと私は子供のやうに泣けて來た。
さあ、此拾圓を松田さんに返へそう、そしてせいせいしてしまいたい。
せいゐつぱい聲をはりあげて、小學生のやうな氣持ちで本が讀みたい。
ハト、マメ、コマ、タノシミニマツテヰナサイか！
郵便局から歸へつて來ると、お隣のベニの部屋に、刑事が二人も來てゐた。
窓をあけると、三月の陽を浴びて、苦學生たちが、すまふを取つたり、壁に凭れたり、あんなにウラウラと暮らせたらゆかいだらう。
私も繪は好きなんですよ、ホラ！　ゴオギカンだの、デイフイだの好きです。
「アパートに空間ありませんか！」
新鮮な朗らかな笑ひ聲がはじけると、一せいに彼達の瞳が私を見上げる。
その瞳には、空や山や海や——。
私はベニの眞似をして二本の指を出して見せた。
焦心、生きるは五十年

——改造社から續放浪記が出ます。
よろしく、御愛讀を乞ふ、筆者——



實話

流れてゆく

小野あづさ

1 窮乏

嫂とお寺の風呂をもらつて、末の子を寢し付けに濱を歩いて來た三沙は暗いランプの明かりの洩れてる兄の家の戸口でしよんぼり立ち止つた。細い身體の全體から糸屑の樣なクチヤクチヤな細い吐息がホーッと流れた。

中では村長の家の普請の手傳ひに行つてゐた兄が遲い晩食を喰つてゐる。久方振りの收入りの故か、お膳には珍らしく大根の輪切りにしたのが醬油を吸つて乘つかつて居る。

嫂もいそ〳〵と夫を構つてゐた。

暫らく窺つてゐた三沙は何かしらシユンシユンと佗しい氣がして、背の子をそつと搖りあげた。

「何！肺病をば病んどるつち？」左手が戸に掛つた瞬間である。

「この最中に！」押し潰した樣な重たい兄の聲が聞へる。

三沙はヂリ〳〵と後退りをし乍らそれでも身體の神經が耳に寄つて行つた。

「妙に身體にあやが無かとは思ふとつたが、私から云ふとすぐ何だけんな、知らぬ振りばしとつたけんど何しろK市から戻つた精吾どんの話ぢや工場はそれで止めさせられたと云ふ樣なはなし…」

「がんどう者が！この最中にい——今、追つ放り出して呉るゝぞ」
兄は陰鬱にと切れと切れな言葉で唸つた。
三沙は慄へて止まない身體をやつともち耐へてパタ〳〵と闇の中に駈け出して行つた。
豫期してゐない事では無かつたもの丶大きな口を開けて待つてゐた絶望の淵にズシンと行き當つた自分自身の重みに、今更の様な沁々とした悲しみがチク〳〵と三沙の胸を疼かせた。涙の引つきりなしに條を引く頬を明るい月明りに背け乍ら三沙は又濱に出た。
行き詰りのない穴洞の様な森閑とした寂しさ！。
「だけど、だけど、どうか仕なきやいけなかつたんだもつと早く」
三沙には嫂が口汚なく彼女の前でまくし立てるのを聞く迄もなく、キユーキユーと詰つてる兄の家の暮しは良く分つてゐた。
人が變つた様な兄の近頃の狂暴さ！
「葬式は仕て呉れぬでも良い、海に放り込んで呉れ」とかき置きをして首を括つたと云ふ、お加代の父親の甚作小父さん！
それから、殆んど戸別にはられてる滯納の赤札！
かうした慘めな事實の影に黴菌の様に働いてゐる田口仁造所有の大敷網のこと…
即ちその田口の大仕掛な大敷網がこの浦に立てられた事に依るこの漁村の二年越の不獵と疲弊との絡まりが三沙には良く分つてゐたで、こんな時「本當に無理なんだ、どうか仕なきやいけなかつたんだわもつと早く」と、自分がこの兄の窮乏の生活の中に轉り込んで來た事を沁々と濟まなく思ふ三沙だつたのだ。
「だけど——」
明るい月明りがさん〳〵と照つてゐる。
三沙はぢつと目を閉ぢた。彼女の頭の中で、島を出てからかうして兄の家へ轉り込んで來る迄の過去が、氣の無い走馬燈の様に胸の何所其所に引つかゝり乍らグルッ〳〵と鈍く廻轉し出した。
濱風に洗ひ晒しの單衣の袖がハタ〳〵と佗しく搖れてゐる。

2 走馬燈の影繪

「あの頃はあの頃さ！愛してたぜ嘘でなしにさ。だけどあの頃はまだやつと檢査濟み、女を見る眼がなかつたしね——」
「では、では、——男の云ふ其の若氣の至りとやらを眞に受けて何も彼もを失ひ盡した女は、女の生命はどうなります！」
秋だつた。二人の移り香が未だよく滲みて了つてさへ居ない白いシーツにポトリポトリと可憐な音をたてる三沙の涙を弄び乍ら、男の笑ひは朗らかだつた。
「だけどそんな風して泣くおみいちやんは又良いな」
ぢつと正面から三沙を視てる男の眼は、ほがらかに燃えた。
そして其の夜も何時もの夜の様に三沙を焼けつく様に愛撫した彼の

だつた。歡喜と不安とが、男の油ぎつたその腕の樣に交る交る絡んで來て三沙の胸を切なくしたその夜だつた。

とまれ！都の生活が男に敎へた女に對する價値標準(?)の進步を堂々と楯にして、まるで良くない梨の滓でも吐き捨てる樣に、否それよりももつと何でもなかつた樣に三沙を島から連れ出した初戀の男は三沙を捨てた。

自活！この不馴れな事實の前に十八の田舍娘の三沙はキヨトンと立たせられた。三沙は漠然と仕事を求めて流れた。

K市の繰糸工場、N製紙、K煙草專賣局、等々と、三沙は轉々と、精力と血色とを上手に搾られて流れて行つた。

放浪はこの女に、自分達の階級の慘めさと搾り取る爲の上手な組織と、そして、其の組織のもとでは永久的にうだつの上る自分等ではないと云ふ、自嘲と、諦めと、そして頽廢とを敎へた。

そしてこの生活　、階級と云ふものに對する意識の漠然たる把握は、轉落しかゝつてる石をゴロ〳〵と落ちる所迄落して行つた。

仕事を持たぬ事は苦しい。實に苦しい。

だが又仕事に有り付いてゐる時、彼等は果して平安であるか？

彼等は其の仕事を一つ踏み外せば、直ぐに喰へなくなる「明日」が始終鼻の先にブラ下つて其の生活を脅やかされてゐる。

そして其の彼等の明日の生活を、運命を、握つて、伸ばしたり、縮めたりして樂しんでるのは奴等だ。

この强權！二重の脅威！。

三沙も其の「明日」が怖ろしかつた。怖れねばならなかつた。

で、喰ひ繋ぐ爲、仕事にブラ下らして置いて貰ふ爲、多くの彼女等が亦さうであつた樣に、最も有意義に（彼女はすくなくともさう想つて）貞操を其の生活に用立てた。

安い支那白粉を其の晒木綿の樣な荒れた肌にバサ〳〵と塗り付けながら三沙は時々、憂鬱にさうする自分の生活のプラスとマイナスをぢいつと考へてシユンシユンと泣けて來る日があつた。

然し彼女の夜の支那白粉はとにかく、男（彼は三沙の工場の現場巡視であつた）と、そして生活に對して二重の效果をあげてゐた。

それから——

過勞、睡眠不足、營養云云、と書く必要があるだらうか。

それはむしろ當然である事の樣に三沙は胸を侵された。

然し隱れて診て貰つた街の醫者は二ヶ月靜養すれば全快の可能を受け合つた。で、或る夜それをそつと男に明した三沙だつた。

自分を誘ひ出す夜毎

「二人で家をもたうねお盆の手當てよな」と私語いた男である。

「そしたら蒸し繭ほぐしなんてさせないよ」

と肩を抱いて與れた男である。

三沙は疑はなかつた。否、疑ふ元氣がもうなくなつてたのだ。

其の夜男は酷く周章た樣だつた。然し後は酷く優しい彼だつた。

「直ぐ入院するが良いね、そしたら僕は君のベッドから工場に通ふさ」そんな事を云つて別の蒲團を出し乍ら、

「あれが一等いけないつてね」

と男は酷く寂しい顔をして媚びる樣に笑つてみせた。

「濟みませんわ」

三沙は第七天國のあの小娘みたいな幸福感で一杯だつた。自分をそつと一人で寢して呉れる男の氣持が古風な感傷に無性に絡んで來て、シユン〳〵泣けて來る有り難いものに思はれる三沙だつた。

そして其の夜は自ら男の胸に埋れて行つて、男の、燃えてるものゝ中に自ら媚びて行つた三沙だつた。

とまれ。男は――男は、そして社會と云ふものは‥‥

次の日工場規程第何ヶ條、危險ナル病氣ニ罹リタル者ハ――の規程は、金壹圓八十錢を三沙の蒸し繭ほぐしにふやけた手に握らしてポイと三沙を路に放り出してしまつた。

男の心！と世の中つてものゝ朗らかさ！

彼女、否彼女等に對するこの水の樣な、空の樣な朗らかさとが今更の樣に三沙の心に滲みて行つた。

それから――、働き度い、が仕事は與へられない。

然し喰はないでは行けない。

この眞實な事實に追ひ詰められた女の痛ましい錯覺！さう。それは確かに錯覺だ‥‥賣つて食ふ物が悉く無く成つた時、着るものが無くて裸に成る時、彼女等は賣れる物がまだ賣らずに殘してあると云ふ風に貞操を把握するのである。

彼女等の心と眼のいたましい錯覺！。

「だけど死ぬよりは」これは彼女等の最後の諦めだ。

然し三沙の自ら値踏みした身體の價打ちは胸の細りと臀部の肉の衰へとに正しく比例して低下して行つた。

そして遂に喰ひ繋ぐ事を支へなくなつた。で、「恥」を、ぢつとうつむいて噛みしめた脣の奧に粉にしてしまつた積りで、其の身體を、此の島の兄の家に轉し込んだ三沙だつたのである。

3 新しい諦めをもつて

島の海と山と空とは三沙の身體を日毎に元にもどして呉れた、「胃が惡い」と云ふ噓がとにかく疑はれないで濟んでゐた。

が然し彼女の前には船と手繰り網とを金と代へに城下に行くその旅費の工面さへ付かなくて陰欝に光る眼を終日暗い部屋に光らして座つてゐる兄があつた。

其の兄を日毎に狂暴に成して行く窮乏の生活が迫つてゐる。

お寺の甘藷を盜んで喰つたと云ふ息子をピチ〳〵ひつぱたき乍ら、目も當てられなく詰つた生計の內幕を並べたて乍ら、「甲斐性なし」と兄を罵り散らし、

「大手で負ひ込むより食ひぶち減らせだよ、一寸は考へて貰はんと

な」とチカチカと當てこする嫂がある。

――誰も悪いんぢやない。私がいけないんだ。今は、病氣が肺病だから逐ひ出す、とかこつけられる迄もなく、實のところ、のんべんと人一人喰はして置ける家ぢやないんだもの――。

三沙は長い事ぢいつと考へてゐた。細くて寂し相でとても賴り無いけれど、流れた様なきれいな眉と澄んだ一重瞼の目だけで充分美しい三沙の細い顔を青白い神經がチクチクと沈痛に動いてゆく。

風が沁々と吹いてゐる。

何所かの水蜜桃がとてもやるせなく匂つてゐる。月が明るい――

三沙は再び辛い涙を唇と一緒にグイグイ嚙みしめ乍ら生命力の最後の一滴がまだ涸れ盡さないで殘つてる事を新しい諦めをもてマザ〳〵と想起しなければならなかつた。

眼を覺してむづかり出した背の子をあやし乍ら三沙は、田口の大親船の船子等が三十幾人か虱の様にゴロゴロと雜古寢してゐる濱の「大部屋」の前にシヨンボリと佇んでゐた。

二年越しの不獵に厩屋の鍋に迄赤札をはられてゐる家の娘達が皆、まるで追ひ詰められた猫の様に、この「大部屋」に通つて三十幾人もの船子の前に自分の貞操を幾らかづゝに値踏みして暮しを助けてゐる事を三沙は聞いてゐたから、

けものゝ匂ひと酒と喧嘩が何時も腐つてゐるこの大部屋。

そこに×をひさがうと決めた三沙！

春を×ぐ彼女等！

何が女を此所に追ひ込んだか、

それは黴菌の様な田口仁造の「金」のもつ力ではなかつたゞらうか

4　E村について

九州N縣に屬して、玄海の波に濤々と岸を洗はれ乍ら浮いてゐるT島！その T島の西海岸に、Kの浦と云ふ漁利の豐かな浦に抱かれて百戸足らずの人家をもつて細やかに明けくれてゐる漁村がある。

これが三沙のE村である。春と秋との二期、この島附近を交流する暖寒流にのつて夥しい魚群が流れて來る。爲にこの西海岸一帶特にKの浦附近は近海有數の漁場であつた。

春に成れば烏賊の利が、世の動きから全く忘れられてポッンと冬を越して來た彼等の胸を嚙んでゐた寂寥を直ぐに和まして呉れた。

秋が深めば嚇々と海を焦す浦一杯の漁火が冬の氣配にともすれば消入り勝な村の彼等の心をドンと彈ませて鰯引きだ

「エイヨ　ヤノ　ヤノ

エイヨ　トントン　トン」

と、其の頃の夜に成ると娘も少年も、年寄りも濱に立つて闇の中に瞳を輝やかせ乍ら、或者は父を、或者は兄を、又或者は愛しい戀人を賑やかな大鼓の音と共に沖に送り出すのである。

闇に鰯の白い腹が光る。

漁火は彼等の心の樣に明るく燃える。

大漁だ、海神樣のお祭りだ、と、——かくして、濱に積みあげるそれを發動船が積んで行つた後の彼等は冬越しの用意に城下に船を仕立てゝ行くのだ。

寂しくない事はない。

然し彼等はその「平安さ」を愛した。

「これに大敷網を立て得れば喃！」

これはE村の彼等の何十年か持ち越しの願望であつた。

何故なら彼等の使ふ手繰り網にはとても掛りおほせぬ魚群なのだ。然し大敷網を買はうにはE村の彼等は皆まだ微力だつた。寄り合つて月掛の講の事など持ち出されたが、ものには成らず濟んで了つてゐた。

で、城下だのE市だのゝ金持の「金」の過剰が、そのはけぐちを、かうした狀態のところへもつて來ぬ筈は無い。然しE村の彼等は——日成らずして潮害に祟られてゐたMの浦はE市の船成金に身賣りしたのであつたが——彼等は決して浦を手放さなかつた。

「城下の田口が浦を買ひ占めて大敷網を立て始めた」と、云ふ事を三沙は島を出奔してから三年目の春、K市に師範學校の二部を受驗に來たお寺の唯一さんに聞かされた。

「戰爭の後の枯れる樣な疲弊に村も襲はれて」と唯一さんは云つて聞して呉れた。然し裏町の溝に沿つて立つた暗い飯屋の女の三沙に、この故里の問題は餘り緣遠いものであつた。その時だつて

「そんな事よりあんた、お加代ちやんと一寸でも良く別れて來れたわね、こんな月の夜はあんたの心が察せられますよつて」と、ぽんと肩をたゝいた彼女だつた。そして「何か奢つてよ」としなだれ掛つた三沙だつた。

三沙はお加代ちやんの事を云つた時唯一が月明りに背けた沈痛な顏は見なかつた。が、轉々として移つて行つた其の後の三沙の二年近くの生活にこの問題は一度も觸れて來なかつた。

彼女には、映の岬と、唐松岬に抱かれた靜かな內海と、鰯引きの囃しの思ひ出される平安なE村の姿が漠然と刻みつけられてゐた。

が、島に歸つて三沙は先づ濱を狹しと乾し廣げられた大敷網の南蠻天竺の大きな帆を見た。白壁の船子小屋を見た。

そして、村の彼等の僅かな給金に抵當流れの船や山や畑を呑んで水膨れに膨れあがつてる網本の田口と云ふ男を見た。

それから、負ひ切れぬ借財に首を括つて死んだ甚作の娘、唯一の戀人であり許嫁であつたお加代が、父親の葬式代金拾五圓の抵當流れで、大敷小屋の母屋で、緞子の蒲團に侍つて田口の放埓な好色心に日毎に瘦せてゐる事を聞いた。

何がそんなにこの村を疲弊さしたのか？　それは田口がこの浦を買ひしめてからこの方二年間引き續いて　不獵の結果である。

二年越しのこの不獵はこの浦の漁利に依つて生活して行く村の彼等の殆どを立ちも這ひも出來ない樣な窮乏に追ひ込んだのである。

ではこの浦をそんなに荒したのは何か！それは「金」だ。否、金を持つてゐる階級の人間と、官憲との固い握手である。

二百幾らかの金でこの浦に對する五年間の權利を買ひ占めて、大敷網を立て始めた城下の田口仁造は、其のフンダンに有る「金」で先づこの村の駐在巡査を完全に抱き込んで了つた。そして村長も、やがてE村の彼等の爲の村長樣ではなくなつた。そこで田口の大敷船は殆ど公然と、沖でダイナマイトを使ひ始めた。魚は大敷網にゾクゾクと係る程掛つて來た。田口仁造はブクブクブクと膨れ上つた。

然し勿論これは永久的の利益ではないのだ。彼等の使用するダイナマイトを怖れて、魚群は次第に路を變へ始めた。

そして三年目の今年邊りはもうてんで、彼等の手繰り網のうてる内浦邊りには影も見せなくなつて了つたのである。

で、そろ〳〵場所を變へる支度に掛つてる大敷組なのだ。

場所を變へろ！

さうだ、彼等には「金」の力がある。一つの浦をダイナマイトを投げこんで、甘いものゝ有りつたけをシャブリ盡せば、ポイと放り出して、又別の新しい對象にシャブリつく「金」がある。

然し其の金持に、萬に近い利益をあげさせる爲にさん〴〵に荒れて了つた浦は……失はれた彼等の生活資源はどうなると云ふのだ？

何が荒したか！。

それを知つて、何是皆起たないんだ！。いや立たなかつたのでは無い。起つても何にもならなかつたのだ。

船子が沖で大火傷をして歸つたと云ふ事が端なく村人に洩れた時、寺の息子の唯一（彼は中途で師範學校を止して歸つて隣村の學校に勤めてゐた）‖が幾人かの同志と、ダイナマイトの事件を村長だの、駐在巡査だのを通して明るみに出さうとした。然しそれは返つて、田口と云ふ金持と、村長と駐在所とをぴつたり握手さる事に役立つただけで、てんで取り上げられ樣ともしなかつたのである。

押しひしがれた友誼の精神と自嘲とが、彼等に甘藷燒酎の密造を強いた。そしてやがて

「俺を船子に使ふて見んなはれ」

と、乏しい生活の中から、屆け物を工面して母屋に日參し始めた彼等だつた。

5　彼女の天國

「とうから惚れてたんだぜ、待つてたんさ、どうせ遠からず此處へ稼ぎに來るだらう〳〵てね」

と、其の夜の男は朗らかに笑つた。

大きな圍爐裏が眞中に大きく仕切つて有るつきり道具とて無いだゞつ廣い板敷の部屋、亂雑に敷き散された幾組もの夜具！、煽情的なランプの灯のゆらぎ！
此處は大敷船の船子達が、虱の様にウヨ〳〵と寢起きする大敷の大部屋である。
兄達の話を盗み聞きした夜、
「どうかして喰ひぶちだけは入れますから」
と兄夫婦の前で鹽つ辛い涙を呑んだ三沙は次の夜この大部屋に、お加代に手づるを附けて貰つて稼ぎに來たのである。
海に稼がない日はゴロ〳〵とこの大部屋に燻り込んで喧嘩と賭博と酒の中にドロンと溺れてるこの男達！
彼等に取つて酒は、そして女は、賭博は、唯現實感の消散藥として一〇〇パーセントに、彼等の愛するものなのである。
「海の時化る日は怖ろしい」とこの部屋に稼ぐ娘達はよくさう云つた。
例の網元はどれ程の利を收めても、稼いだは日當一圓――か一圓五拾錢せい〴〵の彼等船子なのである。時化る日は借金するより他にはビタ一文收入りのない彼等なのだ。
其の漠然たる不合理に對する不平と反抗と自嘲は彼等の、酒だの女だのゝ上に辛辣に現れるのである。
兩の頰から一寸と離れてゐない所にズブリとドスを突き刺して抵抗する自由をすつかり奪つてをいて彼等が終夜眠らせなかつたと云ふお妙と云ふ美しい娘のことや、病氣で寢てゐる女の事等が今更の様に三沙の胸をチクチク突き刺して過ぎて行く。
然し、とにかく明日の朝はお金をもつて歸れるのだ。
「ホーラ嫂さんお金をお使ひなさいな」と云つてやれるのだ。
ホーッと切れ切れな糸屑の様な吐息が消へる様に流れた。三沙はぢつと目を閉ぢた儘――男の胸にそつと寄り添つた。
「Ｇ港のお金ちやんて知つてるかい阿奴俺のレコさ、ありや巧いぜこんな風に甘つたれてさ――、こんな風に俺の腕の下を――」
男は朗らかに他の女の批評をして聞かせた。
朗らかだ、朗らかだ、
自分の前で他の夜の、他の女を批評して聞かせる男の顔をぢつと見上げ乍ら三沙は、もう一度、はつきりと自分自身を見た。
――賣×！賣×！
高畠素之の社會問題辭典に曰く、賣×とは、與へられた時間、與へられた男に、代價を目的として××を提供する仕事である。然してそれが營業である場合のそれを云ふ。――と。――だけど仕方がない、追ひ詰められた彼が試みる凡ゆる生き方の其の一つの様に。
想ひ出した様にニッと笑つて見せた三沙は、油でニトニトしてゐる男の顔に自分の顔を摺り寄せて行つた。
――何だ！何だ！

――はい、これはピエロが！あのお道化人形の赤い大きい附黒子で御座います。お客樣に笑つて頂く附黒子で御座います。

燃える樣な熱い唇と顏とが、身體の全重量をもつて、ジワ〳〵と彼女にのし掛つて來た。

抱き締める男の荒い息遣ひと、毛むくじやらな胸板から發散する磯の香と、汗と、强烈な腋臭との、ごつちやに成つた香ひが體溫に蒸されて、絡まつて來て、三沙の知覺は、何所か遠い隅つこに押しやられて行く樣だつた。

焦點を失くした樣な眼を惘然と男に向けてる三沙の頭の中で、古草履を捨てる樣に、ストンストンと自分を捨てゝ行つた男達の思出が、氣のない走馬燈の影繪の樣に消えたり現れたりしてゐた。

眞夜中である。ヒタ〳〵と汀を洗つてる波の音が遠くでしてゐる直ぐ隣で床がギシギシとゆうらうつに軋つてゐる。滲み入る樣な鈍い疼き：、頭を、胸を、腰の廻りを、シン〳〵と流れてゐる。

――地獄だ！鬼だ！

いゝえ、勿體無い。

明日を食ひ繋がして下さる天國の佛さまで御座います――

「おいへゲよ」

「…專用專用！」

しやげる樣な幾人かの男のだみ聲が、何時か小さい子供の頃、お寺のみ堂で聞いた雨洩りの音の樣にぽつつりと、微かに、もの憂く聞へてゐた。

6 朗らかなアデイユー

時が經つた。遷り變りの早い島の自然はもうすつかり冬だ。十一月の海は白い浪頭を嚙み合ひ乍ら來る日も來る日も暗かつた。

秋の漁期に何の收入りもあげないで來て了つたE村の彼等は、無力な彼等は、冬越しの見込みの、てんで附かぬ怖ろしい不安を、グズ〳〵と唯取り止めもない愚痴に零し合つてゐた。三沙は、三沙等は、追ひ詰められた猫の諦めをもつて大部屋に矢張り稼いでゐた。

文字通りの淫賣！。悲しい生活ではある。

然し、けものの樣な熱い荒い男の息遣ひが媚びる樣に煩にまつはつて來る瞬間の！その瞬間だけの自由！優越感！――金の欲しい女であることも、自分、自らの貞操を値踏みした女である事も忘れられるその瞬間の悲しい誇り、その瞬間の優越感が三沙に、諦め方と自ら慰む事を教へて與れた。

それに、最初の夜の男の勢力は、三沙を他の誰にも手を着けさゝなかつた。

然し瞬間の現實感の消散はそれで良いとして、既にこのK浦はしやぶれる丈しやぶり盡してる田口等は、引き揚げ仕度を始めた。

「正月を濟せりやもどつて春網を立てるぜ」と彼等は云つてゐる。
然しそれは嘘だ。三年間の荒料理で、このK浦からしやぶり取れるだけは取つて了つてゐる田口が來春この浦に再び大敷網を立てに來ないと云ふ事はもう誰にも分つてゐた。
田口には金がある。金は既に新しいしやぶり場を求めてゐたようさうすれば、――さう成れば明日から、どう成る自分なのか？。
三沙は今更の樣に輕業の樣な自分の生活を、見直さねばならなかつた。然し見直したところで結局どう成ると云ふ生活ではない。三沙は時々窒息しさうだつた。

すつかり荷積みを終へてガランと成つた大部屋に三沙は男と向き合つて座つてゐた。
十二月の風に三沙の胸はハタ〱と消入り相に搖れてゐた。
「ね、どうしても連れてつては呉れないの」
「ウヽ、今度はな、駄目さ、嬶の都合がね、それにG港にだつて寄るんだし」
男は朗かに笑つて三沙を見下した。
朗かだ朗かだ。男は何時だつてかうして朗かなんだ。三沙はギヰッ〱と歯と唇を噛みしめた。涙が塩辛くその間に滲みて來た。
「では、では、春にはね、歸つて來てよ！」
「あゝ、春にはな戻つて來るさ大事な漁期だもの」
「ほんと？」三沙はぢつと男を見上げた。
「だけど惠さん、この浦は、この浦は貴方の使つたダイナマイトですつかり荒らされてるのね、魚は數へる程も居ないつてね――」
「ね、だけど惠さんは、私の惠さんだけは、きつと春には來て呉れるわ――ね「
――、首をシュッとかしげて、男の手をギュッと握りしめて、チラッと上目を使つてみせて‥‥
「ハ‥‥惠さん、私の惠さんはよかつたぜ、其の惠さんが來春一人何しにこの浦に？‥‥、おいおみいちやん、忘れたかい俺の仕事は魚取り、魚の逃げちやつた浦はな宙云ひや今日でお去らばさ」

「あゝ」
矢つ張り――さうすれば――。
三沙の胸は譯の分らぬ昏亂が今更の樣に疼いた。何の收入りもなしに而も四ヶ月のお腹をかゝへて、あの兄の家の窮乏の中に何日暮してゐられるか！。
グングン穴を大きくして行く絶望の淵を覗ぞく事の怖ろしさを三沙は沈痛な笑ひでぢつと隱した。
「惠さんたら、焦らすのよ、忘れたの、春にはお腹の赤ちやんの父ちやんよ」
縋り付く樣な聲と言葉と――。

三沙は男の胸に面を埋らせて其の腕をシッと男の首に卷いた。

「やゝの父ちやん！チェッ止して呉れ、淫賣のくせに、淫賣の子の父ちやんに成る程惠さんはお人好しぢやなかつたさ」

男はプイと立上つた。ヨロッとよろけた三沙の縋り着かうとした手に男は無造作に紙幣を握らした。

「さ、×圓だッ」

涙が、ポトポト紙幣を握り締た拳の上に果敢なく音をたてた。

——淫賣！さう私は淫賣だつた。

私の「女」は一つの商品で御座ゐました。賃銀でもつて賣却した時、私の「女」の權利は喪失してしまつたのだ。私の子は、父を要求する自由を奪はれてこの世に生れるのだ——。

「へ……港々の女離相つてな曖柵でね……餘り　な樂しみでないところが又何となくな」

「捨てるの、捨てるのこのまんま」

追び縋つて濱迄走り出た三沙は押し倒されたまゝ、冷たい砂に解けて亂れた髮ごと顏を砂に埋めて搾り出す樣な聲で泣　てゐた。

傷みに破け相な胸だ。

十二月の白い光りの流れてる夕暮である。三沙は本船に漕ぎ付ける男の傳馬を血走つた目でぢいつと見送つた。

涙はかすり取つた粥鍋の底みたいにかう涸れ盡してゐた。

男が漕ぎ着けるのを待つてゐた樣に、彼の傳馬が繰りあげられると、大船は大きな帆をあげ始めた。

ジューッと大きく風を胚んだ南蠻天竺の大帆！

「出船だ」

「あゝ！」

ドラが鳴つてゐる。

宵闇の迫つて來る靜寂な砂濱に三沙の消え入る樣な歔欷が何時迄も縷々と流れてゐた。大敷船は穩やかな海風を存分吸つてゆつたりとKの浦を廻つてゐる。

キスのあとの男の脣の樣に穩やかにそして、ほがらかに。

砂から滲み込んで來る冷氣に殆んど知覺を失つた兩脚を引き摺る樣にして三沙はションボリ汀を歩いてゐた。

月光がチカ〱と砂に濡れてゐる夜中だ。

男の船の消えてつた後の海面が白い波を立てゝゐる。

ヒタヒタと涙の樣な小波が忍びやかに汀を洗つてゐる。

幾時間經つたか

幾時間泣いたか

幾時間歩いたか

死ねなかつた三沙は砂と汗に、クチヤクチヤに成つて殘つてる拾

圓紙幣を冷たい手の平で、ピタ〳〵と伸ばし始めた。

「このお金をこの儘もつて歸つて『仕事を見つけにいらつしやる旅費にお使ひなさいませ』と云つて兄さんに差出して見やう、このお金が無くなつて了ふ迄には、何も彼もどうにか成つて行くだらう」

いくら考へたつて考へは其所からどうにも動きが取れなくなつて了ふのだ。キー〳〵と軋る戸を開ける時のことをズキ〳〵痛む胸に想ひ浮べながら三沙は、ヒョロッと間がぬけたやうに長い自分の影を視つめ乍ら、河添ひの路を歩いてゐた。

7　それから――

總決算、女の一生！否女とその生んだ女の子との一生價額六拾五圓也！五拾圓の札ぎれと生れた斗りの女の子とを當てがはれて、田口の三年間の園ひ者だつた加代は、暗い納戸に肥立の惡い産褥に伏つてゐる。お倫は若い船子と手を握つて三沙の歩いて來た路のワンステップを踏み出した。

島を捨てゝ東京へ出た唯一は「元氣で働いてゐますよ」とお寺の和尚さんに便りを寄してゐる。

――東京は動いてる。

俺はグッグッと大きな力となつて動いてる俺達の力を見たよ、俺達や決して無力ぢやない。皆、もう默つて打たれてはゐない。

俺には俺等と云ふものが段々はつきり分つて來た。

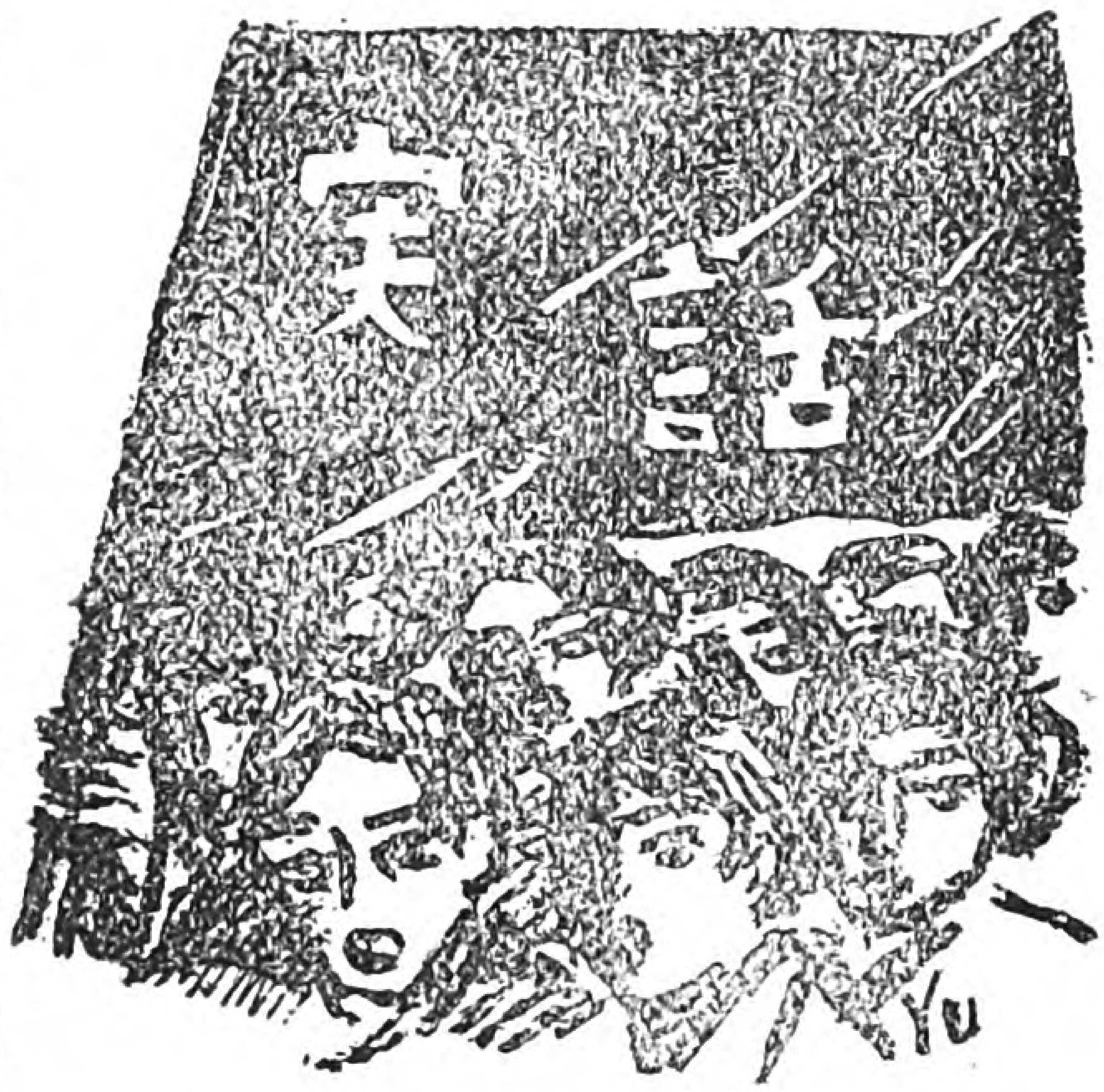
良い友達がゐる、良い先生がゐる。

お前が出て來られるならなあ――！

こんな唯一の手紙を幾度　繰り返して讀み乍ら、ダイナマイトの例の事件の時唯一等の同志だつた鐵吉は疼く樣な憂欝を、腰が立たなくなつた二年間寢たきりの母親の伏つてる納戸の障子にぶつゝけてゐた。彼等の否、彼女等のあの船子小屋は、青年の倶樂部にでもと網本から村長宛に寄附せられた。

村長はよく城下へ通つた。田口と共同の事業か何か企だてられてゐると云ふ。

三沙は、三沙は月の出のおそかつた二月の或夜、漠然と食へる仕事を豫想して、陰慘な冬にペロ〳〵なめずり廻されてゐるさびれた村を捨てた兄達夫婦について再び漂然と、K市に流れて行つた。火の消えた樣なE村は二月の風にヒュー〳〵と吹きまくられてゐる。



階級に育てられる女

藍川陽

秋――高い空が眞蒼だ、日の丸の大旗を中心に四方へ流れた小旗の行列が水のやうな風にヒラヒラ搖いだ。

――螢の光、窓の雪――

一隅から緩いヂンタバンドの響が渦を擴げる。六百人の兒童の顔とユニホームが白と黄の縞を造つて赤土の運動場を圍んでゐた。

――プログラム、徒歩競爭、四年女子――

訓導の赤い腕章が黒い銃身の尖端で蒼空を刺した。拍手――喚聲。出發點で横に並んだ白い運動靴、その中に柔かい裸の踵がある、同じ角度で前に屈んだ白いユニホーム、その中に唯一人の垢じみた單衣があつた。

ズドーン！白煙が輕氣球のやうに蒼空で漂つた、息の切れさうなヂンタバンド、運動場の赤土を轉り出したユニホーム。先頭を垢じみた單衣が走る。走る。

――白、白――

――赤、赤――

黄色い喚聲の潮鳴り。素足の千代は走つた。見えなかつた。聞えなかつた。唯馳け拔けたユニホームの群と自分の距離を絶えず考へた。くるつと赤土が廻轉した。蒼空が急速に傾いた。轉んだ、投げ出された彼女の顔を、手を足を白い運動靴が踏み付けて走り過ぎた。

「ちやんと云ふ通りに運動靴を穿いて來なかつたからこんな事になるんです、それにユニホームも着ないで――着物を着てるのは貴女

だけですよ」
若い女教師は云ひながら汚なさうに彼女の指を卷いた。千代の着物から日光に溫まつた垢の臭ひがした、生爪の剝げた親指は白い繃帶の下でヅクヅク痛んだ。
――お母、靴とユニホームを買つとくれよ、明日の運動會には一人殘らず着物で來ちや不可ないつて先生が云つたから、な、お母一等惡いんでいゝから――
――靴がなくても足があつたら走れるよ、馬鹿、今晩のご飯さへやつとこさだと云ふのに――千代はおづおづねだつた、下駄の鼻緒をくけながらお母は呶鳴つた。それ以上何も云はせないやうな聲だつた。それにさう云つてからお母はホーッと溜息を吐いた、その溜息を聞くと夕暮のやうに寂しくなつた。どうしてお母の怒つた時の顏はあんなに悲しくなるのだらう。千代はガランとした宿直室にぽつねんと腰を掛けてゐた。ヨードホルムの臭ひのする指を撫でながら昨日の事を思ひ出してゐた。陽光の明るい窓から運動場のざわめきが流れ込んだ。

海に近い街だつた。街の中央を廣い川が流れてゐた。一丁目毎に木橋が朽ちた影を落してゐた、時々海から汚れたスワンのやうな蒸氣船が齒切れのいゝ心臟の音を立てて上つて來た、白煙を輪に引き千切つて吹き上げながら兩側の道に海の匂ひを撒き散らした。五月になると憂欝な水面一杯に咲いた水藻の花で顏色を紫に變へる川だつた。川の右手の小高い土地には富んだ人々が住んでゐた、白い清潔な坂が何本となく這ひ上つてるた、赤い屋根と重々しい灰色の瓦が木立の綠色に沈んでゐた、朝と夕方には燕のやうな御用聞きの自轉車が坂を走り上つた。川上に製紙工場が出來た、川はカルキの匂ひがして水藻の花は咲かなくなつた、工場は一つ一つ殖えた、河水は油をギラギラ浮べて玉蟲色に光つた。木橋は次第に石橋に架け代へられた。川の左の町は貧しかつた、臭い溝とマッチ箱のやうな長屋には貧乏人が溢れてゐた。多くは職工達の家族だつた、東の空が白むと工場のポーが唸る、坂上の町はまだ深い眠りの底にゐた。鐵粉色をした顏を垂れて菜つ葉服の群が川沿ひの道を川上へと流れた。夜、夜中過ぎる迄坂下の家々には夜業の灯を細く點してゐた。それだのに坂上の町は年々富み、坂下の町は益々貧しかつた。白い埃の舞ひ上る道を鐵管や石材を積んだ荷馬車が長い列を絕え間なく造つて通つた。牛糞馬糞の轍がつた街路から橫にじめじめした路次があつた、日光に置き忘れられた路次の水溜に蒼い顏を映して子供達が遊んだ。
學校は坂の中腹にあつた。教室では成績の良い者は右に不良な者は左に並べられた、右側の子供は綺麗な着物と贅澤な學用品とを持つてゐた、左側の子供は菜の無い辨當を風呂敷で隱してこそこそ食ふ者が多かつた。上手な繪と上手な字が每週揭示板に貼り出される

習慣があつた。貼り出された誇りに胸を膨らす者は富んだ子供達であつた。貧しい子供は無くなつてもクレオンを買つて貰えなかつた、短くなつた一色のクレオンで描いた繪が綺麗な筈がない。放課後、宿題を忘れた罰に立たされるのも大概彼等であつた。この二色の子供達を前にして教師はパンの爲に忠君愛國と勤勉を説いた。一年に何回か町には國旗が飜つた。式日、貧しい子供達は樟腦の匂ひのする絹の着物の肌觸りを知らなかつた。唯袴もない自身に投げられる小さい友人の蔑みと蔭口と遠慮ない羨望を知つてゐた。子供は泣き度かつた。自分も美しい着物を着て歌を唄ひお祝ひのお菓子が貰ひ度かつた。

千代は六つの時に死んだと云ふ親父の顔を知らなかつた、覺えてるやうな氣もした。お母は暗い家でバッタのやうに瘦せた身體を折り曲げて下駄の鼻緒をくけてゐた。朝から晩迄死に物狂ひになつて鼻緒に噛り付いてゐなければ親子二人が米を噛めなかつた。學校が退けると千代は坂を走り下りて家へ歸つた。街の牛乳屋へ壜洗ひに行つた、暗い川面に蒼い星屑が落ち始めるとお母と二人で大きな風呂敷包みを持つて問屋へ行つた。冬になると千代の細い指は垢切れで千切れさうになつた。パクッと開いた柘榴色の傷口へお母は火に溶かしたどろどろの油藥を流し込んだ、聲を立てる程痛かつた、千代は涙の眼を見張つて我慢した、痛さの底に疼くやうな肉親の情を感じた。

休み時間の廣い運動場、富んだ子達は教師に甘えかゝつて遊んだ、貧しい子達は一隅にかたまつて指を咬えて見てゐた、子等の兩眼には羨望と卑屈が溢れてゐた。

——何故先生はあの人達だけを可愛がるだらう——

千代は子供に取り卷かれた先生の顔を見た。もたれてゐたアカシヤの枯葉が黄色い蝶のやうに千代の頭髪に落ちた。毎朝富んだ子達は奇麗な花を競爭のやうに持つて來た。花は白く曇つた紙に卷いてあつた。先生は優しい笑顔を花と子供に與へた。

——あの笑顔は自分達に向けられた事は無い、花を持つて來ないからだ——

千代はさう考えた。歸途彼女は公園へ行つた、芝生があつた、泉水は水銀色の線を蒼空に吹き上げてゐた、コスモスの赤と白が花壇で笑つてゐる、見廻りの園丁が恐しかつた、千代は芝生に寢轉んで日暮れを待つた、幕のやうな薄闇が木々の間に沈むと蒼白いアーク燈がポカッと點いた、千代は折取つた花を袖で蔽ふと周圍を見廻した、月が出た、白い坂に溢れた蒼い光の中を小さい黒影が泳いだ、走りながら彼女は始めて休んだ仕事とお母を思ひ出した。

——花はこんなに奇麗だこれを佛壇に供えたらお母は許して與れるだらう——

コスモスの糸のやうな綠葉に頰を當てた子供は心の不安を慰めた。

「今頃迄何處をうろうろしてあるくんだい、仕事も休んで――牛乳屋で使つて呉れなくなるぞ」

入りそびれた娘にお母は呶鳴りつけた、休んだ仕事より夜になつても歸らない、不安がお母を怒らした、怒りながら親は密に安心した。

「早く入れ、茶も、何も冷えてしまうた」

娘はおづおづ入つた。

「おや、その花はどうした？」

お母の眼が光つた、蒼ざめた娘は只一言云つた。

「公園で――」

罪を覺悟した寂しい聲だつた。伸びたお母の腕が花を引つたくつた。

「馬鹿――貧乏をしても盗みをするやうな根性はかうして呉れる」

母親は花束で子供を毆つた、暗い火の中で花は無慘に散つた、千代の濡れた頰に桃色の花瓣がべたりと喰つ着いてゐた。

「毀さないやうに氣を着けて見るんですよ」

地理の授業を濟した敎師はかう云つて机一杯に陶器を並べた、敎材の中には生徒が家から持つて來たのも混つてゐた、子供達の細い指が陶器の冷い皮膚を撫でた。

「七寶つてどれ」

「あたしにも貸してよ」

机の周りで子供達が騷ぎ出した、ガチーン

――落ちた――一齊に飛び退いた子供達の足の下で陶器の破片が白く光つてゐた。

「誰が落した」

「山田さんよ」

千代の隣の子が呼んだ。

押されたはづみに隣に居た子の袖が落したのを千代は見てゐた。

「私ぢやない、私ぢやない」

彼女の聲は大勢に揉み消された、持主の子は泣き出した。

「母さんに叱られる、どうしやう」

先生が飛んで來た、昂奮が千代の顏を白蠟のやうにした。

「先生、山田さんが落しました。」

さう云つた子は同意を求めるやうにみんなを見廻した、無數の眼は千代の汚い服裝を嘲つてうなづいてゐた。

何か持つて先生と一緒にお詫びに行かなければならない――から云つた時案外お母は怒らなかつた、唯ホーッと例の溜息を吐いた、問屋から歸りになるべく上等さうな菓子折を買つた、その日の賃金は殆どふいになつた、親子は空腹を抱えて別々な心で寢た。

坂上にある製紙工場主の應接室、柔かい襞のあるカーテンが下りてゐた、先生の詫びを綺麗な夫人は笑つて聞き流した。

「あんな物の一つや二つは何んでもないんですのに――こんな事をして貰つたら困りますね」

金歯のある夫人は千代の着物を見て云つた。

「坂下の子供は親が親ですから粗忽でして」

女教師は夫人に媚びた、女中が茶と菓子を運んで來た、ピアノが聞える、桃色の甘さうな菓子、千代は生唾をゴクンと呑み込んだ。

「あんたお上り」

千代は手を出さうとした、先生の恐い眼が睨んだ。

「宅の話によりますと今度の縣會では小學校増設問題についての討議があるとか云つてましたから先生方の御辛抱ももう一寸の間だけですよ」

「ほんとにさうなりましたらどんなに良い事でせう、坂上のお子さん達と坂下のと一緒ですと一寸苦勞しますわ、それにお子さん達の爲にもね」

女中が紙に包んで與れた菓子を千代は母に差し出して今日の樣子を話した。美しい夫人、廣い家、澤山の女中。菓子は母親の舌を甘く溶かした。彼女は子供に持たした菓子折のみすぼらしさを考へた。卑下が胸を嚙んだ。

「何んとか云ふ家だつたな」

「杉山つてんだよ。杉山つてんだよお母」

「あの坂の取つ付きにある洋館だらう」

お母は喰ひかけの菓子を土間へ叩きつけた。千代の手からも奪ひ取つた、娘は呆氣に取られた。

「彼奴から貰つた物なんぞ、誰が――詫びに行つたが忌々しい、門も家も叩き潰してしまへ、畜生」

杉山の製紙工場は川上にあつた、千代の父親は其處で働いてゐた、ローラーに挾まれた親父は血だらけのするめのやうになつて死んだ。

――職工が一人や二人死ぬのも度々機械が毀れるのも一緒さ――

三百圓の涙金を澁々出した工場主の言葉を人傳てに母親は聞いてゐた。

「毀れた機械は直せる、死んだ人間が三百圓で生き返るか」

お母は忘れた事のない憤りを新にして話した。

「彼奴は敵だ、敵だぞ」

ギラギラ燃えるやうなお母の眼を見た娘の胸に熱いものがキューと走つた。かうして千代は六年になつた、川岸のポプラが柔い芽を出し始める三月未だ受驗制度のあつた時分の學校で子供達は日暮れ迄殘つて勉強した坂上の子等だつた、彼等は日に日に細い顏を蒼白く緊張さした。水色の校舎の女學校、赤い袴の女學生が白い球を

ポンポン跳ね上げてテニスをやつてゐる廣い運動場。千代も赤い袴への憧れを密に抱いてゐた、だが學問は好きでも學校は嫌だと思つた、式日に母親を困らせる事も無くなつた。

「休んだつて授業はないから大丈夫だよ」

千代はお母の傍で鼻緒の數を數えて束にした。自分達の仲間と毎日坂を話しながら歸つた、大概卒業後の話であつた。

「あたい紡績へ行くの、姉ちやんも行つてるから」

髪の毛の赤い屑屋の子は石を蹴り蹴り云つた。二人とも二學年休んで十五になつてゐた。

「あたいも行かうかしら」

千代は自分に相談するやうに呟いた、汽車と都會とそして金、千代の幼い胸は躍つた。

「O市つて遠いんだよ、外に何處かへ行つたらどうだ、工場ならこの街にだつてあるし」

「紡績は入る前にもお金を呉れるんだよお母、それで借金も拂へるし、質屋の蒲團も出せるよ、寄宿舍があつて花やお裁縫も教へて呉れる、向ふで食べるんだからお給金は全部お母に送れる、さうしたらこんな鼻緒なんかに噛りつかないでも遊んで食えるよ」

「だが彼處に居たら肺病になるつて隣りの甚さんが云つてたよ」

年の割に白髮の多くなつた母親は娘を傍に置き度かつた。

「安心しろよ、お母こんなに丈夫だ」

娘は薄い胸を弓のやうに張つて見せた。

四月――坂の上の町に白い花が雪のやうに咲いた。花の匂ひの流れる町を新入の女學生が嬉々として通つた。千代がO市へ行く日が來た、母と娘は川沿ひの道を驛へ急いだ。

「身體を大事にするんだよ」

「お母こそ」

水底からもくもく春が湧き上つてゐた、娘は鼻先の涙を擦り擦り元氣に歩いた。

工場へ入つて二年目の夏、千代はお母の死を報じた手紙を受取つた。

――毒蟲に刺された顎を爪でいじつた、丹毒になつた、隣りの甚さんが一番先に見付けた、高熱に昏倒したお母の口には腐つた林檎が一杯詰まつてゐた、長屋の晝間は病人と子供ばかりで充分に世話してやれなかつたのが殘念だと云つてゐる、そんな譯で垂れ流しの汚物で蒲團が壁へ腐り着いてゐた病みついて八日目の朝、藥を呑ませやうとして入つて行つた時、お母の冷えた身體に蠅が黒胡麻のやうにたかつてゐた、直ぐ知らせる心算だつたが千代が心配してはと病人が強ひて頼むので知らせなかつた――

故郷の幼友達のたどたどしい手紙を千代は握りしめた、南京蟲臭い蒲團の襟を噛んで泣いた。



BOURGEOIS ART　　　　*Adolph Dehn.*

火群(ほむら)

大田洋子

——聲を忘れた生活——

勞働と、搾取とのために、女としての生涯を賭けた、母親の死は、その娘の社會的な反叛の血へ、又更らに、眞新しい血のりをたらした。

電報用紙が、狂ほしく、娘の兩手の中で握りしめられた。

波は、ぐわんと、鋭い刄物を脳天深く打ち込まれたのだ。彼女は憤つた。あの、鮮人の女の、四十年の生涯は、あまりにも、陰惨の、一いろだつた。彼女の人生に有るものは恥辱と、搾取と束縛とだけだつた。締木にかけられて、最後の血の一滴までも、吸ひとられた四十年の終末だ。

「波!」

「なあに?」

「葬式にゆくのか」

バラの模様のある、クリーム色の羽ブトンを腰に卷いて、ベッドへ腹這つた男はそう訊いた。彼は答へないで、白く乾き切つた脣を嚙みしめた。顔が紫いろに變色し、眼のまわりには黒い、くまがかつてゐる。

「いやだね。葬式なんて言葉は、な？」

「――」

「お前の母親が死んだからつて、何も、太陽が西から出るつてこともないや。それと同じに、お前が俺のものでなくなるといふこともないんだ。俺は安心だ。ね？」

武山は、ライタアをおもちやにして、火をともしたり、消したりしてゐる。

まことゝ太陽は今、昨日と同じ軌道を、一糸の亂れもなく正しく沈んでゐる。窓ガラスをぎら〳〵とオレンヂに染めて、娘の肩にふりそそぐ光は、燦然とまばゆい許りだ。

「いつまで泣いてればいゝんだね！　おいでよ、さ！　ここへ――」

男は、情痴の表現で、この場の空氣をどうにかなるものだと思つてゐる。

「あなたに、人間の涙が解るものか！」

「解りますよ。だから、一緒に泣いてやらうと云つてんぢやないかおいでつたら」

「そんな親切がある位なら、私を一人にしといてよ」

このホテルでの、このブルジョアの息子との生活が、世にも破倫な行爲であつたかの如く、彼の神經は支離滅裂した。

晝を忘れた夜許りの生活、シネマと、踊りと、自動車と、酒場と、カーテンを閉め切つた部屋との、それ等の選り好みをするための二十四時間へ續く、二十四時間だ。それがプロレタリアートの娘のしてもいゝ生活か！

彼女の父親の失業と病氣とを知らせて來た時、武山は、夜となく晝となく、二つの腕の中へ彼女を監禁した。この社會的畸形兒は、

「世にも可愛ゆきもの！」

と口はゞつたいことを、女にくり返し乍ら彼女の肉親的な愛情を鐵の踵で幾度踏みにじつたか知れない。

次に彼の家族から、金の無心を云つて來た時も費ひ果して、二人には二分の金も殘つてはゐなかつた。しかしその時は武山も、父の家へ金をとりに歸つた。この男ほど、金のない時を慘めに見せる男はないだらう。この男は金が失くなると、虫けらよりも小さくなつてしまふのだ。

彼の父の武山を社長に持つ日本綿糸株式會社は、目下大きな勞働爭議が起つてゐた。大規模な工場を二つの帝都に持つてゐるその工場のストライキ記事は、大新聞の廣い紙面を奪た、全國的なセンセイションを呼び起してゐた。女工の幹部連は、社長夫人に面會したが夫人は貴族的な言葉で、要求全部を一蹴した上に、必要以上の侮

辱をあたへた。しかしそれは彼女等のイデオロギイをはつきりさせることに役立つだけだつた。大勢の女工たちは、男性の後援許りを頼りにした從來の人形女工とは違つてゐた。

自ら團結し鬪爭の火をたいた。

波は新聞記事を讀んでは昂奮狀態を示すやうになつてゐた。武山はそう云ふ時の波はよけいに美しいと云つた。

――そう云つた頃、武山はポケットから札束をはみ出させてホテルへ歸つて來た。

「ねえ波、家へ行つて見ると、がんじような男工が四五人でね、女工を引き連れて、又マザーに面會强要さ。馬鹿な奴等だ」

「何が馬鹿な奴等なの」

「考へて見ろよ。あゝやつて奴等の小さい要求のために死にもの狂ひに鬪つてゐる積りだらうが、俺がマザーから一言の無心で、うまうませしめて來る、百分の一の要求さへも容れて貰えないんぢやないか」

武山はポケットからつかみ出した札束を、無造作に彼女のひざの上に投げた。

「そう云ふ殘忍な言葉より外に、あなたには云ふことはないの」

「何を云ふんだ」

「あなたの父と云ふ人にあなたは何か云ふべきではないの。勞働者について、あなたは、そんなことより外には何も感じない？」

「俺に依つて親父が枉げられるものか。强者が勝つんだよ。そして俺も强いんだよう！ 俺を相手にそう云ふことを云ふのは止せやい」

不眞面目に言葉を亂して、波に手をのばした。

「しらない！ 私は、あなたを嫌ひになりそうだ。私の親たちもこの百分の一の金をくれてやると、あなたを神樣にしてくれるだらう喰へないと云ふことは、流行り言葉ぢやないんですからね」

「ぢや早く屆けろ。わざ〳〵持つてゆくことないだらう。電報爲替にでもするんだ。一人にしといたりすると、俺、何をやらかすか分らないんだ」

「薄馬鹿見たいなこと許り云はないで、出して頂戴。何だか胸がドキ〳〵して、母さんに逢ひ度くてたまらなくなつたの」

波がベッドから下り、片足をスリッパに引つかけた時、ボーイがだまつてノックして入つて來て、だまつて去つた。彼は、母親の死を報じた一片の賴信紙を運んで來たのだ。

波は、のめるやうに、リノリユームの床に倒れた。彼女は嵐のやうに、そこで全身を狂はせた。

今の今、彼女の冷智の中へ、母の死は强烈な絶望を示すばかりだつた。

――軟體動物――

土手の上の郊外電車は、客を滿載して、よろけ乍ら疾走してゐた

土手の腹では、月見草が煤煙に塗れ乍ら、黄色い花を開いた。土手下には雑草の小徑を經て、魚のくさつたやうな匂を放つ下水の流れが澱んでゐた。下水には、かまぼこ板のやうな橋が、二間置き位に渡してある。その橋こそは、どぶ川に添つて、ずらりと細長く建ち竝べた百軒長屋へゆく唯一の通路だ。軒の低い、まるで、こゝに棲む自由勞働者の頭の如く、押へつけられた軒竝だ。

黄昏が迫つて、煙色の靄がもつれ初めた。波はどうしても、眞直ぐに家へ歸れなかつた。殺人犯人のやうに、そこの草むらに身をかくした。彼女は今まで惡い生活をして來た自分を許せなかつたのだ。

濃藍の空で、星が流れた。しかし、こゝへは星屑さへも落ちては來ない。

遠く、この大都會の中心には、むれ〳〵と炎の柱が燃えてゐる。燃えたゞれてゐる罪火の淵だ。そこには、金と機械と、人間と犯罪とが、あらゆる色彩と音調とを織り出してゐた。贋造紙幣を作る男と、墮胎常習の女とが抱き合つて、資本主義文明を呪ひ、資本家と勞働者とが鬪爭の血を流し、國際的な投資家が十七の異國娘のために、數萬圓の損失を苦笑し、凡そ動くことの可能性を持つた物體がそこでは、互々が血みどろに、鬪ひの火に油を運んでゐるのだ。波は苦痛を感じ乍ら、目の前を見た。

襦袢に等しい、浴衣洋服を着て、裾から赤い布を出し、背中に子供をくくりつけた、女の一群がゐる。女の群は、大勢の男たちと一諸に波の家をとり卷いてゐるのだ。波の母親が鮮人である如く、それ等の女の半分は鮮人だ。

——哀號！ 哀號！ 哀號！ 哀號！

が、波の胸を衝いた。その附近一帶の男女が、この悲しみの家をとり卷いて哀惜の意を表してゐる時、卑怯にも波は、くさむらに、身をひそめてゐた。

家の中から、やせた老人がひよろ〳〵と出て來て、人々に何か云つては頭を下げてゐる。

後から、脊の短い二人の子供が、しく〳〵と泣き乍らついて出た父と弟妹等だ。父は餘りに痩せやつれ、弟妹は極度に小さく凋んでゐる。人々の渦は、三人の不幸に直面した者をかこんで、更に高く泣き聲をあげた。

波は目の前の眞つ黒な蝙蝠の群を見た。蝙蝠は彼女に集つて來てはた〳〵と舞つた。朝鮮語で女が二人、高い聲で話し乍ら、土手下の小徑を歩いて行つた。聞き耳を立てゝゐた波はびつくりした。

彼女の母は、長く休んでゐた松永脱脂綿工場へ四五日前から出てゐたのだ。ところが今朝出勤するとすぐ彼女は死に待たれてゐた。消毒の蒸氣に吹きあげられて、桃色の軟體動物にされてつき返されたと云ふのだ。

——本當なのだらうか？ 波は我と我が、髮の毛をつかんで立ち上つた。火の様に熱した波は、母の死骸のある部屋へ走り込んだ。

「うおウー　うおウー」

と、父は波の前へ崩れて泣いた。波は屍を見た。

髪の毛のない眞赤な頭。眼も脣も鼻も耳朶も、魚のあらひのやうに裂け目が入つてむくれ上つてゐる。石灰のやうな、骨、爪、歯、カルシュームの匂ひと酸つぱい蒸肉の香。

波は桃色の軟體動物を抱きあげた。その歯と爪を、つる／＼の頭を、調べるやうになでた。

手足の指の數を調べた。三本の指は一本にかたまつてゐた。一本の指は半分に煮詰められてゐた。全身に血の粉が吹き出てゐた。乳房は二つとも穴を明け、下腹部は、小山のやうに臓腑を吹いてゐる。

「あの工場は、二度目には、斯ふ云ふ死にざまをさせやがつたのだ！　三度目は、三度目は――」

父親は狂ふのかも知れない。

二度目！　さうだ。母は十八の時、すでにその工場で、腕を半分とられたのだ。

朝鮮へ渡りはしたが、そこで喰へなくなつた父が、十六の鮮人の娘を、驚くべき安い金で買つて内地へ持つて歸つたのだ。

十六の花嫁は朝から夜中まで、脱脂綿工場で働いた。十八の春、工場の機械は、彼女の右腕を半分喰ひ千切つた。半分に千切れた腕の、ギザ／＼をけづり乍ら、外科醫師は云つた。

「何て、氣持ちのいゝ太つた腕だらう。こんなに若さにぴち／＼した腕だもの。切口はすぐに癒えちまふ」

醫師は、うつとりと鮮血にみとれたのだ。

工場はそれだけでいゝと云ふのだ。たかゞ朝鮮女の腕半本だ。傷口をなほして、一生馘にしないと云ふ條件で押へつけられてしまつた。その頃のその工場には鬪爭指導者がゐなかつた。彼等はその問題を宿命であるかの如く錯覺し、あきらめた。

しかし、不思議にも、彼女の勞働賃銀は何年經つても上りつこなしだつたのだ。

それから、今度は、これなのだ！

「波よ！　敵をとつてやつとくれ！　おつ母は、浮ばれんよ。おつ母は、こう云ふ死に樣では、死んでも死に切れんよ」

ぴく／＼と絶えず體をけいれんさせて、父親は、死に切つてしまつた。妻の屍に一抹の未練と怨みとを示した。弟妹は、泣く涙をからして、ぎら／＼と眼を光らせてゐる。

「敵をとつてくれとは何です！　父さんも鬪ふために、しつかりするんですよ」

「さうだ！　皆で屹度、敵をとつてやるからな」

戸外の群集の中で、さう叫ぶ幾人かの自由勞働者があつた。

――捨てる生活――

今日こそ、此の亂倫の生活を捨てるのだ――

波はその決心のために、生々とした。彼女は朝の太陽が、窓へ昇らないうちに起きて、バスへ飛び込んだ。骨の髄まで、ブラッシュをかけて洗ひ流したい氣持ちだ。朝鮮人を母に持つた波は、青春の日に一度も太陽を感じないで生きてゐた。だから富豪の息子の戀に驚異を覺え、その強權的な支配に、溺れてしまつた。しかし彼女はすぐこんなことが、生活の目的でないと云ふことをなげくのだつた驚異から直ぐに飽滿に墮ち、次に退屈を感じさせてしまつたこの男なのだ。指先きにくつついた、チューインガムのかすを捨てる時のやうに巧みにはねて捨てるべき男だ。

波は又びち〳〵と血のみなぎる腕を振つた。

簡單に、シヤワアに掛つてしまふと、街へ浮氣をしに出かける女のやうに、剃刀を使つた。剃つた首が、蒼く匂ふ。彼女は濡れた斷髮の前髮を龜甲の櫛で上にはねあげ乍ら、日本風呂を戀しく思つた。眞白なガウンをまとつて部屋へ歸ると、部屋中には陽が、縞蛇のやうに射し込んでゐた。

武山はベッドに腹這ひ、煙草を卷いてゐた。さも、素直な人形女を持つてゐる男のやうに、彼はゆつたりと構へてゐた。

「何だい？　だまつて起きちまつてさ。もう一度、さあ――」

波は聞こへない風をした。彼女はカーテンをしぼり、廻轉窓をすつかり開け放つた。

午前の街は生きて、どく〳〵と脉打つてゐる。丁字路には、殺人的な交通がくり展げられ、交通巡査は黄塵を浴びて、戰爭の初まる前のやうに、忠實に兩手を殺氣で充し、全身を酷使してゐる。

武山の手首がのびて來て、波の腰にからみついた。彼女が身をかはそうとしたはづみに、着物は男の側までたぐり寄せられた。奇麗に剃り上げられた、薄青い首すじを、男はじつと見てゐた。彼はふつと立ち上つて來た。

「ちよつとだよ！」

「いや。いやなの！　だめ！」

「だつて――。俺は何だつて、この女に、こんなにはげしく惹かされるのかしら」

波は怒つたやうに敏捷に、外出用の洋服を着てしまつた。彼女は冷い顏に、歪んだ笑ひを浮べて、腰に手を當て、そこへ突つ立つて何か考へ込んでしまつた。

「ああ、だめかなあ。では俺も一つ入つて來ようかな」

「ええ、そう！　入つていらつしやい」

「お茶を飲んでからにしようか」

「でも私の頭、まだ乾かないのよ。少し陽に當てるから、その間に入つてくるといゝわ」

「頭に陽を當てる奴があるか。馬鹿、よつちまふぜ」

「あなたぢやあるまいし。ね？　今朝、今朝つてもう晝だけど、パアラーへ降りませうよ。私少しアルコール分をとつてきしやつとし

たいのそれまでは、おつくうで何もしたくないわ。だから、さあ〱、早く入つて、ゆつくりおめかしして來るの」

「ぢやあ、キス」

「今、接吻、したアくなアい。こんなひげ面痛くて駄目。ちやんと剃刀當てて來るのよ。ゆつくり！」

「憎い奴だな。とても今、素晴らしく美しいんだがな」

「ふッふ！」

「ふふッかい？　しかしお前はいゝ女だ。俺にこんなに金を使はせてゐてちつともありがたがらない女は、お前が初めてだ。金のために服從する女には僕あ、飽きちやつてるんだからな。教養のある女だつて云ふ奴等でも、俺の金の前には、賃銀奴隷と、何等變るところはないんだからね」

「そうですかァ。その位にしておいて、入つていらつしやいよね」

「ぢや、入つて來る。明日と云ふ日がないぢやなし、だ」

彼はやつと勇ましく、バスの扉へ姿を消した。——明日と云ふ日が、どうだと云ふのだ——

波は、くすりと笑つた。

彼女は小さいトランクに、質素な洋服だけをざつと詰めてふたをした。高い金を支拂つた數々の洋服や、日本着物が、その互々へつく裝飾品と共に、二つ三つのトランクには、一杯つまつてゐる筈なのを、波は忘れてしまつたのだらうか。彼女はもはや、寶石への魅力をまつたく失つてゐた。

武山が出て來る時分だ。彼女の乾いた斷髮から、鼈甲の櫛が床へ拔け落ちて、三つに割れた。彼女は靴の踵でそれを踏んで、扉の外へ出た。

彼女は電車を横切ると、次の停留所まで歩いて行つて、新聞を買つた。

武山の父の、日本綿糸の爭議は、矢張り新聞の三面に堂々と書き立てゝあつた。

そして三面の下の方に、松永脫脂綿工場にも職工待遇上、種々奇怪な事實が暴露したため、不穩な空氣がみなぎり、早晩、爭議に入るだらう。と云ふ記事が出てゐた。それ以外にも工場閉鎖。ストライキの記事は珍らしいことではない。

あの、片腕ない母親が鮮人の女として十何年間、むごたらしい取扱を受けた母親が、最後に慘死してから二週間經つてゐた。波は腹に力を入れて、新聞を讀んでゐるうちに、胸いつぱいが朗らかになり、胸中が或る決心のために、ときめいて來た。

松永工場へ行つて、皆に會つて見やう。そして自分に出來る仕事があるならば、力の限り働きたい！

だが波は、喰つてゆく生活を忘れることの出來ない女だつた。誰が、自分と、父と弟妹を食べさせてくれるか。

波は手早く廣告案内欄を開いて、アスファルトの一隅を默々と歩

いて行つた。案内欄と云ふ所には、素敵にいろんな職業が女性を求めてゐるものだ。

女中、乳母、女醫、ダンサー、婦人外交員、女給、看護婦、麻雀ガール、派出婦、婦人留守居、求妻、嫁求、等等々。この位はどの新聞にだつて載せてある。だが、その中のどれに波は相當すればよいだらうか。彼女は幼い頃脊が曲る程、手內職をやつたし、それから臺を持つて、デパートの賣り子に進出した。

そこから民衆食堂の給仕女になり、ダンスホールの踊り子になつた。そう云ふ過程は、彼女をニヒリスチックにするより外に思想的に何の作用もしはしなかつた。彼女は奔放にステップを踏む女となり、ルンペン性のニヒリストだつた。

そして痛む足を休めるために、武山の甘言に乘つた眞似をした。だが、波の思想が動いて來たのだ。永い間、麻醉劑をかけられてゐて、今それが、漸次に戻つてとまるやうに、心の傷口が化膿し初めた。

しかし、武山と別れて見ればすぐその場から働かなければ食へない。だからと云つて、自分や父親を養ふためには何をしたつて恥ではない、とは云へないのだ。

そう云つて見ても、誰がこの一癖ありげな女を、重要な仕事のために雇つて呉れやう？　プロレタリアートは自分達の子女に、勞働以外に、專門的な何一つの仕事をも敎へておくことは不可能なのだ。

何によるこ　も出來ない。波たちのやうな種類の女よりも、すべての點で、數倍優れた職業的な、女性大衆が、地球からあふれる程の大勢を示してゐるのだ。

波の母は、その慘死の刹那まで、家族のものを養つて生きて來たのだ。しかし波はそれだけが、最上のものとは思はない。家族と自分とを養ふためには、これからさき何をするか知れないが、喰つてゆくと云ふことだけでは自慢にもならないし、それは目的でもない。

彼女は夕方近く、松永脫脂綿工場の知り合ひの職工に、會ふことが出來た。波はそのあまりに强い壓力的な鬪爭意識と、陰慘な血氣とに壓倒された。鬪爭は決してロマンチックなものではない。勞働者は芝居をしてゐるのではない！　波は母のことを云つて泣いた。

しかし、外來の彼女に職工は何も云へはしない。

「あんたは、今すぐ工場に入ることは不可能だから、爭議が初まるのを待つてゐなさい。ストライキが起きたら、いろ〲手傳つて貰ふこともあるから、其時まで、ほかで働いてゐて貰ひ度い」

と附け加へた。

波は赤い、昂奮した顏をして、工場から出て來た。――でもなぜもつと自分を受け容れてくれないのだらう。私の眼には屹度、あの人達の氣に喰はない影が宿つてゐるに違ひない。私の全身に、一刻も早く拂ひ落さなければならないルンペン根性がこびりついてゐる

のだ。

――白きボヘミアン――

彼女等は、虹のやうな嘘を吐いて生きてゐる。仲間同志一緒の床に寢ながらも、互ひがどこの者だか、本當の名前も、年齢も前身もさつぱり分らないのだ。常に前の生活の名前を捨てゝ新しい名前を使ふ。てんでに、誰に遠慮もなしにルルちやん。徳恵子さん。ナオミさん。ミリ子さん。お葉さんとつけてしまふのだ。

だが、波は松永工場にゐる知り合ひの職工に手紙を出して、その返事を貰ひ度いばつかりに、名前を變へないことにした。

私は波と云ひます。どうぞよろしく――

彼女は客や先輩にそう挨拶した。だから彼女はそこでは波ちやんなのだ。

そこは夜が來れば、光り輝く魔性の殿堂だが、晝間は、垢じみた一くれの廢墟だ。

波はその地下室に棲息した。一階の廣間の廊下からは、眞鍮の手すりのついた細長い階段が見え、よく磨いた厚い扉があつた。その扉一重の内部を、客は密室だと云つて、いろ／＼に取沙汰してゐる。まつたく、客にとつて秘密室に違ひない。しかし彼女等、凡そ奴隷にとつては桎梏の牢屋なのだ。

街にいつせいに灯がつくと、ナイト、クラブにもその大理石のやうな建物に、ほんのりと、ネオン、サインが輝き出した。すると女達はどこからともなく現れて來た。

少女をお伴に連れて來る女、自動車でやつて來るごうせいな女、うつむき勝ちに街の片隅を歩いて來る暗い女、傲慢と冷靜とをモットーとしてゐるかのやうに、すまし込んで來る洋裝の女、御自慢の自動車を自分で動かす金持の男と入口で車をとめてゐる女。

波はその時分、冷い顔をして、地下室から現れた。彼女は淺黄のワンピースを着て、細い腰を、黒いエナメルの帶でかたく締めてゐる。首飾りも、腕輪も、指輪もない、無裝飾の證だつた。女たちは今度新しく入つた女は寢卷き見たいな服裝だね、と云つた。だが淺黄の質素な洋服は彼女によく似合つたし、オレンヂいろの紅を使つた化粧は、その服裝に似合つた。

酒と煙草と夜ふかしとに、蒼白くなつてゐる女たちの中で、波は新鮮だつた。淫蕩と無禮をことゝする酒場の客は、だから、新しく現れた女の腰を、だしぬけに抱いたり、首をつかんだり、ひざの上に抱きあげたりした。

――奴等を人間だと思ふから、口惜しい涙も出ると云ふものだ。酒場の女にとつて、客は雨の降る日の傘なのだ。用途は一つしかない

――波は地下室へ逃げて寢るとき、そう思つた。

「君は、年いくつ？」ルルと云ふ女に客が訊いてゐる。客は必ず、

最初にそう訊くものらしい。
「十九ですわ」
女たちは、大てい本當を答へはしない。十九なら、二十二だと云ふし、二十七なら、十九ですわと云ふ。
「そう。それぢやまだ、處女だね」
「えゝ。どうにかね」
「ハハハハ。子供を一人産んだ處女かい。毎晩遲く歸つちや、亭主と一喧嘩なんだらう」
「あら、亭主のゐる處女なんてあるかしら。ひとりですわよう」
「それぢや、どつかへゆく勇氣あるか？ 一度ドライヴする？」
「えゝ、するわ。いつでせう。私、ドライヴだけなら大好き！」
「ドライヴだけなら？ まあいゝ、同じことさ、いつゆかう？ しかし斯ふ云ふ所の女(ひと)は、實によく素つぽかしちまふんでね」
「たいへん度々御經驗がありそうですこと。ぢやあ、これからすぐにゆきませうか」
「行かう。これからなら、めしでも喰つてだね」
「えゝ、それから踊りにでも何でも……」
「ぢやすぐゆくか」
「あのね。でも外出の罰金が入るのよ」
「そうだつてね。いくら」
「この頃十圓」
「いゝよ。又一緒に歸るから、その時でいゝだらう」
「そう、でもね、支配人の奴、うるさいのよ。出てゆく時出してかないと。ですけど、私、ぢや立替えときませうか」
「ううん、君に立替えて貰はなくてもいゝよ」
すると女はにこ〳〵して、支配人久野のゐるボックスへ金魚のやうに泳いでゆく。
「福井さんたらね、私いやでしようがないのにどうしても連れて出るつての。これ！」
彼女は器用に十圓の札びらを切るのだ。
「あゝいゝとも、行つておいで、何をする人だい。」
「×銀の重役だつて。うるさいつたら」
彼女は支配人が差出した四圓の配當金を帶の中へはさんで、氣前のいゝ銀行家の所へ戻つて來る。そう云ふ調子なのだ。
波は、そうやつて次々に出てゆく女たちを見た。十圓の六圓を店が取り、四圓を白色奴隷がふところにして、店から一夜消へてゆく
夜がふけるにつれて、自動車の出入りがはげしくなる。客は全くブルジョア階級の、肥えた太つた中年以上の紳士許り、殆んどが知名の人ばかりだつたから、その豪奢で、不遜な遊蕩振りは、波を驚かせるに足りた。ダンスホールなどは足下へも寄りつけないやうな亂倫と、破壊と、消費に充ちてゐた。
この酒場は、ナイト、クラブは、辯護士と、醫師と新聞記者上り

の男と、一人の資本家とで、やつてゐる。合資會社の組織だつた。實際には資本家の田邊が殆んど一人で出資してゐたが、新聞記者上りの久野は、支配人と云ふ肩書きで、勞働出資なのだ。

辯護士も醫師も、毎晩やつて來ては、女達から、先生々々と云はれ酒をフリイで飲んでふざけてゐた。彼等は皆看板で、月給を貰つてゐるのだ。

それは、田邊が、法律的な、情實があつて自分の名前では經營出來ないからだ。

だから、支配人久野は、自分の名義になつてゐることを奇禍として店の利潤を全部着服しようと試みてゐる。

田邊は辯護士を抱き込んで、久野に法律的に制裁を加へやうとした。

期日までに、帖簿を明らかにせねば、引つばられるのだ。しかし帖簿には大穴が開いてゐる。久野は金策に駈けづり廻り、そのからくりに浮身をやつした。

久野のからくりの蔭には、常に女が犠牲に供せられる。

客も女も歸つてしまつた深夜、久野や、田邊や、他から入つたブローカーなどが、腕力で喧嘩を初めるのは始終のことだ。

料理人はナイフを持つてじつと喧嘩を見てゐた。バァテンダァは酒瓶をかくした。

地下室に棲んでゐる久野の妻君や、子供たちが起きて來た。波も素足に靴を引つかけて上つて來て見物した。

それが、たつたさつきまでの、華々しい歡樂のあとである丈けに誰も彼も、暗憺とした。

しまいに田邊はそんなことを訊いた。

「おい、波ちやん、君はいくら、久野君に間代を拂つてるの」

「十七圓」

「食べるものは、どうしてるの？」

「方々へ行つて食べて來るんですわ」

「へえ、あんな所に、子守つ子と一緒に入れておいて、十七圓かいその金も帖簿には記入してないね。それも店の收入の一部分だぜ」

「そんなことを云へば、家内なんか、報酬なしで、店のことをすつかりやつてますよ」

「だけど、君の家族は、店のものを食べて、たゞで店に泊つてるんだよ。帖簿を見れば、蓄音機の針が三日にあげず買つてある。帖簿についてゐる油繪の額つて云ふのは、いつたいどこに掛つてゐるんだい。ジョニーウオッカーをこんなに買つてるが、それにしては金が入つてゐない！」

その明くる日から、久野は又百方金策を講じて歩いた。それにはいつもの手で、女が利用された。

これはと思ふブルジョアに目星をつけると必ず、その客へは、店での一流の女がついた。

經營困難に陷つたと云ふ店は、そうやつて支持されてゐた。

「今度は、波ちやんだよ。支配人が眼をぎよろぎよろさせて、このごろ見て許りゐるよ」

女たちは、そう云つて赤い大きな口を笑ひで醜くした。

實際波は、この頃、メキ〱と女つぷりを上げて來た。

――武山父子――

紫緞子のカーテンを、すつかり閉め切つてしまつて、わざ〱その部屋をねつとりとした空氣で滿した。

葉卷きの匂ひ、人間の皮膚の匂ひ、果實の高い香、素性のいゝ化粧料の匂ひ、それ等が洋酒の香と一緒になつて、濃い密度を持つてゐる。二階の別室。

今夜も又、常連の映畫記者が、有名な映畫監督と共に、中野、廣瀨、小杉、などゝ云ふ映畫俳優が、氣どるまいとして氣取つた色調を織り出してゐた。

氣の若い女たちは、いつも花々しく彼等をとり卷いてゐる。

係りの女が、素晴らしい音を立てゝ、巧みにシャンパンを拔く。

そこで、拍手が起り、皆揃つてグラスを手にした。

波もその中の映畫俳優に呼ばれて、そこへ來てゐた。

「グレタ、ガルボ! 若いキツネ――」

と、映畫記者に批評され、波が、ぐつと悶へて黑い眼の底を光らせた時、男ボーイが波を呼びに來た。

廊下で、支配人久野が待つてゐた。

「今度の係り君ぢやないけど、一寸、三階へ上つてくれない、すまないけど」

「なぜなの」

「日本綿糸の武山さんが來たんだよ。社長だよ。賴むからすぐ上つておくれよ」

この間、ホテルへ捨てゝ來た、武山の父が來たのだ。

「誰と一緒?」

「二人連れで來てるんだ。いつも來る並河鑛業の竹井さんが、連れて來てくれたのさ。いゝお客だから賴む」

「ぢやあすぐゆく。あと、二三人よこさなきや困る」

波はコンパクトをあけて、水色の粉をはたくと、三階の階段を、靴音高く上つて行つた。

「あゝ、波ちやん、來てくれたね、こつちへおいでよう」

並河鑛業の專務で偉張つてゐる竹井は、上氣嫌で立ち上り、波に握手した。

「有名な武山氏を連れて來てやつたんだ。御禮云へよ。この子がこゝのクヰンですよ。波子と云ふんです」

「きれいな人だね」

と、武山は微笑で答へた。

武山は、高い鼻と、少し窪んだ鋭い眼を持つてゐた。眼尻にしわの多い、がつちりとした面構へだ。

武山は頭に一面、眞白な繃帶を卷いてゐた。

「この頃、武山さんの會社に、ストライキが起きてゐてね。それで武山さんが、一週間許り前、お孃さんを連れて、自動車で、門を出てこられると、ふいに横合から、石がとんで來たんだよ。世間がうるさいから、知らない處で遊び度いと云つてゐられる」

竹井は說明し初めた。

「新聞で承知してゐます。新聞には硫酸を投げつけたと書いてゐましたわ」

「新聞のことは嘘だよ。新聞はすつかり本當を書くものではない。この頃の新聞はどうも、勞働者にけしかけて困る」

「令孃の顏が、一皮、つるりとむけてしまつたつて、書いてあつたぢやありませんか？」

「嘘を吐け。そんなことが書いてあるものか」

竹井は武山を見て恐縮笑ひをした。波もそこにゐる他の女も愉快そうに笑つた。

武山はぢろりと波を見た。

「こゝへおいでよ」

彼は重々しい聲で、しかし優しく波を呼んだ。

「君は面白そうな女だね。藝者には、斯ふ云ふのがゐなくて、興味がない。抱いてやるからこゝへおかけ」

武山の示す彼の膝へ、波は腰かけた。ロンドン仕立ての、やゝ派手な、鐵色がゝつた洋服に、同じ色のサンマーコートをつけてゐる武山は、男性的な重味を持つてゐた。

「ボップの女も、こうやつて見ると美しいね。それに、この足は素晴らしい。俺は外國にゐた時分、女の足許り見て來たよ。それからこの女はいい形の首をしてゐる」

「氣味が悪いわよ。そんなエロチックを云つて」

一人の女は、冷い白さで、からかつた。

それから今度は竹井が、

「いつも君等に訊くことだが、例の祕密室は、いつたいどうなつてるの。專らの評判ぢやないか」

と、來る度に訊くことを、訊いてゐる。

「だから、云つてあげてるぢやありませんか？　世間の云つてる通りですつてさ」

「本當かい？　おい！　凄いつてね。入口からすぐ浴室になつてるつて云ふんだらう？」

「そう」

「それから出る時は、向ふの部屋へ、つまり密室へ出るんだつてね。片方は、緋の夜具で、片一方には、アメリカから持つて來た、素敵なベッドがある。そう云ふ仕組みだつてね。みんな本當」

「本當。彼女等は、ベッドの上に、白蛇のやうにうづくまつて、支那鏡を見乍ら、人を待つてゐる。そう云ふの」
「へーえ。浴室に使つてる石なんか、とても珍らしいものだつて云つてたぜ。どう云ふ人を入れてくれるんだね、一體」
「倶樂部の正會員だけよ」
女たちは、にや〳〵笑つては、酒を呷つた。
「どうせ、莫大な會費をとるんだらう。どの位？」
「私たちそれを知らないの。經營者と會員とだけが知つてゐるの」
「入會費と云ふものでまとまつた金を、とるんだらうね。女はこゝの女に限られてるの」
竹井と、もう一人の若い男とは、いやに熱心に聞いてゐたが、武山はくす〳〵笑つてゐる。
「しかし、××が眼をつけないのかね」
「あなた方にとつて、何でもないぢやないの。そう云ふことの出來る人なんか、金で踏みにじるくせに！」
「こいつ――」
武山は、波の頭を輕く押へた。
「此頃の若い女、一人殘らす左傾してるのかね。うちの女工達も、今度こそは、立派に團結してやつてるからね」
武山は、體をゆすぶつて、笑つたので、波は彼の膝を下りた。
「まつたく、いゝ足の子だね」
小さいゆり椅子に掛けてゐる波の片足を、武山はふいに持ちあげて、兩手を中に入れた。
彼等はそれ以上、馬鹿げたことも出來ないで奇麗に引きあげて行つた。
だが彼等が、自動車が來ないうちに、門口に出てしまつたので、そこで面白い光景にぶつつからねばならなかつた。
と云ふのは、彼等が門口へ出ると同時に、ビルヂングの前を曲つて疾走して來たパッカードが、そこに留つた。
「なあんだ！　酒場らしくもないや。教會へ青い灯をつけたんぢやないか」
「ふざけるない。君の連れてゆけと云ふ、ナイト、クラブと云ふのは此所なんだ」
二人の若い青年が、ぞんざいにふざけて、下りて來た。波は聞き覺えのある聲だと思つた。へえ？　ホテルへ置いて來た武山ぢやないか――素早く向ふでも、血走つた眼をぴつたりと彼女につけた。
波は冷くおどけた横眼で、かたわらの、父の武山を見た。彼も冷く笑つた眼で、じつと息子を見てゐたが、うまく視線をはづした。そして丁度そこへやつて來た自動車のステップへ急いで足をかけた。
波へ据りついた若い武山の眼が、波の視線に倣つて、クッションに落ちついた父の姿に氣が付いた。
「おや！」と云ふ眼で、彼は見直したが、これも巧者に、素知らぬ

ボーズに戻つてしまつた。二人の青年は肩を並べて玄關の扉へ消へた。

波は苦笑をかくし乍ら、勢ひよく扉を押した。そこに武山が彼女を待ちうけてゐた。

連れの友人の姿は見えない。

武山は、兩肩で怒つた溜息を支へた。

「おい！　ヴァンプ！　一思ひに殺しちまはうか」

「あゝ、それでもいゝ。新しいピストルでも買つたの？」

「いゝ度胸だ。お前を最初に奪掠する時に使つた、おもちやのピストルぢやないぜ。とにかく、すぐ出ろ」

「出られるものか」

「罰金つてやつを出せば、いくらでも出れるさ。いくらでも出してやるぞすぐに二人で出よう」

「やだわよ」

「ぢや、靜かなところがあるか。二人つきりになれる――」

「二人つきりになれるところなんかない」

「あゝそうだつけ。地下室があるんだらう？　凄いつて云ふぢやないか。そこなら二人つきりになれるんだ。そこえ案内しろよ」

「そう簡單に入れるものか。話しなら、どこでだつて出來る」

「何云つてやがる。とにかくいゝ部屋へ連れて行つてくれ。先づ飮んでからにしよう」

波は、三階へ案內した。

「さつきまで、あなたの親父がゐたの。さつきは、驚かしやがつたぜ。ちよい〳〵來るの」

「知つてるのかい。こゝに――」

「來る。地下室へも」

「やな奴だね。今度は、地下室でぶつかるのかな」

「一諸に來た人、羽山さんでせう。二人で來たものは、二人で飮むものよ呼んで來るわ」

降りて行かうとする波を、武山は抱きとめた。

「波！　何だつて人をだましたんだい？　なせだまつて、逃げ出したりしたんだい」

「そんなこと、あなたに答へたつて、何になるものか」

「僕は、口惜しくつて、男泣きに泣いたぜ。理由を云つてくれ。なぜ捨てたんだ？」

「金持ちの息子が、嫌ひになつたのよ。あゝ云ふ金の使ひ方は、貧乏人の娘を耐えられなくするんだ」

波は、階段を駈け下りた。下には支配人が立つてゐた。

「いゝ客らしいね。少しカクテル出してね。君、ちつとも此頃飮まないぢやないか。女が飮んでくれなくちや、いくらも出ないや」

「飮み度くないのよ」

「そこを我慢して、飮むのが、商買ぢやないか。巧く足下へ流すつて方法もあるしさ。女の飮む分だけ、薄く作らせればいいだらう？」

「そのとほりね。タンサンへ色をつけて、カクテルに見せかけて、飲むことにでもしませう」
「さうさ〳〵。そんなに毎晩々々。强いもの許りのんぢや、命が續かない」
羽山は待たせてあつた、武山の自動車へ、女を連れ込んで、どこかへ消へてしまつたあとだ。
波は突差に、そこへ通りかかつた、痩せぎすのナナの肩をつかんだ。
「三階にとても美しいのが來ててよ。ナナつて人ゐますかつて訊いてゐたわよ。上つて御覽」
「ああ、さつき上つてるところ見たわ。實は遠慮しちやつてたの」
「違ふ、違ふ！」
波は手を振り乍ら、階下へ降り、舞踏曲のレコードが廻つてゐるサロンの前で、足音をしのばせると、摺り抜けるやうに、地下室へ降りた。

――地　下　室――

「マムダ――マダム、ゐない？」
支配人久野の妻君は細々とした暗い灯のもれて來るドアの中から返事した。波は扉を開けた、妻君は片隅の方へ、三人の子供を竝べて痩せてゐた。
「今頃、何しに降りて來たの。又叱られやしない」
「私に何か、來てゐなかつた。手紙見たいなもの！」
「來てれば、あんたの部屋へ、入れてあるわよ。久野は、郵便物なんか何一つ、私の眼には觸れさせつこないわよ。電話室だつて私には、交通遮斷なの。いつ女から掛つて來るか分らないんだからね」
「そんなことないわ――。ぢや私、自分の部屋を見て來るわ」
波は、天井の低い、じめ〳〵した、洞窟のやうな部屋を出ようとした。
「あ、波ちやん！　あのね、一寸訊くんだけど、此頃、久野、こんな事云つてるのよ。又、誰か一人女を提供して、まとまつた金を出させなきやならないんで、當りをつける爲めに、毎晩おそくまで、出歩いたり、泊つて來たりするんだつて、斯う云ふの。みんなお前たちに樂をさせてやる爲だなんて云ふの。本當なのかしら？」
妻君は慢性的な嫉妬のために、蒼ざめて、眼のまわりに黑いわを作つてゐる。陽の當らない、地下室の空氣は、彼女の肉體と一緒に精神をも、しいたげた。
「多分、本當だわ」
「外へ、又女が出來てんぢやないかしら」
波は、やつれた妻君の眼をさけた。
「そんなことないわよ」
「さうね。まあいゝわ。私は諦らめてゐるんだから。早く上つてゐ

ないと、又やかましく探しに來てよ」
青い風船のやうに、十燭の電燈が、ぶら下つてゐる。かさの變りに蜘蛛の巣が、それを包んでゐた。カビ臭い奈落だ。便所の匂ひがする。板一枚の、この底には、甘い音樂もさゝやきもない。酒の匂ひも、香料の匂ひも、輝いてゐる人間の顔もない。あるものは、子供の不健康と、妻君の恨み、つらみだけだ。
久野の家族の凹形の部屋と、脊中合せに、もう一つの、小さい穴がある。
茶いろの裂け目のある。疊の上に、子守女は、堅パンのやうに倒れて、いびきをかいてゐた。
妻君が毎晩、變な呻き聲をあげて、良人に何かを迫つてゐると、子守女は、くるりと、波の方へ顔を向けて、くツくツと笑つた。
肉慾の苦しみは、こんな所にも、夜毎に盛り上る朝になつて見ると、久野は顔や手に、爪で引つ掻いた跡を殘してゐた。彼は、ずるい、小さな眼で笑ひ乍ら、血の滲むところへ、鹽をこすりつけた。
「いやだ、いやだ。八年も十年も連れ添つた女房を、抱いて寢る奴が、あるものかい。女房は、女に非ずさ」
地下室は、そんなところだつた。そして、波は、破れ疊、二疊敷位しか借りてはゐないが、月々、十七圓の部屋代と云ふものを、搾りとられてゐた。
波は、自分の部屋へ入つて、先づ、子守つ子の鼻をつまんで見た
少女は足をじたはたさせて怒つた。
波は、虫でも探すやうに、注意深く、そこらを探した。手紙らしいものはない。
返事が來なければ、ならない筈なのだ。彼女は、爭議に入つた、松永工場の、職工幹部に手紙で何かを訴へ、その返事が來てゐる筈だつた。
ひよつとしたら、久野が？
彼女は、當然そう云ふ、疑ひを持つた。——今晩こそ、久野を、とつちめてやらなくちや。もしレポをかくしてるんだつたら、なぐつてやるから——。
波は、そう決心すると、電燈を消して、子守つ子を踏まないやうに、廊下へ出た。
すると、出合頭に、ぐつと、彼女の腕をつかむものがあつた。
「誰だよう！　何をするのさ」
「いゝ加減にしろよ、波ちやん」
久野は、案外弱く、腕を引つ込めた。
「三階の貴公子が、とても怒つてるんだよ。君のことを、あいつは淫賣だとか、工場爭議にかぶれてる不良だとか、安つぽいスパイだとか云つてさア」
「何云つてるの！　あとの二つは、あんたのつけたりだわよツ。あの男は、そんなことを云ふ材料を持つてないよう。あんたが、そん

な材料持つてるのさ。そうふといころを見ると、やつぱり握つてるんだね。」

「そんなことがあるものか。さあさあ、三階へ顔を出しておくれよ君が、一時間ほど、姿をくらましてゐたおかげで、あの客、ジンを一本、一人であけちやつたぜ。君のおかげと云ふものさね」

「ごまかさないでいゝよ。かくしてる手紙を出しとくれ！　さ！」

「手紙なんか、僕あ知るものかい」

「出さなきや、私は今夜限り、出てゆきますよ」

「出たりしてたまるものか。さつき歸つて行つた武山さんだつて、君に眼をつけてくれ**た**んだ。この次、ゆつくりするやうに來ると云つて、僕に賴んで行つたんだよ」

「問題が違ふぢやないか　手紙は、出せないんですかよ」

「出すよ。必ず出すから、一先づ三階へ上つとくれつてば。解らないのかい。ほんとに後生だから。手紙は、あとで出してあげる」

「破いたんだね！」

「さあ、君はクキンだ」

久野は、波を横抱きに、抱へ地下室を蹶つて、歡樂の階上へ駈け昇つた。

板一枚上は、悅樂の花房だ。陰謀家も、策士も、あばづれも、生娘も、みんなとけ合つて消費の盛花だ。

時計の針は、誰かゞとめなくては、走るやうに、廻つてしまふ。

三階の氣短かな客は、床に倒れて、波が身近くやつて來たことを知らない。

この醉ひ痴れた客に、女たちは水一杯持つて來ることを、忘れてゐる。彼女等は、自分をより高く許價してくれる男のところへ集つてゐる。

――地下室の朝――

夜のうちに、子守女が荷物をひつさげて、逃げてしまつた。妻君は朝遲くまで、不貞寢してゐるし、久野は料理部屋で、朝つから、ソセージをつまんでは、ビールを飲んでゐる。

彼等の子供達は、午後は階上へ上つてゆけない掟だものだから、午前は、さんざん、二階三階を駈け廻つてゐる。

波は、逃げ出した子守つ子が、敷つぱなしで行つた寢床を、たゝんでしまつた。眼の中が赤くなつた。しいたげられたものは、いつか、斯ふ云ふ風に、自由をさがして逃げてゆくのだ。

波は四角な切窓へ腰かけた。窓の外の空地には、綠の芝生が萌え小さい、白い花が咲いてゐた。

そして、そこから河が續いてゐる。河は、波の位置から、並行にむしろいくらか、上の方へ展つて、靑々と水をたゝへてゐた。船が通るとみどりと白の波が、ゆらゆらとゆれる。

つい目の先きには、石炭船が、もやつてゐた。昨夜もそこで夜を

明したのだ。船の夫婦は、むつつりとして、口も利かなければ、表情も動かさない。その女房は、だまつて、朝陽を浴びて洗濯する。子供たちを抱いて、河に向つて小便をさせ、やがて、湯氣の立つ御飯を釜のまゝ、亭主のところへ運んでゆく。

彼等は、夜になると、サロンのバルコニーを見上げて、白い眼をむいた。歯ぐきを表して、苦つぽく、顔を歪めた。

そこに、棲息する、悲しき白色奴隷をさへ、彼等は、羨み嫉妬するのだ。――どこに變りがあらう。結局同じ、プロレタリアだ！たゞ手を振り合ふことだけが残されてゐる許りだ。いつ、この、生活形式の違ふ、プロレタリア同志は團結するのか――

こちらを向いた、船の女房の眼が光つて、波を認めた。船の女の憎しみに充ちた、眼に河の面の蒼い色がうつつてゐる。

彼女は、何かをぶつつけ、度い衝動を感じた。血がづき／＼と疼いた。

――この生活は、悪い生活だ。どの階級からも憎まれねばならないのだ。そしてこの生活を捨てることは、一枚の古ハンケチを捨てるよりも易いことだ。しかし彼女はこの生活を、肉體を賣らなくてもいゝからだ、と云ふ理由だけで、選んだのではなかつた！　絶對失業の父親や、弟妹たちが、彼女の經濟の中にゐる。

朝から、琥珀色の強烈な液を呷り、タクシーで雑踏の街を泳ぎ、レビューと戀との映畫を見、どこかに眞實の男が待つてゐるかのやうな、夢想にかられ、そしてそれに、うたがひを持たない酒場の女それは現實だ。彼女等は、自分自身を慘めだとは思はない。――それは知らないからだ。眞綿の目かくしをされてるからだ。彼女等、華やかな奴隷の一團は、早く目さめなければならない。波が二階へ上つて見ると、久野も子供らもそこらにはゐなかつた。三階へ上ると、そこに、しなやかな、日本着物を着た女が、白蛇のやうにのびて、ソフアの上に寝込んでゐる。

どこをさがしても、久野は波から姿をかくしてしまふ。早出の女達が、ぽつ／＼やつて來た。小柄な可愛い女、猶太人の女房のやうに、太つて善良な女、彼女等は、やつて來るとすぐ、商賣用の歌のメエキヤップを初める。そして、昨夜の彼女等の踊りの行動に就いて語り、笑聲をあげてゐる。又流行の、美容術としての眼や脚線の手術に就いても彼女等は語らねばならない。

――夜――

曉にも似て、ほのぼのと夜が來た。賭事と淫樂と、陰謀と、法悦とを織り交ぜた、酒場の夜が來た。灯の華が滿々と充ちて來る。てすり全體に、白ペンキを塗つて、光つた眞鍮をつけた、三階のバルコニーは、すぐ眞下が青い波の面で、丁度上等の船室にゐるやうだつた。

河向ふの遊歩場の散歩者も見へなくなつた。バルコニーでは、老

武山と波とが、向ひ合つて腰かけてゐる。武山の秘書と云ふ、太つた男も、女たちも、引き潮のやうに、ゐなくなつてしまつた。
「だから俺は、花柳界の女には、五年も前に、飽きてるんだよ。ねう、くね〳〵と皮肉ばつかり云はないんだ」
「三百圓も、どうするんですよ」
「要らなければ、貯金にでもして殘すさ。屹度幸福にしてやる。俺だけの有名な男の世話になつてゐれば、何も恥ぢやなし、又、捨てられるなんて、心配すら、大丈夫だよ。いつだつて復讐が出來るぢやないか」
「御冗談でせう。私は、あなたのお妾には、向きませんわ。それよりも、工場で使つて下さらないかなあ」
「え？　工場で何をするのさ。女事務員かね」
「あら、女工にですよう。そしたら少し位、可愛がらせるわよ」
「君見たいな女に、女工になられて、たまるものかね」
「私、あなたの會社へ入り度いわ。そしたら私、屹度偉くなるわ。」
强い、偉い、女鬪士になれ……」
「そうだ。お前は、俺の工場で、訓練されれば、大した鬪士になれる女だよ。しかし、それぢや俺たちの仲間に叱られるからよ。一匹でも、お前のやうなものは、發生を妨げてやるんだよ。しかし、それと、これとは話しが違ふ。お前は抱いてやる事もいゝ女だ。餘り白くない、肌の少し荒目の女は、とてもいゝんだ。こゝの支配人の云つてる通りだよ」
武山の熱つぽい體が動いた。
「いや！　この憎々しい、ブルドック！　ブルジョア」
波は拳固をかためて、武山の鼻先きへ突きつけた。武山は彼女のその手をつかんだ。
「女工にでも、何にでも入れてやる。お前が一人、入つたからつて俺の工場は、みじろぎもしない」
巡航船が、けたゝましく爆音を立てゝ通つた。
波は、無論髮の毛一本、許しはしなかつた。波はベルを押した。
女たちが上り、ボーイが、酒とオニオンを運んで來た。
女たちは、武山をとり卷いて、チエリーブランデーに唇をそめた
こんな場合、肚黒い大實業家は、肚ではたとへ、馬鹿々々しくても女等へ惡い顏を見せるものではない。
「まあ！　このコート。素晴らしいコート！」
夏乃と云ふ女の眼が輝いた。ソフアの片隅にたゝんである鉱色のオーバコートを、彼女は抱きあげた。
「いづれ武山さんなんかゞお召しになるんですもの。大したものに違ひないわ。一寸、私に着させて見せてね」
濃くない空氣が、垂れこめてゐて、皆、いゝ加減高調してゐたから、誰一人、夏乃に注意したものはない。

彼女は空色の美しいドレスの上に、其のオーバコートを羽織つた彼女は無邪氣な笑ひ聲を立てた。
腰に手を當てゝ、氣取つて煙草を吹かしたり、コツ〳〵と歩いて行つて、武山の肩を抱く眞似をしてゐた。
しかし、誰かゞ氣がついた時には、夏乃のオーバを着けた姿が、忽然と消えてゐた。

――火群――

千圓の金と、コートを持ち逃げした女が、酒場の女であつたゝめに。武山は警官を呼ぶことを斷念しなければならなかつた。
だから久野は、頭を振つて云ふのだ。
「俺は、あんな寛大な立派な態度の紳士を、見たことがないよ。しかしね波ちやん。内心乾度、不愉快には違いないよ。だから、すまないが君、お邸まで送つて行つてあげなさいよ。君が送つてあげさへしてくれれば、それで萬事濟むんだからさ」
波は眼を据へた。
久野さん！　今日の夕刊を、なぜかくしたの？　それからさきに返事聞くよ」
「かくさないよ。ちやんとあるよ」
「どこにさ？」
「男ボーイに訊いて御覽」
「男ボーイはね、支配人の命令で、波に見せてはならないと云はれたから、すつかり燒いちまつたと、云つてゐますよ、夕刊はこゝへしか入らないと思つてゐるのかい」
「あやまる。あやまるよ。俺が惡かつた。實はね、松永工場の、ストライキの記事が出たんだらう？　君に見せると、すぐ飛んでゆくものだと思つたものだからね」
「やつぱり、先達頃の、手紙の返事も、すつかり見てゐたんだね。それでそう云ふことを云ふんだらう。私の望は、何よりも、あそこへ行き度いことなんだ」
「まあ、まあまあ、落ちついてをくれよ。君に店を出られると、實に損害をかうむるのだよ。無理にもゐて欲しいんだよ。それに今晩いやだらうが、武山が君に送らせて與れと云つてるんだからさ、逃げた夏乃を救つてやると思つて。そうしておくれよ、ね？」
「波はそんな慈善は、しないんだよ」
――ストライキを起したらすぐ組合の方へ來て見ろ――工場の知人の職工は彼女にいつかそう云つた。
外は滿月の光で、晝のやうだつた。波は白粉を落した淺黑い顔に血潮をみなぎらせた。あの團結した火群の中へ、とにかく頭を突つ込んで見なくては氣のすまない波のことだ。波はそこで、何を見、何を敎へられなければならなかつたゞらうか。●



實話

村の人の生活

青山幸子

三ヶ月の封鎖された生活を終へて雪國の百姓は三月を迎えた、まれに雪が降つても午後の太陽で直ぐ消えた。

小川の雪が溶けて越後山脈の雄姿を浮べた。軒下にさがつたつららが一日と短かになつて陸軍紀念日の頃になるとなくなつた。その頃、百姓はお正月の殘りの鹽鮭を燒いて酒を呑んでゐた。つららが溶けてなくなると、屋根ひさしが漏つてくる、これを雪漏(シミセレ)と言つて、漏るのがあたりまいだと言つて夏になつて修理もせずに、ほつとゐた。何所の家でも先づ臺所と納屋には必ず桶があつて、天氣の好い日でも牛のよだれの樣に漏つて、それが腎臟病患者の小便の樣に薄赤くなつてゐた。

霜が消えて、仕事場の藁くずの上に太陽がのぞくと百姓は新しい堅い藁靴をはいて、三四枚綴つた絆天の上に細帶を締めて、乾燥した鍬の柄を小川の水に浸して握り、野良へ出た。野良は去年の儘になつて荒れて冷たかつた。野良に出た百姓は草津節を鼻にかけて唄ひ乍ら土を掘つた鍬目からは蛙が眞二つに切られて死んでゐた。それを手につまみあげて子供の樣なあざけりを青空に向つて飛した。晩になると米を洗つた白く濁つた水で風呂を立てて這入つた、アカが蚊虫の樣になつて浮びあがつた。臺所では漏藁で夕食火を燃すので煙がたてこめて、咽喉をちく／＼さした、大根おろしと味噌汁と麥飯が茶碗に盛られて、それを各自が鼻先につきつけて三杯程喰ひゲク／＼胸に突かいさしてしやくりをして熱いお湯を呑んだ。

亭主新造は大きな頭をてら／＼さして、熊の樣に齊生したヒゲの

顏には無理に押しあげた樣な鼻があつた、その鼻からは粥の樣な濃厚な汁がたれた。新造は眞黑な掌で拭いては着物を毆つた。その掌に盃を持ち酒を呑んだ、一本の銚子が空になると新造は妻に次の銚子を入れさした。酌を嫌だと言つてゐる妻を無理に引張つてお膳の脇に座らせて妻の靑白く疲せこけた頰をブツと吹いた。妻は氣味惡く泣き出しさうにして臺所へ逃げた。臺所で息子の三藏と二男の作松がキヤ〱と笑つたら新造は怒つて呶鳴つた。一番小さな女の子が妻の膝へ泣き乍ら逃げて行つた。字の讀めない早熟の息子達は泥のついた野良着を釘に引掛けて昨夜行つた遊廓の話などをして赤切の足に繩緒の下駄を引掛けて、おやぢの新造に聞えぬ樣に忍び足で人相惡くこそこそ、柴戶を押開けて出て行つた。

　新造は今日野良で五作爺さんから聞いて來た、區長さんの女中が來月子供を産むと言ふ噂を妻に言つて聞かせて、息子達の女郎買ひに出たり、女中部屋廻りも、みんなお前の敎育が足りないからだと言つて、妻の頰を大きな拳で毆つた。妻は毆られた片頰をおさへ、二枚の前齒をむき出して非鳴をあげ、息子の不行儀は、お前が酒ばかり呑んでゐるからだと言つた。去年の盆に役場へ煤拂に雇はれた時、宿直室で女書記と庶務係が眞裸になつて、足角力を取つてゐたのを障子の破れ目から見た話をして、息子たちをかばつて、無理がないといつた。新造は醉が廻つてくると盛に手鼻汁を飛して鼻をぐす〱さした、新造の母親が見かねて、肥料資金もあるし、稅金もあるから銚子一本きりにせと次の間から言つた。新造は怒つて火箸で毆りつけて、娘のお豐が町から錢を持つてくるから安心しろと怒鳴つた。母親のお淸は大粒の淚をぼた〱落して床に這ひ込み、關節の凝りをもんで空セキを苦しさうに繰返してゐた。

　五時を打つと、朝飯の用意に臺所へ下りた妻は、竈の火を眺めて、來年また苦しまねばならぬ陣痛と姙娠脚氣を思ひ出してゐた。新造は目がさめると、肥料資金を借入る爲めの借用金證書に貼る收入印紙を買ひに出掛けた。代書人が書いた綺麗な字の下に新造はウジの樣なキタナイ字で坂上新造と自分の名前を書き込み、小さい縞の財布に入れて町へ出掛けた。

　親父が町へ行くと息子達は、戶棚よりゆうべの殘の酒を呑んで、燃き火をして、赤く腫れてゐる腫物をごり〱かいた。阿母にしかりつけられて、野良に出て鍬を振つたが昨日の樣に蛙の眞二つはあまり見えなかつた、息子達は母親の前などは何んとも思はずに昨晚の女の肌觸りやのろけを話しあつてゐた。

　太陽の光線は眞綿の樣に和らかであつた。

　百姓は思ひ〱の姿をして野良へ出て畑を打つた。力自慢、女郎買話、飯八杯喰つた話などをした。

　晝休みに百姓は畑に莚を敷いて辨當を喰つてゐると、岡の方へゆく役場の女書記竹田の紫の袴と裾が風にまくりあがつて白い太い脚

がちらちら見えた。百姓の若者達の目は脚に集つてくすくす笑つてゐた。岡の展望の好い所で書記の磯野と二人は寢そべつて——君戀し——を歌ひ出すと子供が後から續けた。岡を下つた二人は、組み合せた腕を解いて、道で出逢つた樣に話を作つて野良にゐる百姓を茶化さしたが、見て來た子供たちが——男の役人が女の役人を抱いて山で頰べたを吹えたよ——と吐鳴つたので二人は逃出して、こそこそ役場の門をくぐつて笑つた。

百姓達の話が、まじめな村會の話になると、この畑が近い中にグランドになると言つて、みな嚮してしまつた。歌も唄はずに耕した。麥が七八寸に伸びて多茱が薹をふいて來た。

新造は晩の八時頃町から舟で大豆粕を積んで歸つた。大豆粕を納屋に入れると新造はしけたビスケットを子供の前に投げ出して、髮を結つてゐる妻に當り散して二本の酒をあほつて床にむぐり疲れてすぐ寢入つた。息子達はその晩も女中部屋廻りに出掛けた。

櫻が咲く頃までは百姓は田打を終へて畑に蕪と胡瓜の種子をまいた。眞綿の樣に和らかな太陽が照つた。野良でたんぽぽが咲き綠の若草が密生した。

學校の先生は百姓をごま化し、敎育視察、自敎會、敎育研究とかの名目の下に百姓達の判らぬ言葉を使つて一日二日と兒童を休ませてゐた。それ等の會合は唯寄り集つて、男敎員は下らぬ女房の批判や藝妓の噂などをし、女敎員は虛榮的な着物やパラソル、尖端的な文學青年や、他人の戀愛關係を羨やましそうに話してゐた。男敎員は女敎員に酌さした。

新造の娘、お豐が町が不景氣だと言つて住込んだカフエーから暇を貰つて來た。面白い恰好で波打つた黑い髮を切つてハイカラな着物で歸つた、母親は斷髮になつたのを怒り毆つた。が父の新造は錢さい持つてくるなら何んだつていいと言つて六拾圓をお豐から貰つて、借入れた肥料代金の內濟として返濟した。事實お豐は町に出て男性の暴逆にコリコリして女の爲めに徹底的にその惡い制度を廢すべくカフエーの女將と喧嘩してきたのであつた。お豐は歸つてから每日煤臭い寢室で薄暗い五燭光に向つてプロレタリア文藝の二十枚位のものを書き、處女會、女子青年會などには全で反對な演說をした。息子達はお豐が歸つてから女中部屋へ行かれなくなつたのみか、每晩お豐から社會上の原理や、マルクス主義の話などを聞かされて度々居眠した。お豐からそんな態だから地主や金持に茶化されるのだと小言を頂戴してメリケンを頂いてゐた。

新造や息子達はお豐が一文にもならない原稿を書いてゐるのが不滿であつたが、息子達はお豐に言ひまくられるのを恐れて默殺してゐた。父親の新造は職を索ねろと言つた。お豐はしわくちやの戶籍謄本を風呂敷に包んで町へ出掛けた。會社、銀行、郵便局、電話交

換手、そして再び彼女はこりこりのカフエーまで出掛ける勇氣はあつたが、あの靑白い顔の價値が商品と同じに慘落するのを思つて――女給入用――の引札を默殺して家に歸つた。金持で女に甘い男とでも結婚しやうかと思つてみた。

新造は道で友達に逢ふ度に お豐の働き口を聞いてゐた。それで家の主人の世話で村長の家へ女中に行つたらどうだと言はれて、新造は初め役場の女書記の話などを頭に浮べてみたが、お豐が氣が向いたらやつてもいい、言つた。お豐は働き口の見付からない反抗心から承諾した。そして手箱と二三のプロレタリヤ傑作集と原稿用紙を持つて村長の家に雇れた。初め不滿であつた新造も、村長の家へ娘をやつておけば殿様に小姓を差上げた位で、まさかの時に骨折つて頂けるし お前の娘は顔立が好いから、うまく行けば村長の妾にも、又息子の嫁にもなればお前には金錢に不自由がないと隣家の老母にそのかされると、新造はすぐその氣になつて自慢して歩いた。その晩からは銚子を一本宛餘計に呑んで錢の取れない息子達と、近頃姙娠して氣を腐らしてゐる妻に、自分の無理難題を通して暴れてゐた。

村の百姓は肥料資金がねえ〳〵と言つてゐる裡に代かきが終つて田植が來た。そして二三日中に靑い田になつて了つた、新造は一反に拾圓價の肥料を投げ込んだから反當り五石平均も取る様な自慢話をしたが、農會の技術員が來て反當りの施肥を調べたら、窒素だけは二貫目 はあつたが、燐酸と加里が全然這入つてゐなかつたので、技術員は追肥料として燐酸を一反に一貫五百匁加里五百匁を入れろと敎へた。だが新造は第一、錢がなくなつてゐた。それから加里なんか施したつて稻が眞黑になつて伸びないから駄目だと言つて技術員をあざ笑つた。技術員は愛想を盡して歸つた。

田甫に植付が濟とその後百姓の仕事も手がすいて來た、しかし一般勞働者の失業の様になつて暇の時は、極端な貧乏に出逢つて行かなければならなかつた。

新造の息子作松は日本石油新潟工場へ日雇に出掛け、三藏は隣家の染吉と臨港會社へ陸上げに雇れて、毎日九十度を下らぬ土用の太陽の下に赤銅色の背中を出して働いた。彼等には二十五錢の麥藁帽子と四十錢の天竺木綿のシヤツさい買求める錢がなかつた。その頃日石新潟工場では事業の縮少から職工の整理が始められて、會社の重役はその馘首案の設定にふけり、極度に彼等が作つた彼等の爲めに武器の代用する法律を亂暴にふりかざしてゐたが、弱い職工の背後には力强い指揮者がある事や、ストライキで職工が目覺めるのを恐れてゐた。日刊新聞は彼等の資本家によく仕へて、充分な退職及解雇手當などと發表してゐたが、事實工場では職工のストライキの對策として日雇を急に多く雇ふてゐた。解雇職工には十四日分の解雇手當と、勤續年數に依つて解雇料を支拂つたが、內幕では重役や

工場長は腹を肥して別邸を作つたと言ふ噂もあつた。勤續年數三十ヶ年に餘る老職工に轉勤を命じ、完全に轉勤不能な事を承知しきつた行爲であつた。僅かな金で首を切つたのが五十名程もあつた。職工は總ストライキをやる爲めに同志を集め相談したが、日雇人夫の裏切を恐れて沙汰止みになつた。職工と人夫は始終喧嘩をしてゐた。人夫は毆られてゐた。

作松は毎日職工に毆られてゐた。が日當二圓也と言ふ高い勞賃にそれも我慢せねばならなかつた。惨落されて行く勞働價値に出逢つても彼等は目をつぶつてゐた。

お豐は村長の家に住み込んだ時は、失業から意地になつてゐたが、矢張り二三日するとカフエーよりはよくはなかつた。毎日十時頃からはとても忙しかつた。土地の問題、村のグランド、その請負師のゴマ摺りまで一々村長の應接室を訪問してゐたがいづれも儲ける爲めに村民百姓をゴマ化す方法と手段の話だけであつた。その際村長は一々尤らしい大きい嘘を言つて感心さしてゐた。その度毎にお豐はお茶とお菓子を經濟的に盛り上げた皿を出して、彼等支配階級の儲け仕事に助力せねばならなかつた時、お豐はその百姓の悲しみと村長の瞞着を材料にして女人藝術へレポを書いて送つた。

でも、いつの間にか一ヶ月ばかりたつた。東京の大學に這入つてゐる息子の好義と、妹の蘭子が夏休みで歸つてくると言ふので、お豐は七月下旬のある日リヤカーを曳いて町の停車場まで迎ひに行つた。暑い日だつた。蘭子の戀人の伊藤は制服制帽のまゝで出迎えた。蘭子は斷髪丸顔の洋裝で、見るから淫蕩兒の樣に悩ましい鼻があつた。好義とお豐は村の出來事を話して先になつて歩いた。後から蘭子は伊藤と餓鬼の樣にチユチユと音を出した。好義は度々お豐の肱を突いてゐた。お豐は自分の體がお人形さんの樣に感じられた。そして戀を弄ぶ彼等に對してムラムラと反抗心が燃えた。

蘭子は戀人に贈るハイカラなネクタイやステツキを買つて來た。毎日裏の山で白い天幕を張つた中で處女とか童貞とか言ふものを捧げるとか捧げないとか言つて、泣いたり笑つたりしてゐた。蘭子は晩になると親達の前に結婚話や、ダイヤの指輪が欲いと言ひ、戀人の伊藤が來ないと暴れ廻つて親達を手古摺してゐた。そのあと始末は必ずお豐に伊藤を迎ひに出した。戀人の伊藤は醫科大學の學生であつた、お豐が迎いに行くと道々の話に、蘭子に飽いてゐるとか言つて立木の影でお豐のゐりあしに接吻を盗まうとした事があつた。

好義は毎日遊びに出て村の若い美しい女と戀愛と言ふよりも弄ぶ爲めに努めてゐた。

そして東京から覺えて來た東京行進曲や淺草行進曲を口笛にして歩いたが、彼れは彼れの周閤に集つてくる稲子胡爪の樣な足をした女には不滿があつた、それでお豐にのぼせ切つてゐた。お豐が水汲みや洗濯する所へ來て、明日街へ活動寫眞を見に行かないかとか、

ドライブをしないとか言つて、お豐が一人でお庭の草などを取つてゐると五圓やるからどうかのと、言つたが、お豐は受け付けなかつた。お豐は事實、よく働く下男の勸作が好きであつた。

お豐は朝の多忙と息子と娘の戀愛ゴッコの準備が終つたので下男の勸作と立話をしてゐたら奥樣が洗濯と中食を命じた。勸作は電氣得業士になつて、東京に出て電車の運轉士になれば日給三圓もとれると言つて常に懷中には早稻田電氣講義錄を押し込んでゐた。

やきもちやきの奥樣は、お豐が姙娠してゐると言ひ出して、或る晩、お豐を自分の部屋に呼んで極めてしんらつに膣が黑くなつたとか、肩が疲せたとか、胸がふくらんだとか言つて恥をかかした。お豐は口惜しくて毆りつけたかつた。そして奥樣の前に氣味の惡い程勸作をほめ續けた。お豐が瘠型で美しいのに反して、奥樣はビヤ樽を顚倒した樣であつた、そして女子靑年會、處女會の幹部などが村長を訪問して長く話してゐると必ず扉の影に立つて、——一寸あなた——甘たるく呼んで村長が何にかと行つてみると羽織のひもが曲つてゐるとか袴の結が嘘だと言つて村長の態度をやいてゐた。訪問客はあきれてかへつて行くのであつた。それらが、役場の女書記を誘惑させるに原因してゐたが、しかし村長は一方奥樣の命令ならどんな無理でも聞いてやる義務があつた、現在の村長の地位も財産も皆な奥樣の持參金から獲得したものであつた。

村長は家に居る時は務めてお豐の歡心を買ふのに種々な物をくれた。奥樣の目を盜んだキスには一回毎に銀貨二粒宛を握らした。晩には湯殿へ呼んで背中を流さしたりしたが、事半途にしていつも奥樣の——一寸あなた——に防げられてゐた。そして豚の樣な奥樣の目が人相惡くなつてきた。

或る時お豐は慘々に村長の惡口を言つて、力まかせに村長をねじふせて金椽の目鏡を取つて捨てた、村長は案外に弱かつた。お豐はその晩の中に逃げ出して來た。

お豐は家に歸つた口實として村長と好義の横暴を一々能辯に並べ立てて口惜がつたが、新造はそんなことがどうして惡いと怒り、世の中には女郎と言ふ職業もあるぞと火箸でお豐の肩を毆つた。

追出されたお豐は友達の花代にたのんで泊めてもらつた。花代は市街自動車の車掌だつた。運轉手が錢も取れるし待遇もいゝからお豐に運轉手をすすめた。作松と三藏が區長の女中に姙娠さした相手だと言れて警察へ引かれて行つたが、事實は學校の先生と××が仕組んだ芝居で罪を三藏に被せて、竹棒で頰の裂る程毆つたと言つて三藏は頰にある五分巾の傷跡を見せた。そして一番憎らしい奴は學校の淺井先生だと言つた。駄菓子屋の娘お國をだまして子を娠ませ僅か五圓の錢で內緒に濟ませた、お國は發狂して鐵道自殺したと言つた。必ずお國の仇を打つてやると言つて以前の樣にのろまの男ではなかつた。彼は目醒めかけていた。村の道を背廣が通ると彼れは

隱れて手當り次第に砂や泥を投げつけてゐた。
　九月のある晩花代とお豐は東京へ逃げ出した。
花代は就職口を索ねながらお豐と花代は計らずも××黨の組合事務所へ行つて無產者新聞に　味を持ち始めた。そしてお豐にも見るやうに誘めた。興味は谷間の水の樣に湧いた。さびしい懷から五錢氣張つて必ず讀んでた。
　鐘紡事件、市電ストライキの眞相が細かに報道されてあつた、お豐はこれ等の事件と、村での村長や學校の先生と比して、まるきり問題にならない程に村長たちののろまさが判るとお豐はあざけりたかつた。十月の初めに淺草の地下鐵乘場で偶然勸作に逢つた。電氣得業士になると言つて夜もろくろく寢ないで學問した勸作が地下鐵の修理工夫となつて泥まみれな菜葉服とシャベルを動かしてゐた。お豐がその理由を訪ねたら、勸作は、東京で學問なんか何にもならないで、電氣學なんか鼻糞程の爲めにもならないから講義錄を古本に賣つたら七錢取つて一日のバット代になつたと言つて苦笑した。そしてお豐に自分の居所である淺草の裏通りの難しい小路を鉛筆でバットの空箱に書いてくれた。
　時は流れる。
　大都會には種々の方面へ修落し行く階級を突き落さうとする多が來た、市營バスの事故が日日に增した。命がけの鬪爭と生存戰が續き流れた。お豐達はその激しい渦にいら立つた魂で驢馬の樣にのろく泳ぎ續けた。
　お豐等は毎日ペーブメントの埃を吸つた。日給七十錢の車掌見習は十三時間の勞働を搾取されてゐた。村で太りかけた肉體がまたたく裡に、鉋でけずる樣に瘠せこけて行つた、青バスの監督達は瘠せて行く彼女達を見て姙娠したのだと思つて變テコの質問を發した。
　ある晩、勸作達の住む深川のアパートに同志の一人が警察に引かれて行つた。腕ぶしの强い勸作だけが、やつと逃げたが巡査に毆られた額に生傷が出來た。勸作はお豐のところに逃げてきたが、そこにも警官の瞳が鋭く光つた。
　日本石油の作松がお豐に面會かたがたメーデーにやつて來たが、そして東京が比較的華やかでなく、勞働者が多くてその團結の强いのに驚いた。それからお豐にあつて村の出來事を話した。
　裏の畑がグランドになつて毎日新潟から學生や金持の息子や娘達が來てゴルフやテニスをするので附近の畑がふみにじられてゐる事から、村長が公金を消費して行政裁判に持出されて東京へ來てゐる事や、學校では女先生が私生子を產んだことなどを話した。
　ある日上野驛前の市電停留場にお豐の村の村長が背廣に山高をかむつて、側で奥樣が丸髷を結つてポカンと廣告塔を見てゐたが、村長夫妻はお豐の車も知らずにバスに乘つた。
　お豐は村での、金のない爲めに羞しめられた事を思ひ出して、唾が吐きかけたかつた。車の動搖に村長夫妻は度々のけぞつた。

生田花世さんがある日の

春月さんが死んでから今までの仕事は、私にとつて本當にひどい勞働でした。死なれた事は悲しいがこの三年間さん〲我儘で苦しめられたので重荷が下りたやうな氣がします。二日目には「詩人は勝手にブラ〱させてもらふものだ」と來るんですから。遺書で私に謝つてあるがそれが私には何で謝つてあるのかよくわかりません。

春月さんの死後三年間交渉のあつた靜岡の女に遺骨が拜みたければ出てくるやうにと、手紙をやりましたら、且那と正妻と三人できました。その女は政治ブローカーの妾なので、さうした特殊な境遇にゐる者の常として一方に非常に物足りない、みたされない物をもつてゐてそれを春月さんによつてみたされやうとしたのですが、その女にとつては春月さんには限らなかつたでせう。春月さんも又どこまでその女と同棲したいと思つたか疑問で、其女はまた妻妾同居と云ふ事に興味をもつて、詩をかいたりしてゐたが、さう簡單にはいきません。

神戸の女の方の輪かくが春月さんは好きだつたのですが、その女が非常に冷たい性的でない女なので、その女でみたされぬものを靜岡の女みたさうでとしたのです。二人が春月さんをひつぱり合をして私は床の上の置物みたいであつたので、何もかもほーつておきました。

春月さんは事實に即さねば何もできない人でした。資本家攻擊の詩をかいてゐますが春月さんにとつての資本家が、どこであるかはおわかりでせう。

春月さんは詩人すぎた故に私は苦しみました。彼がもつとも詩人らしく生きたこの三年に私はもつともくるしみました。前の十二年間は彼は子供のやうであつたが最後の三年間で私達二人は分裂するだけ分裂したのです。私も色々くるしみ出たり入つたりしたが、死んでからの後始末のために、出て了はなくてよかつたと思ひます。

私は去年頃から――この男、いつそ死んだ方がいゝな――と思つたりしましたが私が殺す事も出來ませず――。春月さんがどうしても苦しくてやりきれんどうしたらいゝだらうと申しました時私は「死になさいと私が云ふと自殺幇助になるから云はない」と云つてました。それで死んだのにはおどろかないが、その後の勞働でひどくつかれました。

彼は「かたすみの幸福」をのぞむ氣持と、それをにくむ氣持がさうこくしてゐました。さうした矛盾のある男で、加藤武雄氏が、彼は大きな墓石をきらふと云つてゐたが、大きな墓石をのつけてやれば彼はきつと微笑するだらうと云つておられましたが、ほんとにさう云ふ男でした。

天神町の家を出るまでは家庭爭議もおこしけんくわもしましたがその間はいゝのです。けんくわをする氣がなくなると兩方とも氣分がはぐれて御勝手にと云ふやうな氣持になります。かうして春月さんは生と死、マルキシズムとアナキシズムの交錯した氣持をもつた後で死ぬ方へ方針をたて、私は生きる方へ方針をたてました。私は戀愛でもはじめてやらうかなどと思ひましたが、そんな若さが自分にある事がたのもしく思はれます。

現在私は時計の振子のやうな態度に、こんな風に(手つき)をしてひどい奴だとにくむ心と又やぶれるやうなかなしみにおそはれます。遺書をみた時は心がぐつと春月さんの沈んだ海へひかれ自分自身海の底にある心でしたが、なんで死んだと考へると私の心はグッとーこんなにー

死んだときいた時は、十中七まで情死だと思つたので一緒にとびこむつもりはなく、車中くやし涙にむせびなから現場に行きました。何しろ春月氏は女に誘はれて行つたのですから。二人で死んでゐたら上で冷やかに笑へるやうな氣持を私はもつてゐました。にくらしいのは死ぬ四五日前に、原稿をしらべて、もう少したつと花世女史がムッソリニーのやうにえらい女だとわ

16.

話

かるなどと云つてゐました。春月氏も自分が死んでも私がとりみださないと云ふ自信はもつてゐたのでせう「むつゝりしてゐて、時々爆發する男だ」と三上氏のおつしやる通りほんとにさう云ふむづかしい男でした。よく花世さんの旦那は、小學校の敎師か、會社員だと丁度他の女にも目もくれないで平和にやつて行くだらうに、詩人の細君になんかなつて氣の毒だなどと笑つてゐました。ゆめ〳〵詩人の亭主なんかもつて、私のやうに苦勞をしなさらないがよいと思ひます。

林芙美子さんの滿洲便り

大連波止場——雨がざん〳〵降つてゐます。三等旅客の佗しさ、私は一寸しよげてゐます。警察の人にしらべられて（私一人）一人で下船、大陸に來た感じ、いまさら人生もへちまもなくなつて、美しいフツトウに立つてゐます。ハルビンの一人旅はキケンださうですが、何くそ…：元氣を出して行つて來ます。（八月二十六日）

大連にて——大連は朱色の街です。馬車のカラカラ鳴る鈴の音が好きなので、馬車に乘つて、町をみました。チンギンは拾五錢也。滿洲の空は天氣セイロウにして、十月の風が吹いてます。アカシヤのゆさゆさした並木道をロシヤの踊子が通つてゐます。二十七日朝直路ハルビンへ行きます。コウリヤンが繁つてゐるさうですが、馬ぞくは大丈夫だそうです。女馬ぞくになりたやと思つた時代もあつたのですから、樂しみに汽車に乘ります。淋しい、淋しい。（二十六日）

ハルビンにて——驛に降りた私のかくこうを空想して下さい、とにかく、あつちをむいても、こつちをむいても、でかいロシヤ人ばかり、アプトンシンクレアを讀んでゐた紋つきのロシヤ女の後にしつゝいて驛の出口に出ましたが日本の宿ひきがないので「マダム！」と呼びかけたのを幸ひ馬車に乘つて宿に來ました。街中ゴルキーみたいにえらい巡査や馬車屋の顏、支那の兵隊が、こゝではゐばつてます。貴女達のきてるのより、づつといゝ洋服が二三圓でかへます。怒らないで下さい。ハイヒールだつて三圓も出せばパリです。內地の金が二倍以上になります。

ハルビン——こゝでは夜間の五時頃までキアバレーがあります。日本のレビユーなんてこゝのを見るとダンチです。ハルビンの街は思ひ出の街、遊びの街です。國のない白色露人の小さい街、支那人の街とくらべて活氣がありません。娘達は家の中で食ふや食はずの生活をして



ハルビン郊外の農家——コオリヤおばさんと赤ちゃん

ゐても街を歩く時は氣のきいた恰好をしてゐます。少しロシヤ語がつかへる様になりましたので一人でキタスカヤへ御飯たべに行きます。二十錢も出ゝばすばらしい。赤色露人はとてもゴウシヤな生活をしてゐます。(九月一日)

長谷川時雨様

奉天より――奉天より毎日毎日休むひまもなく歩いておりますので落ちついて御手紙もさしあげられませず失禮しております。ハルピンはいゝところです。女人藝術愛讀者御夫妻と偶然お會ひして、日本食を御ちそうになりました。お名前は山内さん。とてもいゝところです。こゝの領事さんが來年はモスコーへいらつしやいと云つて下さいました。

私がダンスをするなんて、自分でも考へてみませんでしたが斷然うまくなりました。夜の寒さに會ふと旅愁を感じます。カツカツ馬車の音と旅空。



芙美子さんとロシヤ新聞の婦人記者

この寫眞はハルピンで知つた最初のロシヤ人の婦人記者です。ヒニクな短編がうまいのです。お母さんを養つてゐる人です。此人の務めさきはグンパオ(公報)と云ふ新聞社、とても不景氣なので新聞だけでは食へないので、英語を教えてゐるそうです。コロンタイの事を、かれは政治家で作家ではない、代作ばかりさせてゐるので問題にしてゐないと云つてゐました。あとで赤色系詩人に聞きましたところ大分赤い戀等は代作問題でもめたそうです。でもマアマアです。



サモワルな沸かすロシヤ婦

女人藝術を見て日本は女の文學雑誌があるのか、とてもとてもうらやましいと云つてゐました。

アカシヤはきれいです。

ロシヤ人は一日に一食主義、朝夕はかるいものをとつてゐます。だんだん貧乏旅行に心細くなりましたが最後までガンバルつもりです。

撫順つくしかんにて――女人藝術のゐだいさをお知らせします。こんな遠いところに、私は女人藝術の讀者の方と會ふ事が出來ました。うれしくてなりません、貴女達の仕事がこんな遠いところで實を結んでおります。實にうれしく旅空で肉親にあつたやうなうれしさを感じました。ブラボウ。(芙美子)

空想が實現してうれしいでした(中川靜子)

撫順は木も草もあるのねと林さんはビックリして居りますわ(田川美根子)

お目にかゝれて喜びで一ツパイです、炭の都を引つ張り廻して元氣で今驛の待合におります女人藝術よ、進め!(舟橋久子)

(九月五日)

相剋（みちづれ）

V・マルゲリット
望月百合子譯



第三章

人類はより正しくなる時より幸福になるであらう。
ジヤン・フイノ（兩性問題とその偏見より）

一

アニックの抱き包むやうな優しさに、アメデエは、心の屈托は屈托だが、再び幸福な様子に歸つた。彼はよく彼女をからかつた。

『あと一ヶ月半しかない……一ヶ月しか……その間まあうんと僕を苦しめるんだね。あなたの中にゐる小さな神秘が生れてしまひさへすれば、いま僕が受けてゐるこの慘めさをきつと復讐してやるから！』

彼女は笑つてゐた……彼はアニックがこんなに頑張るのは只彼女が頑くなだからだと思ひ決めてゐた。……心の平衡をとり戻しさへすれば、彼女も彼等の肉體を分けた子供を前にしては、避けがたい法律上の結婚に同意するだらう。だから彼はいつでも、一ぱいの誇りを以つて『僕の子供』と言ひ乍らアニックを抱擁した。その時彼女の眼が暗くなるのに彼は氣がつかなかつた。

やがて酣はな選擧戰の時期になつた。アメデエのアパルトマンには絶えず叫んだり、身振りをしたりする男達が頻繁に出入するやうになつた。どうかして彼等二人きりのやうな時も、アメデエは彼女に、自分の宣言を讀んで聞かせたり、政綱の説明をしたりするのだつた。それからまた、彼女が威脅や慢罵に滿たされた匿名の手紙を注意深く選り抜いてしまつた郵便物に急いで目を通すのもこんな時だ。

混亂と疲勞の生活を口實に、彼女は出產までトリアノンに行つて住むことを願つた。……もうどうしてもこの躁狂的な生活に堪え切れなくなつた。だからヴエルサイユの、メレットの傍にゆけば……

この苦しい場面を前にして、彼女は卑怯にも尙ほ、彼を法律上の無權力者にすることを考へつゞけてゐた。

『貴方も出來るだけ暇をみて來て下さい……それから電話で！……陣痛が始まつたらすぐお知らせしますわ』

彼は何の疑ひも抱かずに、うなづいた。そしてこの騷々しさや、激しい人の出入りが、彼女には堪え切れなくなつて、この大切な忙しい最中に、靜穩を求めしめたのだらうと思つてゐた。

彼女がヴェルサイユの學校に着いた時は、休み時間の最中だつた。マドモアゼル、アルデイは助教師達と一緒に運動場を散歩してゐた。小さな女の子達は四方八方にかけまわつて遊んでゐた。メレットの方へ近づいて行く時、彼女はふと小さな……やつと七つばかりの女の子がたつた一人ぼつちでゐるのを見つけた。小石を盛つた山の上に坐つて、その子はいかにも悲しさうな様子をしてゐた。アニックは思はず近よつて

『何してるの？』、ときいた。

『遊んでるの』

『何んで？』

『何んでもなく！』

同時に

『まあ、びつくりさせるね！』といふマドモアゼル、アルデイの聲がしたので、彼女はふり返つた……子供は校長先生が近づいて來るのをみると立ち上つた。

『またそんな處に蹲み込んでゐる！……ルルウ！ルイズ、マルシャンをも仲間に入れて遊んでおやり……さあ行つてお遊び……（そしてアニックに說明した）……可哀さうな子でね……あの子の兩親は夫婦別れをしたんだよ……父親といふのは醉どれでね。母親はあの子を邪魔にして、あの子を可愛がつてゐる祖母さんの處へやつてしまはふと思つたんだよ。そんな亂暴な母親だから、あの子はすつかり子供らしい處を失くしてしまつたのさ……そしてちつとも遊ばうとしないんだよ……』

『可哀さうに！』

『まあお上り！　お茶を一杯どう？　時間はあるでせう？』

『いくらでも。今朝からトリアノンに來てゐるんですもの。貴女にいい病院を探して頂かうと思つて』

『えゝ？……何んだつて？』

メレットは心配して目を瞠つた。

『でアメデエは？……アメデエはどうしたの？』

『メレット、安心なさつていいのよ。相談の上で來たんですから！アパルトマンは迚も我慢が出來切れなくなつたんですもの……大變な騷ぎで……だからこゝに來れば……』

『あゝさう！　ぢやお産の時にはあの人も來るんだね？』

『あの人はさう思つてゐますの！　だけど私は子供の屆出を濟ましてからあの人に知らせようと思ふんです……』

『で、あんたの認知は？……父親不明とするの？』

『何時間かの間だけは！　さうしなければならないんですもの。だつてそれより他に私が親權を持つことは出來ないんですもの』

『ぢや、この前あんなに話したのに、そのことをあの人に話すことが出來なかつたんだね？』

『あゝ！　私にはその勇氣がなかつたんです……それに、してしまつたことは、それがなされる苦しみを見るよりはましです……まあどうにかなるでせう……』

マドモアゼル、アルデイは頭を振つた。

『これからまだどれだけの苦しみを受けることだらう！』
『新例を開らくことを逃避するなら、自分の義務を理解したつてなんになるでせう？』
『それやさうだ！…だが若しあの人が子供に自分の名を與へることを拒絶したら？』
『そんなことが出來るもんですか、私の知つてゐるかぎりでは…それに、若しさうなつたからつて何んにも困りはしませんわ！ 遺産の相續にだつて…ある額以上の財産は凡て國家の所有に歸さなければならないんですもの！ 若し貧乏でなかつたら、私だつて働らいたでせうか？ まあ、私の名だつてあの人の名と同じやうに名乘るのに不名譽な名ぢやありませんわ…その點は私責任を持つわ……』
『あんたの道に從ふ爲には何んといふ意志が必要な事だらう！』
『その意志は貴女から來たものですよ』
『いいえ、それはあんたの中にあつたんです。…私は只理想を說く老孃でしかないんだもの。私は行動の前に後退してしまつた。あんたはは、嚮導者です。あんたの信念はあらゆる障害をかき分けてしまひます』
『ねえ、私は正しくはないんでせうか？ だつて若し私が間違つてゐたら…若し私が愛する男や私自身に間違つてこれ程の苦しみの原因をつくつたとしたら！』
『いいえ、アニック、どんな偉大なものでも、苦しみの中にしか決して造り出されないものです。血みどろの手で探り探りにしか前進は出來ないものです…』
『夜の暗の中を！』
『日に向つて！』

喧ましい、執拗な電話の鈴呼が、アパルトマンの靜寂を破つた。丁度晝食時間だつたので、一人の秘書もゐなかつた。ダンヴォア婆さんは息を切らし乍ら臺所から出て來た。
『モシモシ！』
『サックスの二千百十二番ですか？ ジヤクマン樣のお宅ですか？』
『さうですが、旦那樣はお留守ですよ』
『あゝさう！ では、奧樣に男のお子樣がお生れになつたとお傳え下さい…』
『おや！…お産はお輕かつたんですか？…それはようございました！…よろしうございます。ヴェルサイユのパロアス町十二番地ですね…旦那樣はどんなにお喜びになるでせう…モシモシ…モシモシ…』
電線の他の端ではもう受話器をかけてしまつた。だが細かいことまで知りたいダンヴォア婆さんはまだ一寸の間いたづらに受話器を耳からはなさなかつた…
看護婦（アニックが電話をかけることを賴んだ）は、同時に、アニックが待ち切つてゐる部屋に入つて行つた。…報告しなければならないのだ！
『どうでした？』
『旦那樣はお留守でした。だから言づてを賴んでおきました…何んにも御用はおありになりませんか？ さうでしたら御晝食にゆきます』
アニックは蒼ざめた顏を動かして、何にも用はないといふ合圖を

した。彼女は一晩中苦しみぬいた後に、午前四時に出産したのであつた。そしていまはもう屆出も、認知も濟んで、肝心なことはすつかり終つてゐた……彼女は疲れ果てゝ溜息を吐いた。

醫者と看護婦と共に分娩に立會つたマドモアゼル・アルデイはその悲慘な光景に顚倒してしまつた。……姙婦の叫び聲や、重荷を押し出さうとする體の屈折や、どこに苦痛をおいていいか分らず徒らに虛空を見まわす、見えない視線や……それから無知覺狀態や、この一種の死の狀態から、弱い微かな苦痛の呻きと共に一つの生命が生れて來たのだ……彼女はアニックによつて始めて、かくの如き母となるための購償を見たのであつた！

少し休息するために醫者から歸宅をすゝめられた彼女は、十一時には再び病院を訪れた。併しアメデエに知らせる前に出産屆けと認知とを濟ませるために、醫者に伴はれて彼女と共に町廳に行く筈のモニックは來なかつた。ブランシエが『そんな惡いことをジヤクマンにしてはならない』と妻に確く禁じたからであつた。彼女はそれに從はねばならなかつたのだ……だから病院の看護婦長がモニックに代ることになつたのだつた。

アニックは、側らに眠つてゐる嬰兒をそつと撫でてゐたが、不意に泣き出した。ほつとするとともに、心も弛るみ、孤獨の寂しさも感じられたのだ。殊に――三十分ばかり前に出て行つたマドモアゼルアルデイが、朝食を濟ませたらすぐ歸つてくると約束はしたが――放任されてゐるやうな感じがひしひしと胸に迫るのだつた。彼女は家族に圍まれて、愛撫されてゐる母親達を想像してみた。それだのに彼女の周圍には一人の家族も、母も、夫も……夫さへもゐないではないか？――『私がそれを望んだんぢやないか？……あゝ！　哀れな人間の魂よ、お前の祖先傳來の習慣に、お前の偏見に、お前の誤謬に打ち勝つためには、どれ程の不意打ちと、爭鬪とがあることだらう！　私は逃げてゐる。そしてそこから私のこの苦しみは來てゐる……』

彼女はそつと、自分の息子の方に顏を向けた。

『お前には、誰のために私がいまゝでこんなにも苦しんで來たか分るだらう……自分自身に滿足することがどんなにむづかしいか、お前には分るだらう！』

彼女は枕の下から、一枚の紙を取り出して讀み返した。

『アメデエ、クロオド・ラムベエル、父親不明……アメデエが赦してくれゝばいいが！……あゝ！　私はあの人からあの人の子供を取り上げてしまふんぢやない。たゞ私にどうしてもなければならない分を取るだけなんだ……あの人の子供だつて？……若し私がなかつたら、この盲目な芽生は、この不思議な原子はどうなるだらう？　これがどの標準で、豐饒な細胞に適合してゆくかさへ他人には分らないではないか！　私の子供だ……私の呼吸なしには此子も呼吸をしないだらう！　私はまだこの子が、私のお腹の中にゐて生命のない塊でしかなかつた時に、その弱い肺臟に生命を吹き込んだんだ！　そしてこの子は生れて來たのだ。その子に對して私が少しも考へないでいいだらうか？……いや、いや！　私がしたことは正しい……』

アメデエは、夕方歸途に就く前に、何か變つたことはないかと思つて、議會からダンヴオア婆さんに電話をかけて見て始めて、出產を知つた。その夜は三つも會合があつたにも拘らず、彼は一寸の間を利用してヴエルサイユまで、もう二日見ない病人を抱擁しに行く

ことを樂しみに思つた。

『男の子だつて？…凡て順調に行つたつて？…急いで、僕の鞄を用意しておくれ！　いま取りに寄るから…ブランシェ君が？…やつぱり電話をかけてくれたつて？　直ぐ僕に話したいことがあるつて？…後になると間に合はないんだつて？…よろしい』

彼は何んにも氣がつかなかつた。…彼は欲ひ出したい程幸福だつた…何も彼もいまになればうまく行くのだ、と彼は確信してゐた…彼は運轉手（選擧の爲に借りた自動車の）に『ラスパイユ街へ、大急ぎで！』と叫んだ。そこで、身のまわりのものを大急ぎで受取つた…それは若しパロアス町の病院で泊ることが出來れば、それに必要なものだ…併し、何故一切整つてゐるホテルに行かないでパロアス町の病院に行くのだらう？

自動車は、非常な速力で廻轉してゐるのに、彼には少しも前進してゐないやうに思はれた。妻と息子とから彼を隔てゝゐる道は長かつた…不意に、彼にこの喜びを與へたものに對する感激的感謝の念が、彼の心を柔らげた。

『彼女から生れたこの小さなものはどんな樣子をしてゐただらう？どの不可知の種が、どの遺傳がこの肉の包を含んでゐたのだらう？父のか？…母のか…？誰が、この小さな人間に對して優越權を持つだらう？』

彼は自動車が止つたのも氣がつかない程、それに氣を取られてゐた。だから運轉手が降りて、彼に注意しなければならなかつた。呼鈴を押した時、彼の心臟は高鳴つてゐた。看護婦は、彼の名を聞いて、立派なおとなしい男の子が生れたことや、マダムの肥立は申分なくいいことを告げた。併しもう二十四時間は乳を出すために彼女を疲らせないやうにしなければならないので、なるたけ話をさせないやうにして欲しいと言つた！…

彼を見るや否や、彼女は涙を堪えることが出來なかつた。彼は彼女の兩手をとつて、やさしく撫でた。そして熱い接吻をその手に與へた。彼は小さな娘にでも話すやうな、やさしい聲で話しかけた。やさしい、やさしい言葉や、非常におだやかな愛撫は一層アニックの心を弱くするばかりであつた。彼女は彼に子供を抱いてみるやうにと指ざした。彼は手の先で無器用に併し感動で一生懸命になりながら子供を抱き上げた。彼は抱き上げた子供を、まるで不意に世界でも抱き上げたかのやうな氣持ちになつて、しげ〳〵と見つめた。

彼はアニックの傍に子供を寢かさうとして體を屈めた。併し彼女はそれを止めた。

『いいえ、そのまゝお掛けなさいな。お話がありますから』

『話しちやいけないつて看護婦が言つたよ』

『でも…』

『いや、可愛いアニック。それに僕はこの小さな紳士の誕生を、急いで役場に屆けに行かなければならないよ』

『そのことです…まあきいて下さい』

『シュッ！』彼は唇の上に一本の指を當てゝお默りといふ合圖をした。

『この子はクロオド・アメデエ…』

『勿論さ！…この子に着物を着せるやうに呼鈴を押しておくれ…』

『お待ちなさい！　貴方は、只認知さへすればいゝんです。その他の形式はもう濟ませましたから』

に差し出した。

『何？　子供を寢かすまでお待ち』

彼にはまだ分らなかつた。彼の腦髓は、つつかひ棒をされた機關のやうに、動かなくなつてゐた。併し書類を一目見ると、俄かに彼の思考力は働らき始めた……彼は蒼白になつた。紙片は彼の指の間で顫へた。

『こんなことをあなたはしたのか！』

『赦して下さい……そして聞いて下さい！……私がお話することを……』

彼は彼女に默るやうに合圖をした。出産屆けの書類は床の上に落ちた。アメデエは鐵棒ででも毆られて、今にも倒れようとしてゐる人かなにかのやうに、よろめき乍ら拳を固めた。彼女はこの狂暴な呆然自失の前に、どんな言葉を見つけて彼を鎭めていいか分らなかつた。不意に、あらゆる自制を失つてしまつて、何か亂暴な行爲をしさうに感じたので、彼はふら／＼するのを止めて、何も彼も追ひ散らすやうな大きな身振りをしながら入口にかけつけて、狂人のやうに飛び出して行つてしまつた。

それからの八日間は、アニックにとつて、不安に滿されてゐた。あらゆる言葉を盡した彼女の度々の歎願の手紙も、いまはアメデエを說得しようとしてゐるブランシエの足繁き仲裁にも拘らず、アメデエはヴエルサイユを再び訪ねようとはしなかつた。選擧戰だ、運動だ、といふ口實を設けて、それは憎惡の輕蔑だ。

『だが君は、君の子供の認知はしなければならないよ！』

『そんな必要はない。彼女は子供を自分のものにして置きたかつたんだから、さうすればいいさ！』

『よく考へてみ給へよ！　彼のひとを君は愛してゐる、そして子供をだつて、君は愛するだらう……どうしたつて、君は父親なんだから……それに君がひと度認知さへすれや、子供は君の姓を名乘るんだから……』

『何故彼女は僕に相談しなかつたんだらう？』

『彼のひとは、君が拒絕しただらうからといふんだよ』

『それや分らない』

『で？……勿論、僕はあのひとに贊成はしなかつたよ。だからこそモニックが證人になることも禁じたし、君に知らせようともしたんだよ……併し今日は……』

『いやそれはいけない！』

『いや、君は子供の認知をするだらう。それはしなければならないよ。君は自尊心でそれを拒絕するのか？……ともかく君は惡い助言者だよ！　この幾月かの間の妻との爭ひで、僕も隨分考へたよ……で結局、働らきたがつてゐるモニックの方が僕より正しかつたんだ……新らしい女達だよ、新らしい風習だよ、君！……かうした彼女等の新らしい獨立心と、吾々の古い權力との間の苦しい、併し避けがたい爭鬪では、吾々が諦めなければならないよ……結局、いまアニックと君を引離してゐるものは何んだね？　言葉の問題さね。彼のひとは、君にとつて眞の、たつた一人のみちづれとなり得るひとではないかね？　さうだらう。そして彼のひとが何を君に願つてゐると思ふかね？　單なる形式上の讓歩だけぢやないか。だつて結局、クロオドの敎育に就いては君達の意見は一致してゐるんだか

ら。彼のひとが君に願つてゐるプラトニックな滿足を與へてやり給へ。ともかく、彼のひとは君を迚も愛してゐるんだから。若しかすれば君があのひとを愛するよりももつと君を愛してゐるかも知れない……君はやつぱり最强者なんだよ』

かうした話のあつたその夕方に、アメデェは市廳で、選擧の開票に立會つた……投票は集まつた……ジヤクマン、ジヤクマン、ジヤクマン……いまこそ當選は確實だ……悲しみに閉されてゐた彼の心に、歡喜が甦つて來た。

もう八日もヴエルサイユに行かなかつたのだ！……午後受取つたアニックの電報は、ブランシユが持つて來たクロオドの寫眞と一緒に彼の財布の中に入つてゐた。怨みは、いつの間にか、消失しかゝつてゐた……漠然とした愛情の要求が再び彼に歸つて來た。若しアニックに會ふことを考へて愉快でないにしても、彼等の子供を見ることを考へると、彼は感激で一杯になつた。

彼は時計を出して見た。眞夜中だ……まだ計算は濟んでしまはないけれども、あらゆる人々が彼を祝つた。彼は最高點で當選なのだ……不意に彼は決心した。ヴエルサイユに行かう。そして開票の結果の發表を待つ間を紛らさう。併し、パロアス町の病院の戸は閉つてゐた。彼はその翌朝しかアニックに會へなかつた。

看護婦に導びかれて行つて、瘦せた、引つつたやうな彼女の顔をみた時、そして彼をみていかにも疲れ果てたやうな、悲しみ切つたやうな微笑を泛べたのを見た時、彼の心臓は引き絞られるやうに感じた。そして突き上げてくる衝動を危うじて抑壓した。

昨夜會つたばかりのやうに、彼女は選擧のことを訊ねた。そして朝刊が報じた彼の成功を心から嬉しさうに頷いた。彼女はどういふつもりで彼が來たのか分らなかつたので子供のことは話さうとしなかつた。併し丁度、授乳の時間だつた。本能か或はもう習慣のせいか、赤んぼは眼を覺まして、泣き出した。

『何時です？』と彼女は看護婦に訊ねた。

『もう五分です。哺乳器の用意を致しませう』

彼等は二人きりになつた。彼は尙も眞面に彼女を見ることを避けてゐた。

『自分のお乳で育てないのかね？』

『いまさう出來ないんです。私のお乳は子供を病氣にするんですもの』

『どうして？』彼女は頭を振つた。

『何んでもないんだけど！……でも私、お乳が出なくなるやうにはしたくないんです。だつてそのうちにまた自分のお乳がやれるやうになると思ひますから。でも、隨分それは苦しいんですよ』

彼は搖籃の方に行つて、眼を閉さいだまゝ、乳首を探さうとして口を動かしてゐる小さな赤んぼを見た。そしてその赤んぼを抱き上げて、額に長い接吻をした。

彼女は呟やいた。

『ありがたう！　ありがたう！　貴方に對してあんなことをしたのではありません。今に分ります！　今に分ります……』

彼は子供を寢かせて、アニックの寢臺に近づいて鎭めた。

『お默り、今はよさう、後で……お乳を飮むのを見てから、訪問者に會ひに行つて……午後また來るから……』

アニックは何んにも言はないで、アメデュの手を執つて唇を押しあてた。

婦人彙報

カニ工船の暴虐

富山工船會社カニ工船エトロフ丸は同縣出身の漁夫三百名及び富山縣立水產學校實習生十五名を乘せて五月上旬からカムチャツカ東海岸に出漁中であるが作業中病人となつた實習生十四名を函館入港の中積船で送還して來た。水上署の上陸取調に際しエトロフ丸の奇怪な虐殺事件が暴露した。同船は本年始めての出漁で經驗が淺く大不漁だつたので漁夫は一日二十時間の酷使を强ひられ牛馬にも劣る食物しかあたへられなかつた。漁夫達は六月待遇改善を要求してストライキを斷行したところ同船幹部宇野善九郎その他は就寢中の漁夫や實習生を片つ端から棒片で亂打し漁夫淸水外十五名を死に至らしめ、死體は水葬と稱して海中に投りこんだ。殘つてゐる漁夫中には尙重病人が五十餘人虐待に泣いてゐるとの訴へであつた。尙日本海員組合員宛の通信によれば、一日二十時間どころか二十三時間の勞働に野菜は缺乏し壞血病にかゝらぬ者はなく已に多數の死者を出し船長はこの半死半生の人間を鬼の様に使役してゐる。聞いた丈で身の毛のよだつ話である。一體一日二十三時間の勞働では何時間眠れるか。一日は五十時間ではないぞと怒鳴りたくなる。全く小林氏の「蟹工船」以上である。

三信鐵道工事の爭議

愛知縣北設樂郡川合村三信鐵道工事の賃金不拂ひに端を發した罷業は次第に惡化し去月十八日五百餘名の爭議團は工事監督事務所を襲ひデモを行つたが例により警官隊の干渉から大亂鬪となり、團員は棍棒、鶴嘴を以て二百餘名の警官と鬪ひ、相互に重輕傷者を出した。爭鬪は應援の警官隊によつて一と先づ鎭められたが同日の檢束者は實に四百四十名に上つた。

乾新兵衞の釋放

多くの人間が喰ふや喰はずの時惡辣に惡辣を重ねて積みあげた財產で座つてゐても日に五萬圓の利子が上ると云ふ乾新兵衞更に慾を出して市ケ谷に收容されたがわづか五日で突然大名のお引越の様な騷ぎで釋放された。彼は渡邊倉庫、旭日生命、山十土地、同製絲、中國の某一流銀行乘取りの陰謀を發覺の爲收容され、起訴內定にまで至つたのだが取卷連の示談の奔走及び裏面にひそむ有力な力の援助のため釋放されたらしい。現金王と云はれてゐる乾氏の入獄がブルジョア諸方面に影響する所大きいからにすぎない。そんなに迄偉大な金は唯湧いて來たものだらうか。そんな奇蹟がない限り勞働者の血と肉を搾つて得たものに他ならないではないか。

參謀本部に喰ひ込む戰旗

參謀本部陸地測量部技手金澤祐行他五名は突如免官となつた。右は「戰旗」荏原支部を去年から引受けて讀者の勸誘に努め同測量部內の同僚六名を以てグループを組織し、發禁の雜誌を配布し、ニュースを發行し讀書會を開く等啓蒙に努めてゐた者である。金澤は治安維持法第一條に當るものとも云ひ又軍法會議に付せられた。

現役・豫備將校の衝突

上目黑近衞輜重兵大隊に應召中の豫備見習士官會社員大熊亮四郎氏は所屬第二中隊の見習士官の寢室で、戰友横田見習士官の看病中窓からのぞいた者があるので「誰か？」と叱つた所折から巡視中の同中隊付週番士官は不寢番を叱責するとは怪しからぬとて詮議だてたので怒氣をふくんだ大熊見習士官は週番士官が何だと云ひよつたのがもとで上官侮辱罪に問はれ陸軍刑務所未決監に拘留された。大熊氏は舊東京無產黨志村分會長として借家人組合運動をやつた事があり板橋憲兵隊の注意を受けてゐた爲、軍隊の赤化を極度に恐れてゐる當局はこれを口實に相當苛重な所置をとるらしく友人達は憤慨し對策協議中である。

機密文書竊取事件

これも又軍隊の事件である。近衞師團兵器部職工平良松は數年前友人城間と共に上京し、平は同部職工となり成績優秀な爲間もなく機密文書の印刷に從事させられた。一方城間は左翼思想團體で活動を續けて居たが最近ある機密文書が城間の部屋から發見されたといふので軍部では騷いでゐる。平は城間の所へ寄つた時置忘れたといつてゐるが當局は極力計畫的なものだと云つて、軍機保護法違反者として取扱ふ事になつた。

市營電氣風呂の計畫

大阪市電氣局では深夜の餘剩電力利用の一方法として市社會部福利課に交渉して、市內の無產市民の多い場所を撰び、湯錢も三錢位にして小ジンマリした清楚な市營浴場を作る計畫中とある。先づ五ケ所程作り娛樂機關を備へ營業時間は午後六時から十二時迄。一日

の汗を流した後で碁や將棋を娯ませる等なか〳〵理想的な樣だが彼等のする仕事に拔目のある筈なく御覽の通り。曰く浴場を市民館同樣夜間授職、敎化指導、集會場等に利用しようと云ふのである。無產者の御爲ごかしのブルジョア御用電氣風呂に御注意あれ。

警官の宿料直下

警視廳ではいよ〳〵管下警官の住宅費値下を近く發表する事になつたが薄給の彼等にとつてこれは近頃廢止された過勤手當同樣本給に等しいものであるから事實上の減俸に他ならない。尙市內警察勤務の警官には居住制限規定があつて下町警察署員は署から五十町以內その他は三十町以內等制限されてゐるが實際は市內の家賃が高いため郊外に住んでゐる者が多いので制限をわづか四町增して、市內勤務で群部に居住するものは警部が九圓、家族を持つ警部補が四圓同巡査が三圓づゝ減額されるとの事。生活上の一大脅威にもかゝはらず職掌柄ストライキともゆかないとは御氣の毒な譯である。

本氣で都市の騒音防止

東京大阪を始め大都市の市民は絕えざる騒音によつて慢性神經病をおこし都市生活者に多大な影響を及ぼす有樣なので次第に問題化し騒音防止協議機關を設け、鐵道、電車、自動車、工場氣笛、うるさい動物の飼育制限、街頭騒音等の取締をする事になつた。

モップルの組織變更

モップル(解放運動犧牲者救援會)は我國現下の客觀的情勢からみて幾多の誤謬ある事を發見し、去月中旬全國支部代表大會をひらき誤謬淸算の討議を行つた結果モスクワの國際赤色救援會に加盟して名稱も國際××救援會日本支部としてモスクワ本部と同樣な組織に變更し當面のテーゼとして工場班農村班の確立强化と共に全所屬勞働組合員を獲得し又醫療救護部を設けて同志の加療に活躍せしめる事になつた。又目下收監されてゐる共產黨員の公判開廷に際しては勇敢に公判鬪爭を行ふ等、いよ〳〵全面的進出をする事になつた。

前衛的青年檢擧さる

七日の第十二回國際無產青年デーを頭痛の種としてゐた警視廳では六日拂曉大活動を開始し下谷神田芝の各區に潜伏中の全國協議會青年部の戰鬪的前衛青年三十餘名は一網打盡に檢擧された。七日の無產デーに際し黨員百數十名上野公園に參集し、帝國主義絕對反對、戰爭絕對反對、ソヴエートロシア擁護等のスローガンの旗やビラを以て市內各所で大々的にデモを決行する準備中であつた。この國際無產青年共產黨(キム)は廿六ケ國に支部を持ち、飽く迄非合法運動をめざし日本における有力團體となり漸時組織の完全に進みつゝあつたものである。

自由勞働者の失業率

中央職業紹介事務局東京地方職業紹介事務局とでは協力して東京市內外の自由勞働者の集合所十九ケ所につき調査の結果によれば中には失業率一〇〇%とで集合者の一〇中一〇がアブレ者である所もあり、その他にも九八%又は九〇%と云ふ失業率の高い所多く十九ケ所の集合所を平均して五九%の失業率と云ふ悲慘な狀態である。

產兒調節の志望者

大阪の優生兒相談所について日本產兒制限協會の調べる所によれば相談に來た婦人三千五十九名中三十―四十代の世帶盛りが大部分を占め三十から三十五位迄が最高位で九八三名廿五歲以下が一八七名、廿歲以下はタッタ一人で靑春期の子女が享樂の報いを廢れて制限を行ふのだと云ふ偏見は破られ病弱多產で困る者が大部分でいづれも極度の貧困が動機となつてゐる事が判明した。

村長を襲ふ

村長の公金費消事件で紛爭中の銚子在高神村は次第に險惡な空氣濃厚となり去る七日眞夜、怒にもえた反村長派の村民二百五十餘名は折柄の强風に乘じ竹ヤリ棍棒等を携へて村長縣會議員山口巖兵衞方を襲擊し續けて役場を襲ひ玄關窓等を破壞して雪崩れこみイス机等を打壞し制止しようとした駐在巡査を打ちのめし、更に駐在所を襲擊破壞し、今度は役場派村會議員五名の住宅を襲擊して引揚げた。この日銚子署員總動員、檢事局、縣警察部の應援をかりて六十餘名を檢擧した。村民の汗の結晶である公金を消費した村長は訴へられず正義心に燃へた人間が罰せられると云ふ不合理はどこから來る。その解決の道は？

電氣應用の手錠

最近警官が連行の犯人に自分の携劍を利用されて反對に害を受ける事が多いので警務課では他人に拔かれぬやう携劍に安全器をつけ、連行の際は豆電地應用の手錠及叉股を用ひ抵抗力を失はせて一人で四五人の犯人を連行出來る樣試驗中の由。

編輯後記

歐亞聯絡飛行、三大陸横斷飛行青年の成功をみききすると、あたしも飛びたいなとつくづく思ふ、日本の女の人一つ勇敢にやらないかな。夏休み海で泳いで飛びこんで眞黒になつて歸つてきたら九月號發禁、とう〳〵發禁になつたな、社長さんの元氣なのがとても力强いかんじ。私は他人が元氣だと自分の氣持も朗かで猶元氣になる。さあしつかり、いろんな經驗がふへるたびにうれしい。九月二十九日から開かれる秋夜講習思想文藝講座を聯盟員の方達がよろこんで支持されるやうに希望する。いろんなプランのもとに之からはいろんな事が行はれるだらう。さあ秋の蒼空の中に、女人藝術よ一ぱいにすくすくとのびてゆけ（みどり）、

この二三日、身のしまるやうな涼しさがつゞいて、夏休で田舍へかへつて、遊びすぎ、のびすぎた私を心よく、緊張させてくれる。

今月の内容については一々こゝで云ふ必要もない。應接室の淺野氏は、今春ヨーロッパから歸朝された新人、學ぶべき多くの事を語つて下さつたと思ふ。

天高く、馬肥え、燈火親しむべき候、各々の部署で、みんながつちりがんばりませう。（美子）

暑い〳〵と繰返してゐるうちいつか冷氣を含んだ風が吹き始めたなんて澄切つた空、冴え渡つた月なんだらう。何處となしに、うら淋しさがクヒいつてくる。もう秋だと私の心が心に叫ぶ時、シューンと身内がひきしまる。いつぱいに、ふくらんだ爽やかさ、私は秋が一等好き。生きた收獲を得られるのも此の時だ、ウンと胸を張り腕を伸ばして高らかに歩まう。

讀書に絕好な折、九月二十九日から開かれる講習會、屹度何物か與へずにはおかないと思ふ。奮つて御來會下さい。（美智子）

秋になつて嬉しいにはうれしいが、もうこんな風が吹くのかと思ふと貧乏人は何だか心細い。急に涼しくなつたのでお隣りさんと競走でくしやみばかり。うはさも度重なると惡口になるとか、餘りありがたくない。九月號の發禁は心配してはゐたがやつぱりちよつと驚いた。でも一度位の發禁に恐れをなす私達ではないつもり。もつともつと腕をくんで進まふ。讀者の方で心配して手紙を下さいますが發禁は發行停止とは違ふから安心して下さい。（優子）

九月號はとう〳〵發禁になりました。隅田氏と佐野氏の論文がいけないといふのです、しやくだけれども、現在の檢閲制度がある限り、出版の自由を持たない限り仕方がありません。皆さんの御手元に充分行き渡らなかつたのは殘念ですが、その代り十月號は一日も早くとみんな頑張つてゐますから御期待に添へるだらうと思ひます。なほ發禁紀念に前號で發表したプロレタリヤ映畫會を中止して文藝思想講座を催します。勉學の涼夜ふるつて御來會下さい。今度の成績に從つて今後もこの種の催しを時々するつもりです（素子）

昭和五年九月十五日印刷
昭和五年十月一日發行（毎月一回一日發行）

送料一部壹錢五厘

定價
1部……40錢
6部……2.40錢
12部……4.80錢

□誌代の拂込みは成可く振替利用を乞ふ
□郵便切手代用は一割增の事。

發行兼印刷者——長谷川ヤス
編輯者——素川絹子
印刷所——秀英舍
大賣捌——東京堂 北隆館 東海堂 大東館

發行所 東京市牛込區左内町三十一番地 女人藝術社
振替東京七五八二五 電話牛込(24)一七八九

よい秋です、今年の收獲はいまだと思ふと心に湧躍を覺えます。この時こそ女人藝術も躍進しなければならないと思ひます。不幸を幸に轉換するには氣持ちを引きしめて一意勉强、自分の心をじつと見詰めやうと思ひます。九月號發禁の數日の後、とみに秋風は都門を訪れました。ふと、秋夜講座を望むのは、私ばかりではあるまいと曆もつの頁をクリながら考へました。翌朝を待つて編輯諸氏に計るとみな異議なしです。よき仕事はよき了解をすぐにうるものだと力强く思ひました。たぶん女人聯盟員諸氏愛讀者の方々も一讀御賛成のことと思ひます。終日の勤勞にお勞れでせうが、長い期間でもありませんからぜひお出下さい。此會の成功は聯盟員諸氏の心の成長をも意味すると思ひます。

私は切にいのります。各地の聯盟支部でも、よき實のりをうる集りによつてお互ひに啓發されて下さい。消費組合などもつもよし、資金と閑のある方は託兒所など―醫へ一人二人の兒からでも預かつてあげたらと思ひます。よき仕事をお互ひにもちませう。（時雨）

昭和三年九月六日第三種郵便物認可
昭和五年九月十五日印刷納本
昭和五年十月一日發行（毎月一回一日發行）

第三巻第十號
定價金四十錢（送料金一錢五厘）